

札幌国際芸術祭2017開催報告書

Sapporo International Art Festival 2017 Document

目次	Contents	
開催概要	Outline	2
SIAF2017を振り返って	Looking back at SIAF2017	
・大友 良英 ゲストディレクター	・Otomo Yoshihide, Guest Director	4
・企画メンバー(バンドメンバー)	・Project Members(Band Members)	8
1 常設の展覧会	Exhibitions	32
2 プログラム	Programs	
会期中のプログラム	Programs during SIAF2017	68
SIAF2017開催へ向けたプレイベント	Pre-events toward SIAF2017	98
2016年度からの継続的なプロジェクト	Projects from 2016	100
メインビジュアルとシンボルマーク	Main Visual and Symbol	105
3 実施状況		
1. 運営		108
2. 広報・PR		118
3. ガイドブック		125
4. グッズ		126
5. 連携		127
6. ボランティア		128
7. 来場者数		131
8. アンケート		134
9. 経済波及効果		138
10. 収支状況		138
有識者の評	Professional Assessment	139
札幌国際芸術祭実行委員会		186
助成・協賛・協力		187
関係者クレジット		188
SIAF2017企画体制		192

〈注〉

- ・本報告書は2017年12月31日までの情報を掲載しています。
- ・特に西暦のない日付は、2017年に実施されたものです。
- ・価格は特別な表記のある場合を除き、消費税8%を含んだ税込価格で記載しています。
- ・端数処理を行っているため、表中などの合計の値が一致しない場合があります。
- ・本報告書に掲載する画像、記事の無断転用を禁じます。

開催概要

名称	札幌国際芸術祭2017（略称:SIAF2017） <div>サイアフ</div>				
開催期間	2017年8月6日（日）－10月1日（日）〈57日間〉				
テーマ	芸術祭ってなんだ？				
サブテーマ	ガラクタの星座たち				
ゲストディレクター	大友 良英				
会場	モエレ沼公園 札幌芸術の森 札幌市立大学 金市館ビル AGS6・3ビル 北専プラザ佐野ビル CAI02 北海道教育大学 アーツ & スポーツ文化複合施設 HUG 札幌大通地下ギャラリー 500m美術館 狸小路商店街 大通すわろうテラス	札幌市資料館 JRタワー プラニスホール 北海道大学総合博物館 札幌市円山動物園 円山公園 札幌宮の森美術館 藻岩山 りんご UNTAPPED HOSTEL WAYA 雪結 (yuyu) Ten to Ten Hokkaido Hostel & Kitchen 中島公園	SappoLodge THE STAY SAPPORO めざましサンド店 札幌ゲストハウスやすべゝ／河合珈琲 mima 北海道立三岸好太郎美術館 JRタワー東・西コンコース 札幌駅前通地下歩行空間 チ・カ・ホ 大丸札幌店 TOOV cafe/gallery OYOYO まち×アートセンター さっぽろ	大漁居酒屋てっちゃん 札幌コンサートホール Kitara 扇谷記念スタジオ・シアター ZOO 石山緑地 中島公園 札幌市電 大通公園 北翔大学北方圏学術情報センター「ポルト」 くう PROVO ターミナルプラザことにパトス ほか	
参加アーティスト	ARTSAT × SIAF ラボ アーノント・ノンヤオ €YƳ 相川 みつぐ 秋庭 孝宏 阿児 つばさ 東 広典 Adam Kitingan アプト 雨宮 庸介 アヨロラボラトリー 有泉 汐織 張 惠笙 イ・カホ 五十嵐 淳 池間 由布子 イサム・ノグチ 石川 直樹 石川 ひなの 伊藤 隆介 WinWin 上ノ 大作 植野 隆司 上原 なな江 宇川 直宏 梅田 哲也 MC MANGO 大黒 淳一×SIAF ラボ 大城 真 大友 良英 大友 良英＋青山 泰知＋伊藤 隆之	オーレン・アンバーチ OKI OTACO 勝井 祐二 カミュー・ノメント カリフ8 菊澤 好紀 岸野 雄一 北原 英司 空間現代 陳世川 グエン・タン・トゥイ クリスチャン・マークレー クリス・ピッツィオコス 栗谷川 健一 クワクボリョウタ 今野 勉 斎藤 歩 斎藤 秀三郎 斉藤 幹男 酒井 広司 Sachiko M 札幌大風呂敷チーム×プロジェクトFUKUSHIMA! さっぽろ八月祭スペシャル ビックバンド さや さよ 沢 則行 さわ ひらき C・スペンサー・イエー 篠原 有司男	湿った犬 東海林 靖志 ジョン・リチャーズ 白濱 雅也 白ばんズ 鈴木 昭男 鈴木 ヒラク 鈴木 悠哉 高島 連 高橋 幾郎 立花 泰彦 田中 充 タノタイガ 鄭捷任 陳建年 chi too 荻部 絲 チョン・ヨンドゥ 珍盤亭娛樂師匠 都築 響一 dj sniff DJ方 テニス Courts テンテンコ 刀根 康尚 中尾 微々 中尾 眞佐子 中崎 透 中ザワ ヒデキ 長沼 修 長見 順 中村 としまる	ナムジュン・バイク 新美 太基 振子 びじん のん 灰野 敬二 端 聡 ハットコベ 林 和夫 原田 郁子 PIKA 東方 悠平 樋口 勇輝 平尾 拓也 深澤 優子 藤倉 翼 富士 翔太郎 藤田 陽介 船川 翔司 古立 太一 不破 大輔 宝示戸 亮二 細馬 宏通 堀尾 寛太 松井 紫朗 松井 美耶子 真鍋 昌揮 真夜中フォーク ミュージック マレウレウ 蜜子舞賽 三岸 好太郎 三沢 洋紀	水内 義人 南 阿沙美 宮北 裕美 宮出 実希 ムジカ・テト 毛利 悠子 森 ミユキ 山川 冬樹 山崎 比呂志 山田 真歩 ユエン・チーワイ 指輪ホテル 芳垣 安洋 吉田 野乃子 吉増 剛造 米子 匡司 リチャード・ホーナー YPY 渡辺 はるか 渡部 勇介 ワビサビ 赤平住友の炭鉱遺産: 坑内模式図 北海道の木彫り熊 大漁居酒屋てっちゃん 北海道秘宝館 三松正夫の昭和火山映画 レトロスペース坂会館
主催	札幌国際芸術祭実行委員会 / 札幌市				

Outline

Title	Sapporo International Art Festival 2017 (SIAF2017)				
Dates	Sunday, August 6, 2017 – Sunday, October 1, 2017 〈57 days〉				
Theme	How do we define “Art Festival”?				
Sub-theme	When Bits and Pieces Become Asterisms				
Guest Director	Otomo Yoshihide				
Venues	Moerenuma Park Sapporo Art Park Sapporo City University Kinichikan Bldg. AGS 6-3 Bldg. Hokusen Plaza Sano Bldg. CAIO2 Hue Universal Gallery (HUG) Sapporo Odori 500-m Underground Walkway Gallery Tanukikoji Shopping Arcade Odori Suwaro Terrace Shiryokan (Former Sapporo Court of Appeals)	JR Tower Planis Hall Hokkaido University Museum Sapporo Maruyama Zoo Maruyama Park Miyanomori International Museum of Art, Sapporo Mt. Moiwa Ringo Untapped Hostel Waya Yuyu Ten to Ten Hokkaido Hostel & Kitchen Nakajima-koen SappoLodge	The Stay Sapporo Mezamashi Sandwich Guest House Yasube / Kawai coffee Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido East-West Concourses of JR Tower Sapporo Ekimae-dori Underground Walkway (Chi-Ka-Ho) Daimaru Sapporo TOOV cafe/gallery OYOYO Machi× Art Center Sapporo Tairyo Izakaya Tecchan Sapporo Concert Hall "Kitara"	Ougiya Memorial Studio Theater Zoo Ishiyama Green Space Nakajima Park Sapporo Streetcar Odori Park Northern Regions Academic Information Center "PORTO" COO PROVO Terminal Plaza Kotoni PATOS and more	
Participating Artists	ARTSAT × SIAF Lab Arnont Nongyao €YƳ Aikawa Mitsugu Akiba Takahiro Ako Tsubasa Azuma Hironori Adam Kitingan Abt Amemiya Yosuke Ayoro Laboratory Ariizumi Shiori Alice Hui-Sheng Chang Yii Kah Hoe Igarashi Jun Ikema Yuko Isamu Noguchi Ishikawa Naoki Ishikawa Hinano Ito Ryusuke WinWin Ueno Daisaku Ueno Takashi Uehara Nanae Ukawa Naohiro Umeda Tetsuya MC MANGO Oguro Junichi × SIAF Lab Oshiro Makoto Otomo Yoshihide Otomo Yoshihide + Aoyama Yasutomo + Ito Takayuki	Oren Ambarchi OKI OTACO Katsui Yuji Camille Norment Caliph8 Kikuzawa Yoshinori Kishino Yuichi Kitahara Eiji Kukangendai Gelresai Nguyen Thanh Thuy Christian Marclay Chris Pittsiokos Kuriyagawa Kenichi Kuwakubo Ryota Konno Tsutomu Saito Ayumu Saito Hidesaburo Saito Mikio Sakai Koji Sachiko M Sapporo O-furoshiki team × Project Fukushima! Sapporo Hachigatsusai Special Bigband Saya Sayo Sawa Noriyuki Sawa Hiraki C. Spencer Yeh Shinohara Ushio	shimetta-inu Shoji Yasushi John Richards Shirahama Masaya Shiropanz Suzuki Akio Suzuki Hiraku Suzuki Yuya TAKASHIMA Ren Takahashi Ikuro Tachibana Yasuhiko Tanaka Mitsuru TANOTAIGA Cheng Jye-Renn Chen Chien-Nien chi too Tipus Chen Jung Young Doo Chinbantei Gorakushisyou Tsuzuki Kyoichi dj sniff DJ Po Tenniscoats TENTENKO Tone Yasunao Nakao Bibi Nakao Masako NAKAZAKI Tohru Nakazawa Hideki Naganuma Osamu Nagami Jun Nakamura Toshimaru	Nam June Paik Niimi Taiki Neji Pijin Non Haino Keiji Hata Satoshi Hattokope Hayashi Kazuo Harada Ikuko PIKA Higashikata Yuhei Higuchi Yuki Hirao Takuya Fukazawa Yuko Fujikura Tsubasa Fuji Shotaro Fujita Yosuke Funakawa Shoji Furudate Taichi Fuwa Daisuke Hojito Ryoji Hosoma Hiromichi Horio Kanta Matsui Shiro Matsui Miyako Manabe Masaki Mayonaka Folk Music MAREWREW Mic Usay Migishi Kotaro Misawa Hiroki	Mizuuchi Yoshihito Minami Asami Miyakita Hiromi Miyade Miki Musica Htet Mohri Yuko Mori Miyuki Yamakawa Fuyuki Yamazaki Hiroshi Yamada Maho Yuen Chee Wai YUBIWA Hotel Yoshigaki Yasuhiro Yoshida Nonoko Yoshimasu Gozo Yonago Tadashi Richard Horner YPY Watanabe Haruka Watanabe Yusuke Wabisabi Akabira Sumitomo Coal Mine Heritage: Underground Mine Map Carved wooden bears of Hokkaido Tairyo Izakaya Tecchan Hokkaido Hihokan Images of Mt. Showa-shinzan in eruption painted by Mimatsu Masao Retro Space Saka Hall
Organizer	Sapporo International Art Festival Executive Committee / City of Sapporo				

札幌国際芸術祭2017を終えて

大友 良英

ゲストディレクターをやるにあたっての札幌市からの唯一のリクエストは「市民とともにつくってほしい」ということでした。おそらくは前回の芸術祭で当時わたしがリーダーを務めていたプロジェクトFUKUSHIMA!が市民とともに「大風呂敷」をつくり、それを敷いて盆踊りをやったこと、そしてその祭りがその後も「八月祭」として市民の間に定着していった経緯を踏まえての依頼だったと思います。それにしても、芸術祭の監督経験などないわたしに依頼、しかも坂本龍一さんに続き、2回連続で音楽家への依頼というのは、それなりの英断であったと同時に、そこにすでにある方向性のようなものが見えるような気がしました。

わたしはこれらのことを受けて次のように考えました。

(1) 芸術祭と言いながら、現状基本は多くの場合、現代美術を中心にしている日本の芸術祭ですが、これは音楽家の視点で、音楽のやり方でやっていいというサインだろう。といっても音楽祭をやるわけではなく、あくまで芸術祭なのだから、音楽家が音楽祭ではなく芸術祭をやったらどうなるかという視点だけは踏み外さないようにしよう。そもそも音楽家が美術の世界のやり方を踏襲する必要もないわけで、その辺はかなり大胆に押し通させてもらおう。とりわけ、わたしはインターナショナルな即興演奏やオルタナティブな音楽の現場で自分のスタンスや音楽を作ってきた人間なので、その方法を基本に置かせてもらおう。これについては書くとき長くなるので省略しますが、即興演奏の方法を基本におくということは、事前の計画どおりにやるだけでなく、様々な状況に対応して、フレキシブルに変化していくことを良しとしている上に、いわゆる美術のキュレーションのように、ある方向性で何か説明し配置していくのではなく、起こった現象を、その現場に居合わせた人たちがどう受け取るかを基本にしているので、自治体のように計画的に税金を使うような方法をとっているところと組むにはかなり齟齬が出る可能性があるなとも思いました。それでも音楽家、特にわたしのような即興演奏家がやる以上は、そこを頑固に守りたいなとも思いました。なぜなら、その方向、方法にこそ、未来の可能性があるとわたしは考えているからです。

(2) 市民とやる…という依頼は、考えれば考えるほど定義が難しい。市民というのはいったい誰のことなんだろう。仮に全市民のことを言うのなら、そんなことをこの予算規模でやるのは到底無理だし、もしそんなことが実現したとしたら全体主義みたいになってしまうわけで、そんなものは全力でやりたくないとなわたしの体が拒絶反応を示しています。いろいろ考えた挙句、わたしの結論は、専門家やプロだけでつくるのではなく、やりたいと手を上げてくれた人にはなるべく場を提供しつつ、でも(1)でわたしの考える方向がぶれないようにしたい。かつ、よくある落とし穴で、誰にでもわかりやすくという一見民主的な言葉にひっかかってクオリティが下がるようなことはしたくない(クオリティとは何?という議論があるのはわかりますが、この字数ではややこしくなるのでここでは置いておきます)。で、わたしの結論は、誰でもウェルカムということではなく、まずは最初にわたしのディレクションについて正確に伝え、それでもやりたいという人は拒まずに、大人、子供、プロ、素人にかぎらず、なるべく組んでいこうということでした。ここには震災後の福島での経験が生きていると思っています。

(3) 日本で芸術祭が注目されだした大きなきっかけは「町おこし」への貢献だと思うが、札幌に関しては、少なくとも「町おこし」が動機ではないと判断。なのでそこには軸をおかないでおこう。だったら、どういう目的をもったらいいのかを提示する必要はあるだろう。

といったあたりが事前に考えたことでしたが、それをそのまま言うのでは、あまりにも理屈が勝ってしまって面白くもなるともないなと思い、そのことを背景におきつつなるべくシンプルな問いかけをすることに決めました。それが「芸術祭ってなんだ?」という疑問形のテーマです。でもわたしは答えをだしたかったわけではありません。大切なのは疑問をなげかければ人々が答えてくれるということです。そこから会話が生まれます。おかげでプロアマ問わず市民のみなさんと関わりを持つこともでき、結果的にはそこから様々なプロジェクトが立ち上がっていきました。当初はコアな企画メンバー(バンドメンバーと呼びましたが)とともに始めましたが、いつのまにか、バンドメンバーだけでなく、様々な人が関わり、意見を言う場ができ、最終的には予想よりはるかに多くの作品を発表することになったように思います。結果的に答えはいくつもあっていいわけですが、なにより重要なのは答えをだすことではなく、そこから生まれる多様さと、その多様さをどう共有していくかということだと思います。多数決になるのではなく、多くの小さかったり、かすかだったりする多様な試みが、どうやれば共存していけるのか。それはまさに、多様な人々が暮らす都市社会をどうオーガナイズしていくのかともイコールであり、「町おこし」ではない都市型の芸術祭がなすべきテーマはそこにあるとも思っています。

次にわたしが提案したのは「会ったこともない自分より有名な人の名前を出さない」という企画メンバーや運営に出した縛りでした。作品の企画や説明の際に、とりわけ美術では立派な先人の名前が次々出てきて自分の作品の歴史付けをするのが習慣のようになっているとわたしは感じてます。別にそれが悪いとは思いませんが、でも、わたしにとって、そんな大文字の歴史は面白くないなと感じています。なぜならその方法だと歴史というものをあまりにも単線的に見がちになってしまいますし、なによりも問題だなと思うのは、その説明によって、その作品が美術なり音楽なりの歴史の中で重要であることを説明してしまいかねないからです。確かにそういうことはあるかもしれませんが、事実そうした作品にも素晴らしいものがたくさんあるのも知っています。でも、それは(1)に書いたわたしが見てきた世界では、むしろ恥ずかしいことというか、そうした権威付けははしたないことというか、そんなことよりも、あなたの歴史はどうなんだったってことのほうが大切だと思ったのです。そのために一番手取り早いのは「会ったこともない自分より有名な人の名前を出さない」縛りでした。

これをやることで何が起こったかといえば、様々な展示の中でアーカイブが大きな意味を持ったことだと思います。知られた大文字の美術の歴史や音楽の歴史では見えないものがあるのだとしたら、それを見えるようにするには、独自のアーカイブを作っていくことです。しかもそれは「会ったこともない自分より有名な人」を出すのではなく、つまりは権威付けするのではなく、自分がいったい何に影響をうけて何をしてきたかというのを提示することで、そこから派生する別の歴史が見えてくる…複数の歴史に対して繋いでいくような複数の線をどうひくかがその人の個性にもなり、そこから見える歴史がまた別の何かを提示してくような豊かなアーカイブのありかたに、皆が向かっていき、今回の芸術祭ではかなり充実したアーカイブが各所で見られることになりました。それはこれまでの美術や音楽の歴史からもれてしまうようなものがほとんどでしたが、それこそが札幌が芸術祭をやる大きな意味になったと思っています。これもまた前段で言った「多数決になるのではなく、多くの小さかったりかすかだったりする多様な試みが、どうやれば共存していけるのか」に共通するものです。それは美術や音楽を権威あるものとして、そこに参加し、ある位置を獲得するような方向ではなく、自分たちにとってアートとはなんぞやというところに立ち返ることでもあると思います。芸術はどこかにある立派なものではなく自分たちのもの、そこから札幌は始めてほしいと思ってますし、それこそが札幌で行われる芸術祭の独自の個性を作るものだと思います。それは自分たち自身で価値を創出するという意味でもあります。

即興ということに関して言えば、テニスコートやわたしがほとんどの期間滞在し作品をつくりつづけ、地元の沼山さんと端さん、中島さん、マユンさんはじめ数多くのアーティストや企画者も期間中、ずっと作品やイベントにかかわりつづけ、予定にないこともどんどんやりつづける中で、とても文字にはしきれない、記録にしづらいこともいっぱい起き、結果的には生きた芸術祭になったと思っています。こうして終わってみると「アーカイブと即興」につきた芸術祭とも言えると思います。その意味で、ぶれずにディレクションを貫き、世界中どこを見てもないような、理想的な芸術祭がうまれたと思っています。同時にこの方法で、市民とやるとはという問いにも、ある程度の答えときっかけを提示できたと思っています。この辺はぜひ次にもつなげてより発展させてほしいなとも思ってます。とりわけ「大風呂敷」と「さっぽろコレクティブ・オーケストラ」は、市民参加型として本当に素晴らしい成果を出せました。参加してくださったみなさんに対し、最大限の言葉で絶賛したい気持ちです。

一点悔やまれるのは「国際」「インターナショナル」の部分が弱かったことです。これは来日ミュージシャンの数の話ではありません。単に来日ということなら数多くのアーティストが来てますから。そうではなく、国際芸術祭というのは、ドメスティックにもを発信するのではなく、様々な文化や言葉を持った人にも届くようにすることであり、その自覚を運営側に徹底することをわたしが疎かにしたことが悔やまれます。世界の優れたものを持ってくるから国際なのではなく(それもありますが)、そうではなく自分たちのやってることが、地球の反対側にも届くようにすること、日本語圏以外にも何をやってるかが伝わるようにすることこそが「国際」あるいは「インターナショナル」ということだとわたしは考えています。もしも札幌が将来オリンピックをやりたのであれば、この「国際」「インターナショナル」とはなんなのかを考える機会をもっと持つべきだし、芸術祭はそれを実践するまたとない機会だと思っています。日本語だけで全てが完結する世界だけでは芸術を語るには不十分すぎる、いや芸術だけでなく世界を語るには不十分すぎる…という言葉を残して、わたしは次の方にディレクションを引き継ぎたいと思います。

2017年12月2日 ブラジル、リオデジャネイロにて



大友 良英 おおもとしひで | 音楽家

1959年、神奈川県横浜市生まれ。実験的な音楽からジャズやポップスの領域までその作風は多種多様、その活動は海外でも大きな注目を集める。また映画やテレビの劇伴作家としても数多くのキャリアを有する。近年は「アンサンブルズ」の名のもと、さまざまな人たちとのコラボレーションを軸に展示作品や特殊形態のコンサートを手がけると同時に、一般参加型のプロジェクトにも力を入れている。東日本大震災後は十代を過ごした福島でプロジェクトを立ち上げ、現在もさまざまな活動を継続中。2012年には、「プロジェクトFUKUSHIMA!」の活動で芸術選奨文部科学大臣賞芸術振興部門を受賞。2013年、「あまちゃん」の音楽でレコード大賞作曲賞ほか数多くの賞を受賞している。2014年、独立行政法人国際交流基金アジアセンターとともに「アンサンブルズ・アジア」を立ち上げ、音楽を通じたアジアのネットワーク作りに奔走している。2017年度文化庁文化交流使として南米各地での活動も行っている。

After the Sapporo International Art Festival 2017

Otomo Yoshihide

The only request from the City of Sapporo when I accepted the post of guest director was to "create an art festival with local residents." I think this was requested probably because I led Project Fukushima! in the previous art festival, where we made O-furoshiki with local residents and held a Bon dance on the furoshiki. This event was then established as the August Festival by local residents. The city asked me, someone with no experience as an art festival director, to take the helm, and this was the second consecutive request to a musician following Mr. Sakamoto Ryuichi in the first edition. It was a bold decision, and I felt I saw a trend developing.

From these, I thought as follows:

(1) In Japan, most art festivals currently focus on contemporary fine art, but my selection as director told me I could create an art festival from a musician's perspective. However, since this was not a music festival but an art festival, I had to create an art festival as a musician. Musicians do not need to follow the approach of the fine art world, so I approached things in my own way. I am a person who has set my stance and created music in the international improvisation and alternative music scenes, so I basically employed that approach here. It's a long story, so I won't go into detail here. However, employing an improvisational style means to not only go ahead with planned action but also allow things to change flexibly according to the circumstances. It is not to describe and place something in a specific direction like curation, but to focus on how people present in a place understand what happened there. Accordingly, it may cause conflict when working with a local government, which systematically uses tax. Even so, since a musician, especially an improviser like me worked on the event, an improvisational style had to be adhered to. That was because I see future possibilities in the direction and style of improvisation.

(2) The more I thought about the request to work with local residents, the more difficult it became to define local residents. Who are local residents? If local residents were defined as meaning all residents in the area, it would have been absolutely impossible to work with all residents within this budget. If it worked out, it would have become totalitarianism. I did not want to do such a thing and my body was showing rejection symptoms. After much consideration, I decided to provide as many opportunities as possible to motivated volunteers in addition to experts and professionals while sticking to my direction shown in (1). I didn't want to fall for the words of "easy for everyone to understand," which are seemingly democratic but reduce quality (I know some people wonder what quality is, but it's a long story so I won't go into detail here). My conclusion was not to welcome everyone but to work with anyone who wishes to work with me after hearing my direction regardless of whether they are adults, children, professionals or amateurs. This conclusion was drawn based on my experience in Fukushima after the Great East Japan Earthquake.

(3) The main reason why art festivals attract attention in Japan is that they contribute to town revitalization. I didn't think town revitalization was the motive for Sapporo, so I chose not to focus on that. Then, I had to detail what the purpose was.

The above is what I thought in advance. I thought expressing all my thoughts was too argumentative and boring. So, I decided to ask a simple question in this context. That is the theme, "How do we define 'Art Festival'?" I didn't want to find a single answer. The important thing is that people answer a question, which prompts conversations among people. This made me have relationships with local residents, whether they are professionals or amateurs, eventually launching various projects. I began preparations with core project members (band members), but before I knew it, not only band members but also various other people were involved and exchanged opinions, resulting in far more artworks than I expected. It is no problem if there are many answers, and the most important thing is not to find an answer but to accept and share diversity. How can diverse, small and minor attempts exist together rather than being rejected by a majority vote? That is exactly the same as how to organize an urban community. This is the theme of what should be done in an urban-type art festival that is not intended for town revitalization.

I also proposed a rule requiring project members and the operational side not to use the names of people who are more famous than the artist and whom he/she never met. I feel that especially in fine art, there seems to be a custom that the names of admirable forerunners are used in planning and commentary to explain the artist's influences. I don't think it is bad, but I don't think it is interesting. This is because that approach explains history in a single line, and the explanation may give an impression that the work is important in fine art or music history. It may be true, and I know many such works are actually wonderful. In the international improvisation and alternative music scene, name-dropping is embarrassing and doing it is disgraceful. The artist's history is more important than that. This is why I imposed the rule not to use the names of people who are more famous than the artist and whom he/she has never met.

This gave great meaning to the archives at SIAF2017. If there are invisible things in the fine art or music history explained by big names, one-of-a-kind archives should be created to bring these things to light. The archives, which highlighted the artists' work and influences, present a different history to the art history focused on famous artists with no connection to the artists exhibiting. Multiple histories are connected with multiple lines in a certain way, which shows the artist's characteristics and another history that presents something else. In this way, everyone worked to create rich archives, which were exhibited at various venues of this art festival. Most of them were not placed in the context of fine art or music history, but this gave great meaning to the art festival in Sapporo. This also relates to the question, how can diverse, small and minor attempts exist together rather than being rejected by a majority vote? It doesn't mean to gain status in the fine art or music worlds, but to consider what art is for us. Art is not something to be exalted, it is ours. I hope Sapporo starts from this point.

When it comes to improvisation, Tenniscoats and I stayed in Sapporo for almost all of the festival period and continued to create works there, and Mr. Numayama, Mr. Hata, Mr. Nakajima and Ms. Mayun and locally-based artists maintained involvement in works and events and continued to do unplanned things. Many things that are hard to print and record happened, resulting in an organic art festival. Looking back at SIAF2017, I now think it was an art festival that entirely focused on archives and improvisation. In this sense, an ideal art festival unique to Sapporo was created by sticking to our vision. I think this approach somehow responded to the request of working with local residents. I hope this will lead to the next edition and develop. Among the projects I was involved in, the O-furoshiki Project and the Sapporo Collective Orchestra were really amazing. I would like to heap praise on all participants for their performance.

One thing I feel bad about is that it was not so international. This is not about the number of musicians from overseas. Numerous artists came to Japan. An international art festival is an opportunity to convey art to people with different cultures and languages rather than spreading it domestically. I regret failing to raise the operational side's awareness about it. I think that an international event is not to bring excellent things to Japan (that's part of it, though), but to convey what we do to the opposite side of the earth and regions where Japanese is not used. If Sapporo wants to host the Olympics in the future, it should have more opportunities to consider what "international" means. The art festival is the best opportunity to consider this. It is insufficient to talk about art in the world, when everything is understood only in Japanese. It is insufficient to talk about not only art but also the world from only one perspective. With these words, I would like to hand over the direction to the next director.

In Rio de Janeiro, Brazil, December 2, 2017

Otomo Yoshihide Musician

Born in Yokohama, Japan in 1959. He is known for composing music for a wide variety of genres from experimental, pop, and jazz music. He has received attention from all around the world for his different activities, including his successful career as a sound track composer for film and TV. In recent years he has been producing works for exhibitions and special type of concerts in collaborations with various other artists under the name of "Ensembles", while also focusing on unique public-participative projects as well. In 2012, after the Great East Japan Earthquake, he started in Fukushima, "Project Fukushima!" where he'd spent his teenage years and received the Ministry of Education's Award for Fine Arts in the category of Promotion. Another of his many works, the theme music for the popular TV series "Amachan", has received many honorable prizes, including the Best Composer Award for the Japan Record Award in 2013. In 2014, he launched "Ensembles Asia" with the Japan Foundation to create a stronger network through Asia woven by music. He has also worked in South America as a Japan Cultural Envoy FY2017.

「大友流」に共振した SIAF2017

沼山 良明

「札幌国際芸術祭(以下 SIAF) 2017」は、2015 年秋ゲストディレクターに大友良英さんが就任し、大友さんによりバンドメンバー(企画メンバー)が選任されました。私も大友さんとの 33 年間におよぶ親交により、エグゼクティブアドバイザーとしてメンバーに加わることになり、約 2 年の準備期間を経て、57 日間の会期を無事終えることができました。

アドバイザーといえば、前回の SIAF2014 では著名な浅田彰さんが務めた要職であり、正直プレッシャーと戸惑いがありました。長年音楽シーンで活動しアート全般には疎い私ですが、札幌プレビエンナーレ 2011 や SIAF2014 の音楽部分を担当したことなどで、他ジャンルの方々と関わりを深めてきた経験と、大友さんがここ十数年来手がける展示作品「アンサンブルズ展」を、仙台、水戸、東京などで興味深く見て、いつか札幌でも実現したいと熱望していたこともあったので、ディレクター大友良英さんが描く芸術祭を、微力ながら支えてみようと思心しました。

公募も含めた各プロジェクトがほぼ出揃い、準備が動き始めた頃、コミュニケーション不足により、大友さんが事務局や地元スタッフへ疑念や誤解を抱く場面もありましたが、双方が真摯に向き合って解決し、素晴らしい信頼関係を築いて開幕を迎えることができました。

開幕が近づき各会場に姿を現し始めた作品たちを見た時、大友さんのテーマ「芸術祭ってなんだ?」という問いかけや、「ガラクタの星座たち」に呼应する光景に感動しました。また「さっぽろコレクティブ・オーケストラ」や「大風呂敷プロジェクト」、ゲリラ的なパフォーマンスなど、子どもから大人までを巻き込んだ、数々のライブイベントやプロジェクトが毎日のように開催され、これこそが大友さんが描いた、札幌でしか体験できない、独創的で刺激的な芸術祭だったと思います。

また、大友さんの勧めで、札幌市資料館に「NMA ライブ・ビデオアーカイブ」の部屋を設けることができ、道内外のたくさんの来訪者の方々と出会え、感動していただけたことも私の生涯の財産となりました。

素晴らしい展示とイベントの数々に満ちた SIAF2017 でしたが、今後の課題は、次回にどう繋げていくかということと、市内中心部の拠点、チ・カ・ホ(札幌駅前通地下歩行空間)や 2018 年秋にオープンする札幌市民交流プラザなどをフル活用して、芸術祭の魅力を広く多くの人々に伝えることができるよう願っています。

沼山 良明 ぬまやま よしあき | NMA コンサート・オーガナイザー

1944 年、北海道夕張郡由仁町生まれ、札幌市在住。本業はピアノ調律師。70 年代後半、ジャズ評論家・副島輝人氏との出会いなどで前衛音楽に関心を深め、1983 年ドイツのメルス・ニュージャズ祭を観て、世界と日本の音楽情報のギャップに目覚めたことから、同年 NMA (NOW MUSIC ARTS) を発足。国内外の先鋭的な音楽を札幌に紹介するコンサートを企画、開催している。



NMA ライブ・ビデオアーカイブ



NMA Live - 大友良英スペシャル 3days DAY3

札幌国際芸術祭 2017 を終えても終わらない感覚

漆 崇博

2014 年に開催された 1 回目の札幌国際芸術祭(以降 SIAF)の準備段階から遡って、私と SIAF との関わりは 5 年を経過した。

SIAF2014 では、プロジェクトマネージャーとして、プレ事業やボランティアの取りまとめ、参加型プログラムの運営など、芸術祭を下支えする役割が大きかったと認識している。一方、今回の SIAF2017 では、企画メンバーの一員として、札幌市電を舞台としたプログラムの制作や、札幌市資料館を舞台としたアートプロジェクトの企画・コーディネーターする立場として、比較的アーティストや表現者に寄り添う形での関わりが主であった。

個人的な感想を言えば、SIAF2014 の終了時は、何か大きなことをやりきった達成感があったように思う(と同時に疲労感が襲ってきたわけだが...)。しかし、SIAF2017 では、会期終了後も何かを引きずるような感覚で、不思議とそうした達成感のないまま現在に至っている。担った役割の違いも理由としてはあるが、おそらく原因はそこではない。振り返ると SIAF2014 が、現代美術の展覧会を主軸とした比較的ピラミッド型の構造であったのに対し、SIAF2017 は、多少の凸凹はあるにせよ、ジャンルの垣根もなく、メインもサブもない、すべてが横並びで渾然一体となった構造であった。

前例がないと言われるほど多数のイベントやプロジェクトが存在した SIAF2017 は、アートが特別な「ハレ」の舞台に降り立つのではなく、日常という「ケ」の状況から表現者の自発的な思いや発想、行動を源に湧き上がるようにアートが存在したと私は考えている。そうして作られた状況や表現が、日常と切り離すことのできない営みの延長に存在し、もっと生活の根っこにあるものを改めて捉え直す場として機能したならば、2015 年からスタートした SIAF ラボでの活動において継続的に考えてきたことでもあり、SIAF2014 で感じた非日常を生み出すことに終始することで得た特殊な達成感が、今回湧いてこないことも納得がいく部分がある。つまり SIAF2014 の終了後から終わりのないプロジェクトが始まっていたことを今さらながら自覚するのである。

私にとっては、もはやコントロール不能で、さまざまな事象が入り混じった状況こそが、実は本来の私たちの日常であり、そうした制御しきれない混沌の中こそ制約や規制をうやむやにする(或いは乗り越える)自由な発想や表現が存在しうるのではないかと SIAF2017 を通じて改めて確信する機会となった。そうした感覚を一人でも多くの人と共有できることを期待し、これからも活動していきたいと考えている。

漆 崇博 うるしたかひろ | コーディネーター

1977 年、北海道生まれ。石狩市在住。一般社団法人 AIS プランニング代表理事。北海道各地でのアーティスト・イン・スクール事業のコーディネートを中心に、芸術文化を媒介とした事業運営を行う。SIAF2014 では、プロジェクトマネージャーとしてボランティア運営や、札幌市資料館でアクティビティ拠点プロジェクトの取りまとめを担当した。



CAMP SITE PROJECT「裏庭」



SIAF ラボ編集局×サカナ通信

バンマスが率いる融通無碍な国際展・SIAF2017

上遠野 敏

SIAF2017スペシャル・ピックバンドのバンドマスター(ゲストディレクター)は大友良英さん。バンドメンバー(企画メンバー)に入れてもらえたのは光栄の至りです。バンマスの大友さんは作曲家とノイズや即興演奏に長けているばかりか、パフォーマンスやサウンドインスタレーションも得意としています。人の話を「聴く耳」を持っている方で、バンドメンバーのそれぞれの音を聴き分け、スコア(計画)を書き、そしてタクト(采配)を取り、これまでに見たことない国際展を奏でてくれました。

私は、前回のSIAF2014には作家として「炭鉱の記憶」をテーマにした作品を展示しました。炭鉱遺産を活用したアートプロジェクトは2004年から継続してアートディレクターと作家を務めて、日本経済を支えた炭鉱の記憶をアートで掘り起こして、地域の方々と協働する地域活性化の一端を担ってきました。このような経緯もあり、2015年4月から札幌国際芸術祭部会(SIAFコミッティー)のメンバーに加わりました。メンバーは飯田志保子さん、久保田晃弘さん、山田修市さん、吉崎元章さんの5名。専門的見地から助言やサポートを行うのがミッションです。その中でも最も重要なのが、ゲストディレクター候補のリストアップ。前回の坂本龍一さんに匹敵する人材が求められます。挙げては消えの連続でしたが、事務局提案で前回の国際展や八月祭で活動されて人柄や企画力に優れている大友良英さんの名前が挙がり、一同が大賛成。大友さんの札幌の師匠である沼山良明さんに打診。沼山さんの頼みとあれば快諾されて、10月1日にゲストディレクター決定のプレスリリースの運びとなりました。11月10日に新宿にコミッティーと事務局が出向き大友さんと第一回の打ち合わせを行い、ようやく始動しました。11月30日には札幌に来ていただき、歓迎会。その時の私のフェイスブックには、「包容力があり人間力が大きく、人を楽しくさせ自然と人が集まる人を『人たらし』と言うらしい。(沼山さんご夫妻談)これからの数年が楽しみ満載の予感。人々を主役にして予祝を与える。その律儀さがいい。」と書かれています。

それからが急ピッチで進み、2016年2月16日のSIAF2017記者会見に臨みました。バンマスは大友さん、秋元市長、バンドメンバーが揃い開催概要が示されました。私たちバンドメンバー12人はさまざまなバックグラウンドから集められて、大友さんの投げかけた「芸術祭ってなんだ?」に対してのそれぞれの応えが企画に反映されることになります。私の企画案は札幌と北海道の至宝、円山公園企画などを構想。まずは閉館が噂されていたレトロスペース坂会館へ大友さんをご案内。いたく感激されたようで「芸術祭は『レトロスペース坂会館』から学ばなければならないのだ」と「名も無き人々の営みに対する、限りない愛情の集積なんだと思う。そして芸術祭たるもの、このようにあるべきなんだと、」とSIAFブログに書かれました。私の企画案の名もなき市井の人々の賢人たちに着目した「大漁居酒屋てっちゃん」「北海道の木彫り熊」「三松正夫の火山画」などの企画が、いわば大友さんと共犯関係で実施されるに至ったわけです。最終的には「北海道秘宝館」「赤平住友炭鉱坑内模式図」、円山公園の「コタンベッププロジェクト」(これは富田哲司さんに企画を担ってもらった)の7企画を実施しました。展示数と物量がとてつもなく多くて、出品作家さんの多大なる労力と尽力のおかげで展示をすることができました。大友さんと上遠野、そして展示に応じてくれた人々の三者が絶妙なタイミングで揃った、今しかできない唯一無比の展覧会になりました。とても楽しかった。

上遠野 敏 かとおのさとし

美術家・札幌市立大学教授

1955年、福島県生まれ。札幌市在住。東京藝術大学、大学院修了。札幌市立大学、大学院で教授。2004年から空知産炭地域の炭鉱遺産を活用したアートプロジェクト「奔別アートプロジェクト2014」などのアートディレクター兼作家として地域活性化に取り組んでいる。「ネ・申・イ・ム・光景」シリーズとして日本全国の神仏の現れを撮影した写真作品にも取り組んでいる。



大友ゲストディレクターによる坂会館視察

コレクティブ・大風呂敷・ハードコア・アンサンブル・

ノイズ・オーケストラ・電車の旅

木野 哲也

「中心をなるべく作らない、いつも中心に入れない・入らない人たちもいることを忘れないこと、その周辺を見渡すこと」。大友さんのいくつかのオーダーの中でも、この言葉を大風呂敷プロジェクトでは最後まで大事にしたいと思った。着想から約2年「市民と一緒につくるって何だ?」をずっと考え続けた。作家が導く作品づくりではないし、明確なゴールが定まっていたわけでもない。縫いたい、敷きたい、関わりたい、という市民の主体性を大切にしつつ、何かしら良き着地点を探し続けようと考えていた。芸術祭のテーマの中で市民協働は一つの大ミッションでもあり、大風呂敷はそれを体現していくべきプロジェクトであった。一枚の布キレはどこかの家の押入れの隅っこや昔のデパートの袋なんかの中で長く眠っている。布・糸の回収を市内約20カ所で行ったときに、布は旅をすると思った。布は姿・形・行き先や用途を変えながらも、今回多くの市民の手によって表舞台で輝いた。布と布の出会いがコレクティブだしアンサンブルだなと感じ、このプロジェクトの懐の深さと未知数の可能性にドキドキもした。

プロジェクト達成の最大の功労者は、大風呂敷工場へ集まり縫い続けた札幌市民の皆さんであると思うし、また延べ2000名を超える市民を工場へ受け入れ続けた約11ヶ月間、その運営管理チームである仲間たちとの協働の物語りは涙無しでは語れない。自分は工場の管理統括の立場でもあるが、むしろここに集う方々や、仲間たちのモチベーションをキープし持ち上げ続けること、人と人のあいだに生まれていく雰囲気を感じ取っていくこと、尊重が大切だと思い続けていた。僕個人としては、人に居場所があることの強さを再認識したプロジェクトでもあった。自ら選び足を運びたいと思える居場所があることは、きっと日々の営みに潤いとなり、充実感となり、もしかしたらプライドになったり、暮らしのエネルギーになるだろうと、参加者たちとのコミュニケーションの中で感じる場面も増えていった。他者と出会い認め合って仲間になって、仲間のいる大切な場所が生まれる。それってすごく強いんだなあと何度も感動した。

全5公演が早々にソールドアウトとなったノイズ電車SAPPORO は、アングラインディでハードコアノイズでポップなヤツらとでも言うべきか、けど着実にプレイヤーとしての実績と新鋭企画を札幌で重ね続けているメンバーたちとの協働制作を僕は望んだ。企画立案、ミュージシャン選考・交渉から当日アテンド、本番運営までの全行程をこのメンバーでやり切ったことは大きな前進であったと思う。夜のスキノ発着、予測不能な約60分、貸切ワンマン、チラシポスターのキレ具合など、ミステリアスさが演出感と期待感にうまくハマっていた。相当にイカれた激しい回もあったが流血もなく終えられホッとした。いつも優しく冷静な運転手さんたちへ、全公演終了後にたくさん御礼を伝えた。

いろいろあって担当ではなくなったさっぽろコレクティブ・オーケストラは、途中までではあったが自分にはとても尊く大切な時間だった。ありがとうございました。

木野 哲也 きのとつや

ディレクター

1978年、北海道稚内市生まれ。北斗市出身、札幌市在住。芸術文化分野におけるさまざまな領域の企画・制作・運営を実践。各地域でのプロジェクトの経験を生かし、現在、まちづくり関連事業にも携わる。これまでに携わった主な企画・プロジェクトとして、「飛生の森づくりプロジェクト/TOBIU CAMP」(飛生アートコミュニティ、白老町、2011～)、「さっぽろ八月祭2015」など。



2017年3月に行われた大風呂敷サミット

惑う星々の集い

坂口 千秋

私が担当していた会場はいずれも札幌の南区にあり、その行き帰りには必ず真駒内の街並を通り抜けます。真駒内は1972年札幌冬期オリンピック当時の面影が今も残る緑豊かな郊外で、70'sな団地から芸術の森へと続く道のりは、札幌の都市と自然の関係を体現するコンパクトなドライブルートでした。それはまた、毛利悠子の新作インスタレーション「そよぎ またはエコー」のテーマを辿るようでもありました。

毛利さんは、北海道の旅で得たインスピレーションから、作品がスカイウェイの環境と共鳴に至る道筋を、約1年かけてじっくりとつくっていきました。会場の選定から始まり、素材集めや制作まで、プロセスには毎回他者とのドラマチックな関わりがあり、その物語の厚みが作品の土台を支えました。交渉には上遠野先生や事務局に大いに助けられ、またノルウェーのカミュー・ノメントと坂本龍一のパフォーマンスも、ノルウェー王国大使館をはじめ多くの協力があって実現できたイベントでした。けれどもなによりも、彼女のひたむきで貪欲なつくる姿勢が、周囲を動かしていったといえるでしょう。たくさんの人を巻き込んでつくりあげた今回の経験によって、毛利さんはさらにスケールの大きいプロジェクトに挑む自信をつけたことと思います。そして私は、毛利悠子という作家の「ここでしかできないものをつくりたい!」という欲望に乗っかって、普段会えない人に会い、行かないところへ行き、旅するようにSIAFを楽しみました。

ところで、毛利さんはとあるSIAF2017のインタビューで、「アーティストが本気でつくってるから絶対に面白いものになる」と答えていました。その言葉通り、SIAF2017は作り手たちの祭典でした。作品を星にたとえて「星座」というキーワードが出されたのは少しあとでしたが、ひとつひとつの星に光を当てたのがSIAF2017だったと思います。星々の世界では、さまざまなイベントが発生し、そこからたくさんの物語が生み出されていました。あまり語られることはないけれど、こうしたいくつもの物語がそのプロジェクトを豊かにします。モエレ沼に広がった大風呂敷の光景が「市民とつくる芸術祭」の象徴といわれた理由も、あの布ひと切れに関わった人々の物語があったからなのです。でもそれははるか遠くから眺めれば、混沌とした銀河のようなものだったのではないかと思います。「札幌国際芸術祭という芸術祭ってなんだ?」という問いに私なりに答えるなら、惑う星々の集いです。それらはひとつの星座にはなることなく、バラバラのまま、美しい混沌を形成していました。

坂口 千秋 さかぐち ちあき | コーディネーター

鹿児島県出身。現代美術関連のコーディネーター、企画、編集、ライターなど。美術館から屋上までさまざまなアートの現場に関わる。2014年、さっぽろ天神山アートスタジオの立ち上げスタッフとして半年間札幌に滞在。「プロジェクトFUKUSHIMA!」美術部メンバー。アート&カルチャーマガジン『VOID Chicken』共同編集発行人。



毛利悠子 視察の様子



モエレ沼公園 音楽&アート解放区

SIAFデザインプロジェクトについて

佐藤 直樹

私の役割は「芸術祭ってなんだ?」というテーマの中で芸術祭そのものの「デザイン」をどう位置づけるかから始まった。

札幌でユニークなデザイン活動が続けてきたワビサビの工藤良平さんとCOMMUNEの上田亮さんをゲストに招いたパブリックミーティングを開き、「SIAFデザインプロジェクト」の発足を確認したのが2015年2月17日。for SIAFの機能を持つと同時にthrough SIAFであるような、芸術祭の開催によって更新される「デザイン体験」をいかに組み込んでいくかを考えていくことになった。複数の色彩の組み合わせ、可変的なマークの採用などは、会場候補地を中心とした街歩きのワークショップを経たもので、引き続き行われたパブリックミーティングでの報告や検証を重ねながら決定されていった。こうしたプロセスに接することがすべての市民の関心事に上ることはないかもしれないが、開かれた機会を設けながら企画が進められたこと自体、大きな意味を持つものだったと考える。今後も継続され、SIAFの特徴として根付いてくれることを願う。

ワークショップを重ねることで「小学生デザイナーによるラッピング電車SIAF号」の実現にこぎ着けたことも特筆すべき成果だろう。デザインは、ごく一部の人間の制作の範囲内で占有的に完結するものではそもそもない。接した人々の体験としてどうだったかが問われるべきものである。時代的な流れの中で、ある種の競争原理によってより洗練化されたいくつかの特例が「先端的なデザイン」「優れたデザイン」と目された状況もかつてはあった。しかし、そうしたデザイン観自体もう過去のものと言わざるを得ない。「SIAFデザインプロジェクト」で確認できた重要な点はそこだろう。中でも「札幌デザイン開拓使 サッポロ発のグラフィックデザイン〜栗谷川健一から初音ミクまで〜」開催の意義は大きかった。

今後の課題があるとするなら、グラフィックだけでなく建築やプロダクト、ファッションなども含めた、より広い範囲の「デザイン」を射程に入れたテーマをいかに設定できるかではないか。コンテンポラリーアートに特化した芸術祭もあっていいわけだが、SIAFの意義が領域横断性にあることは間違いない。とすれば「デザインをどう位置づけるか」も問われ続けるべきテーマだろう。国内のドメスティックな力関係などによるのではない、世界性を持った提案を探ること。そのためにローカルゆえの豊かさを手放さないこと。今後もその認識は踏まえてほしい。

佐藤 直樹 さとう なおき | アートディレクター/多摩美術大学教授

1961年、東京都生まれ。北海道教育大学卒業後、信州大学で教育社会学・言語社会学を学ぶ。美学校菊畑茂久馬絵画教場修了。1994年、『WIRED』日本版創刊にあたりアートディレクターに就任。1998年、アジール・デザイン(現Asyl)設立。個人展示として、「秘境の東京、そこで生えている。」(3331 Arts Chiyoda, 2017)。



第1回デザインミーティング



第3回デザインミーティング

「狸小路TV」と、文化を活用したまちづくり

中島 洋

私の活動は、大友さんからお誘いを受けてから、市民参加を含むさまざまな企画提案や「まちなか」企画としての狸小路商店街の会場探しから始まった。しかし、解体予定の巨大ビルやビル上階の空きスペースなどの有力候補がだめになり、スペース探しは至難の技だった。そこでまずは専門の映像を中心に、60年代、70年代のテレビを題材に企画しようと考えた。それは、ネットなどの新しいメディアが今、青春期であるように、TVの青春期を考えることが、今に繋がる表現の原点を探ることになると考えたからだ。

今野勉さんと長沼修さんを約一年前にお招きして、街中の下見とTV表現を巡っての議論を重ねて、まとめていった。それは「TVは生だ」との今野さんの言葉に象徴されるように、メインの「根源的なTV表現を再発見する」イベントを中心に、小さなスタジオから放送番組をネット配信し、狸小路商店街の協力店に設置したテレビジョンに生放送する試みだった。商店街の大きな街頭テレビジョンには、技術的な制約でできなかったが、約40日間連夜のスタジオの番組制作には、札幌在住のフリーキャスターや、アーティスト、CMディレクター、高校教師などが参加して、会期中、回を重ねるごとに多様な表現が広がっていった。また札幌の放送局の現在を透視する番組や作品を見て議論する「TVはどうなる」シリーズは、芸術祭だけで終わることなく、TV局の意欲的なメンバーによるネットワーク作りに広がる可能性がある。

また芸術祭のCMを作る「CM映像制作ワークショップ」は、ICC(インタークロス・クリエイティブ・センター)主催で、大学・高校生30名が、5チームにわかれて半年かけてCMを制作し、大友さんが作曲して音楽をつけてくれ、道内各地の映画館や公共施設で多くの方に見ていただいた。

このように、多くの市民の参加や協力によって企画が形になったが、芸術祭全体としても、さまざまな形での市民参加が成果の一つだろう。芸術祭は創造都市を目指す札幌の事業の一つだが、(公募企画の)市民プロジェクトに100近い応募があったことが象徴するように、創造都市とは、アーティストだけでなく、市民が創造的な活動をする「場」を創ることも大きな柱なのだ。2回の芸術祭で萌芽が出た市民の創造的参加を、2018年にオープンする札幌市民交流プラザが引き継ぎ、文化を活用したまちづくりとして、芸術祭とともに歩んでいくことを望んでいる。

中島 洋 なかじまよう | シアターキノ代表

1950年生まれ、札幌市在住。大学時代より、実験映画制作や自主上映を始め、アート、演劇、舞踊などさまざまな表現に関わる。1992年に市民出資によるミニシアター「シアターキノ」を設立。札幌市文化芸術基本計画検討委員など、文化行政の委員も多数務める。札幌初の国際的な芸術祭を目指す札幌ビエンナーレ・プレ企画では企画制作委員長。SIAF2014ではボランティアとしてアート・カフェを担当する。



狸小路TV



SIAF2017CM映像制作ワークショップ

? マークが与えてくれたありがとう

端 聡

「芸術祭ってなんだ?」疑問符から始まったSIAF2017。世界で開催されている国際的な芸術祭でこのようなテーマを見たことはありません。その問いに対して、正解が一つである必要はないと大友ゲストディレクターは語り、さらに国際性とは多様性だとも言っています。私も過去、大小いくつか国際展に関わってきた経験があることから、正直このテーマを聞かされた時は驚きました。一般論としてテーマには具体的なイメージを示す言葉があり、その言葉やイメージに対して深く掘り下げる思考、問題、課題、疑問などを、創造性を通じ表現するのがアートプロジェクトの常であり、芸術祭そのものに?マークを用いるのは「何かとは何か?」その「何」とは何だ?みたいな究極の哲学を与えられた印象でした。それに増して私が担当企画したのは「まちなかエリア」すすきでのしたので、当然、まちにはその場所ごとの歴史や顔があり、それを無視することはできず、そのまちの顔の中に「芸術祭ってなんだ?」を表現することになるわけです。「札幌とは?」「すすきとは?」そこで開催する「芸術祭ってなんだ?」が重なり合い「?疑問符」の三重奏を上手く演奏するのが私のバンドメンバーとしての役割でした。そこで大友さんの言う「正解がひとつである必要はない、多様性が重要」という言葉を踏まえ、私なりにテーマを考えてみることにしたのです。

日本のルーツと言われる縄文文化は、一説によると主語を持たない言葉を使い、あなたと私という区別もなく何かを所有することも比較することもなくすべては地球や宇宙と一体化し、それは人間だけではなく動物も植物も鉱物もすべては同じく平等とされすべてを受け入れ共有していたと言われます。それはその後の神道にも通じており八百万(やおよろず)の神で表すすべてのものには霊生、神が宿するという独自のアニミズムや何でも受け入れる多様性に繋がり、現在でも日本のポピュリズムにみられます。12月にはクリスマスで教会へ、正月は神社、2月はバレンタイン、お盆はお寺さん、10月はハロウィンでお祭り騒ぎ。ある意味、節操がないというか、外国の人からみれば、サンドイッチにご飯と生クリームをはさめ、ビールに納豆を入れて一緒に飲んでみたいに思う。これは海外ではまったく理解できない現象です。神道では八百万(やおよろず)の神が存在し日本の人口がまだ100万人の頃に800万いたのですから、1人にもれなく8人の神様がいたわけです。なのでその後、インドから中国を渡ってブッダさんが入るも受け入れ、ヨーロッパからキリストさんが入ってきても受け入れる。なにせ八百万もいるのだから一人二人ぐらい増えたってどってことないわけです。だからと言って外国ものを軽視しているわけではなく祭にすることですべてのものに感謝している。この多様性を重視し何でも受け入れる日本人独自の穏やかな姿勢は今回の芸術祭にも活かされています。内容を振り返ってみると美術、音楽、演劇、映像、ダンス、メディアアートと大きくジャンル分けすることはできますが、その中身は千差万別。それぞれの企画者、アーティストがそれぞれの「芸術祭ってなんだ?」を見事に試みており、他に類のない多様性のある全方位の芸術祭ができたのだと思います。

最後になりますが、昼夜問わず懸命に芸術祭を支えてくれた行政のみなさん、スタッフのみなさん、そして今回のテーマ「芸術祭ってなんだ?」にありがとう。

端 聡 はたさとし

美術家・アートディレクター

1960年、北海道岩見沢市生まれ。札幌市在住。札幌を拠点に活動する美術家。1995年ドイツ学術交流会DAADの助成によりドイツに滞在して以降、国内外で多数の個展、グループ展に出品。2004年、札幌文化奨励賞を受賞。2012年、北海道文化奨励賞を受賞。SIAF2014では地域ディレクターとして企画に加わる。「あいちトリエンナーレ2016」に参加。



《Intention and substance》

芸術祭ってなんだ？

細川 麻沙美

私は、前回 SIAF2014で、プロジェクトマネージャーとしてチ・カ・ホ会場を中心に作品制作の現場を担当し、その縁から2015年より SIAF2017開催に向けて準備をする事務局の一員、つまり裏方となった。そして、大友さんがゲストディレクター(以下、GD)に決定し、さっそく主軸となる企画メンバーに声がけを始めた時期に、「現場の裏方もメンバーに」という思いがけない発想から企画メンバーに加えていただいた。そのため、メンバーと言えども、企画を立案し実現させるのではなく、GDやメンバーの企画を実現させる可能性をできる限り広げる役割(実際には状況の調整と多く事務作業)として SIAF2017には関わった。この立場で改めて大友GD が掲げたテーマを考えてみたい。

「芸術祭」という言葉のイメージや捉え方は個々人によって異なる。日本全国で多数の「芸術祭」が開催される昨今、団体ごとの設立背景、地域固有の特性などがさまざまに反映され、それこそ多様な形式を楽しむことができる。その現状、そして札幌での実状、はたまた芸術という概念の根本問題など異なる切り口を見出せるこの問いをテーマとして掲げたことは、大友さん自身も考えながら芸術祭を作りあげていきたい宣言であると私は捉えた。そして、事務局は、このテーマとそこから導き出されるアイデアをできる限り具現化することを軸に開催に向け、邁進した(と個人的には思っている)。SIAFの事務局は行政の職員と私のような外部スタッフの混淆チームで、一緒くたになって準備を進める。そのため、事務局といっても考えややり方は一枚岩にはいかない。そして事務局というのは、基本的にプロジェクトの制御や、管理を試みるが、個人的にはそういった制限を感じさせないように立ち回ってみた。その理由は、札幌国際芸術祭の基本構想の展開方針に掲げられている「最先端の芸術表現」の紹介を担保したかったからである。ここで私は、アーティストであるGDが出す方向性、やりたいことこそ「最先端の芸術表現」となりうるものだとしている。これはあくまで仮定であり、確信ではない。だが、誤想でもないだろう。それは、SIAF2017が位置付けられ、どのような成果があったかは、まだまだ先にならないとわからないからだ。だが私はこれが無責任な発言だとは思わない。

個人的なことで恐縮だが、私は東京の現代美術館の目の前で育ち、高校生で見た開館記念展で現代美術がわからなすぎて強い興味を持ったことから、美術史の専攻を選ぶことにした。そして、論文のテーマを検討している時に、教授陣から美術史として検証するなら1950年代ぐらいまでを研究対象にというアドバイスをもらったことを思い出す。そんな自分が今 SIAF2017の事務局にいる。

自分の経験から私が勝手に理想とする芸術祭のインパクトはここにある。限られた会期や内容でも強烈なインパクトや影響が必ずや誰かに届いているかもしれないのだ。だが、それはすぐに検証できないし、ましてや美術史的価値なんて(今回はそんな価値はむしろ否定されているのも理解している上で)、少なくとも半世紀ほど待つことを求められる。つまり「最先端」の明確な定義は難しいからこそ、その具現者がアーティストであるはずと仮定する。だからこそ、裏方としては、アーティストが自由に動いてもらえる環境づくりが、絶対的な勝負であり、これこそが一番の醍醐味だったと感じている。

2017年の札幌における「芸術祭ってなんだ?」という答えは、今回だけで出せるものではなく、むしろこれからにかかっている。

細川 麻沙美 ほそかわ あさみ
コーディネーター

1977年、東京都生まれ。大学にて芸術学と美術教育を学ぶ。卒業後、アーティストやキュレーターを支える立場で展覧会制作・運営に関わる。2005年、モエレ沼公園グランドオープン時の「イサム・ノグチ展」東京展を担当。SIAF2014には、プロジェクトマネージャー(メディアアート担当)として参加。



2017年5月11日の記者会見

札幌国際芸術祭2017を振り返って

マユンキキ

前年度(2016年度)の7月と1月に「ウポボピクニック」という、対象は5歳から小学校3年生まで、ワークショップを行った後に全員でお弁当を食べ、アイヌの歌を歌いながら中島公園内を行進するイベントを行いました。1月には大人も対象に、雪の降るすすきの交差点をバッタの踊りを歌い踊りながら渡るイベントも行いました。

8月4日・5日、プレイベントで行われた「さっぽろ八月祭」では、八月祭スペシャルビッグバンドのメンバーとして盆歌を歌いました。8月23日から26日までは「raprap」という、アイヌ音楽とコンテンポラリーダンスのコラボ作品を、韓国と日本で創作活動をしている振付師・ダンサーのチョン・ヨンドウ、札幌を拠点に活動するダンサー東海林靖志とマレウレウが演出を行い、5名のダンサーと共にシアターZOOにて4日間で5公演行いました。この作品は人間の一生をテーマとしており、今年で2度目の公演となりました。前回に行った際はダンサーは2名だったのですが、今回は3名増やし、ダンスの幅が大きく広がりました。

9月3日には「マレウレウ祭りin SIAF2017～目指せ100万人のウポボ大合唱～」を札幌芸術の森野外ステージで行いました。マレウレウ祭りは2011年から行われているイベントで、毎回多彩なゲストを招いてライブを行い、会場のお客様と一緒にアイヌの歌を歌うものです。今回はトンコリ奏者のOKI、大友良英、原田郁子、台湾原住民のチーム台東好歌隊を招きました。各アーティストがライブを行った後に会場全体でワークショップを行い、それから全員でのセッションをしました。セッションの最後には会場のお客様が一つの大きな輪をつくり、全員で踊っていたのが印象的です。

企画メンバーとしてではないですが、円山公園で行われた「コタンペッププロジェクト」にも、アイヌ文化アドバイザーとして関わらせていただきました。このプロジェクトは、円山公園に「クチャ」というアイヌの仮小屋を大風呂敷の生地で模したものをいくつも建て、小さなコタン(村)をつくらうというものでした。

今回の芸術祭で私が関わったものは、全体を通して「人を巻き込む」というのが大きなテーマとしてありました。共に歌い、踊り、話し、考える。演者と観客との境があいまいになり、参加することが共演することと同じ、全員が演者であるという気持ちでした。それは、私が関わっていない多くのプロジェクトでも見えたものです。私にとっての今回の芸術祭は、境界をあいまいにし、誰もが無関係ではないと思わせるものでした。

マユンキキ まゆんきき | 「マレウレウ」メンバー・アイヌ語教師

1982年生まれ。北海道旭川市出身。札幌市在住。アイヌの伝統歌「ウポボ」の再生と伝承をテーマに活動する女性ヴォーカルグループ「マレウレウ」のメンバー。さまざまなリズムパターンで構成される、天然トランスな感覚が特徴の輪唱など、アイヌがルーツとなるウポボを忠実に再現するアーティスト。



夏のウポボピクニック



マレウレウ祭り in SIAF2017

はじまりの地、モエレ沼から

宮井 和美

普段モエレ沼公園に従事する筆者は、ホームであるモエレ沼公園会場の企画運営に携わった。企画メンバーが選定されてほどなく発表された大友ゲストディレクターによるキャッチーかつ内省を促す「芸術祭ってなんだ?」というテーマは、結果、企画するメンバー各々の趣向、思想、個人史からはじまる歴史へと還っていくものが主たる企画となったわけだが、当園の企画もまた同様に、筆者がこれまで取り組んできた展覧会が下敷きとなり、生まれていったものだ。この公園がひとりの作家の作品としてある以上、そこにひとときでも展示される作品は、この場所について言及する展示内容に至るのは必然ではないか。単に「サイトスペシフィックな作品」という以上の、場と思想に関わった内容を求め、公園の歴史や基本設計者であるイサム・ノグチのアイデアを現代の作家が換骨奪胎し、新しい作品を生み出していくことを中心に据えた構成となった。その上で、大友ゲストディレクターが目指す芸術祭を実現するために、さまざまな条件を見定めながら企画を進めた。最終的に、公園のシンボルである屋内施設ガラスのピラミッドをメイン会場に、9組の作家による新作10点と旧作2点、計12作品が出品された。

館内の様子はというと、松井紫朗氏の生み出したバルーン状の彫刻空間を巡り歩けば、大友良英氏、青山泰知氏、伊藤隆之氏による不穏な音の森と出会う。伊藤隆介氏の手ほどきによって公園から地層へ潜り進むと、地下だと思っていたのが実は上空へと向かっていたことに気づく。そこではARSTAT×SIAFラボによるイマジネーションの宇宙へとダイブすることができる—といったわけだ。展示空間内で、環境的にも内容的にもそれぞれ作品が干渉しあって欲しいという難しい依頼となったが、作家には粘り強く協議していただき、互いの作品世界が共鳴しあう大きな空間が生まれた。

屋外では、伊藤隆介氏の100台以上の廃自転車を山へと設置した労作《長征—すべての山に登れ》と大黒淳一氏とSIAFラボによる環境デバイスをを用いて水面に波紋を生み出す《沼紋》を展示した。これらに加えて屋外では、ARTSAT×SIAFラボが会期中と会期後に二度パフォーマンスを行った。この通称SPACE-MOEREプロジェクトは、今回の展示作品の中で、最もこの公園に隠されたコンセプトを引き出したと言えるだろう。ノグチの夢見た空からみる彫刻作品としてのモエレ沼公園。成層圏まで気球を使って送り出されたモジュールが我々の代わりにそれを見て、地上にいる我々のもとへと信号を送り返す。音を介してはるか遠く宇宙と呼ばれる彼方と行われるその詩的なやり取りは、我々のいる世界を拡張していった。いずれの作品にも展示に至るまで難しい局面が多くあった。最後まで妥協なく誠実に制作に取り組んでいただいた各作家、そしてそれを支えた事務局スタッフには本当に感謝したい。

今回の芸術祭で目指された民主的で自由な創造活動は、美術館や公共施設/公共事業という輪郭のはっきりした場の枠が溶けだして周縁に滲んでいくような機会を生み出した。出入り自由/誰も拒まない/風通しの良い…それはそもそも公園という場の特徴とも重なる。モエレ沼公園という場が今回の芸術祭の「はじまりの地*」だとすれば、それはどこへと向かって行くのだろうか。次に続く道がいかなるものになるのか、見守っていきたい。

*大友ゲストディレクターのコメントより

宮井 和美 みやい かずみ
キュレーター

1978年、北海道生まれ。札幌市在住。2001年金沢美術工芸大学美術工芸学部美術科芸術学専攻卒業。2003年からモエレ沼公園学芸員。公園という開かれた場での創造活動の可能性を探る。専門はコンテンポラリー・アート。



ARTSAT×SIAFラボ 気球に搭載したカメラが撮影した画像

ガラクタの再生—展覧会というメディアの更新

藪前 知子

大友良英ゲストディレクターのもと、「キュレーター」ではなく「バンドメンバー(企画チーム)」が招集された札幌国際芸術祭2017。市民が主役となり即興的に祭りを立ち上げることがコンセプトであるこの芸術祭に、「外から来た現代美術のキュレーター」という異物が何をすべきか。結論として試みたのは、担当した芸術の森会場と北海道大学博物館での二つの会場において、本来は過去の時間(＝ガラクタ)に属する「展覧会」というメディアを、そのつど生まれ変わる新たな経験(再生＝NEW LIFE)の場として更新することだった。

芸術の森会場は「NEW LIFE リプレイのない展覧会」と題した。森全体に作品を展開した5人の作家たちは、いずれも音の表現を入り口として、伝達手段としてのメディアを、単に過去の時間を「再生＝リプレイ」させるためではなく、今ここにしかない瞬間を共有する手段として、その新しい使い方を発明してきた表現者たちである。

クリスチャン・マークレーの展示は、若き日の大友良英に大きな影響を与えた「Record Without Cover」から始まり、都市の再生(リサイクル)と過去の再生(リプレイ)とを重ね合わせる新旧の作品で構成した。また、副島輝人、沼山良明の企画による86年の初来札以来の、大友をはじめとする日本の実験的な音楽シーンとの交流を辿るアーカイブにより、この芸術祭の持つ文化的な文脈を明示した。マークレーは芸術祭初日に大友と札幌で見つけたガラクタを楽器とする即興的なセッション「Found Objects」を行った。刀根康尚は、アポリネールの「雨が降る」の朗読の音滴が空から降る作品を制作。言葉という記号＝代理物でしかないものを、鑑賞者それぞれの体験の中でそのつど意味を発生させる物理的な存在として立ち上げ、「現在」という捉えがたい瞬間に輪郭を与えることを試みた。刀根はまた、再生メディアを新たな瞬間の生成へと変換させて来た試みの最新の成果として、複数の刀根のAIが観客の動きに反応しつつ演奏を行うコンサート「AI Deviation」を開催。観客の協働によって作者という固定的な主体の解体を試みた。㊦Y㊧は、完全遮光の空間の中に、自らの手で打った膨大な数のドットにより、ドッカイドー(・海・)と名付けられた光の海を出現させた。個人の感度により視覚体験が異なるという、言わば観客の中で自己生成する作品の展開を試みた。最終日には会場中心に水槽を設置し、㊦Y㊧本人が日本の北南中心から採取した水の中に浮遊しつつ、その流れをセンシングして音に変換する「ドット・リーム」を開催した。鈴木昭男は、野外美術館全体に彫刻に耳を澄ますポイントを巡る「点 音(おとだて)」を展開。芸術の森美術館入り口には台座状の「きいてる」を設置し、耳を澄ます人が他者にとっては「彫刻」にもなるという、「聴く」「見る」の間の領域を提示した。有島武郎旧邸には、世界各地の「点 音」のアーカイブを展示。自らの作品を巡りつつの鈴木とダンサーの宮北裕美とのパフォーマンスも行った。藤田陽介は、アメリカミズアブの幼虫を飼育・繁殖させ、その生死の循環の営みを可聴化させたサウンド・インスタレーションを森の一角に設置。今この瞬間に生成し、他者の生との共振を誘う新しい「音楽」の出現を試みた。

北海道大学博物館の吉増剛造展「火ノ刺繍—石狩シーツの先へ」では、この地で生み出された吉増剛造の代表作である「石狩シーツ」を巡るヴィジョンを、札幌の人たちとの交流も含む過去の資料と新作映像を織り交ぜつつ空間に展開した。中心となる《石狩の時間の皺皺皺皺…》は、石狩河口での吉増の「石狩シーツ」全編朗読を映像・音響作品として構成した新作である。過去を読み替え「その時にしか始まらない瞬間」の偏在として現在の時間を編み続ける吉増剛造という存在を、再生メディアによっていかに現前させるかの挑戦といえる作品となった。会期中には、空間現代と鈴木ヒラクをそれぞれ招き、即興的なセッションを行った。

藪前 知子 やぶまえ ともこ
キュレーター

1974年、東京都生まれ。東京在住。東京都現代美術館学芸員。2004年から展覧会やコレクションの仕事に携わる。キュレーションの他に、雑誌などに寄稿多数。現代美術に留まらず、ファッション、音楽など周辺領域の境界にあるようなジャンルに規定されない表現についての仕事も多い。これまで担当した主な展覧会は、「大竹伸朗 全景 1955-2006」(2006)、「山口小夜子 未来を着る人」「おともこどもも考える ここはだれの場所?」(2015)、「MOTサテライト 2017春 往来往来」(2017、以上東京都現代美術館)など。



吉増剛造「火ノ刺繍—「石狩シーツ」の先へ」

SIAF2017, where I resonated with Otomo's style

Numayama Yoshiaki

Mr. Otomo Yoshihide assumed the post of guest director of the Sapporo International Art Festival (SIAF) 2017 in the autumn of 2015, and band members (project members) were selected. I have had a close friendship with Mr. Otomo for 33 years, and I joined SIAF2017 as the executive advisor. After around two years of preparation, the 57-day event successfully ended.

The advisor is an important position, and was a role previously filled by the renowned Asada Akira in SIAF2014. I confess that I felt pressure and confusion upon taking up my position. I have long been active in the music scene, but I am not familiar with art as a whole. However, I took charge of the music at Sapporo Pre-biennale 2011 and SIAF2014 and in the process came together with people from other fields. I have also seen Mr. Otomo's "Ensembles" exhibitions, which have taken place for more than 10 years in Sendai, Mito, Tokyo and other places, and I had a strong desire to hold that exhibition in Sapporo. So, I decided to support the art festival directed by Mr. Otomo however I could.

After almost all the projects, including the publicly sought projects, were decided, and their preparation had started, there were some tough moments between Mr. Otomo and the Secretariat and local staff due to a lack of communication. However, together they solved the problem to build a trusted relationship before the opening of the event.

When I saw works in the venues before the opening, I was impressed by the scenes responding to Mr. Otomo's theme, "How do we define 'Art Festival'?" and the sub-theme, "When bits and pieces become asterisms." Numerous live events and projects that involved both children and adults, including the Sapporo Collective Orchestra, the O-furoshiki Project and guerilla performances, were held almost every day. I think this was a creative and exciting art festival created by Mr. Otomo that could be experienced only in Sapporo.

The room for the NMA Live Video Archive was established in the Shiryokan at Mr. Otomo's suggestion. There, I met many visitors from Hokkaido and elsewhere who were impressed by the archive. This became a lifelong treasure for me.

SIAF2017 was filled with wonderful exhibitions and events. How to develop it into the next edition will be a challenge for the future. I hope that the bases in the city center, Chi-Ka-Ho and the Sapporo Community Plaza will be utilized to widely spread the appeal of the art festival to many people.

Lasting feeling after SIAF2017

Urushi Takahiro

I have been involved in the Sapporo International Art Festival (SIAF) for more than five years, since the preparation stage of the first edition in 2014.

In SIAF2014, as a project manager, I was mainly engaged in providing underlying support for the art festival, such as managing pre-projects and volunteers and operating participatory programs. In SIAF2017, as a project member, I was more involved in the artists and expressionists taking part in the Streetcar Projects and the planning and coordination of the Art projects based in the Shiryokan.

Numayama Yoshiaki

NMA Concert Organizer

Born in Yuni, the Yubari District of Hokkaido in 1944. Now living in Sapporo. A piano tuner by trade. An encounter with the jazz critic, Teruto Soejima, in the late '70s was one of the main catalysts for him to develop an interest in avant-garde music. When he finally joined the International New Jazz Festival Moers in Germany in 1983, he became aware of the gap in music exchange between Japan and the rest of the world, which inspired him to form the group called NMA (abbr. of NOW MUSIC ARTS) in the same year. The group has been organizing projects and concerts to introduce cutting-edge music in Japan and abroad to Sapporo.



NMA Live Video Archive



NMA Live Otomo Yoshihide Special 3days

Urushi Takahiro

Coordinator

Born in Hokkaido in 1977. Now living in Ishikari. Representative director of the AIS Planning Incorporated Association. Managing the Artist-in-School project for various regions in Hokkaido as a coordinator, and engaged in many art and cultural projects. He took part in SIAF2014 as the project manager for volunteer administration and center of activity project.

To share my personal opinion, I had a sense of accomplishment when SIAF2014 ended (I had got a feeling of exhaustion at the same time). In SIAF2017, however, I don't feel any sense of accomplishment. It may be partly because of the difference in my role, but it is probably not the main reason. Looking back, SIAF2014 had a pyramid structure with contemporary art exhibitions at its center while SIAF2017 had a structure in which there were no boundaries of genres nor difference between "main" and "sub," and all elements existed side by side and blended together.

In SIAF2017, which had an unprecedented large number of events and projects, art welled up from the voluntary thoughts, ideas and actions of artists in *ke* (informal daily situations) rather than *hare* (cheerful formal situations). If such situations and expressions were an extension of daily activities and functioned as an opportunity to review things rooted in life, then this is what we have continuously considered through the activities of SIAF Lab, which started in 2015, and it makes sense that I did not have the sense of accomplishment that I felt in SIAF2014 by creating an extraordinary atmosphere. In other words, I have now realized that an endless project started after the end of SIAF2014.

SIAF2017 convinced me that one situation that is out of our control and contains various phenomena is our daily life, and that freewheeling thinking and expressions that smooth over (or overcome) boundaries and hurdles exist in such out-of-control chaos. I would like to continue my activities in anticipation of sharing such a feeling with as many people as possible.

SIAF2017—a flexible international exhibition led by a bandmaster

Katono Satoshi

The bandmaster (guest director) of the SIAF2017 Special Big Band was Mr. Otomo Yoshihide. It was a great honor for me to work as a band member (project member) under him. As a bandmaster, Mr. Otomo is not only skilled at composing, noise music and improvisation, but also good at performing and sound installation. With an ability to listen to others, he earnestly listened to each member's ideas, created a score (plan) and waved the baton to create a never-seen-before international exhibition.

In SIAF2014, I exhibited a work as an artist on the theme of the "memories of coal mines." As an art director and artist, I have been involved in an art project using coal mine heritage sites since 2004. I have dredged up the memories of coal mines, which supported the Japanese economy, in the form of art and have worked with local people for local revitalization. Under these circumstances, I joined the SIAF Committee in April 2015. There were five members, Ms. Iida Shihoko, Mr. Kubota Akihiro, Mr. Yamada Shuichi and Mr. Yoshizaki Motoaki and me. Our mission was to give advice and support from a technical perspective. The most important task was to list candidates for the guest director. We needed someone with talent comparable to Mr. Sakamoto Ryuichi, the guest director of the previous event. Numerous candidates were listed and ruled out, but when the name of Mr. Otomo Yoshihide was mentioned by the Secretariat, all couldn't agree more, because of his great personality, excellent planning ability, and involvement in the previous edition and the August Festival. We approached Mr. Numayama Yoshiaki, who has long been the mentor of Mr. Otomo in Sapporo. Mr. Otomo willingly consented to our offer, saying that he couldn't say no to Mr. Numayama, and a press release announcing him as guest director was issued on October 1. The Committee and the Secretariat visited Shinjuku



SIAF CAMP SITE PROJECT "URANIWA"



SIAF Lab editorial office x SAKANA PRESS

Katono Satoshi

Artist / Professor of the Sapporo City University

Born in Fukushima in 1955. Now living in Sapporo. He studied sculpture at the Tokyo University of the Arts and at its graduate school. He is a professor of the Sapporo City University and its graduate school. He has been carrying out regional revitalization art projects such as "Ponbet-su Art Project 2014" (Mikasa, Iwamizawa, Yubari), in which he utilizes former coal mines in Sorachi since 2004 as both an artist, and an art director. He has also been working on the photographic series "Kami, Hotoke, Kokei" (God, Buddha, Sight), taking images of Shinto and Buddhist deities from all around Japan.

on November 10 to hold their first meeting with Mr. Otomo. On November 30, Mr. Otomo was invited to Sapporo for a welcoming party at Onobeka. At that time, I wrote on my Facebook page, "A man who is tolerant and broad-minded, and who makes people happy and attracts people, is called 'hitotarashi' (according to Mr. and Mrs. Numayama). I anticipate a lot of fun in the upcoming years. He spotlights other people and praises their efforts. He is such a faithful man."

Things went well at a fast pace, and a press conference for SIAF2017 was held on February 16, 2016. Mr. Otomo, Mayor Akimoto and band members were present at the press conference to provide an outline of the event. We, 12 band members with different backgrounds, were required to answer Mr. Otomo's question, "How do we define 'Art Festival'?" and then reflect our answers on SIAF's projects. I planned Sapporo and Hokkaido: Three Great Treasures from Each, a project in Maruyama Park and other projects, and took Mr. Otomo to the Retro Space Saka Hall, which was rumored to be closed. He was deeply impressed and wrote on the SIAF blog, "We have to learn from the Retro Space Saka Hall in the art festival," and "It is an accumulation of boundless love for the activities of nameless people. This is the way an art festival should be." My plans that focused on nameless ordinary people, such as Tairyō Izakaya Tecchan, carved wooden bears in Hokkaido and images of Mt. Showa-shinzan in eruption painted by Mimatsu Masao were implemented in collaboration with Mr. Otomo. Eventually, seven projects, including Hokkaido Hihokan, Akabira Sumitomo Coal Mine Heritage: Underground Mine Map, and the Kotan-pet Project in Maruyama Park (this was planned with the help of Mr. Tomita Tetsuji) were implemented. There were an astonishing number of exhibits and a huge amount of material. The exhibits were displayed thanks to the great labor and effort of participating artists. Mr. Otomo, myself and artists who offered works gathered in a finely timed manner to stage unique exhibitions that could be held only at that time. It was a lot of fun.



Otomo visiting the Retro Space Saka Hall

Collective, O-furoshiki, hard core, ensemble, noise, orchestra, tram trip

Kino Tetsuya

"Try to not to form the center, and do not forget that there are people who cannot or do not enter the center of the project. Look over the surrounding area." I wanted to utilize these directions from Mr. Otomo in the O-furoshiki Project. So, I thought about "what is creating with local residents?" for about two years from the initial planning of the O-furoshiki Project. The O-furoshiki Project was not created by artists and no clear goal was set. I tried to find a good way to manage the project while respecting residents' initiative and desire to participate in the project to sew and spread out large furoshiki. Collaboration with residents was a major mission of the art festival, and O-furoshiki was a project that embodied that mission. Pieces of cloth are lying in the corner of someone's closet or an old department store shopping bag. When I began to collect pieces of cloth at around 20 places in the city, I thought cloth undergoes a journey. In the process of changing its shape, form, destination and purpose, pieces of cloth were displayed by many local residents. I felt the patchwork of pieces of cloth showed the collective effort of people like an ensemble. I was also excited about the generosity and unknown possibility of the project.

Sapporo residents who continued to sew at the factory deserve the lion's share of the credit for the project's success. We accepted more than 2,000 local residents in total at the factory over about 11 months. I cannot tell the story of this collaboration with management team members without tears. Although I was

Kino Tetsuya

Director

Born in 1978 in Wakkanai, Hokkaido. From Hokuto, now currently living in Sapporo. He has been involved in various projects related to arts and culture. With his experience in implementing projects for different regions, he also is involved in businesses related to city planning. Major projects he has been involved include "TOBIU CAMP" (Tobiu Art Community, Shiraoi, 2011-) and "Sapporo August Festival 2015".

responsible for the management and control of the factory, I continued to think that it was important to keep residents and team members motivated, feel the atmosphere among people and respect them. Through this project, I reaffirmed the strength of people who have a place where they belong. Through communication with participants, I often felt that having a place where they choose and want to go enriched their day-to-day lives and gave them a sense of pride and energy. People met other people, respected each other and made friends, creating an important place where there were friends. I was impressed time and again by how this made people strong.

Tickets for all five performances of NOISE TRAM SAPPORO were sold out quickly. In this project, I collaborated with underground indie, hard core and pop artists who had proved themselves as performers and conducted new projects in Sapporo. It was a big step forward that these members undertook everything from planning, musician selection and negotiation to attending to musicians during performances. The reserved conductor-less streetcar that started from and returned to Susukino at night, after 60 unpredictable minutes, and psychedelic flyers – these elements created a mysterious atmosphere, building a sense of anticipation. Some performances were pretty crazy and violent, and I was relieved when all performances ended without bloodshed. After all the performances had ended, I expressed my deep gratitude to the drivers who were always kind and calm.

Although I quit working for the Collective Orchestral halfway through, it was a precious, valuable time for me. Thank you very much.



O-furoshiki Summit, March, 2017

A gathering of bewildered stars

Sakaguchi Chiaki

In SIAF2017, the sites I was in charge of were mostly located in Minami Ward and Makomanai, my transit point, is a leafy suburban area that still retains the atmosphere of the Sapporo 1972 Winter Olympics. Driving through the way from the housing complex built in the 1970s to the forest surroundings around the Sapporo Art Park area was a compact route connecting an urban area and nature, a typical feature of the city of Sapporo. It was also a journey through the theme of *Breath or Echo*, the new installation by Mohri Yuko at the Skyway of Sapporo City University. Mohri derived the idea from her last summer trip in Hokkaido and carefully built a concept and system at the Skyway as to resonate with the landscape surrounding it. It was a long process. For making this work she interacted with others, from the selection of a venue to the collection of materials and production. What happened in the process were often dramatic and vital to support the base of this work. Professor Katono and the SIAF Secretariat helped us in negotiations in many occasions, and the sound performance by Camille Norment from Norway and Sakamoto Ryuichi was also made possible by generous support from Royal Norwegian Embassy and others. And above all, Mohri's untiring effort and insatiable desire for creation moved people around her. This experience of involving others in her creation of work must have given her confidence about engaging in the larger project in the future. And thanks to the artist with a strong desire saying "I want to make a specific piece in this time and chance!", I met people whom I would never have met in my everyday life and went to areas I would never have gone. I enjoyed SIAF as if I had been on a journey. I would like to thank the artist and everyone involved.

By the way, in one interview of SIAF2017, Mohri Yuko convincingly said that this festival would definitely be interesting because artists were devoting themselves to their own creations. She was right. SIAF2017 was a festival of crea-

Sakaguchi Chiaki

Coordinator

Born in Kagoshima. Writer, coordinator, and editor in the field of contemporary art. She has been involved in implementing various art projects in locations from museums to the streets. In 2014 she stayed in Sapporo for over six months as a startup member of the Sapporo Tenjinyama Art Studio. She is a member of the "Project Fukushima!", and a co-editor and publisher of the art & culture magazine "VOID Chicken".

tors. As the keyword "asterism" was presented a little later by Otomo director, each of the large and small projects was like moving stars. Millions of events have happened on each planet and millions of stories were born. Such stories behind the project often remained untold but made the work rich and meaningful. The sight of O-furoshiki spread in Moerenuma Park was said to be the symbol of the art festival, because each piece of patchwork cloth also had a number of stories of participated citizens. But at the same time, the art festival viewed from afar was like a milky way that appeared in the summer sky for only two months. "How do we define 'SIAF2017'?" in my sense was maybe a gathering bewildered stars. Each of them was so different and never had become a single constellation together, but eventually formed a beautiful state of the chaotic galaxy.

SIAF Design Project

Sato Naoki

My work began with positioning the design of the art festival under the theme, "How do we define 'Art Festival'?"

With Mr. Kudo Ryohei of Wabisabi, who is engaged in unique design activities in Sapporo, and Mr. Ueda Ryo of COMMUNE as guests, a public meeting was held on February 17, 2015 as the start of the SIAF Design Project. We considered how to incorporate new design experiences into SIAF, that are made for SIAF and to be updated through SIAF. Color combinations and the variable logos were considered through strolling workshops in candidate venues and determined after a series of reports and verifications in public meetings. Although not every local was interested in this process, planning through the open process had great meaning. I hope this will continue and take root as a characteristic of SIAF.

It is also worthy of special mention that SIAF-go, an ad-covered streetcar designed by elementary school students, was completed through a series of workshops. Design is not completed by only a few people. Design should be evaluated by people who have experienced it. There was an era when design refined amid competition was considered advanced or excellent in line with current trends. However, I have to say that such an idea of design is a thing of the past. That is an important point confirmed in the SIAF Design Project. Particularly, it was significant that the exhibition Sapporo Design Pioneers, Graphic Design from Sapporo – From Kuriyagawa Kenichi to Hatsune Miku was held as part of SIAF2017.

If there is a challenge for the future, it is to set a theme that covers a wide range of design, including not only graphics but also architecture, products and fashion. It may be good that there is an art festival dedicated to contemporary art, but there is no doubt that the significance of SIAF lies in its interdisciplinary nature. If so, how to position design is also an eternal theme. World-class proposals should be developed without being influenced by the power balance in Japan, and without losing local affluence. I hope this point will not be forgotten.



Mohri Yuko researching Ishikari Bay



Closing event:
Music & Art Set Free in Moerenuma Park

Sato Naoki

Art Director / Professor of the Tama Art University

Born in Tokyo in 1961. After graduating from the Hokkaido University of Education, he studied the sociology of education and language at Shinshu University, and also studied painting under Mokuma Kikuhata at Bigakko. In 1994 he became the art director for "WIRED" magazine's launch in Japan. Then in 1998 he founded ASYL DESIGN inc. (current ASYL). His artwork "Unexplored Tokyo: There, it has grown" has been exhibited in places such as 3331 Arts Chiyoda and more.



SIAF Design meeting vol.1



SIAF Design meeting vol.3

Tanukikoji TV and city development using culture

Nakajima Yo

After receiving an offer from Mr. Otomo, I began by proposing various projects that included resident participation while looking for venues in the Tanukikoji Shopping Arcade for a project in the downtown area. Finding a space was not easy; efforts to secure a giant building that was planned to be demolished, an open space in an upper floor of a building and other major candidates went badly. Then, I planned a project using TV footage (footage is my specialty) from the 1960's and '70's because those days were the growth period of TV, just as now is the growth period of the Internet and other new media. I thought that considering TV's growth period would lead to exploring the origin of current TV expressions.

About a year before the project, I invited Mr. Konno Tsutomu and Mr. Naganuma Osamu to go on a preview of the downtown area and have discussions on TV expressions. Mr. Konno says, "TV is live," so the project included a main event titled the Rediscovery of Fundamental TV Expressions and live coverage from a small studio, which was broadcast through the Internet to TVs placed at co-operating stores in the Tanukikoji Shopping Arcade. It could not be broadcast to large public TVs in the shopping arcade due to technical constraints, but freelance casters, artists, CM directors and high school teachers in Sapporo participated in program production in the studio for about 40 nights in a row, showing various expressions during the art festival. The series of "What will become of TV?" in which participants had discussions after seeing programs and works via current broadcasting stations in Sapporo, did not end after the art festival and provided an opportunity for people involved in TV to network.

In the six-month Commercial Video Production Workshop, organized by Inter x cross Creative Center, 30 university and high school students were divided into five teams to produce art festival commercials. The commercials, with music composed by Mr. Otomo, were shown at movie theaters and public facilities across Hokkaido.

In this way, the projects were implemented with the participation and cooperation of many local residents. The variety of resident participation was one of the main achievements of the art festival as a whole. The art festival is one of the projects by the City of Sapporo, which aims at a creative city. As symbolized by nearly 100 applications for civic projects, creating opportunities for residents to engage in creative activities is a main pillar for a creative city. I hope that the Sapporo Community Plaza, which will open in 2018, will take over the germination of resident participation in the past two art festivals and go work with the art festival to use culture for city development.

Thanks for the question

Hata Satoshi

SIAF2017 began with the question, "How do we define 'Art Festival'?" I have never seen such a theme in any international art festival around the world. Guest Director Otomo told us there was no need for us to find only one answer to this question. He also said that internationality means diversity. I have experience with some international events, so I was honestly surprised to hear this theme. Generally speaking, themes include words showing a specific image, and in art projects, thoughts, problems, issues and questions are typically ex-

Nakajima Yo

Representative of Theater Kino

Born in 1950, now living in Sapporo. He has been involved in art, performance, and dance since he was a student, beginning with making experimental movies that he would have independent screenings for. With funding from the community, he established "Theater Kino" in 1992, an independent mini-theater. He has served on several committees for cultural affairs, including the Sapporo Arts and Culture Planning Committee. He is the executive chief of the Sapporo Biennale Pre-events. For SIAF2014 he managed the Art Cafe, as a volunteer.



Tanukikoji TV



SIAF2017 Commercial Video Production Workshop

pressed through creativity. Accordingly, when I saw a question as the theme of the art festival, I felt like I was facing some kind of ultimate philosophy, like "what is what?" and "what is that what?" I planned a project in Susukino in the downtown area, where each place has its own history and character. Without ignoring these factors, I had to express "How do we define 'Art Festival'?" in the area. What is Sapporo? What is Susukino? These questions overlapped with the question, "How do we define 'Art Festival'?" My role as a band member was to work on these three questions. I considered the theme in light of Mr. Otomo's words that "there is no need for us to find only one answer" and "internationality means diversity,"

According to one theory, in the Jomon culture, which is believed to be the root of Japan, language had no subjects, there was no distinction between you and I, and there were no concepts of possessing and comparing. Everything integrated with the earth and the universe, and all things, including not only humans but also animals, plants and minerals, were equal, accepted and shared. This idea led to that of Shintoism, creating distinctive animism like yaoyorozu no kami (lit. eight million gods) that reside in all things and diversity with which anything is accepted. Such an idea is also seen in Japanese populism. Japanese people go to church on Christmas Day in December, visit a shrine on the New Year days, enjoy Valentine's Day, attend a temple during the Bon Festival period, and have a party on Halloween Day. In a sense, Japanese people have no principles, and from a non-Japanese standpoint, it may look like they eat a sandwich of rice and fresh cream and drink beer containing natto. In Shintoism, yaoyorozu no kami exist. Eight million gods already existed in Japan when its population was still one million, meaning that eight gods existed for one person. Later, Japanese people accepted Buddha, which came from India via China, and also accepted Christ from Europe. Since there are eight million gods, an increase of one or two gods is not a big deal. However, Japanese people do not make light of things from overseas. Japanese people make all things "festivals" to appreciate them. This Japanese attitude of thinking of diversity and accepting anything was also utilized in this art festival. Looking back, SIAF2017 consisted of projects that could be largely divided into fine art, music, theater, video, dance and media art genres, but their content was quite different from each other. All project planners and artists tried to answer "How do we define 'Art Festival'?" to help create a unique, all-around art festival with diversity.

Finally, I thank all the staff members who supported this art festival day and night, and the theme, "How do we define 'Art Festival'?"

How do we define 'Art Festival'?

Hosokawa Asami

In SIAF2014, I worked as the project manager in charge of the Chi-Ka-Ho venue and other places where works were exhibited. Because of this connection, I joined the Secretariat for SIAF2017 in 2015. In other words, I took a background role. Then, Mr. Otomo was selected as the guest director, and when he approached key project members, he proposed that people behind the scenes also be allowed to become project members. Thus, I unexpectedly became a member. Accordingly, although I was a project member, I did not plan and implement own projects but was involved in SIAF2017 to expand the possibility of projects planned by Mr. Otomo and other members (actually I was mainly engaged in coordination and administrative work). I would like to consider the theme proposed by Mr. Otomo from this position.

Hata Satoshi

Artist / Art Director

Born in 1960 in Iwamizawa, currently living and based in Sapporo. Since going to Germany on a DAAD grant in 1995, he has had solo and group exhibitions in Japan and abroad. He received the Sapporo Cultural Honor Award in 2004. In 2012, he received the Hokkaido Cultural Honor Award. He participated in SIAF2014 as a regional director. He was a participating artist for Aichi Triennale 2016.



Hata Satoshi *Intention and substance*

The image and understanding of the words "art festival" differ depending on the individual. Numerous art festivals have been held all over Japan, each with local characteristics and varying back stories, which are reflected in the festivals and give the festival scene diversity. The question presented as a theme allows us to consider an art festival from different angles, such as the current status of art festivals, the actual situation of the art festival in Sapporo and the fundamental problem of the concept of art. I thought it was a declaration by Mr. Otomo, who wanted to rethink what it means to be an art festival. The Secretariat vigorously worked toward an art festival that embodies the ideas derived from the theme (this is my personal idea, though). The SIAF Secretariat was a mixed team of city employees and freelance staff members like me. Accordingly, the Secretariat was not monolithic in terms of the way of thinking and approach. Secretariats basically try to control and manage projects, but I personally tried not to impose restrictions on them. This is because I wanted to make sure we introduced "cutting-edge artistic expressions," which is a policy of the basic concept of the Sapporo International Art Festival. I consider that the direction presented by Mr. Otomo as an artist can lead to "cutting-edge artistic expressions." This is my assumption but not conviction. However, I don't think it is a mistake. We still have a long way to go to establish the position and achievement of SIAF2017. I don't think this is an irresponsible comment.

I am afraid that I also have to talk about my personal affairs. I grew up in front of a contemporary art museum in Tokyo, where I was interested in contemporary art because the exhibition commemorating its opening I saw in my high school days was too difficult to understand, and yet chose to study art history. I remember my professors advised me that I should choose a topic that covers art history until around the 1950s for my thesis. I am now in the SIAF2017 Secretariat.

I think the art festival will be possible to have those influence. The period and the content were limited, but it may have had a strong impact on someone. It cannot be readily verified, and we have to wait at least for half a century to verify the value in art history (For this SIAF2017, this value was not important rather ignored). I assume that since it is difficult to clearly define "cutting-edge," those who embody it must be artists. This is why I felt that people working behind the scenes have to create an environment where artists work freely, and this is what I most enjoyed about my role.

It is difficult to find an answer to the question, "How do we define 'Art Festival'?" in SIFA2017 alone. It depends on future developments.

Looking back at SIAF2017

Mayunkiki

We, MAREWREW, had an event titled Upopo Picnic for five year-old children to third graders (ages 8 and 9) in July 2016 and January 2017, where participants ate boxed lunches together after a workshop and then marched in Nakajima Park while singing Ainu songs.

In January, we had an event for adults in which we crossed an intersection in Susukino in the snow while singing and performing a locust dance. At the Sapporo August Festival held on August 4 and 5 as a pre-event to SIAF, we sang a dance song as a member of the August Festival Special Big Band.

From August 23 to 26, Jung Young Doo, a choreographer and dancer who is engaged in creative activities in South Korea and Japan, Shoji Yasushi, a danc-



Press conference, May 11, 2017

Mayunkiki

Member of "MAREWREW" /
Ainu language teacher

Born in 1982. From Asahikawa, Hokkaido, currently living in Sapporo. Member of, "MAREWREW", a women's vocal group whose activities center around the rebirth and passing on of the traditional Ainu song, "Upopo". She is an artist who faithfully revives "Upopo" using Ainu rooted rhythmical patterns, and the signature style of singing in a natural trance-like chorus round.

er based in Sapporo, and MAREWREW, created *raprap*, a collaboration of Ainu music and contemporary dance, and performed it with five dancers at Theater Zoo five times over four days. This work is themed on human life, and this year marked its second performance. In previous years only two dancers had performed, but with five dancers taking part this year the scope of the performance was expanded.

On September 3, the MAREWREW Festival in SIAF2017 – Upopo for the Masses was held at the outdoor stage of Sapporo Art Park. The MAREWREW Festival is an event that has been held since 2011. With various guests, MAREWREW performs live and sings Ainu songs together with the audience. This time, OKI, a Tonkori player, Otomo Yoshihide and Harada Ikuko, as well as indigenous artists from Taiwan, participated in the festival. After the live performances by each artist, we had a workshop, and then all artists played together. At the end of the session, all the audience in the venue formed a large loop and danced. It was impressive.

I was involved in the Kotan-pet Project at Maruyama Park as an advisor on Ainu culture. This project was intended to create a small kotan (village) by building many temporary Ainu sheds called kucha in Maruyama Park using cloth for O-furoshiki.

In SIAF2017, the major theme of the projects I participated in was to involve people. Singing, dancing, talking and thinking together. The boundary between performers and the audience became blurred. Participating was equal to performing together. I felt that all people there were performers. I've seen the same in many projects I was not involved in. This art festival was an event that blurred boundaries and made me feel that all people are related to each other.



Upopo Picnic in Summer



MAREWREW Festival in SIAF2017

From Moerenuma, the starting point

Miyai Kazumi

I usually work at Moerenuma Park, so I was involved in the planning and operation of the Moerenuma Park venue, my home ground. Under the catchy and introspective theme, "How do we define 'Art Festival'?" which was presented by Guest Director Otomo and announced soon after the project members were selected, projects were planned based on the ideas, thoughts and histories of the members. The projects at our park were also developed based on the exhibitions I have been engaged in. Since this park is the work of an artist, works exhibited in the park even for a short period of time should feel connected to the place. The exhibits were required to be more than just site-specific works and to be deeply connected to the place and its concept. As a result, contemporary artists learned about the history of the park and the ideas of Isamu Noguchi, the designer of the park, to create new works to be exhibited there. To realize the art festival envisioned by Guest Director Otomo, we considered various factors when planning the projects. Glass Pyramid, an indoor facility that serves as the symbol of the park, was used as the main venue, and a total of 12 works (10 new works and two old works) by nine groups of artists were exhibited in the pyramid.

Inside the facility, a balloon-shape sculpture created by Matsui Shiro was exhibited with a disturbing and beautiful sound space created by Otomo Yoshihide, Aoyama Yasutomo and Ito Takayuki. While looking at a work created by Ito Ryusuke, visitors worked their way beneath the park, only to discover they

Miyai Kazumi

Curator

Born in Hokkaido, 1978, and living in Sapporo. After graduating from the Aesthetics and Art History Course, Department of Fine Art, Kanazawa College of Art in 2001, she became a curator at Moerenuma Park in 2003. Since then, she has explored the possibilities of creative activity in an open space like a park. Her specialty is contemporary art.



ARTSAT x SIAF Lab
A photo taken by the camera loaded on a balloon

had actually been going toward the sky. There, visitors experienced a space imagined by ARTSAT×SIAF Lab. It was a challenging task to create an exhibition space in which individual works interfere with each other in terms of the environment and content. The artists had ongoing discussions to create a large space in which works resonate with each other.

The works exhibited outdoors included *Long March – Climb Every Mountain* (a heap of more than 100 abandoned bicycles) by Ito Ryusuke and *Numamon* (ripples created with an environmental device) by Oguro Junichi and SIAF Lab. In the outdoor space, a performance was given by ARTSAT×SIAF Lab. during and after the art festival. Among the exhibits, this commonly called Space-Moere Project is said to have most clearly shown the concept hidden in the park, allowing Moerenuma Park to be viewed from the sky as the sculpture Noguchi dreamed of. A module was sent up to the stratosphere by a balloon, and the module that captured an image of Moerenuma Park transmitted signals to us on the ground. The poetic sound communication with the module in the faraway universe expanded our world. We often faced difficulties in the process of exhibiting each work. I would like to thank the artists who created works with integrity and without making compromises and the secretariat staff who supported their creations.

The democratic and free creative activities, at which this art festival aimed, created an opportunity in which work could be exhibited beyond the framework of sharply defined places, such as art museums and public facilities/public projects, and could blend into alternative surroundings. A freely accessible open space where anyone is accepted – this concept shows characteristics of a park. If Moerenuma Park is the starting point* of this art festival, where will it lead? I would like to see what the pathway leading to the next event is like.

*From Guest Director Otomo's comment

Regeneration of trashed objects

—update of an exhibition as a medium

Yabumae Tomoko

In the Sapporo International Art Festival, band members (planning members) not curators were gathered under Guest Director Otomo Yoshihide. I wondered what a contemporary art curator from the outside would do with the concept of an improvisational event featuring local residents. As a result, I reshaped the conventional style of an exhibition of being a medium for gathering art objects from the past (= trashed objects) into a continuous opportunity for the regeneration (rebirth = new life) of new experiences at the two Sapporo Art Park and Hokkaido University Museum venues.

The project at Sapporo Art Park was titled *New Life: Exhibition without a Replay*. The five artists who presented works all across Sapporo Art Park are expressionists who have employed sound as their primary medium of artistic expression and invented a new approach that utilizes media as communication tools to not only simply replay the past, but also share moments experienced right here at this moment.

The exhibits by Christian Marclay included *Record Without Cover*, which had a decisive influence on the young Otomo Yoshihide, and new and old works that combined the recycling of a city and the replaying of the past. Marclay has been involved in the Japanese experimental music including Otomo since he first visited Sapporo in 1986 for the live performance organized by Soejima

Yabumae Tomoko

Curator

Born in 1974 in Tokyo, and living in Tokyo. Curator of the Museum of Contemporary Art Tokyo. Since 2004, she has been involved in exhibitions and collections as a curator. Apart from curation, she also writes for various magazines, newspapers, etc. She works across various genres of creation and expression, including fashion and music, not limited to contemporary art and art-related field. Major exhibitions she has been curated at the Museum of Contemporary Art Tokyo include: "Shinro Ohtake: Zen-Kei Retrospective 1955-2006" (2006), "Sayoko Yamaguchi: The Wearist, Clothed in the Future" (2015), "An Art Exhibition for Children: Whose place is this?" (2015), and "MOT Satellite 2017 SPRING by the deep rivers" (2017).

Teruto and Numayama Yoshiaki. The archival materials were also on display to demonstrate the cultural context of this art festival. On the first day of the art festival, Marclay and Otomo performed *Found Objects*, an improvisation using trashed objects found in Sapporo.

Tone Yasunao produced work showing drops of sound of the recited *Il Pluet* (It's raining), one of G. Apollinaire's calligrams, falling from the sky. Words are merely symbols or substitutions. He transformed them into a physical existence that brings forth meaning for individual viewers when they experience it, allowing viewers to see the elusive present moment as something clear and distinctive. As the latest result of his efforts to transform replay media into a new moment, Tone also held *AI Deviation*, a concert of Tone's artificial intelligences, which gave a performance in reaction to the movement of the audience. Through collaboration with the audience, he tried to break up the fixed image of an artist.

㊦㊧ produced a sea of light titled *dot kai dot (DKD)* with enormous dots punched out by himself in a completely blacked-out space. He created self-generating work, providing a visual experience that varies depending on the sensitivity of the viewer. On the final day, *Dot Leem* was held using a water tank installed in the venue. ㊦㊧ himself floated on the water collected from the north, south and center of Japan and sensed the flow of the water to convert it into sound.

Suzuki Akio presented *Oto-date*, which was designed to give visitors an opportunity to visit spots set up across Sapporo Sculpture Garden and listen carefully to a sculpture at each spot. At the entrance to the Sapporo Art Park Art Museum, Listening, a base-shaped work, was established to present an area between listening and seeing, where a person listening carefully looks like a sculpture for others. At the Former Arishima Takeo Residence, the archive of *Oto-date* performed so far around the world was displayed. While moving among his own works, Suzuki also gave a performance with dancer Miyakita Hiromi.

Fujita Yosuke set up a sound installation that made it possible to hear the life cycle of black soldier fly larvae as they grew underground at a corner of the Art Park. He presented new "music" that encouraged the audience to resonate with the life of other living things.

Fire Embroidery – Beyond *Ishikari Sheets*, Yoshimasu Gozo Exhibition at the Hokkaido University Museum, presented a space showing the vision of *Ishikari Sheets*, his representative work created in Hokkaido, with past materials including the records of exchanges with Sapporo residents and a new video. The video *Pli, pli, pli, pli,,,,,of the time of Ishikari* is a new audio and video work of *Ishikari Sheets* recited by Yoshimasu at the mouth of the Ishikari River. It is a work that shows Yoshimasu Gozo as existing in replay media, interpreting the past to express the present time as the uneven distribution of moments that only start at that time. During the festival, he performed improvisations with Kukan Gendai and Suzuki Hiraku.



Yoshimasu Gozo
Fire Embroidery – Beyond *Ishikari Sheets*

1

展示

Exhibitions

RE/PLAY/SCAPE

会場

モエレ沼公園 札幌市東区モエレ沼公園1-1

モエレ沼公園の象徴であるガラスのピラミッドを拠点として、公園の歴史と彫刻家イサム・ノグチの視点を現代へつなぐプロジェクトを展開。参加作家の作品は、少しずつ関わり合いながら、モエレ沼公園という場をひもとき、ここでしか成立し得ない作品を生み出しました。ノグチのインスピレーションに満ちたこの場(=Playscape)が、今を生きる作家のインスピレーションによって新たに再生(=Replay)される、モエレ沼公園が新しい創造の舞台となりました。

参加作家・作品

ガラスのピラミッド

ARTSAT×SIAFラボ

《Sculpture to be Seen from Space, Improvisation to be Heard from Space. 宇宙から見える彫刻、宇宙から聞こえる即興演奏》2017 ①、
《Sculpture for All of the Intelligence 全知性のための彫刻》2017 ②

伊藤 隆介

《層序学》2017、《メカニカル・モンスターズ》2017 ③

大友 良英+青山 泰知+伊藤 隆之

《(with)without records》2017 ④

大友 良英

《サウンド・オブ・ミュージック》2017 ⑤

Sachiko M

《Here the sounds...》2017

ナムジュン・パイク (韓国 / 米国)

《K-567》1993 ⑥

松井 紫朗

《climbing time / falling time》2017 ⑦

屋外展示

伊藤 隆介

《长征-すべての山に登れ》2017 ⑧

大黒 淳一×SIAFラボ

《沼紋》2017 ⑨

イサム・ノグチ

《モエレ沼公園》1982-2005 (設計:1998)

関連イベント

8/6(日)	SIAF2017オープニング	P71
8/22(火)	ARTSAT×SIAFラボ 気球打ち上げとテレコーディングパフォーマンス	P80
9/30(土)	クロージングイベント「モエレ沼公園 音楽&アート解放区」	P96
10/19(木)	ARTSAT×SIAFラボ 気球打ち上げとテレコーディングパフォーマンス	

Venue

Moerenuma Park Moerenuma Koen 1-1, Higashi-ku, Sapporo

A project featuring the history of Moerenuma Park and the perspective of sculptor Isamu Noguchi was held at the Glass Pyramid, the symbolic centerpiece of the park. The works of participating artists intertwined with each other to retrace the history of Moerenuma Park, the only place where this work would have been possible. This place full of Noguchi's inspiration (= playscape) was regenerated (= replayed) by the inspirations of today's artists. Moerenuma Park became a stage for new creation.

Artists, Works

Glass Pyramid

ARTSAT×SIAF Lab

Sculpture to be Seen from Space, Improvisation to be Heard from Space, 2017 ① / Sculpture for All of the Intelligence, 2017 ②

Ito Ryusuke

Stratigraphy, 2017 / The Mechanical Monsters, 2017 ③

Otomo Yoshihide + Aoyama Yasutomu + Ito Takayuki

(with) without records, 2017 ④

Otomo Yoshihide

Sound of music, 2017 ⑤

Sachiko M

Here the sounds..., 2017

Nam June Paik

K-567, 1993 ⑥

Matsui Shiro

climbing time / falling time, 2017 ⑦

Outdoor Exhibition

Ito Ryusuke

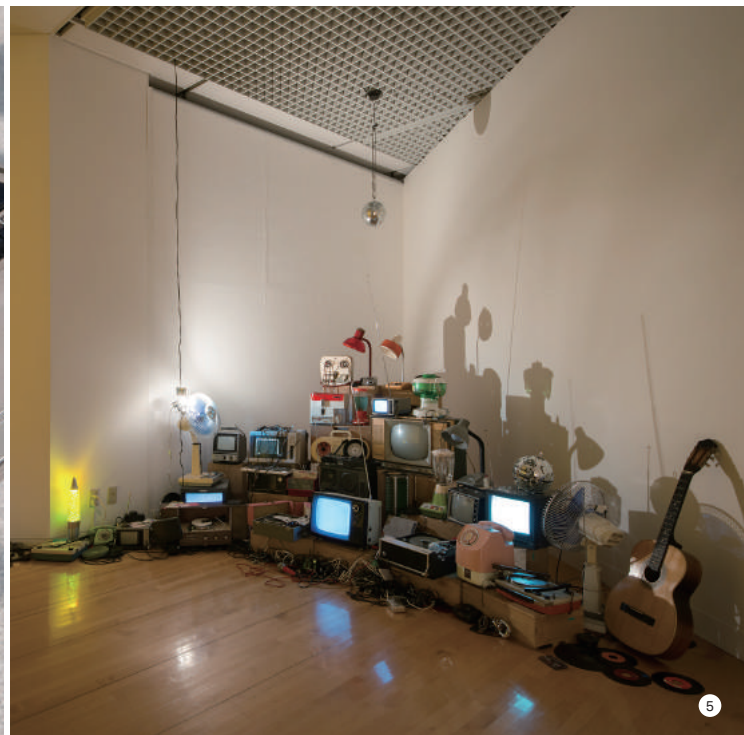
Long March-Climb Every Mountain, 2017 ⑧

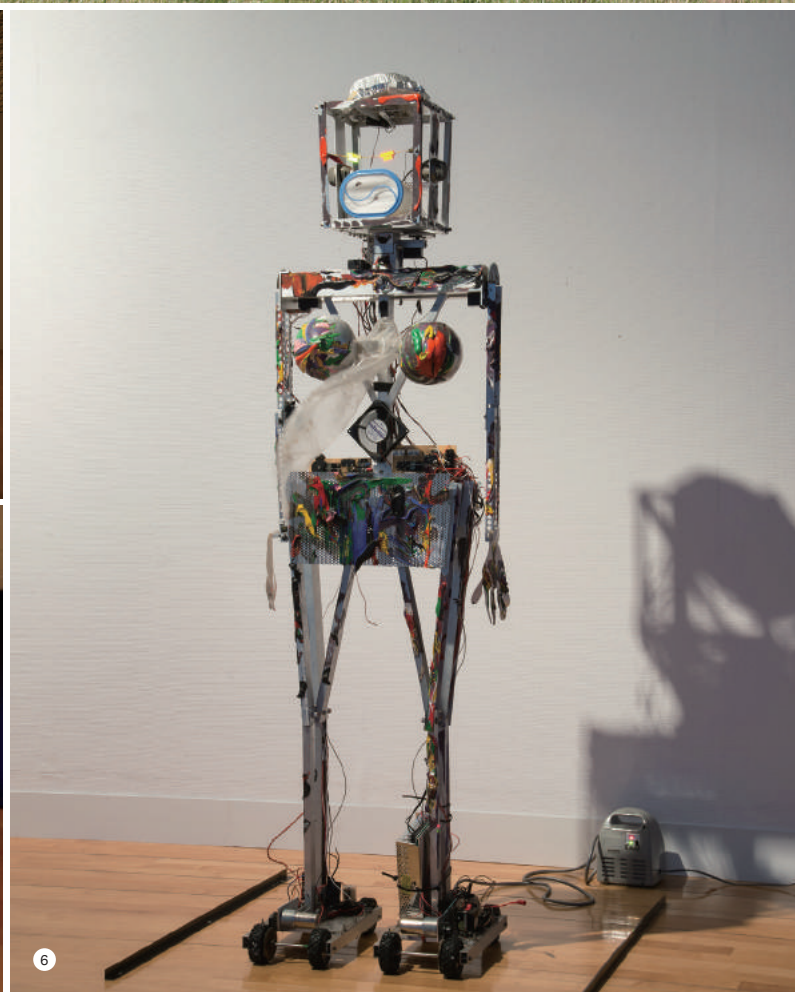
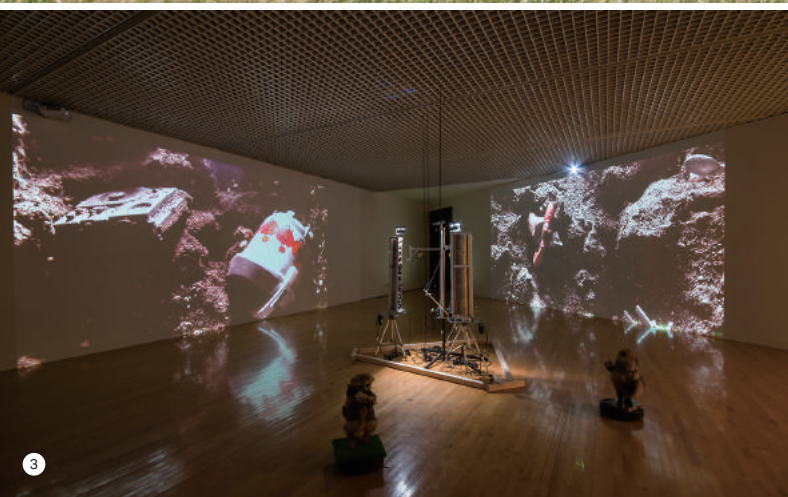
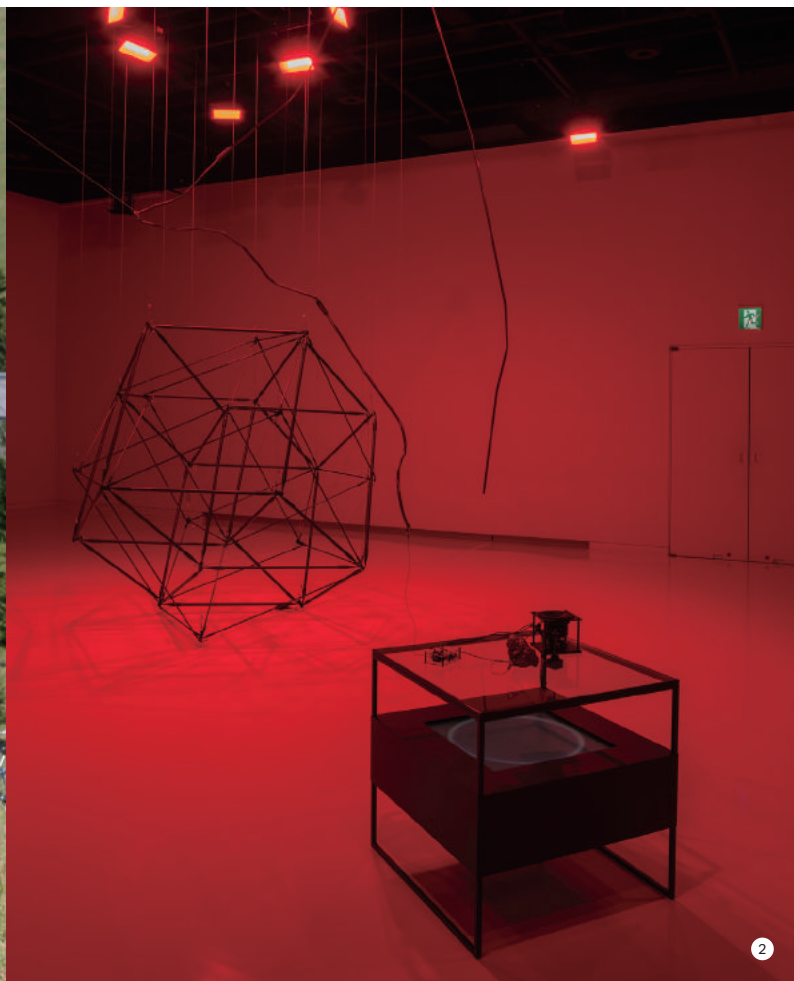
Oguro Junichi × SIAF Lab

numamon, 2017 ⑨

Isamu Noguchi

Moerenuma Park, 1982-2005





NEW LIFE：リプレイのない展覧会

NEW LIFE: Exhibition without Replay

会場

札幌芸術の森 札幌市南区芸術の森2丁目75

音の表現を入り口として独自の道を切り開いてきた5人のアーティストたちが、森全体に作品を展開。彼らは、伝達手段としてのメディアを、単に過去の時間を「再生＝リプレイ」させるためではなく、今ここにしかない瞬間を共有するために、その新しい使い方を発明してきた人たちといえます。本展では、彼らの表現を通して、本来は過去の時間に属する作品の集まりである「展覧会」というメディアを、そのつど生まれ変わる新たな経験(再生＝NEW LIFE)の場として更新することを試みました。

参加作家・作品

札幌芸術の森美術館

クリスチャン・マークレー (スイス/米国) ①

《Record Without a Cover》1985

《Recycling Circles》2005

《Lids and Straws (One Minute)》2016 ほか

鈴木 昭男

《きいてる》2017 ②

刀根 康尚 (米国)

《Il Pleut(雨が降る)》2017 ③

工芸館

€Y㊄

《ドッカイドー／・海・》2017 ④

有島武郎旧邸

鈴木 昭男

「点 音アーカイブ」

札幌芸術の森野外美術館

鈴木 昭男

《点 音》2017 ⑤

藤田 陽介

《CELL》2017 ⑥

関連イベント

8/6(日) クリスチャン・マークレー＋大友 良英「Found Objects」

8/11(金・祝) 鈴木 昭男・宮北 裕美パフォーマンス「きいてる みてる」

9/2(土) 刀根 康尚「AI Deviation」

10/1(日) €Y㊄「ドット・リーム | DOT LEEM」

Venue

Sapporo Art Park Geijutsu-no-mori 2-75, Minami-ku, Sapporo

Five artists who have pursued unique activities using sound as a form of expression exhibited works throughout the forest. These artists have obviously invented a new approach that utilizes media as communication tools to not simply replay the past, but also share moments experienced right here in the moment. Through their means of expression, this exhibition tried to renew the conventional style of an art exhibition of being a medium for gathering art objects from the past into a continuous opportunity for the regeneration (rebirth = new life) of new experiences.

Artists, Works

Sapporo Art Museum

Christian Marclay ①

Record Without a Cover, 1985

Recycling Circles, 2005

Lids and Straws (One Minute), 2016, etc.

Suzuki Akio

ki i te ru (Listening), 2017 ②

Tone Yasunao

Il Pleut, 2017 ③

Craft Hall

€Y㊄

dot kai dot / DKD, 2017 ④

Takeo Arishima Residence

Suzuki Akio

oto-date Archive

Sapporo Sculpture Garden

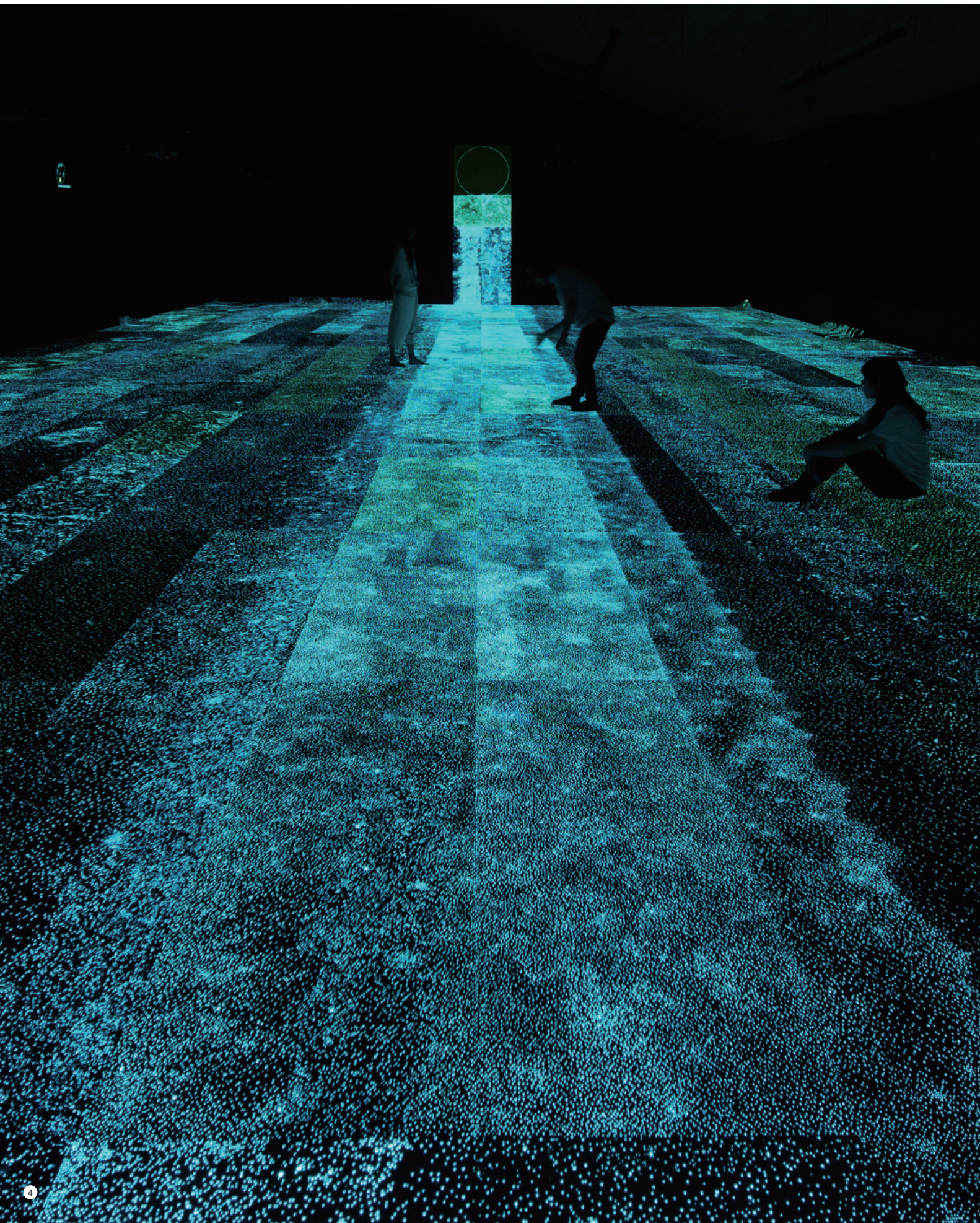
Suzuki Akio

oto-date, 2017 ⑤

Fujita Yosuke

CELL, 2017 ⑥





4



5



3



2



6

毛利 悠子 Mohri Yuko

会場 | Venue

札幌市立大学 芸術の森キャンパス スカイウェイ
札幌市南区芸術の森1丁目

Sapporo City University
Geijutsu-no-mori Campus Skyway
Geijutsu-no-mori 1-chome, Minami-ku, Sapporo

作品 | Work

《そよぎ またはエコー》2017
Breath or Echo, 2017



建築家・清家清氏設計による札幌市立大学の空中廊下「スカイウェイ」の80m部分を会場に、音速、光、磁力、風といった現象を発生させ、時を経て摩耗した「もの」たちを蘇らせた、風化と再生のインスタレーション。山を貫くトンネルを抜けて木漏れ日の通路からパノラマへと移りゆく環境に、廃ピアノやタ張市にあった碍子が奏でる音や明滅する街路灯などが共鳴した、ドラマチックな時間と空間を生み出しました。素材を北海道から集め、レジデンスの施設も活用した本作品は、「都市と自然」から「ガラクタの星座たち」へ、前回と今回のSIAFテーマをしなやかにつなぐものでもあり、2度目のSIAF参加を果たした作家の成長を力強く印象づけました。

An installation of weathering and regeneration in which worn objects set in the 80-m long Skyway, a midair corridor designed by architect Seike Kiyoshi at Sapporo City University, were revived through the phenomena of sound velocity, light, magnetic force and wind. Discarded pianos, the sound of insulators from Yubari and flickering street lights resonated with the venue, which featured a mountain tunnel leading to a sun-drenched passage offering panoramic views, creating a dramatic moment and space. Mohri stayed and researched in Hokkaido several times and created this work, with materials she collected during her research, and connected the two themes of "City and Nature" in SIAF2014 and "When Bits and Pieces Become Asterisms" in SIAF2017, highlighting the development of the artist, who participated in SIAF for the second consecutive time.

関連イベント

8/26(土) [P82](#)
After the Echo
8/27(日) [P84](#)
After the *After the Echo*
Camille Norment Artist Talk

梅田 哲也 Umeda Tetsuya

会場 | Venues

① 金市館ビル 札幌市中央区南2条西2丁目1
Kinichikan Bldg.
Minami 2-jo Nishi 2-1, Chuo-ku, Sapporo

② りんご 札幌市豊平区中の島1条3丁目8-19
Ringo
Nakanoshima 1-jo 3-8-19, Toyohira-ku, Sapporo

作品 | Works

① 《わからないものたち》2017
Things That Don't Know, 2017
② 《りんご》2017
Ringo, 2017



1970年代にデパートとして建てられ、市民に親しまれた金市館ビルの1フロア、約300坪の空間に、札幌市内各地で集めた廃材や、その場所にもともとあった材料をもとに広大なインスタレーションを展開した《わからないものたち》。また、かつてりんご倉庫として使用されていた札幌軟石の蔵を、建物ごと音と光と時間の作品に変容させた《りんご》。常に会場となる周囲を観察し、ゼロベースで環境を捉え直すことからスタートする梅田の作品は、その場所でしか成立しない体験として、さまざまな状況を生み出し、鑑賞者と作品との干渉による偶然の出来事も作品の一部となり、作家にも予測できない「中心のない世界」が出現しました。

The Kinichikan Building was built in the 1970s as a department store and has been popular with Sapporo residents ever since. In an area of approximately 990m² in one floor of this building, an extensive installation was created using materials that had been collected from various parts of Sapporo combined with items already on site. It was exhibited under the title of *Things That Don't Know*. *Ringo*, a work of sound, light and time, was created using a whole warehouse made of Sapporo freestone where apples used to be stored. Umeda creates unique site-specific experiences by starting with an observation of the venue and assessment of the environment. By incorporating the results of interference between the viewer and the work, a "coreless world" unpredictable even to the artist emerged.

関連イベント

8/18(金) [P78](#)
ライブパフォーマンス
「わからないものたち その2」
9/23(土・祝) [P94](#)
ライブパフォーマンス
「わかりやすいこと」
9/30(土) [P97](#)
オールナイトトーク
「生きているのに走馬灯」
8/9(水)、8/20(日)、8/27(日)、
9/10(日)、9/18(月・祝)、9/30(土)、
10/1(日)
《わからないこと》会場内ライブ

堀尾 寛太
Horio Kanta

会場 | Venues

- ① AGS6・3ビル 札幌市中央区南6条西3丁目13
AGS 6-3 Bldg.
Minami 6-jo Nishi 3-13, Chuo-ku, Sapporo
- ② 藻岩山山頂付近 札幌市南区藻岩山
Mt. Moiwa
Mt.Moiwa, Minami-ku, Sapporo

作品 | Works

- ① 《補間》2017
interpolation, 2017
- ② 《テレグラフ》2017
telegraph, 2017



SIAF2017終了後に解体されるAGS6・3ビルでは、その構造と設備を素材とする作品《補間》を展開。数年間使われずに繁華街で眠っていたビルのシャッターや避難器具などが連鎖的に引き起こす現象や、真っ暗な地下で蛍光灯が激しく明滅する非日常的な空間を体験しました。標高531mの藻岩山では《テレグラフ》を発表。山頂から街の明かりが見えるということは、街から山頂の明かりも見えるのではないかとそんな仮説に基づき、山頂に光を発する作品を設置。街からは稜線上に現れた光の明滅を確認することができ、山頂では風で回転する鏡の反射光が引き起こす、RGBのライトの発光や、一斗缶、ラジオなどが発する音が断続的に森の中に鳴り響き渡りました。

In the AGS 6-3 Building, which is to be demolished after SIAF2017, he created *interpolation*, a piece using the structure and equipment of the building. Visitors experienced a series of phenomena caused by shutters, fire escape equipment and other elements of the building that had been abandoned in the entertainment district for several years, and there was an extraordinary space where fluorescent lights flicker violently in the dark basement. He also exhibited *telegraph* on the 531-meter Mt. Moiwa. City lights can be seen from the summit of Mt. Moiwa, so lights on the summit must be seen from the city. Based on this hypothesis, he set up a luminous piece of work on the summit. From the city, the flickering of light on the ridge could be observed, while at the summit luminescence from an RGB light reflected off a mirror rotating in the wind, and the intermittent sounds of an 18-liter square can and a radio echoed in the forest surroundings.

関連イベント

- 9/18(月・祝)
DARK ELECTRONICS
WORKSHOP [P91](#)
- 9/28(木)
《補間》会場内ライブ [P95](#)

端 聡
Hata Satoshi

会場 | Venue

- 北専プラザ佐野ビル5階
札幌市中央区南5条西3丁目2
- Hokusen Plaza Sano Bldg.
5F, Minami 5-jo Nishi 3-2, Chuo-ku, Sapporo

作品 | Works

- 《Intention and substance》1995-2017
《コタンベツの丘》2017 ①、《液体は熱エネルギーにより気体となり、冷えて液体に戻る。そうあるべきだ。2017》2017 ②
《意図した物質とエネルギーの変化》2017 ③
- Intention and substance*, 1995-2017
Kotanbetsu hill, 2017 ①
Liquids turn into gas by thermal energy, then get cold and turn back into a liquid. That is how it should be. 2017, 2017 ②
Change in intended substance and energy, 2017 ③



産業革命以降の大量生産、大量消費による方向性から多くの利便性、物質的豊かさを得た反面、大量廃棄などからの環境やエネルギーの問題、金融システムからの経済格差問題など、いくつもの課題を抱えつつ盲目的な経済成長を劇的とも言える速さで進んできました。そろそろ一度立ち止まり、あらゆる資源が循環するシステムへと、さらに人間の思考までも循環させるような時代にシフトしなければならないという考えから、常に物質は変化することと循環することを意図とした表現を歓楽街すすきので展開しました。

We humans gained convenience and material wealth from mass production and consumption after the industrial revolution, and have experienced drastically progressive economic growth while facing numerous problems, such as environmental and energy issues due to mass disposal and economic disparity derived from financial systems. It is time to stop and shift from the social system to the circulation system of resources and to the age of circulating even human thought. Based on this idea, Hata exhibited his works in the Susukino entertainment district with the concept of change and the circulation of material.

関連イベント

- 9/15(金)
端聡×港千尋
スペシャルトーク [P90](#)

札幌の三至宝：アートはこれを超えられるか！

Three Great Treasures from Sapporo

会場

北専プラザ佐野ビル地下1階
札幌市中央区南5条西3丁目2

市井の中に評価も求めず、類まれなる情熱で、類まれなるものをつくる人がいます。企画メンバー上遠野敏が選んだ、どの文脈にも属さない「札幌の三至宝」を紹介しました。

展示

① 大漁居酒屋でっちゃんサテライト

「でっちゃん」こと阿部鉄男さんが、20年の歳月をかけて雑貨で埋め尽くした「大漁居酒屋でっちゃん」のカラージュ空間を藤倉翼が撮影した写真と、「でっちゃん」自らが家族をモチーフとして描いた油絵や素描を公開しました。

画：阿部 鉄男 撮影：藤倉 翼

② レトロスペース坂会館別館

坂一敬さんが雑貨を数万点収集した私設博物館「レトロスペース坂会館（本館）」の「別館」が会期限定で北専プラザにオープン。本館にも紹介されたことがない秘蔵コレクションを坂館長自らが展示。併せて藤倉翼が撮影した本館の様子と館長の写真が展示されました。

館長：坂 一敬 副館長：中本 尚子 撮影：藤倉 翼

③ 北海道秘宝館

2010年に閉館した北海道秘宝館（札幌市南区定山溪）に展示されていた蠟人形を札幌の至宝として写真で紹介。併せてドキュメント映像で、当時の様子を振り返ると共に、役目を終えた館内の写真を展示しました。

写真・映像：都築 響一

Venue

Hokusen Plaza Sano Bldg.
B1, Minami 5-jo Nishi 3-2, Chuo-ku, Sapporo

There are ordinary people who create extraordinary things with great passion without seeking recognition. *Three Great Treasures from Sapporo*, selected by Katono Satoshi (a project member) were introduced here free of context.

Exhibitions

① Tairyo Izakaya Tecchan Satellite

The interior space of Tairyo Izakaya Tecchan was collaged over 20 years by owner Abe Tetsuo, who is also known as Tecchan. Photographs of the space taken by photographer Fujikura Tsubasa were exhibited along with Tecchan's own oil paintings and drawings of his family.

Paintings / drawings: Abe Tetsuo, Photos: Fujikura Tsubasa

② Retro Space Saka Hall Annex

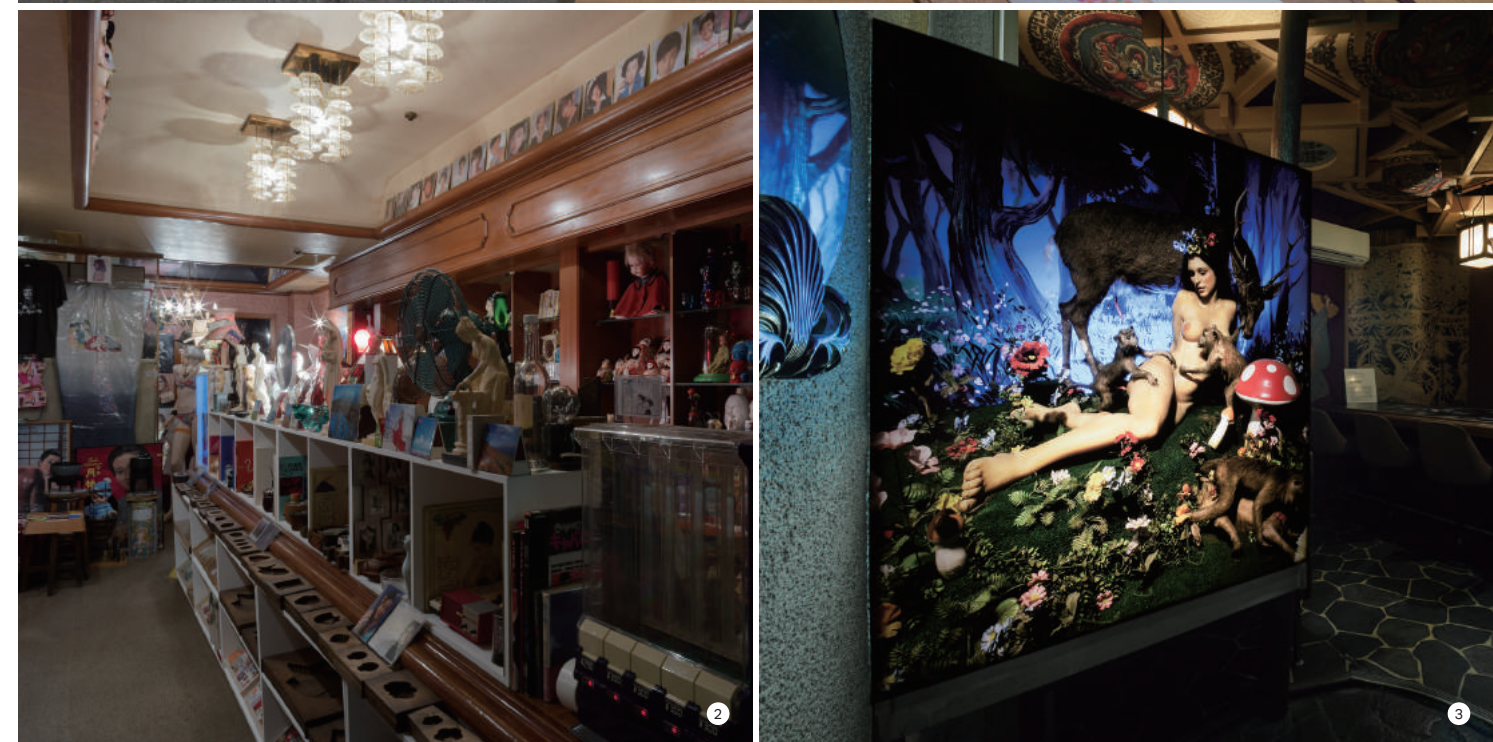
The annex of the Retro Space Saka Hall (main building), a private museum exhibiting tens of thousands of knick-knacks collected by Saka Kazutaka, opened in the Hokusen Plaza Sano Building for a limited time only. Saka exhibited his collection that had never been shown. Photographs of Saka and the main building taken by Fujikura Tsubasa were also exhibited.

Director: Saka Kazutaka / Deputy director: Nakamoto Naoko, Photos: Fujikura Tsubasa

③ Hokkaido Hihokan

Hokkaido Hihokan (Jozankei, Minami-ku, Sapporo) was closed in 2010. A wax doll on exhibit there was introduced as a great treasure from Sapporo along with photographs. A documentary film was also shown along with photographs of the interior space of the closed facility to look back on that time.

Photos and videos: Tsuzuki Kyoichi



関連イベント

大漁居酒屋でっちゃん
店内ツアー
(会期中、水・日を除く毎日)

P73

9/27(水)
一夜限りの坂 NIGHT
トークとレコードのゆうべ with
スナック寿樹

P95



レトロスペース坂会館(本館)
札幌市西区二十四軒3条7丁目3-22



大漁居酒屋でっちゃん
札幌市中央区南3条西4丁目 カミヤビル7階



1



2



4



5



3

DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS

THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS

season 5 (DOMMUNE SAPPORO!)

会場

北専プラザ佐野ビル地下1階 札幌市中央区南5条西3丁目2

CAI02 札幌市中央区大通西5丁目8 昭和ビル地下2階

宇川直宏によるインターネットストーリーミング放送局 DOMMUNE のプロジェクト「THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS」は、現代日本を代表するアーティスト100人の個人史をひもとく、自叙伝的インタビュー番組です。SIAF2017ではこのプロジェクトの season 5 を開催。すすきのにある「北専プラザ佐野ビル」では、かつてクラブだった全面ピンク色の空間を生かした、ここでしか見ることのできない異色の展示が5名のアーティストにより展開されました。また、「CAI02」には作品展示に加えて、DOMMUNE SAPPORO! を開局し、番組配信と展示を行いました。

参加作家・作品

宇川 直宏

北専プラザ佐野ビル

大友 良英 《without records》2017

斎藤 秀三郎 《作品8703処女》1987、《作品9202》1992、
《作品9002ハート》1990、《キャベツ玉》2007

篠原 有司男 《Red and Black on White》2004、《Black & Pink on White》2012、《カマキリマン・ライダー》2002 ①

中ザワヒデキ 《10枚から成る62円分の普通切手の57通り》2017

山川 冬樹 《その人が見た未来は僕らの現在》2015 ②

CAI02

さわひらき 《dwelling》2002、《did I?》2011

札幌ループライン ③

監修：岸野雄一、技術協力：クワクボリョウタ、音楽：海藻姉妹、制作：TASKO inc.

配信番組

8/5(土)	「DOMMUNE SAPPORO!」 DAY1 インタビュー：クワクボリョウタ×島中 実 LIVE + TALK：Sachiko M (ASR)	P70
8/6(日)	「DOMMUNE SAPPORO!」 DAY2 インタビュー：さわひらき×上妻 世海 LIVE：藤田 陽介、テニスコーツ、MC MANGO	P73
8/18(金)	「DOMMUNE SAPPORO!」 DAY3 ④ インタビュー：大友 良英×宇川 直宏 DJ LIVE：岸野 雄一、珍盤亭楽楽師匠	P78
8/19(土)	「DOMMUNE SAPPORO!」 DAY4 インタビュー：中ザワヒデキ×上妻 世海 講演：中ザワヒデキ	P80
9/16(土)	「DOMMUNE SAPPORO!」 DAY5 ⑤ インタビュー：山川 冬樹×藪前 知子 LIVE：山川 冬樹、ハットコベ、テンテンコ	P90

Venues

Hokusen Plaza Sano Bldg.

B1, Minami 5-jo Nishi 3-2, Chuo-ku, Sapporo

CAI02 Showa Bldg. B2, Odori Nishi 5-8, Chuo-ku, Sapporo

DOMMUNE is an Internet streaming broadcast station established by Ukawa Naohiro. The 100 Japanese Contemporary Artists, a project of DOMMUNE, is an autobiographical interview program to reveal the personal histories of 100 Japanese contemporary artists. In SIAF2017, Season 5 of this project was shown. In the Hokusen Plaza Sano Building in Susukino, five artists used a space in pink that was once a hostess bar to display unique exhibits. DOMMUNE SAPPORO!, a satellite studio, was opened at the CAI02 gallery, where the program broadcasting and an exhibition were implemented.

Artists, Works

Ukawa Naohiro

Hokusen Plaza Sano Bldg.

Otomo Yoshihide *without records*, 2017

Saito Hidesaburo *Work 8703 Virgin*, 1987 / *Work 9202*, 1992 / *Work 9002 Heart*, 1990 / *A Head of Cabbage*, 2007

Shinohara Ushio *Red and Black on White*, 2004 / *Black & Pink on White*, 2012 / *Praying mantis-man Rider*, 2002 ①

Nakazawa Hideki *57 Ways to Make 62 Yens Worth from 10 Stamps*, 2017

Yamakawa Fuyuki *The Future She Saw was Our Present*, 2015 ②

CAI02

Sawa Hiraki *dwelling*, 2002 / *did I?*, 2011

Sapporo Loop Line, 2017 ③

Supervisor: Kishino Yuichi, Technical cooperation: Kuwakubo Ryota, Music: Kaiso Shimai, Produced with cooperation of TASKO inc.

Livestream Programs

Sat., Aug. 5	DOMMUNE SAPPORO! DAY1 Talk: Kuwakubo Ryota×Hatanaka Minoru, Performance and Talk: Sachiko M (ASR)	P70
Sun., Aug. 6	DOMMUNE SAPPORO! DAY2 Talk: Sawa Hiraki×Kouzuma Sekai, Performance: Fujita Yosuke, Tenniscoats, MC MANGO	P73
Fri., Aug. 18	DOMMUNE SAPPORO! DAY3 ④ Talk: Otomo Yoshihide×Ukawa Naohiro DJ: Kishino Yuichi, Chinbantei Gorakushisyou	P78
Sat., Aug. 19	DOMMUNE SAPPORO! DAY4 Talk: Nakazawa Hideki×Kouzuma Sekai Lecture: Nakazawa Hideki	P80
Sat., Sep. 16	DOMMUNE SAPPORO! DAY5 ⑤ Talk: Yamakawa Fuyuki×Yabumae Tomoko Performance: Yamakawa Fuyuki, Hattokope, TENTENKO	P90

さわ ひらき Sawa Hiraki

会場 | Venue

北海道教育大学 アーツ&スポーツ文化
複合施設 HUG
札幌市中央区北1条東2丁目4

Hue Universal Gallery (HUG)
Kita 1-jo Higashi 2-4, Chuo-ku, Sapporo

作品 | Work

《うろ・うろ・うろ》2017
ulo ulo ulo 2017



さわひらきが、2017年1月にモエレ沼や夕張市のシュエパロ湖などで、梅田哲也と行った光の実験「フィールドアクション」の記録をベースとした映像インスタレーションを発表。氷点下のなか、表面の積雪を掻き、氷に穴を開け、水中に照明を沈め、その光源を上下して拡散の範囲を変化させるなど、謎に包まれた非合理的な行為によって出現した未知なる光景。不気味に発光する穴、その周りで行われる営みなど、一連の出来事がさわの能動的(創造的)な誤読によって再構築され、虚と実が交錯する詩的な映像で描き出されました。

Sawa Hiraki presented a new video installation based on the records of *Field Action*, an experiment on light conducted at Mo-erenuma and Lake Shuparo in Yubari in January 2017 together with Umeda Tetsuya. Ethereal scenery was created by Umeda, who shoveled snow on the icy lake surface, made a hole in the ice and then dropped a light into the lake in freezing temperatures. A series of events, including the light coming from the hole and movements performed around it, were reconstructed through Sawa's proactive (creative) misreading and depicted in poetic footage in which fantasy and reality were intertwined.

中崎透×札幌×スキー 「シュプールを追いかけて」 NAKAZAKI Tohru×Sapporo×Ski –Tracing Snow Tracks

会場 | Venue

札幌大通地下ギャラリー 500m美術館
札幌市中央区大通西1丁目～大通東2丁目
(地下鉄大通駅とバスセンター前駅を結ぶ地下コンコース内)

Sapporo Odori 500-m Underground Walkway Gallery
Odori Nishi 1-chome to Higashi 2-chome, Chuo-ku, Sapporo



日常生活の上ではやっかいな雪と共存しながら楽しんだり苦労したりする北国の生活、1972年の冬季オリンピックを契機に都市計画が進んだ札幌という都市の輪郭をなぞる展覧会。この展覧会のために結成されたボランティアチームSIAF500メーターズと共にリサーチを行い、さまざまな施設や関係者から借りてきたスキー板をはじめとした冬の道具が並びました。また、スキー・雪山にまつわるインタビュー記事や作品を500m美術館の直線空間に並べることで、人間の工夫や遊び心の軌跡、生活、人、時代や歴史を感じとれる空間を創出しました。

In snowy regions, people coexist with, enjoy and struggle through snow. This is an exhibition tracing the outline of Sapporo, which rapidly developed when the Winter Olympics were held in 1972. With the SIAF 500 Meters volunteer team, which was formed for this exhibition, Nakazaki conducted research to display skis and other winter tools borrowed from various facilities and people. He also showed articles of interviews and works related to skiing and snow mountains in the linear exhibition space of the Sapporo Odori 500-m Underground Walkway Gallery to create a space where viewers could understand people's efforts to coexist with and enjoy snow, as well as highlighting various lifestyles, people, ages and histories.

狸小路TV

Tanukikoji TV

会場 | Venues

狸小路商店街 札幌市中央区南2・3条西1～8丁目
(祭屋永井、宮文刃物店、auショップ狸小路、北海道みやげ たぬきや、道産食彩HUG、新倉屋、リカープラザ鈴木、シアターキノ、KOPITIAM、フレッシュエアー、hilminei、くさかカバン店)

大通すわろうテラス 札幌市中央区南2条西4丁目 札幌ナナイロ前

札幌プラザ2・5 札幌市中央区南2条西5丁目

Tanukikoji Shopping Arcade

Minami 2- and 3-jo Nishi 1- to 8-chome, Chuo-ku, Sapporo

Odori Suwaro Terrace

Minami 2-jo Nishi 4-chome, Chuo-ku, Sapporo

Sapporo Plaza 2-5

Minami 2-jo Nishi 5-chome, Chuo-ku, Sapporo

参加作家 | Artists

今野 勉、長沼 修
Konno Tsutomu, Naganuma Osamu

テレビにおける表現をいろいろな角度から再評価する企画。テレビ放送開始当初すべての番組が生放送だったことから、芸術祭会場からのリアルタイム映像を狸小路商店街の店舗に設置したテレビに放映しました。また、連日19時30分から1時間、この企画のために考えられた番組(上映+トーク)を大通すわろうテラスから生放送。上映イベントではテレビ表現が成熟した時期である1960～70年代に放送され、現在では見ることが難しい珠玉のドラマ上映や、近年放送されたローカル番組も取り上げ、関係者とトークを実施しました。

Tanukikoji TV was a project in which TV expressions were reevaluated from various angles. All programs were live when TV broadcasting began, so real-time footage from SIAF venues was broadcast to TVs placed at stores in the Tanukikoji Shopping Arcade. Live coverage of a program (screening + talk show) for this project was also broadcast from Odori Suwaro Terrace for one hour from 19:30 every day. In the screening event, excellent dramas that were broadcast in the 1960s to '70s (a maturing period of TV expressions) and that are now difficult to find, and recent local programs were screened, and a talk show was held with people involved.



関連イベント(上映+トーク)			
8/20(日)	根源的なTV表現を再発見する～60年代・70年代の今野勉のTV表現から、創造とは何かを問い直す～	P80	
8/21(月)	北海道の視点を探索する	P80	
8/23(水)	「TVはどうなる?」シリーズ1	P80	
8/29(火)	「TVはどうなる?」シリーズ2	P84	
9/1(金)	「TVはどうなる?」シリーズ3	P84	
9/13(水)	「TVはどうなる?」シリーズ4	P88	
9/17(日)	TV映像から再発見する〈札幌〉～ローカリズムと創造の原点を探る～	P91	

番組配信 (P73以降参照)

8/6(日)	オープニング放談「Viva! 札幌 Viva! 狸小路」
8/7(月)	北海道のハロウィン「ローソクだーせ」中継
8/8(火)	狸小路商店街新役員座談会
8/10(木)	連続漫画ライブ
8/11(金・祝)	狸小路6丁目座談会
8/12(土)	アートマネジメントってなんだ 1
8/14(月)	今はなき忘れられた懐かしい北海道ローカルTVCM特集 1
8/15(火)	今はなき忘れられた懐かしい北海道ローカルTVCM特集 2
8/17(木)	テレビでラジオ～ドラマの世界 1
8/18(金)	狸小路でボンバーマン
8/21(月)	北海道の視点を探索する トーク中継
8/22(火)	ラ・テ期草創期 てんやわんやのナマ放送現場
8/23(水)	上映イベント「TVはどうなる?」シリーズ1 トーク中継
8/24(木)	狸小路から札幌へ、老舗宮文の宮本社長対談
8/27(日)	狸小路クイズ王決定戦 アタック25チャンピオンすがわまさひろに挑戦!
8/28(月)	加賀城匡貴のアートたんけんたい賞 1
8/29(火)	上映イベント「TVはどうなる?」シリーズ2 トーク中継
8/31(木)	テレビでラジオ～ドラマの世界 2
9/1(金)	上映イベント「TVはどうなる?」シリーズ3 トーク中継
9/4(月)	加賀城匡貴のアートたんけんたい賞 2
9/7(木)	アートマネジメントってなんだ 2
9/8(金)	アートマネジメントってなんだ 3
9/11(月)	加賀城匡貴のアートたんけんたい賞 3
9/12(火)	TVの青春期を語ろう
9/13(水)	上映イベント「TVはどうなる?」シリーズ4 トーク中継
9/15(金)	アートマネジメントってなんだ 4
9/18(月・祝)	今はなき忘れられた懐かしい北海道ローカルTVCM特集 3
9/19(火)	今はなき忘れられた懐かしい北海道ローカルTVCM特集 4
9/22(金)	北のお菓子文化～甘くて深～い歴史の味
9/23(土・祝)	私たちの札幌国際芸術祭～外国籍生徒による自国語リポート・アートサミット
9/24(日)	私たちの札幌国際芸術祭～外国籍生徒による自国語リポート・アートサミット
9/25(月)	加賀城匡貴のアートたんけんたい賞 4 大賞決定
9/26(火)	狸小路ニューウェーブの発信者たち
9/27(水)	アートマネジメントってなんだ 5
9/28(木)	北海道食文化の成り立ち
9/30(土)	狸小路TVメンバーのラスト放談



札幌市資料館を拠点としたアートプロジェクト

Art projects based in the Shiryokan

会場 | Venue

札幌市資料館 札幌市中央区大通西13丁目

Shiryokan (Former Sapporo Court of Appeals)
Odori Nishi 13-chome, Chuo-ku, Sapporo

SIAF2017のテーマ「芸術祭ってなんだ?」を参加者一人ひとりが考え、試し、共有する場として、展示やワークショップ、参加型のプログラムを実施しました。また、インフォメーションセンターやカフェ、ボランティアセンターを併設し、芸術祭に関する情報発信の中心的な会場として機能しました。

The Shiryokan was open to the public as a place to consider, share and take part in activities related to the theme of SIAF2017, "How do we define 'Art Festival'?", and exhibitions, workshops and participatory programs were held. An information center, a cafe and a volunteer center were also established in the Shiryokan, which acted as a base for the art festival.



アートとリサーチセンター / Art and Research Center



サカナ通信 / SAKANA PRESS



CAMP SITE PROJECT「裏庭」
CAMP SITE PROJECT "URANIWA"

・アートとリサーチセンター Art and Research Center

北海道・札幌に滞在し活動をするアーティストによる創造的活動を支援するための新しい情報ソースを蓄積することを目的に、情報ポータルサイトの作成や、「北海道芸術史・オルタナティブ芸術史」の年表をまとめるオープン・プロジェクト、アーティストのスタジオを訪問するスタジオヴィジット、滞在制作を試みたアーティストの活動を訪ねるツアーなどを実施しました。

With the aim of accumulating information sources to support creative activities by local artists and artists from other regions who are residing in Sapporo / Hokkaido, various projects were implemented including the creation of an information portal site (website), the Open Project (in which chronological tables for Hokkaido art history and alternative art history were compiled), the Studio Visit project, and tours visiting artists who participated in the artist-in-residence program.

関連イベント

8/11(金・祝)	北海道美術史[1977-2017]フォーラム	P73
8/12(土)～13(日)	アーティストが見た北海道・札幌プログラム01音威子府ツアー・阿児つばさ	P75
9/12(火)	北海道美術史[1977-2017]フォーラム	P88
9/23(土・祝)	アーティストが見た北海道・札幌プログラム02 小樽ツアー・深澤孝史	P94
9/25(月)	アーティストが見た北海道・札幌プログラム03 夕張ツアー	P95

・サカナ通信 SAKANA PRESS

「さいあふ、かわらばん、なぜなに通信」の略称。SIAFに関わる市民が記者となり、会期中に行われるプロジェクトやイベントのタイムリーな情報をはじめ、札幌・北海道ならではの情報を取材、編集し、さまざまなメディア(SNS、ブログ、瓦版、回覧板など)を通じて発信しました。

An abbreviation of *Saiafu*, *Kawaraban*, *Nazenanitsushin* (lit. SIAF, newsletter, why, what, correspondence). Local residents involved in SIAF acted as reporters and collected and edited information on projects and events during the festival as well as information unique to Sapporo / Hokkaido to publish through various media (e.g. SNS, blogs, newsletters, notices).

・CAMP SITE PROJECT『裏庭』 CAMP SITE PROJECT "URANIWA"

参加作家 | Artists タノタイガ TANOTAIGA

資料館の裏庭を「キャンプ場」として機能させるためのプロジェクト。規制の趣旨に抵触しない方法で創意工夫により課題を解決していくため、参加者と共に勉強会やワークショップ、交流イベントを重ね、一連の取り組みを公開しながら、「公共(パブリック)とは何か?」を参加者の「個人(パーソナル)・プライベート」な視点から考え、プロジェクトの実現に向けた活動を展開しました。

A project creating a camp site in the Shiryokan's backyard. Study sessions, workshops and exchange events were held to use inventiveness to overcome various issues without contravening public regulations. These efforts were open to the public, and all participants considered what a public space meant from their personal perspectives and worked to realize the project.

関連イベント

8/8(火)～11(金・祝)	キャンプの為にテント制作ワークショップ	P73
8/12(土)	裏庭ミーティング vol.3「CAMP/キャンプ」の整備について考えてみる	P75
8/13(日)	タノタイガ「開拓風呂入浴式」	P75
8/17(木)～19(土)	「裏泊」で泊ってみる	P77, 78, 80
8/20(日)	タノタイガ「ラーメンが食べたい」	P80
8/24(木)～26(土)	「裏泊」で泊ってみる	P81, 82
8/31(木)～9/2(土)	「裏泊」で泊ってみる	P84, 86
9/2(土)	タノタイガ 鮭を飼いたい!「ルアー作りワークショップ」	P86
9/7(木)～9(土)	「裏泊」で泊ってみる	P88
9/14(木)～16(土)	「裏泊」で泊ってみる	P88, 90, 91
9/14(木)	タノタイガ 鮭を飼いたい!「タノタイガと行く鮭釣りツアー in 白老」	P88
9/15(金)	タノタイガ 鮭を飼いたい!「鮭と入浴式」	P90
9/16(土)	タノタイガ 鮭を飼いたい!「鮭料理」	P91
9/16(土)	裏庭ミーティングvol.4 これは「CAMP/キャンプ」だったのか?	P91
9/30(土)	裏庭フィナーレ「開拓風呂入浴式・晩餐会」	P97
10/1(日)	裏庭フィナーレ「開拓風呂入浴式」	P97

北海道の三至宝：アートはこれを超えられるか！

Three Great Treasures from Hokkaido

会場

札幌市資料館 2階
札幌市中央区大通西13丁目

北専プラザ佐野ビル会場で展開した「札幌の三至宝」に並び、企画メンバー 上遠野敏が選んだ「北海道の三至宝」を紹介しました。

展示

① 赤平住友の炭鉱遺産：坑内模式図

〔展示期間：8月6日（日）～17日（木）〕

2016年に住石マテリアルズ株式会社から赤平市に旧住友赤平炭鉱の施設とともに譲渡された「坑内模式図」を初めて一般公開。これは全長200キロメートルの坑内を約5メートルの図面2枚に収めた炭鉱の羅針盤といえるもので、坑内測量職員がどのように作業を進めるかを判断する重要な役割を担っていました。

② 地球の声を聞いた男・三松正夫の昭和新山火山画

北海道有珠郡壮瞥町の元郵便局長三松正夫は、戦時中に火山（昭和新山）の生成を記録した人物です。昭和新山は三松が私財を投じて購入した個人の所有物で、火山そのものが世界に誇れる博物館の資料となっています。今回は火山画（一部レプリカ）とミマツダイアグラムなどの資料を併せて展示し、その魅力を伝えました。

③ 北海道の木彫り熊～山里稔コレクションを中心に

木彫り熊は、北海道を代表するお土産という時代もありましたが、その後近年まで評価がされない時期が続きました。本展示では、彫り師たちが試行錯誤を重ね、造形性を高めた手彫りの熊を再認識し、また俯瞰する機会として、造形作家の山里稔さんのコレクションの木彫り熊と道内の名作熊が一堂に会しました。また、市民公募の立体熊も展示して彩りを添えました。

関連イベント

8/11（金・祝）
トーク「北海道の三至宝：アートはこれを超えられるか！」

P73

Venue

Shiryokan (Former Sapporo Court of Appeals)
2F, Odori Nishi 13-chome, Chuo-ku, Sapporo

Three Great Treasures from Hokkaido (selected by Katono Satoshi, a SIAF project member) were introduced along with *Three Great Treasures from Sapporo* at the Hokusen Plaza Sano Building.

Exhibitions

① Akabira Sumitomo Coal Mine Heritage: Underground Mine Map

(exhibited August 6 – 17)

The underground mine map of the former Sumitomo Akabira Coal Mine, which was assigned from Sumiseki Materials Co., Ltd. to Akabira City in 2016 with other related facilities, was opened to the public for the first time. This map depicting the whole 200-km pit on two pieces of 5-meter-long paper can be referred to as a compass for the coal mine, and it played an important role when pit surveying technicians decided how to proceed with work.

② Images of Mt. Showa-shinzan in eruption painted by Mimatsu Masao

Mimatsu Masao, the former postmaster of Sobetsu, Utsunomiya-gun, Hokkaido, recorded the formation of a volcano (Mt. Showa-shinzan) during the Second World War. Mt. Showa-shinzan was bought by Mimatsu and remains in his family, and the volcano itself provides world-class materials for museums. The exhibits included pictures of the volcano (partly replicas) and related materials, including the Mimatsu Diagram.

③ Carved wooden bears of Hokkaido from Yamasato Minoru Collection

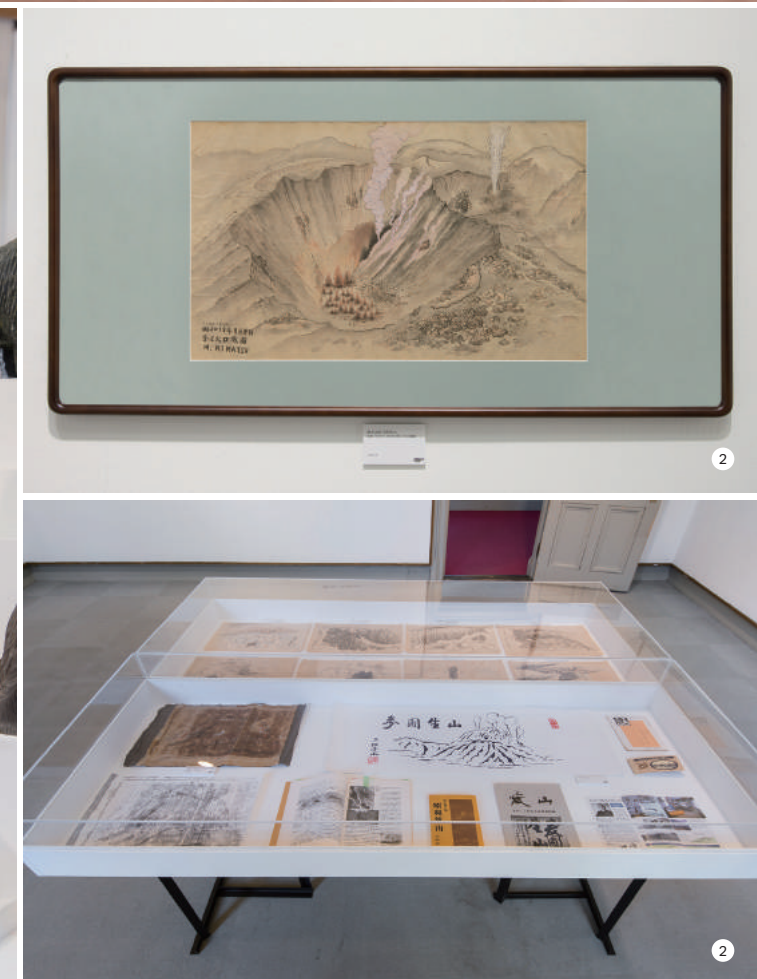
Wooden bears were once a popular gift from Hokkaido, but until recently had lost their attraction. In this exhibition, sculptor Yamasato Minoru's wooden bear collection and other masterpieces from Hokkaido were brought together for public display to provide an opportunity to recognize and enjoy the beauty of carved wooden bears. Three-dimensional bear artworks collected from the public were also on display to add color to the exhibition.



1



3



2

2

テラコヤーツセンター
「土砂」
Terakoyarts Center 'Dosha'

会場 | Venue

札幌市資料館 2階 札幌市中央区大通西13丁目

Shiryokan (Former Sapporo Court of Appeals)
2F, Odori Nishi 13-chome, Chuo-ku, Sapporo

参加作家 | Artist

テニスーツ

Tenniscoats

SIAFが開催された57日間、札幌市資料館2階にある旧応接室に、テニスーツのさや、植野隆司とMC MANGOが滞在し、来場者と共に作品をつくりました。みんなでいろいろなことを練習したり、ゲストが来たり、ここで数々の出来事が繰り広げられました。

Many works were created by Saya and Ueno Takashi of Tenniscoats, MC Mango (who stayed in the former reception room on the second floor of the Shiryokan for all 57 days of SIAF) and visitors to the Shiryokan. Dosha provided a place for practicing various things and welcoming guests, and was the venue for a variety of events.

関連イベント

8/11(金・祝)・12(土)	みんなで音楽劇をつくろう	P73, 75
8/13(日)	「みんなで音楽劇をつくろう」発表会	P75
8/18(金)	サウンドオン サイレント〜テニスーツ、細馬宏通 in シアターキノ	P78
8/19(土)	裏庭カレフェス	P80
8/22(火)	「リュウガ君のタップダンスLOVE」ワークショップ	P80
8/23(水)~26(土)	ざやえんどう with テニスーツ 楽団しよう	P80-82
8/28(月)	テニスーツ@札幌市立大学	P84
9/1(金)	ミセストライアングル in 資料館裏庭	P84
9/3(日)	テニスーツと立花泰彦	P87
9/5(火)~8(金)	テニスーツ、weird-meddle record企画	P88
9/12(火)	リュウガ君のタップダンス教室2	P88
9/22(金)	非公式トークライブ「芸術祭、終わりののはじまり…」	P91
9/23(土・祝)	リュウガ君のタップダンス教室3	P94
9/24(日)	テニスーツ in 地下歩行空間	P94
9/24(日)	スモーフェス in 資料館裏庭	P94
9/25(月)	テニスーツ in 宮の森美術館	P95
9/27(水)	DOMMUNE中継ライブ	P95
9/28(木)	堀尾寛太「補間」会場内ライブ	P95
10/1(日)	Let it be…	P97



NMAライブ・ビデオアーカイブ
NMA Live Video Archive

会場 | Venue

札幌市資料館 1階 札幌市中央区大通西13丁目

Shiryokan (Former Sapporo Court of Appeals)
1F, Odori Nishi 13-chome, Chuo-ku, Sapporo

札幌を拠点に、1983年から即興や実験的な音楽を中心としたコンサートを企画してきたNMA(NOW MUSIC ARTS)の活動を紹介する展示室。主宰の沼山良明の部屋をイメージした室内では、これまでNMAが企画したライブビデオを自由に検索視聴でき、当時のチラシ、イベントが紹介された新聞や雑誌の切り抜きなども展示しました。

An exhibition room introducing the activities of NMA (Now Music Arts), which is based in Sapporo and has organized concerts for improvisation and experimental music since 1983. Visitors could freely enjoy videos of live performances organized by NMA as well as advertising literature and newspaper and magazine clippings about events in the space inspired by the studio of Numayama Yoshiaki, the organizer of NMA.



札幌デザイン開拓使

サッポロ発のグラフィックデザイン
～栗谷川健一から初音ミクまで～

Sapporo Design Pioneers

Graphic Design from Sapporo—From
Kuriyagawa Kenichi to Hatsune Miku—

会場 | Venue

JRタワープラニスホール
札幌市中央区北5条西2丁目

JR Tower Planis Hall

Kita 5-jo Nishi 2-chome, Chuo-ku,
Sapporo

参加作家・作品 | Artist, Works

栗谷川健一
《ムックリを鳴らすアイヌ娘》1953、
《スキーの源流》1966 ほか

Kuriyagawa Kenichi
A young Ainu woman playing the
mukkuri, 1953 / The origins of skiing,
1966, etc.



「デザインってなんだ?」という問いを、札幌にまつわるデザインで考える展覧会。1872年、北海道開拓使長官・黒田清隆が考え、採用されなかったとされる幻の開拓使旗エンブレムを起源に、明治初期の鳥瞰図、昭和初期にグラフィックデザインの先駆けとなった栗谷川健一、札幌オリンピックで登場したデザイン、そして80年代以降、札幌を拠点とするデザイナーによって生み出されたグラフィックデザインの数々などを紹介しました。

This exhibition posed the question "What is design?" through designs related to Sapporo. It featured graphic designs in Sapporo, which started with an emblem for the Hokkaido Development Commissioner (which was designed by Kuroda Kiyotaka, the chief of the Hokkaido Development Commissioner in 1872 but was not adopted). The designs exhibited included bird's eye-views from the early Meiji era and works by Kuriyagawa Kenichi, a pioneer of graphic design in the early Showa era, as well as numerous designs created for the Sapporo Olympics and graphic designs created by designers based in Sapporo since the 1980s.

関連イベント

9/19(火)
札幌デザイン開拓使
無料デー

[P91](#)

火ノ刺繍 —「石狩シート」の先へ

Fire Embroidery —Beyond Ishikari Sheets

会場 | Venue

北海道大学総合博物館
札幌市北区北10条西8丁目

Hokkaido University Museum

Kita 10-jo Nishi 8-chome, Kita-ku, Sapporo

参加作家・作品 | Artist, Works

吉増剛造
《石狩の時間の皺皺皺皺...》2017、
《火ノ刺繍》2017 ほか

Yoshimasu Gozo,
Pli, pli, pli, pli, ..., of the time of Ishikari, 2017 /
Fire Embroidery, 2017, etc.



日本の現代詩の最先端を切り開いて来た詩人、吉増剛造。代表作、「石狩シート」をモチーフに、声と文字のはざまに詩を発現させるその芸術の核心に迫る展覧会。ひとつの詩が生み出される過程を、草稿や日記、旅の記録、ギャラリー「テンポラリースペース」を中心とする札幌の人々との交流の軌跡など過去の資料によってたどりつ、詩人の現在の営みまでを展示として構成。詩という領域への挑戦、エロティシズム、戦後日本の近代の終焉など複数の主題が織りあわされた「石狩シート」のヴィジョンを空間として展開しました。

An exhibition featuring *Ishikari Sheets*, the major work of Yoshimasu Gozo, a pioneer of cutting-edge contemporary poetry in Japan. This exhibition introduced his world of poetry emerging in between voice and letters. The process with which a poem is created and the artist's previous activities were introduced with materials including drafts, diaries, travel reports and records of exchanges with Sapporo residents in Temporary Space (a gallery) and other places. The exhibition created a space representing the vision of *Ishikari Sheets*, which covers his challenge to the poetry to eroticism and the end of the modern age in postwar Japan.

関連イベント

9/1(金)
パフォーマンス
吉増剛造×空間現代

[P84](#)

9/3(日)
パフォーマンス
吉増剛造×鈴木ヒラク

[P87](#)

クワクボリョウタ

Kuwakubo Ryota

会場 | Venue

札幌市円山動物園
西門イベントハウス [旧・魔境の伝説]
札幌市中央区宮ヶ丘3-1

Event House at the west gate of
Sapporo Maruyama Zoo
Miyagaoka 3-1, Chuo-ku, Sapporo

作品 | Work

《LOST#16》2017
LOST #16, 2017



クワクボリョウタは、2010年から発表している《LOST》シリーズで、鑑賞者自身が内面で体験を紡ぎ出すような作品に着手しています。本作では大正・昭和の世に行政や鉄道会社に依頼され日本中の「鳥瞰図」を作成した吉田初三郎の仕事を参照。初三郎の姿と、芸術祭に参加するアーティストである自身を重ね合わせながら、主催者や動物園の関係者と対話を行いました。制作にあたり札幌の郊外へも足をのばし、北海道の風景をリサーチ。作品内に配置された小さな家々の屋根には、雪国特有の形が反映されました。また、市内のさまざまな場所で収集したオブジェも数多く作品内に登場。大人から子どもまで、幅広い来場者が作品に触れる機会となりました。

Kuwakubo's *Lost* series, which he began in 2010, reminds the viewer of his/her own inner experiences. This time, he was inspired by the work of Yoshida Hatsusaburo, who created bird's eye views of places all over Japan at the request of the government or railway companies in the Taisho and Showa eras. While equating Hatsusaburo with himself as an artist participating in this festival, he talked with the organizer and people involved with Maruyama Zoo. Before production, he also visited the suburbs of Sapporo to research the scenery of Hokkaido. The shape of roofs unique to snowy regions was reflected in the roofs of small houses placed in his work. Many of the objects collected around the city were also used in his work. This project presented an opportunity for visitors of all ages to enjoy his work.

関連イベント

8/5(土) [P70](#)
「DOMMUNE SAPPORO!」
DAY1
10/1(日) [P97](#)
アーティスト・トーク

コタンペッププロジェクト

Kotan-pet Project

会場 | Venue

円山公園 札幌市中央区宮ヶ丘
Maruyama Park
Miyagaoka, Chuo-ku, Sapporo

参加作家 | Artist

五十嵐 淳
Igarashi Jun



円山の環境、歴史、文化のさまざまな結びつきをひもとき、急速な都市化の中で、見えなくなってしまった物事を再発見するプロジェクト。都市と自然が近接する円山は、かつてアイヌ語でコタン(村)ペツ(川)と呼ばれていました。このプロジェクトでは、円山公園に、未来を思考し、円山をまるごと体験する創造的なコタン(村)が出現。来場者自身が「大風呂敷テント」を借りて、「クチャ*」をモチーフとした居場所をしつらえることにより、常に風景が変化するコタンが形成されました。

* アイヌが猟期に使う仮小屋

A project planned to uncover the environment, history and culture of Maruyama and rediscover things that have become lost and invisible amid rapid urbanization. Maruyama, where the urban area and nature are close to each other, was called kotan-pet (kotan = village, pet = river) in Ainu. In this project, a creative kotan that allowed visitors to think of the future and experience multiple aspects of the Maruyama area appeared. An ever-changing kotan was formed by visitors who borrowed O-furoshiki tents and set up places to stay like kucha.*

* Temporary shed used by the Ainu during the hunting period

関連イベント

8/6(日) ひろがれコタンワークショップ #01 [P73](#)
めちゃクチャ OPENING
8/12(土) 五十嵐淳、上遠野敏、マユンキキと歩く [P75](#)
コタンペツ再発見ツアー
8/20(日) 見えないものを見てみよう! [P80](#)
コタンペツちゃクチャパーチャルツアー
9/10(日) ひろがれコタンワークショップ #02 [P88](#)
森で食べる・話す・唄う
10/1(日) ひろがれコタンワークショップ #03 [P97](#)
さいごめちゃクチャ CLOSING

石川直樹展
「New Map for North」
Ishikawa Naoki Exhibition
– New Map for North

会場 | Venue

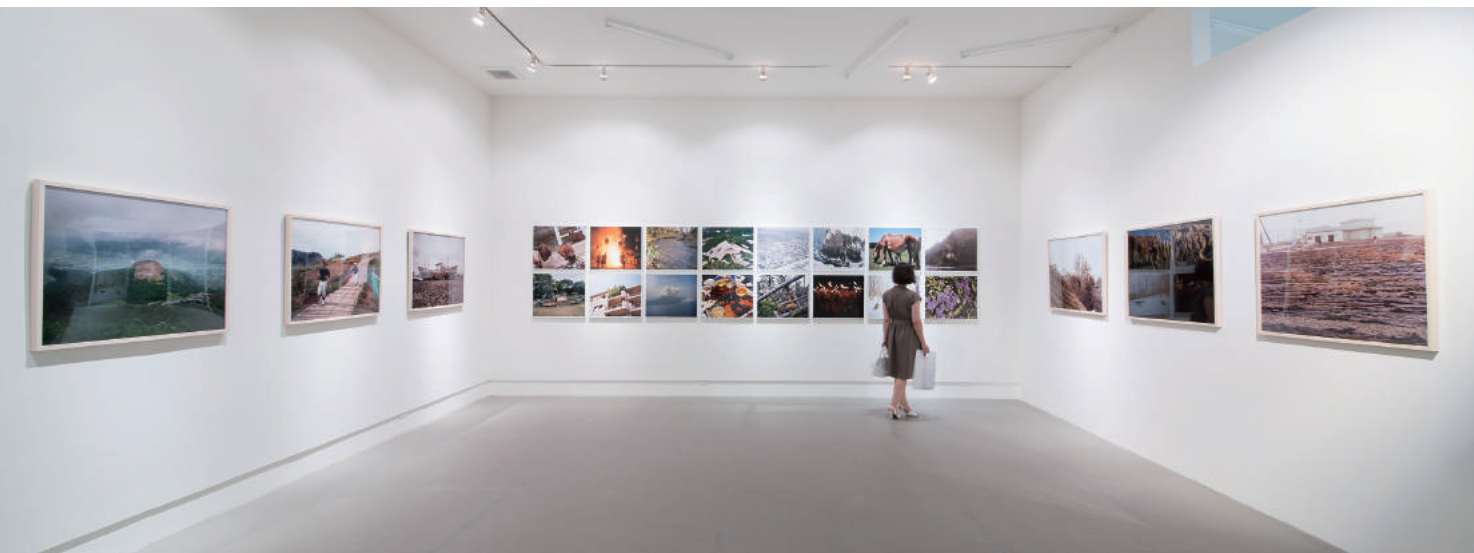
札幌宮の森美術館
札幌市中央区宮の森2条11丁目2-1

Miyanomori International
Museum of Art, Sapporo
Miyanomori 2-jo 11-2-1, Chuo-ku, Sapporo

参加作家・作品 | Artists, Works

石川 直樹《サハリン・北海道》、
《知床・道東》、《白老・登別》
アヨロラボラトリー 《白老・登別》
Ishikawa Naoki
Sakhalin / Hokkaido, Shiretoko /
Doto, Shiraoi / Noboribetsu

Ayoro Laboratory
Shiraoi / Noboribetsu



石川直樹が2001年から15年以上にわたる北海道の旅より、知床半島や網走などの道東地方、白老・登別を中心とした胆振地方、サハリン島などの北方地域で撮影した写真群を展示。また、白老・登別のパートでは2016年より複数回にわたって石川が参加してきた、アイヌ民族博物館の立石信一と彫刻家の国松希根太によるプロジェクト「アヨロラボラトリー」との共同企画として、同地を拠点に彼らが行ってきたフィールドワークの成果を、写真、彫刻、テキストなどでたどりました。

An exhibition of photographs taken by Ishikawa Naoki, who has traveled extensively around Hokkaido since 2001, visiting places such as the Shiretoko Peninsula, Abashiri, and other areas in Eastern Hokkaido; Shiraoi, Noboribetsu, and other parts of the Iburi area; and the island of Sakhalin and other northern islands. Ishikawa has collaborated with Ayoro Laboratory, a unit comprised of Tateishi Shinichi of the Ainu Museum and sculptor Kunimatsu Kineta, since 2016 to conduct on-site activities several times in Shiraoi and Noboribetsu. The results of their field work were shown using photographs, sculptures and text.

関連イベント

8/18(金) [P78](#)
トークイベント
石川直樹×アヨロラボラトリー

ゲストハウス×ギャラリープロジェクト
Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

Guest House × Gallery Project
Sapporo ARTrip–Art is the Opening to a Journey

近年、新しい旅の拠点としてその存在が注目されているゲストハウスを会場に、「旅」をテーマにした展覧会を開催しました。札幌市内4カ所のギャラリーと市内8カ所のゲストハウスが参加。ギャラリーが選んだ北海道を拠点に活躍する10組のアーティストが、ゲストハウスの空間に作品を設置。アーティストとゲストハウスが持っている個性が相乗効果を生み、より魅力的な場がつけられました。

In recent years, guest houses have been attracting attention as new bases for travel. Using such guest houses as venues, exhibitions were held with the theme of travel. Four galleries and eight guest houses in the city participated in this project, and 10 groups of Hokkaido-based artists selected by the galleries exhibited works in the guest houses. The individual characteristics of the artists and those of the guest houses created synergy, making the guest houses more attractive spaces.

会場・参加アーティスト

- **UNTAPPED HOSTEL** 札幌市北区北18条西4丁目1-8
上ノ 大作「ハタゴ(旅籠)」
ワビスabi「METALOOKS」
相川 みつぐ「UNBEATEN-N18W5」
- **WAYA** 札幌市豊平区豊平2条4丁目1-43
鈴木 悠哉「archegraph_study」
- **雪結(yuyu)** 札幌市中央区南3条東4丁目3-13
酒井 広司「胆振線 19792017」
南 阿沙美「ハトに餌をやらないでください」
※南阿沙美 展示期間:8月6日～9月3日
- **Ten to Ten Hokkaido Hostel & Kitchen 中島公園**
札幌市中央区南8条西5丁目288-5
富士 翔太郎「きこえるまち」
- **SappoLodge** 札幌市中央区南5条東1丁目1-4
白濱 雅也「熊の神」
- **THE STAY SAPPORO** 札幌市中央区南5条西9丁目1008-10
斉藤 幹男「選ばれた魚」
- **めざましサンド店** 札幌市中央区南4条東3丁目9-1 ハイツ昭和1階
相川 みつぐ「季節は巡る」
- **札幌ゲストハウスやすべえ/ 河合珈琲**
札幌市中央区南10条西7丁目6-6
東方 悠平「野生」
※展示期間:8月6日～17日

Venues, Artists

- **UNTAPPED HOSTEL** Kita 18-jo Nishi 4-1-8, Kita-ku, Sapporo
Ueno Daisaku *HATAGO (An old time inn)*
Wabisabi *METALOOKS*
Aikawa Mitsugu *UNBEATEN-N18W5*
- **WAYA** Toyohira 2-jo 4-1-43, Toyohira-ku, Sapporo
Suzuki Yuya *archegraph_study*
- **Yuyu** Minami 3-jo Higashi 4-3-13, Chuo-ku, Sapporo
Sakai Koji *The Iburi Line 19792017*
Minami Asami *Don't feed the pigeons*
*Minami Asami exhibition period: August 6, 2017– September 3, 2017
- **Ten to Ten Hokkaido Hostel & Kitchen Nakajima-koen**
Minami 8-jo Nishi 5-288-5, Chuo-ku, Sapporo
Fuji Shotaro *"Reverberating echoes" Hometown*
- **SappoLodge** Minami 5-jo Higashi 1-1-4, Chuo-ku, Sapporo
Shirahama Masaya *The God of Bears*
- **THE STAY SAPPORO** Minami 5-jo Nishi 9-1008-10, Chuo-ku, Sapporo
Saito Mikio *The Fish*
- **Mezamashi Sandwich**
Heights Showa 1F, Minami 4-jo Higashi 3-9-1, Chuo-ku, Sapporo
Aikawa Mitsugu *The seasons revolve*
- **Guest HouseYasube / Kawai Coffee**
Minami 10-jo Nishi 7-6-6, Chuo-ku, Sapporo
Higashikata Yuhei *Wild*
*Exhibition period: August 6, 2017– August 17, 2017



雪結 (yuyu)



THE STAY SAPPORO

市電プロジェクト ～都市と市電

Streetcar Projects – City and Streetcar

早くから開拓が進められた市電エリア＝旧山鼻村の歴史や営みに注目し、「市電(路面電車)」に新たな役割・表情を持たせることで、エリア特有の魅力や可能性を引き出すプロジェクト。アーティストと市民が共同で、さまざまな企画に取り組んできました。今後は、このプロジェクトで見出したさまざまな情報やプロセスをアーカイブし、未来の札幌の創造活動につなげていきます。

Projects to highlight the appeal and possibilities of the streetcar area (the former Yamahana Village and area developed from earlier times) by focusing on its history and past undertakings and giving a new role and expression to the streetcar. Artists and local residents worked together on various projects. The findings and process found in these projects are scheduled to be archived, leading to even more creative activities in Sapporo in the future.



ラッピング電車 SIAF 号 / SIAF the Sapporo Streetcar – ad-covered streetcar

・ラッピング電車 SIAF 号

SIAF the Sapporo Streetcar – ad-covered streetcar

SIAF デザインプロジェクトとの連携企画として、札幌市中央区の小学生 5、6年生とワークショップを通じてラッピング電車 SIAF 号のデザイン(設計図)を考案しました。その図案をもとにラッピングされた SIAF 号は、期間中毎日どこかの時間に出動。通常運行のほか、市電プロジェクトの各コンテンツの会場としても活用されました。

As a collaborative project with the SIAF Design Project, workshops with fifth- and sixth-year students of elementary school who live in Chuo-ku, Sapporo was held to design an ad-covered streetcar. The SIAF-go ad-covered streetcar created based on the children's design ran every day during the festival, and was also used as a venue for programs of the Streetcar Projects.

4/23(日)	市電 SIAF 号の設計図をつくろう! ①
5/13(土)・14(日)	市電 SIAF 号の設計図をつくろう! ②
7/17(月・祝)	ラッピング電車完成お披露目会

・市電放送局 JOSIAF

JOSIAF – Broadcasting station on the tram

札幌市電の貸切車両をラジオのスタジオとして活用し、市電の成り立ちや周辺の歴史などにスポットを当て、さまざまなゲストと番組を製作・配信する連続企画。観客を乗せての公開収録を行ったほか、放送終了後はアーカイブとして番組をネット配信しました。

In this project, a streetcar was used as a radio station and a series of programs were produced with guests discussing the beginning of the streetcar, history of the streetcar area and other matters. Passengers could enjoy viewing public recordings while taking the streetcar, and after the live radio broadcast was over, programs were archived and broadcast through the Internet.

8/6(日)	都市と市電と札幌人	P73
8/18(金)	都市と市電とアーティスト	P78
9/8(金)	都市と市電と研究者	P88
9/20(水)	JOSIAF × JOFU – FM AIR-G' hello! HOKKS	P91
10/1(日)	1周目 : Time Loop Tram 99 / 2周目 : Next Loop!	P97

・指輪ホテル「Rest In Peace, Sapporo

～ひかりの街をはしる星屑～

Rest In Peace, Sapporo

– Scattering ashes throughout the sparkling city

アーティスト「指輪ホテル(芸術監督:羊屋白玉)」が、市電やその周辺地域を舞台に新作となる演劇を市民とともに制作し、公演しました。制作にあたっては、パフォーマンスや、美術や衣装の作成、映像撮影などに市民が参加。市電周辺エリアならではの風景、人、物、出来事に注目し、時には市電の車内で、時には車窓からの風景の中で、それらの要素を指輪ホテル独自の観点で演出に盛り込んだ演劇が創作されました。

Yubiwa Hotel (artistic director: Hitsujiya Shirotama) collaborated with local residents to produce and perform a new theatrical play set along the streetcar route and its surrounding area. Residents were involved in production in various ways; they performed in the play, created stage art and costumes, and took footage. Focusing on scenery, people, things, and events unique to the streetcar area, Yubiwa Hotel incorporated these elements to create a play set in or viewed from a streetcar.

参加作家:指輪ホテル

会場:札幌市電車内、山鼻郵便局、セイコーマート山鼻店、黒田邸、4丁目プラザビル、第2三谷ビル

公演日:2017年9月23日(土・祝)、24日(日)

※リサーチ期間:2017年1月～5月

※説明会:2017年3月24日(金)、3月26日(日)、3月28日(火)、5月27日(土)

※稽古期間:2017年5月～9月

・ノイズ電車 SAPPORO 2017

NOISE TRAM SAPPORO 2017

複数のミュージシャンが市電に乗りこみ、観客の目の前でノイズミュージックを演奏する、計5回の連続企画。ライブ空間へと変容した市電が夜の札幌を周回しました。

In this project, a total of five live performances took place where several musicians got on streetcars and performed noise music in front of an audience. These streetcars transformed into a live performance space, running through Sapporo at night.

8/11(金・祝)	中村 としまる×高橋 幾郎	P73
8/25(金)	大城 真×ハットコベ	P81
9/1(金)	DJ方×MC MANGO	P84
9/15(金)	YPY×テンテンコ	P90
9/29(金)	大友 良英×湿った犬	P95



市電放送局 JOSIAF
JOSIAF – Broadcasting station on the tram



ノイズ電車 SAPPORO 2017
NOISE TRAM SAPPORO 2017

「OPEN GATE の部屋」

OPEN GATE archive room

動き続けた展覧会、動き続ける記録たち

～The ever-changing archives of Asian Sounds Research

OPEN GATE2017関連企画として、Asian Sounds Research プロジェクトの3年間の記録映像や写真を公開するアーカイブ展を開催しました。また、OPEN GATE 2017終了後には、当日の記録やそこで生み出された作品を追加し、展覧会を更新しました。

映像:樋口 勇輝

写真:渡部 勇介、WinWin、松本 美枝子

作品:米子 匡司、水内 義人、chi too、Adam Kitingan

キュレーション:Sachiko M

This retrospective exhibition looking back on the three-year activities of the Asian Sounds Research project with documentary videos and photographs was held as a related project of OPEN GATE 2017. The exhibition was updated after OPEN GATE 2017, with its records and works.

展示期間:9月6日(水)–10月1日(日)

カフェスペースでの小さな展示 8月6日(日)–10月1日(日)

Wed., Sep. 6 – Sun., Oct. 1

a small exhibition at the cafe space Sun., Aug. 6 – Sun., Oct. 1

会場 | Venue

TOOV cafe/gallery

札幌市中央区南9条西3丁目2-1 マジソンハイツ1階

TOOV cafe/gallery

Madison Heights 1F, Minami 9-jo Nishi 3-2-1, Chuo-ku, Sapporo



撮影:渡部 勇介

北海道立三岸好太郎美術館開館50周年記念 特別展

大友良英アーカイブ お月さままで飛んでいく音＋ 三岸好太郎ワークス 飛び出す事ハ自由ダ

Special Exhibition in Commemoration of the 50th Anniversary
of the Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido

Otomo Yoshihide: *Sound that Flies to the Moon*＋
Migishi Kotaro: *You Are Free to Fly*

会場 | Venue

mima 北海道立三岸好太郎美術館
札幌市中央区北2条西15丁目

Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido
Kita 2-jo Nishi 15-chome, Chuo-ku, Sapporo

参加作家・作品 | Artists, Works

- ① 大友 良英《自作真空管アンプ》《Waltz for Clown》ほか
Otomo Yoshihide *Handmade tube amplifier, Waltz for Clown, etc.*
- ② 三岸 好太郎《道化役者》《オーケストラ》ほか
Migishi Kotaro *Clown, Orchestra, etc.*



大友良英と三岸好太郎の共演による展覧会。一つめのセクションでは、音楽家・大友良英が紡ぎだす表現世界のルーツや、「アンサンブルズ」という思考と結び合う多彩な活動の有り様を、本や写真、譜面などの資料を中心に、彼の手描き解説とともにたどりました。二つめのセクションでは、画家・三岸好太郎が生来のロマンティシズムとともに、わずか10年余りの間、目まぐるしく展開した絵画世界を紹介。ともにジャンルや枠組みを飛び越えて、それぞれの表現をひらいてきた大友と三岸。二人の軌跡が吹き抜けの空間にクロスする展覧会となりました。

A joint exhibition by Otomo Yoshihide and Migishi Kotaro. In the first section, the roots of the expressionistic world of musician Otomo Yoshihide and a diverse range of activities connected to the concept of "ensembles" were introduced through materials including books, photographs and musical scores with his hand-written wall texts. In the second section, the world of painter Migishi Kotaro was introduced; his style was originally romanticism but he then moved through a succession of other styles over the course of his short career. Both Otomo and Migishi opened up their own expressions that transcend categorization. It was an exhibition in which the trajectories of these two artists cross in the same space of the museum.

関連イベント

9/2(土)	P84
オープニングトーク	
9/8(金)	P88
大友良英スペシャルライブ	
9/16(土)	P91
土曜セミナー	
9/21(木)	P91
ドキュメンタリー映画 『KIKOE』上映会	

SIAF2017 Official Bar

「出会い」at OYOYO DE-A-I at OYOYO

会場 | Venue

OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
札幌市中央区南1条西6丁目8-1 第2三谷ビル6階

OYOYO Machi×Art Center Sapporo
6F Daini Mitani Bldg., Minami 1-jo Nishi 6-chome, Chuo-ku, Sapporo

2008年にオープンして以来、2017年12月に閉館するまで、札幌市民が多様なイベントを開催できる場として長く愛された「OYOYO まち×アートセンターさっぽろ」(OYOYO)。SIAF2017ではインフォメーションセンターを設置したほか、SIAFに来た方や参加アーティスト、スタッフ関係者などが来場する交流カフェバー『SIAF2017 オフィシャルバー「出会い」at OYOYO』を会期中オープン。参加アーティストによるアフタートークをはじめとした関連企画を行うイベントスペースを併設し、夜の時間帯に、より深くSIAF2017を楽しめる、新たな出会いと発見にあふれた場となりました。

From its opening in 2008 to the closure in December 2017, OYOYO Machi×Art Center Sapporo (OYOYO) was popular with Sapporo residents as an eclectic event space. In SIAF2017, an information center was established here with SIAF2017 Official Bar De-A-I, a café bar that allowed interaction among visitors, participating artists and staff. An event space for after-performance talks by artists and related projects was also established, making OYOYO a place full of new encounters and discoveries at night.



2

プログラム
Programs

8/5
土 | Sat.



SIAF2017前夜祭 「さっぽろ八月祭2017」

会場：札幌市北3条広場（アカプラ）

SIAF2014のプログラム「フェスティバル FUKUSHIMA! 北3条広場で盆踊り」を契機に例年開催されている「さっぽろ八月祭」。8月4日（金）・5日（土）の開催となったこのイベントの2日目の5日をSIAF2017前夜祭と位置づけ、実施しました。大風呂敷を通常のアカプラだけでなく赤れんが庁舎（北海道庁旧本庁舎）まで広げ、その上をゲストディレクター大友良英の指揮のもと、多くの市民と共にパレードしました。パレードがアカプラに到着した後は、誰でも参加ができるオーケストラ SAPPORO! がスタート。大友ゲストディレクターだけではなく、実行委員会会長・札幌市長 秋元克広、クリスチャン・マークレーもオーケストラの指揮に参加しました。

Eve of SIAF2017: Sapporo August Festival Venue: Sapporo Kita 3-jo Plaza "AKAPLA"

Since the Festival Fukushima! Bon Dance at Kita 3-jo Plaza in SIAF2014, the Sapporo August Festival has been held every year. This year's August Festival was held on August 4 and 5. The second day was positioned as the eve of SIAF, and a special event was organized. Large furoshiki were spread not only in AKAPLA but also areas leading to the Former Hokkaido Government Office Building, and many local residents paraded on the large furoshiki under the direction of Guest Director Otomo. After the parade reached AKAPLA, the Orchestra Sapporo, in which anyone could participate, started to perform. Not only Otomo but also Executive Committee President/Sapporo Mayor Akimoto Katsuhiko and Christian Marclay conducted the orchestra.

8/5
土 | Sat.

「DOMMUNE SAPPORO!」 DAY1

会場：CAI02

アーティストインタビューの公開収録と21時からのライブイベントを札幌の特設会場から5回にわたり配信しました。

The artist interviews were recorded in front of an audience followed by live performances at 21:00, and they were streamed live from a special studio in Sapporo for 5 times.

DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS 「THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 / #035 クワクポリョウタ」

出演：クワクポリョウタ | 聞き手：畠中 実（ICC 主任学芸員）

「DOLIVE!」 DAY1

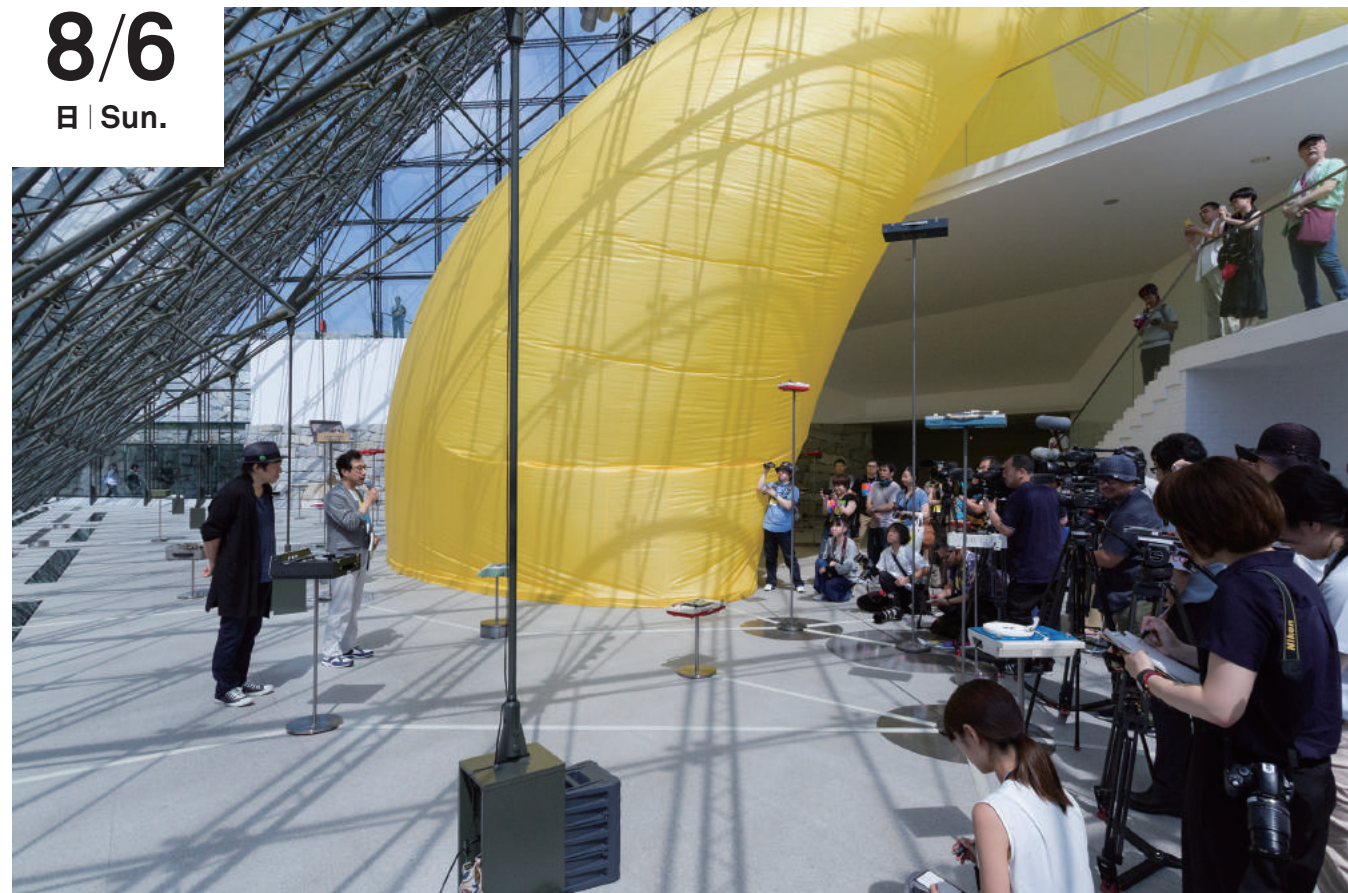
Asian Sounds Research / OPEN GATE 2017 "DOMMUNE JACK" SPECIAL!!

OPEN GATE から OPEN GATE 2017まで Asian Sounds Research Special Talk Session.

トーク：Sachiko M | 聞き手：畠中 実（ICC 主任学芸員）

ライブ：Sounds from OPEN GATE with Sachiko M ~
DOMMUNE JACK version

8/6
日 | Sun.



SIAF2017 オープニング

会場：モエレ沼公園

ゲストディレクター大友良英と実行委員会会長・札幌市長 秋元克広が開幕を宣言しました。モエレ沼公園会場の出展作家も参加しました。

SIAF2017 Opening Ceremony

Venue: Moerenuma Park

Committee President/Sapporo Mayor Akimoto Katsuhiko declared the opening of SIAF2017 in Moerenuma Park. The artists exhibiting their works in Moerenuma Park also participated in the ceremony.



8/6
日 | Sun.



クリスチャン・マークレー＋大友良英 「Found Objects」

会場：金市館ビル

クリスチャン・マークレーと大友良英によるオープニングライブ。1986年の初来札以来、公私に渡って交流を続けて来た二人が、札幌で拾ったガラクタ(found objects)を楽器に即興演奏を試みました。

Christian Marclay + Otomo Yoshihide: Found Objects

Venue: Kinichikan Bldg.

Christian Marclay and Otomo Yoshihide have known each other both professionally and personally since 1986 when Marclay visited Sapporo for the first time. They gave an impromptu performance with the found objects they picked up in Sapporo.

8/6 日 | Sun.

「DOMMUNE SAPPORO!」DAY2

会場：CAI02

DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS 「THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 / #036 さわひらき」

出演：さわ ひらき | 聞き手：上妻 世海（文筆家・キュレーター）

「DOLIVE!」DAY2

ライブ：テニスコーツ、MC MANGO、藤田 陽介

コタンベッププロジェクト

ひろがれコタンワークショップ #01 めちゃクチャOPENING

会場：円山公園 | 出演：山道 陽輪、堀江 純子（一般財団法人アイヌ民族博物館学芸課）、マユンキキ

市電放送局 JOSIAF 都市と市電と札幌人

会場：札幌市電 | ゲスト：和田 哲（街歩き研究家）、札幌 LRT の会

狸小路 TV オープニング放談「Viva! 札幌 Viva! 狸小路」

出演：中田 美知子、和田 由美、中島 洋

8/7 月 | Mon.

大漁居酒屋てっちゃん 店内ツアー

会場：大漁居酒屋てっちゃん ※以降、会期中、水・日を除く毎日開催

狸小路 TV 北海道のハロウィン「ローソクだーせ」中継

出演：札幌の子どもたち、テニスコーツ、福津 京子

8/8 火 | Tue.

狸小路 TV 狸小路商店街新役員座談会

出演：島口理事長、牧浦専務理事、松山常務理事、福津 京子

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

キャンプの為にテント制作ワークショップ

会場：札幌市資料館 2階 SIAF ラボミーティングルーム | 出演：SIAF ラボ

8/11 金・祝 | Fri.

トーク 北海道の三至宝：アートはこれを超えられるか！

会場：札幌市資料館 研修室

出演：三松 三朗（三松正夫記念館館長）、山里 稔（造形作家）、大谷 茂之（八雲町郷土資料館学芸員）、吉田 勲（住友赤平炭鉱職員）、井上 博登（赤平市教育委員会学芸員）
モデレーター：上遠野 敏



8/9 水 | Wed.

さっぽろコレクティブ・オーケストラ

公開ワークショップ 会場：札幌市立北九条小学校

梅田哲也《わからないものたち》

会場内ライブ

会場：金市館ビル | 出演：梅田 哲也、テニスコーツ、高橋 幾郎

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

キャンプの為にテント制作ワークショップ

会場：札幌市資料館 2階 SIAF ラボミーティングルーム | 出演：SIAF ラボ

8/10 木 | Thu.



さっぽろコレクティブ・オーケストラ

公開ワークショップ 会場：札幌市立北九条小学校

ノイズ電車関連企画

合格点

会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ

出演：中村 としまる、高島 連、高橋 幾郎 ほか

狸小路 TV 連続漫画ライブ

出演：いがらしゆみこ、札幌の漫画家たち、福津 京子

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

キャンプの為にテント制作ワークショップ

会場：札幌市資料館 2階 SIAF ラボミーティングルーム | 出演：SIAF ラボ

ノイズ電車 SAPPORO 2017

会場：札幌市電

出演：中村 としまる、高橋 幾郎

さっぽろコレクティブ・オーケストラ

公開ワークショップ

会場：札幌市立北九条小学校

アートとリサーチセンター

北海道美術史「1977-2017」フォーラム

会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ

モデレーター：吉崎 元章

登壇者：小室 治夫（杉山留美子基金代表 / JRタワー ARTBOX ディレクター）、佐藤 友哉

狸小路 TV

狸小路6丁目座談会

出演：新倉屋 斎藤会長、吉原 稿浩

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

キャンプの為にテント制作 ワークショップ

会場：札幌市資料館 2階

SIAF ラボミーティングルーム

出演：SIAF ラボ

テラコヤーツセンター「土砂」

みんなで音楽劇をつくろう

会場：札幌市資料館 1階刑事法廷展示室

出演：テニスコーツ、山田 真歩（女優）

8/11
金・祝 | Fri.



鈴木昭男・宮北裕美パフォーマンス 「きいてる みる」

会場：札幌芸術の森美術館・野外美術館
出演：鈴木 昭男、宮北 裕美



8/12
土 | Sat.



コタンベツプロジェクト

五十嵐淳、上遠野敏、マユンキキと歩くコタンベツ再発見ツアー

会場：円山公園 | 出演：五十嵐 淳、上遠野 敏、マユンキキ

アートとリサーチセンター

アーティストが見た北海道・札幌プログラム01 音威子府ツアー・阿児つばさ

会場：音威子府村内各所 | 企画・ガイド：阿児 つばさ

狸小路TV

アートマネジメントってなんだ1

出演：小山 冴子、中島 洋

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

裏庭ミーティング vol.3

「CAMP / キャンプ」の整備について考えてみる

会場：札幌市資料館 2階 SIAF ラボミーティングルーム

テラコヤーツセンター「土砂」

みんなで音楽劇をつくろう

会場：札幌市資料館 1階刑事法廷展示室

出演：テニス Courts、山田 真歩(女優)

8/13
日 | Sun.



テラコヤーツセンター「土砂」

「みんなで音楽劇をつくろう」発表会

会場：札幌市資料館 1階刑事法廷展示室

出演：テニス Courts、山田 真歩(女優)

アートとリサーチセンター

アーティストが見た北海道・札幌プログラム01 音威子府ツアー・阿児つばさ

会場：音威子府村内各所 | 企画・ガイド：阿児 つばさ

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

タノタイガ「開拓風呂入浴式」

会場：札幌市資料館裏庭 | 出演：タノタイガ



8/14
月 | Mon.



DJ 盆踊り in さっぽろ夏まつり

会場:大通公園 | 出演:岸野 雄一、珍盤亭娛樂師匠

地域住民が交差する場でDJイベントを出現させる活動を行ってきた岸野雄一が、大通公園で開催される札幌の夏の風物詩「さっぽろ夏まつり」の北海盆踊りの会場にDJブースを出現させ、新たな空間をつくりあげました。

DJ set at Bon Odori of Sapporo Summer Festival

Venue: Odori Park
Artists: Kishino Yuichi, Chinbantei Gorakushisyau

Kishino Yuichi, who has performed DJ events with local residents, set up a DJ booth in the venue of the Hokkai Bon Dance in the Sapporo Summer Festival, a summer feature of Sapporo, to create a fresh atmosphere in it.

8/14 月 | Mon.

狸小路TV

今はなき忘れられた懐かしい北海道ローカルTVCM特集1
出演:早川 渉

8/15 火 | Tue.



モバイルアースオープン 夏休み緊急企画!!

アースオープンで夏祭り in 旭山ベース

会場:旭山記念公園「森の家」

リタイアした消防車両に、札幌の土と藁と水をこねてつくった薪窯に乗せた移動式薪窯「モバイルアースオープン号」が、会期中さまざまな会場に登場。それぞれが持ち寄った食材を焼いて楽しめました。

Mobile Earth Oven Venue: Asahiyama Memorial Park, etc.

Mobile Earth Oven, a retired fire truck loaded with an oven made of earth, straw and water from Sapporo, appeared at various venues during SIAF2017. Local residents could bring ingredients and cook them with the oven.

狸小路TV

今はなき忘れられた懐かしい北海道ローカルTVCM特集2
出演:早川 渉

8/17 木 | Thu.

さっぽろコレクティブ・オーケストラ

ワークショップ

会場:札幌コンサートホールKitara 大リハーサル室

トーク 祭りってなんだ?

会場:OYOYO×まちアートセンターさっぽろ
出演:三上 敏視(音楽家、神楽・伝承音楽研究家、多摩美術大学美術学部非常勤講師)

狸小路TV テレビでラジオ〜ドラマの世界1

出演:劇団 fireworks、木原くみこ

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

「裏泊」で泊まってみる 会場:札幌市資料館裏庭

8/16 水 | Wed.

特別協力プログラム

マームとジプシー 10th Anniversary Tour 〈札幌公演〉

会場:札幌市教育文化会館

日本の現代演劇をリードする劇作家・演出家の藤田貴大率いるマームとジプシーが、結成10周年の節目の年に、満を持して札幌に初登場。8月16日(水)、19日(土)、20日(日)の3日間、上演形式にも工夫をこらした画期的な公演が実現しました。

Special Cooperative Program Mum & Gypsy – The 10th Anniversary Tour (Sapporo Performance)

Venue: Sapporo Education and Culture Hall

Mum & Gypsy, a theater company led by Fujita Takahiro (a leading dramatist and stage director in Japan), appeared for the first time in Sapporo in 2017, the 10th anniversary of the company. The epoch-making performance was staged in a unique style on August 16 (Wed.), 19 (Sat.) and 20 (Sun.).



撮影:井上 佐由紀



8/18
金 | Fri.

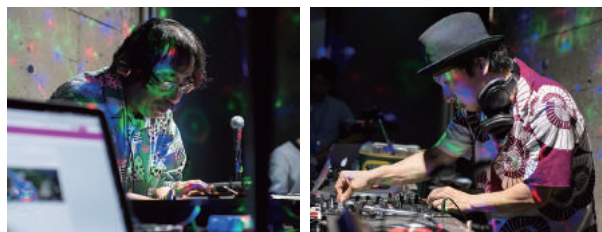


梅田哲也ライブパフォーマンス 「わからないものたち その2」

会場：金市館ビル
出演：梅田 哲也、高橋 幾郎、リチャード・ホーナー、
湿った犬、高島 連、深澤 優子、平尾 拓也、石川 ひなの、
宮出 実希、阿児 つばさ、MC MANGO



8/18 金 | Fri.



「DOMMUNE SAPPORO!」 DAY3

会場：CAI02
DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS
「THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS
season 5 / #037 大友良英」
出演：大友 良英 | 聞き手：宇川 直宏
「DOLIVE!」 DAY3 DJライブ：岸野 雄一、珍盤亭娛樂師匠

サウンド オン サイレント ～テニス Courts、細馬宏通 in シアターキノ

会場：シアターキノ
出演：テニス Courts、細馬 宏通

トーク
石川直樹×アヨロラボラトリー
会場：札幌宮の森美術館特設会場
出演：石川 直樹、アヨロラボラトリー

市電放送局 JOSIAF
都市と市電とアーティスト
会場：札幌市電
ゲスト：岸野 雄一、祭の妖精 祭太郎

CAMP SITE PROJECT「裏庭」
「裏泊」で泊ってみる
会場：札幌市資料館裏庭

ざっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ

会場：札幌コンサートホール Kitara
大リハーサル室

狸小路TV
狸小路でボンバーマン
出演：ナカムラココロ、札幌のゲームクリ
エーター、福津 京子 ほか



8/19
土 | Sat.



妖怪フィギュア・アートシアター 中島公園百物語

会場：札幌市こども人形劇場こぐま座前の広場
(札幌市中央区中島公園)



中島公園百物語 妖怪パレード
会場：札幌市北3条広場、狸小路商店街、中島公園

かつて中島公園で起きた出来事やエピソード、施設、人物などを妖怪として蘇らせる
パフォーマンス。子どもたちがデザインした妖怪を人形劇作家の沢則行がつくりあげ、
劇作家・演出家の斎藤歩が物語を紡ぎあげました。北海道演劇財団「札幌座」と札
幌市こども人形劇場「こぐま座」のスタッフたちも妖怪となって、まちなかでのパレー
ドや、過去と現在が交差する中島公園で妖怪パフォーマンスが繰り広げられました。

Nakajima Park Ghost Stories

Venue: Open space in front of Sapporo Children's Puppet Theater "Kogumaza"
Artists: Saito Ayumu, Sawa Noriyuki

Past events, episodes, facilities and people associated with Nakajima Park were
revived as specters. Puppet show writer Sawa Noriyuki created specters based on
children's designs, and dramatist and stage director Saito Ayumu created a spec-
ter story. Staff members of Sapporoza (Hokkaido Performing Arts Foundation) and
Sapporo Children's Puppet Theater "Kogumaza" were disguised as specters and
performed at Nakajima Park.

8/19 土 | Sat.



モバイルアースオープン

アースオープン×バーカバッション in 北大マルシェ

会場：北大マルシェ(北海道大学農学部前)
出演：ひがし町バーカバッションアンサンブル

「DOMMUNE SAPPORO!」 DAY4
DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS「THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 / #038 中ザワヒデキ」

会場：CAI02 | 出演・講演：中ザワヒデキ
聞き手：上妻 世海(文筆家、キュレーター)

マームとジブシー
10th Anniversary Tour〈札幌公演〉
会場：札幌市教育文化会館

さっぽろコレクティブ・オーケストラ

ワークショップ
会場：札幌コンサートホール Kitara
大リハーサル室

Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

富士翔太郎「プラネタリウム点灯式ライブ」

会場：Ten to Ten Hokkaido Hostel & Kitchen 中島公園
出演：富士 翔太郎

テラコヤーツセンター「土砂」

裏庭カレーフェス
会場：札幌市資料館裏庭
出演：インド富士、ヤーマンカレー、小磯さん、テニス Courts

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

「裏泊」で泊まっている
会場：札幌市資料館裏庭

8/20 日 | Sun.



狸小路TV

根源的なTV表現を再発見する
～60年代・70年代の今野勉のTV表現から、創造とは何かを問い直す～

会場：札幌プラザ2・5
出演：今野 勉、後藤 一也(北海道文化放送制作部副部長・プロデューサー)、松井 茂(情報科学芸術大学院大学[IAMAS]准教授)

梅田哲也《わからないものたち》

会場内ライブ
会場：金市館ビル | 出演：湿った犬

コタンベッププロジェクト

見えないものを見てみよう!
コタンベツちゃクチャパーチャルツアー

会場：円山公園
出演：谷本 晃久(北海道大学 文学研究科 日本史学講座 アイヌ・先住民研究センター准教授)

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

タノタイガ「ラーメンが食べたい」
会場：札幌市資料館裏庭 | 出演：タノタイガ

8/21 月 | Mon.

狸小路TV

上映+トーク 北海道の視点を探索する

会場：OYOYO×まちアートセンターさっぽろ
出演：今野 勉、青木 隆夫(夕張地域史研究資料調査室室長)

8/22 火 | Tue.



ARTSAT×SIAFラボ
気球打ち上げとテレコーディングパフォーマンス

会場：モエレ沼公園

狸小路TV

ラ・テ期草創期 てんやわんやのナマ放送現場

出演：石橋 雄哉(元STV社長)、木原 くみこ

テラコヤーツセンター「土砂」

「リュウガ君のタップダンス LOVE」
ワークショップ

会場：札幌市資料館 2階 テラコヤーツセンター「土砂」
講師：リュウガ君

8/23 水 | Wed.

狸小路TV

上映+トーク「TVはどうなる?」シリーズ1

会場：OYOYO×まちアートセンターさっぽろ
出演：海野 祐至(北海道テレビ放送社会情報部副部長)、平尾 由佳子(北海道テレビ放送プロデューサー)ほか

テラコヤーツセンター「土砂」

ざやえんどう with テニス Courts 楽団しよう

会場：札幌市資料館 2階 テラコヤーツセンター「土砂」
出演：ざやえんどう

8/23 水 | Wed.



raprap

会場：扇谷記念スタジオ・シアター ZOO
出演：マレウレウ、チョン・ヨンドゥ、東海林 靖志、渡辺 はるか、有泉 汐織、菊澤 好紀

異なる身体・声・リズム、そして文化を持つクリエイターたちが出会い、そこから生まれた北海道発コンテンポラリーダンス。

raprap

Venue: Ougiya Memorial Studio Theater Zoo
Artists: MAREWREW, Jung Young Doo, Shoji Yasushi, Watanabe Haruka, Ariizumi Shiori, Kikuzawa Yoshinori

Creators with different bodies, voices, rhythms and cultures met each other and created this Hokkaido contemporary dance.



撮影：高橋 克己

8/24 木 | Thu.

トーク

コレクティブ・オーケストラは
芸術祭の縮図である

会場：札幌市資料館 2階 プロジェクトルーム
出演：大友 良英、藤田 貴大、有馬 恵子

raprap

会場：扇谷記念スタジオ・シアター ZOO
出演：マレウレウ、チョン・ヨンドゥ、東海林 靖志、渡辺 はるか、有泉 汐織、菊澤 好紀

狸小路TV

狸小路から札幌へ、老舗宮文の
宮本隆一社長対談

出演：宮本 隆一、中田 美知子

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

「裏泊」で泊まっている

会場：札幌市資料館裏庭

テラコヤーツセンター「土砂」

ざやえんどう with テニス Courts 楽団しよう

会場：札幌市役所 1階ロビー、OYOYOまち×アートセンターさっぽろ
出演：ざやえんどう、大城 真



8/25 金 | Fri.

raprap

会場：扇谷記念スタジオ・シアター ZOO
出演：マレウレウ、チョン・ヨンドゥ、東海林 靖志、渡辺 はるか、有泉 汐織、菊澤 好紀

ノイズ電車 SAPPORO2017

会場：札幌市電 | 出演：大城 真、ハットコベ

テラコヤーツセンター「土砂」

ざやえんどう with テニス Courts 楽団しよう

会場：D&DEPARTMENT HOKKAIDO、OYOYOまち×アートセンターさっぽろ
出演：ざやえんどう

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

「裏泊」で泊まっている

会場：札幌市資料館裏庭

8/26

土 | Sat.



撮影：佐々木 育弥

After the Echo

会場：札幌市立大学 芸術の森キャンパス スカイウェイ
出演：カミーユ・ノルメント、坂本 龍一 | インスタレーション：毛利 悠子

Sound performance by Camille Norment and
Ryuichi Sakamoto in the installation by Yuko Mohri

Venue: Sapporo City University Geijutsu-no-mori Campus Skyway

8/26

土 | Sat.

raprap

会場：扇谷記念スタジオシアターZOO
出演：マレウレウ、チョン・ヨンドウ、東海林 靖志、渡辺 はるか、
有泉 汐織、菊澤 好紀

さっぽろコレクティブ・オーケストラ

ワークショップ・リハーサル

会場：札幌コンサートホール Kitara 大リハーサル室

テラコヤーツセンター「土砂」

ざやえんどう with テニススクーツ 楽団しよう

会場：円山公園、札幌市資料館 2階 テラコヤーツセンター「土砂」
出演：ざやえんどう

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

「裏泊」で泊まってみる

会場：札幌市資料館裏庭

8/27

日 | Sun.



さっぽろコレクティブ・オーケストラ

会場：札幌コンサートホール Kitara 大ホール

SIAF2017を機に小学生から18歳までの子どもたちを中心として結成されたオーケストラ。作曲家や指揮者が中心となるのではなく、年齢も経験も異なる参加者たちが、ワークショップを重ね一人ひとりの音を互いに尊重し、「今、ここ」で出会う他者との関係性の中から演奏をつくりあげていきました。公演当日は60名が参加。約800名の聴衆の前で演奏を行いました。

Sapporo Collective Orchestra

Venue: Sapporo Concert Hall "Kitara"

This orchestra was formed with elementary to high school students as its main members for SIAF2017. Neither the composer nor the conductor led the orchestra. Through a series of workshops, participants who were different in age and experience collaborated with others they met here while respecting each other's sound. A total of 60 children participated in the performance on the day and played in front of approximately 800 people at Sapporo Concert Hall "Kitara."

8/27 日 | Sun.



After the Echo Camille Norment Artist Talk

会場: OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
出演: カミュー・ノルメント | 司会: 毛利 悠子 | 通訳: 松本 知佳

梅田哲也《わからないものたち》

会場内ライブ

会場: 金市館ビル | 出演: 湿った犬

狸小路TV

狸小路クイズ王決定戦 アタック25チャンピオン すがわまさひろに挑戦!

出演: すがわまさひろ、福津 京子、クイズ回答者

8/28 月 | Mon.

テラコヤーツセンター「土砂」 テニス Courts@市立大学

会場: 札幌市立大学 芸術の森キャンパス スカイウェイ | 出演: テニス Courts

狸小路TV 加賀城匡貴のアートたんけんたい賞1

出演: 加賀城 匡貴

8/29 火 | Tue.

狸小路TV 上映+トーク「TVはどうなる?」シリーズ2

会場: OYOYO まち×アートセンターさっぽろ

出演: 吉岡 史幸(北海道文化放送経営企画室部長)、
後藤 一也(北海道文化放送制作部副部長・プロデューサー)

8/31 木 | Thu.

SIAFラボ 編集局 第3回 編集会議 -SIAF2017を編集する-

会場: 札幌市資料館サカナ通信編集室

狸小路TV テレビでラジオ〜ドラマの世界2

出演: 劇団 words of hearts、木原 くみこ

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

「裏泊」で泊まってみる 会場: 札幌市資料館裏庭

9/1 金 | Fri.



撮影: 鈴木 余位

パフォーマンス 吉増剛造×空間現代

会場: PROVO | 出演: 吉増 剛造、空間現代

ノイズ電車 SAPPORO 2017

会場: 札幌市電 | 出演: DJ 方、MC MANGO

テラコヤーツセンター「土砂」

ミセストライアングル in 資料館裏庭

会場: 札幌市資料館裏庭 | 出演: 水内 義人、和田 晋侍、テニス Courts

狸小路TV 上映+トーク「TVはどうなる?」シリーズ3

会場: OYOYO まち×アートセンターさっぽろ

出演: 山口 洋介(映像ディレクター)、山谷 博(札幌テレビ放送プロデューサー)

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

「裏泊」で泊まってみる 会場: 札幌市資料館裏庭

9/2 土 | Sat.

トーク 「大友良英アーカイブ+三岸好太郎ワークス」
オープニングトーク

会場: mima 北海道立三岸好太郎美術館 | 出演: 大友 良英

展覧会「大友良英アーカイブ お月さままで飛んでいく音+三岸好太郎ワークス 飛び出す事ハ自由ダ」の開幕を記念し、会場である mima 北海道立三岸好太郎美術館にて大友良英によるオープニングトークを行いました。

Opening talk for the joint exhibition by Otomo Yoshihide and Migishi Kotaro

Venue: Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido

Otomo Yoshihide gave an opening talk for the exhibition titled Otomo Yoshihide: *Sound that Flies to the Moon* + Migishi Kotaro: *You Are Free to Fly* at the Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido.



9/2 土 | Sat.



ひがし町パーカッションアンサンブル

パーカッション市電ライブ

会場: 札幌市電 | 出演: ひがし町パーカッションアンサンブル

スペシャルゲスト: 大友 良英、テニス Courts

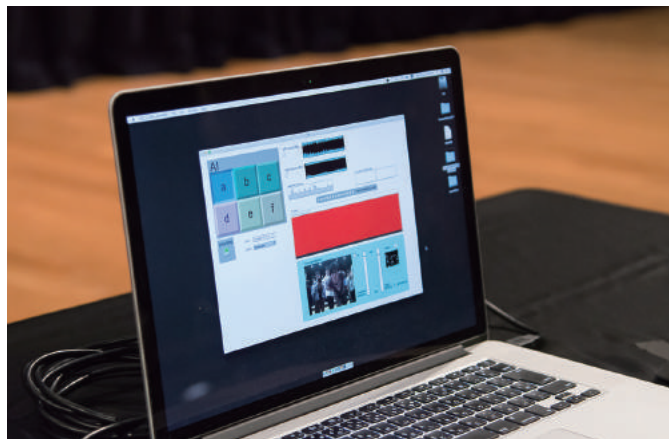
北海道・浦河町にある浦河ひがし町診療所へ通う、障がいのある方々を中心に結成された即興演奏グループ「ひがし町パーカッションアンサンブル」。会期中、さまざまな場所で、健常者も障がい者もなく、居合わせた人々と一緒に自由な音楽をつくりあげました。

I Have a Dream-Higashimachi Percupassion Ensemble

Venues: Sapporo Streetcar, etc.

Higashimachi Percupassion Ensemble is an improvisational performance group formed for people with disabilities who attend Urakawa Higashimachi Clinic in Urakawa, Hokkaido. During SIAF2017, they created free music in various places with the participation of anyone present.

9/2
土 | Sat.



刀根 康尚「AI Deviation」

会場：北翔大学北方圏学術情報センター「ポルト」 | 出演：Virtual Yasunao Tone (V.Y.T)

9/3
日 | Sun.



マレウレウ祭り in SIAF2017 ～目指せ100万人のウポポ大合唱～

会場：札幌芸術の森 野外ステージ
出演：マレウレウ、OKI、大友 良英、原田 郁子、鄭捷任、陳建年、陳世川、
蜜子舞賽、荻部絲

マレウレウが主体となり、ゲストにトンコリ奏者 OKIと原田郁子、
台湾から原住民族のアーティストを迎えて芸術の森野外ステージ
で音楽フェスを開催。大風呂敷が広げられた会場では、スペシャ
ルセッションが実現しました。

MAREWREW Festival in SIAF2017 ～ Upopo for the Masses ～

Venue: Outdoor Stage, Sapporo Art Park
Artists: MAREWREW, OKI, Otomo Yoshihide, Harada Ikuko,
Cheng Jye Renn, Cheng Chien-Nien, Gelresai, Mic Usay, Tipus Chen

This music festival with MAREWREW as the leading performer was
held at the outdoor stage of Sapporo Art Park with guest artists:
OKI (a Tonkori player) and Harada Ikuko from Japan, as well as in-
digenous artists from Taiwan. A special session was performed in
the venue decorated with large furoshiki.

9/2
土 | Sat.

モバイルアースオープン

「新・新に移動式オープンがミニ消防車で
やってくる」
会場：札幌市新琴似・新川地区センター



ノイズ電車関連企画

合格点
会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
出演：巨人ゆえにデカイ、蒔田 浩平、御除霊乳房 ほか



CAMP SITE PROJECT「裏庭」

タノタイガ 鮭を飼いたい！
「ルアー作りワークショップ」
会場：札幌市資料館裏庭
出演：タノタイガ、SIAFラボ
「裏泊」で泊まってみる
会場：札幌市資料館裏庭

9/3
日 | Sun.



パフォーマンス 吉増剛造×鈴木ヒラク

会場：札幌芸術の森 大練習室 | 出演：吉増 剛造、鈴木 ヒラク

ひがし町バーカパッションアンサンブル

バーカパッション meets テラコヤーツ

会場：札幌市資料館 2階テラコヤーツセンター「土砂」
出演：ひがし町バーカパッションアンサンブル、テニスコーツ

Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

酒井広司・南阿沙美「夕暮れ彫刻ピクニック」

会場：大通公園 | 出演：酒井 広司、南 阿沙美

テラコヤーツセンター「土砂」

テニスコーツと立花泰彦

会場：札幌市資料館エントランス | 出演：テニスコーツ、立花 泰彦

9/4 — 14

9/4
月 | Mon.

狸小路TV
加賀城匡貴のアートたんけんたい賞2
出演：加賀城 匡貴

9/5
火 | Tue.

テニス Courts、weird-meddle record 企画
会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
出演：植野 隆司、さや、秋庭 孝宏

9/6
水 | Wed.

テニス Courts、weird-meddle record 企画
会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
出演：真夜中フォークミュージック(三沢 洋紀+植野 隆司)、
白ばんズ(さや+池間 由布子)

9/7
木 | Thu.

テニス Courts、weird-meddle record 企画
会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
出演：植野 隆司、三沢 洋紀、池間 由布子、高橋 幾郎、
MC MANGO、アプト、OTACO、古立 太一、森 ミユキ、さよ、
ほか飛び入り

狸小路TV
アートマネージメントってなんだ2
出演：樋泉 綾子(札幌市文化芸術交流センター事業担当係長)、
中島 洋

CAMP SITE PROJECT「裏庭」
「裏泊」で泊まっている
会場：札幌市資料館裏庭

9/8
金 | Fri.

大友良英アーカイブ+三岸好太郎ワークス
大友良英スペシャルライブ
会場：mima 北海道立三岸好太郎美術館
出演：大友 良英、テニス Courts

テニス Courts、weird-meddle record 企画
会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
出演：テニス Courts、高橋 幾郎、立花 泰彦、大友 良英

市電放送局 JOSIAF
都市と市電と研究者
会場：札幌市電
ゲスト：岡本 亮輔(北海道大学メディア・コミュニケーション研究院准教授)、
朴炫貞(メディアアーティスト)

狸小路TV
アートマネージメントってなんだ3
出演：小野 朋子、中島 洋

CAMP SITE PROJECT「裏庭」
「裏泊」で泊まっている
会場：札幌市資料館裏庭

9/9
月 | Mon.

CAMP SITE PROJECT「裏庭」
「裏泊」で泊まっている
会場：札幌市資料館裏庭

9/10
日 | Sun.

コタンベッププロジェクト
ひろがれコタンワークショップ #02
森で食べる・話す・唄う
会場：円山公園
ゲスト：マユンキキ、作田 悟(アイヌ植物ツアーガイド)

梅田哲也《わからないものたち》
会場内ライブ
会場：金市館ビル | 出演：湿った犬

9/11
月 | Mon.

狸小路TV
加賀城匡貴のアートたんけんたい賞3
出演：加賀城 匡貴

9/12
火 | Tue.

テラコヤーツセンター「土砂」
リュウガ君のタップダンス教室2
会場：札幌市資料館 2階テラコヤーツセンター「土砂」
講師：リュウガ君

アートとリサーチセンター
北海道美術史 [1977-2017] フォーラム
会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
モデレーター：樋泉 綾子(公益財団法人札幌市芸術文化財団 市民
交流プラザ開設準備室)
登壇者：磯崎 道佳(美術家)、柴田 尚(北海道教育大学教授/NPO
法人 S-AIR 代表理事)、穂積 利明(北海道立近代美術館主任学芸員)、
梁井 朗(北海道美術ネット主宰/アートブロガー)

狸小路TV
TVの青春期を語ろう
出演：長沼 修、中田 美知子

9/13
水 | Wed.

狸小路TV
上映+トーク「TVはどうなる？」シリーズ4
会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
出演：広瀬 久美子(北海道テレビ放送報道部)、
小林 太一(北海道放送ディレクター)

9/14
木 | Thu.

ノイズ電車関連企画
合格点
会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
出演：YPY、テンテンコ、KOPY、37A、河村 康輔、湿った犬 ほか

CAMP SITE PROJECT「裏庭」
タノタイガ 鮭を飼いたい！
「タノタイガと行く鮭釣りツアー in 白老」
会場：白老町某所 | 出演：タノタイガ、SIAF ラボ

「裏泊」で泊まっている
会場：札幌市資料館裏庭

9/15
金 | Fri.



撮影：渡部 勇介

Asian Sounds Research Presents
OPEN GATE 2017 動き続ける展覧会
～An ever-changing exhibition「何もないところから」～ start from here

会場：石山緑地
出演：米子 匡司、水内 義人、chi too、Adam Kitingan、WinWin、さや、
植野 隆司、上原 なな江、大友 良英、樋口 勇輝、渡部 勇介、
PIKA(15日・16日)、モパイルアースオープン(17日・18日)、
中崎 透(17日・18日)
キュレーション&ディレクション：Sachiko M

石山緑地を会場に4日間の実験的な展覧会とパフォーマンスが
繰り広げられました。15時頃、作品とアーティストが石山緑地に
現れ、17時頃にパフォーマンスが始まり、暗くなる頃すべてを片
付けて会場を去ります。大規模な設備を用いず、緑地のありの
ままを生かしながら、作品と音とパフォーマンスが目の前で生ま
れては消えてゆく、絶え間なく変化する4日間でした。

Venue: Ishiyama Green Space
Artists: Yonago Tadashi, Mizuuchi Yoshihito, chi too, Adam Kitingan,
WinWin, Saya, Ueno Takashi, Uehara Nanae, Otomo Yoshihide,
Higuchi Yuki, Watanabe Yusuke, (15th and 16th) PIKA,
(17th and 18th) Mobile Earth Oven, NAKAZAKI Tohru
Curation and Direction: Sachiko M

A four-day event featuring experimental exhibitions and performances
was held at Ishiyama Green Space. Works and artists appeared at Ishi-
yama Green Space around 15:00, a performance started around 17:00,
and everything was removed from the venue when it became dark. It
was an ever-changing four-day event, where the momentary works,
sound and performance appeared and disappeared in the natural sur-
roundings of the green space without using large-scale equipment.

9/15
金 | Fri.



千鳥ふみ子さんと一緒に大風呂敷をつくろう! &
大風呂敷プロジェクト応援隊長就任式

会場: おおどおり大風呂敷工場

ノイズ電車 SAPPORO 2017

会場: 札幌市電 | 出演: YPY、テンテンコ

トーク 端聡×港千尋 スペシャルトーク

会場: OYOYO まち×アートセンターさっぽろ

出演: 端 聡、港 千尋

狸小路TV

アートマネージメントってなんだ4

出演: 藪前 知子、中島 洋

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

タノタイガ 鮭を飼いたい!「鮭と入浴式」

会場: 札幌市資料館裏庭 | 出演: タノタイガ

「裏泊」で泊まってみる

会場: 札幌市資料館裏庭

9/16
土 | Sat.

Asian Sounds Research Presents
OPEN GATE 2017 動き続ける展覧会
～An ever-changing exhibition
「何もないところから」～start from here

会場: 石山緑地

出演: 米子 匡司、水内 義人、chi too、Adam Kitingan、
WinWin、さや、植野 隆司、上原 なな江、大友 良英、樋口 勇輝、
渡部 勇介、PIKA

キュレーション&ディレクション: Sachiko M

大友良英アーカイブ+三岸好太郎ワークス

三岸好太郎美術館 土曜セミナー

会場: mima 北海道立三岸好太郎美術館

出演: 福地 大輔(北海道立釧路芸術館主任学芸員)、
藤原 乃里子(北海道立三岸好太郎美術館主任学芸員)

モバイルアースオープン

札幌オオドリ大学コラボ企画・モバイル避難所体験!
～レンタカー宿泊とモバイルアースオープンを体験しよう～

会場: 大通西4丁目「だい・どん・でん」会場内

千鳥ふみ子さんと一緒に大風呂敷をつくろう!

会場: 札幌市資料館 1階 SIAF ラウンジ

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

タノタイガ 鮭を飼いたい!「鮭料理」

裏庭ミーティング vol.4「これは「CAMP/キャンプ」だったのか?」

会場: 札幌市資料館裏庭 | 出演: タノタイガ

「裏泊」で泊まってみる

会場: 札幌市資料館裏庭

9/16
土 | Sat.



ひがし町パーカッションアンサンブル

パーカッション狸小路ライブ

会場: 狸小路6丁目 南3条グランドビル前 | 出演: ひがし町パーカッションアンサンブル、大友 良英



9/17
日 | Sun.



狸小路TV

上映&トーク「TV映像から再発見する〈札幌〉
～ローカルイズムと創造の原点を探る～」

会場: 札幌プラザ2・5

出演: 長沼 修、是枝 裕和(映画監督)ほか

Asian Sounds Research Presents
OPEN GATE 2017 動き続ける展覧会
～An ever-changing exhibition
「何もないところから」～start from here

会場: 石山緑地

出演: 米子 匡司、水内 義人、chi too、Adam Kitingan、WinWin、さや、
植野 隆司、上原 なな江、大友 良英、樋口 勇輝、渡部 勇介、
モバイルアースオープン、中崎 透

キュレーション&ディレクション: Sachiko M

千鳥ふみ子さんと一緒に大風呂敷をつくろう!

会場: 札幌市資料館 1階 SIAF ラウンジ

梅田哲也《わからないものたち》

会場内ライブ

会場: 金市館ビル | 出演: 湿った犬

9/18
月・祝 | Mon.

堀尾寛太《補間》

DARK ELECTRONICS WORKSHOP

会場: AGS6・3ビル

講師・出演: ジョン・リチャーズ、堀尾 寛太

Asian Sounds Research Presents
OPEN GATE 2017 動き続ける展覧会
～An ever-changing exhibition
「何もないところから」～start from here

会場: 石山緑地

出演: 米子 匡司、水内 義人、chi too、Adam Kitingan、
WinWin、さや、植野 隆司、上原 なな江、大友 良英、
樋口 勇輝、渡部 勇介、モバイルアースオープン、中崎 透

キュレーション&ディレクション: Sachiko M

千鳥ふみ子さんと一緒に
大風呂敷をつくろう!

会場: 札幌市資料館 1階 SIAF ラウンジ

狸小路TV

今はなき忘れられた懐かしい
北海道ローカルTVCM 特集3

出演: 早川 渉

梅田哲也《わからないものたち》

会場内ライブ

会場: 金市館ビル | 出演: OTACO

9/19 火 | Tue.

札幌デザイン開拓使 無料デー

会場: JRタワープラニスホール

千鳥ふみ子さんと一緒に
大風呂敷をつくろう!

会場: 札幌市資料館 1階 SIAF ラウンジ

狸小路TV

今はなき忘れられた懐かしい
北海道ローカルTVCM 特集4

出演: 早川 渉



「DOMMUNE SAPPORO!」DAY5

会場: CAI02

DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS
「THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS
season 5 / #039 山川冬樹」

出演: 山川 冬樹 | 聞き手: 藪前 知子

「DOLIVE!」DAY5

ライブ: 山川 冬樹、ハットコペ、テンテンコ



9/20 水 | Wed.

市電放送局 JOSIAF

JOSIAF ×
JOFU - FM AIR-G'
hello! HOKKS

会場: 札幌市電

出演: 猪熊 梨恵(札幌オオドリ大学
学長)、森本 優(AIR-G'アナウンサー)

9/21 木 | Thu.

大友良英アーカイブ+三岸好太郎ワークス

大友良英ドキュメンタリー映画
『KIKOE』上映会

会場: シアターキノ | 出演: 岩井 主税、大友 良英

モバイルアースオープン

体験授業/土窯で遊ぼ

会場: 札幌市立盤溪小学校、旭山記念公園「森の家」

9/22 金 | Fri.

テラコヤーツセンター「土砂」

非公式トークライブ「芸術祭、終わりののはじまり…」

会場: 札幌市資料館2階 テラコヤーツセンター「土砂」

出演: 非公式、大友 良英、テニスコーツ

狸小路TV

北のお菓子文化 ～甘くて深～い歴史の味

出演: 塚田 敏信(まち文化研究所主宰)、五十嵐 いおり

9/23

土・祝 | Sat.



アジアン・ミーティング・フェスティバル 2017 札幌スペシャル

会場：札幌芸術の森 大練習室

出演：dj sniff、イ・カホ、C・スペンサー・イエー、大友 良英、カリフ8、グエン・タン・トゥイ、張 恵笙、ムジカ・テト、アーノント・ノンヤオ、ユエン・チーワイ

スペシャルゲスト：灰野 敬二

ゲスト：勝井 祐二、宝示戸 亮二、吉田 野乃子

ユエン・チーワイとdj sniff がキュレーションを行う実験音楽・即興音楽・ノイズの分野におけるアジア有数のフェスティバル。アジア各地から来日したアーティストと、地元で活動するアーティストのほか、スペシャルゲストに灰野敬二(23日)とオーレン・アンバーチ(24日)を迎え、2日間にわたってさまざまな編成での即興演奏が行われました。

Asian Meeting Festival 2017 Sapporo Special

Venue: Large Practice Room, Sapporo Art Park

Artists: Alice Hui-Sheng Chang, Arnont Nongyao, C. Spencer Yeh, Caliph8, dj sniff, Musica Htet, Nguyen Thanh Thuy, Otomo Yoshihide, Yii Kah Hoe, Yuen Chee Wai

Special Guest: Haino Keiji

Guests: Katsui Yuji, Hojito Ryoji, Yoshida Nonoko

With Yuen Chee Wai and dj sniff as curators, this festival is known as one of Asia's foremost festivals in experimental, improvisational and noise music genres. Artists from various parts of Asia, local artists and special guests Haino Keiji and Oren Ambarchi performed improvisation in various kinds of combination and formation over the two-day period.



9/23

土・祝 | Sat.

SIAF2017 市電プロジェクト×指輪ホテル

「Rest In Peace, Sapporo～ひかりの街をはしる星屑～」

会場：札幌市電 | 出演：指輪ホテル ほか

9/23

土・祝 | Sat.

梅田哲也《わからないものたち》

梅田哲也ライブパフォーマンス「わかりやすいこと」

会場：金市館ビル

出演：振子びじん、船川 翔司、湿った犬、さや(テニスコーツ)、松井 美耶子、中尾 微々、中尾 眞佐子、平尾 拓也、石川 ひなの、新美 太基、深澤 優子、真鍋 昌揮、宮出 実希、松吉 菜々子、鈴木 悠哉、梅田 哲也 ほか

Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

「北海道の旅」について写真家 酒井広司と語るトークイベント

会場：ゲストハウス雪結(yuyu)

出演：酒井 広司、河嶋 峻(ゲストハウス雪結オーナー)

アートトリサーチセンター

アーティストが見た北海道・札幌プログラム02
小樽ツアー・深澤孝史

会場：小樽市内各所 | 企画・ガイド：深澤 孝史

狸小路TV

私たちの札幌国際芸術祭～外国籍生徒による
自国語リポート・アートサミット

出演：市立札幌大通高等学校5名、西野 功泰

テラコヤーツセンター「土砂」

リュウガ君のタップダンス教室3

会場：札幌市資料館2階 テラコヤーツセンター「土砂」

講師：リュウガ君



テラコヤーツセンター「土砂」

テニスコーツ in 宮の森美術館

会場：札幌宮の森美術館 | 出演：テニスコーツ

狸小路TV

加賀城匡貴のアートたんけんたい賞4 大賞決定

出演：加賀城 匡貴

アートトリサーチセンター

アーティストが見た北海道・札幌 プログラム03
夕張ツアー

会場：夕張市内各所

ガイド：佐藤 真奈美 | ゲスト：菊池 史子

9/25

月 | Mon.

9/26

火 | Tue.

札幌国際芸術祭2017クロージングウィーク
NMA Live—大友良英スペシャル3days DAY1

会場：PROVO

出演：Filament(大友 良英、Sachiko M)、大友 良英×山崎 比呂志、
大友 良英×クリス・ピッツィオコス、
大友 良英×Sachiko M×山崎 比呂志×クリス・ピッツィオコス

モバイルアースオープン

体験授業

会場：札幌市立盤溪小学校

狸小路TV

狸小路ニューウェーブの発信者たち

出演：斉藤 正広(まる)(M'S MARO企画)、中田 美知子

9/24

日 | Sun.



アジアン・ミーティング・フェスティバル2017
札幌スペシャル

会場：札幌芸術の森 大練習室

出演：dj sniff、イ・カホ、C・スベンサー・イエー、大友 良英、カリフ8、
グエン・タン・トゥイ、張 惠荃、ムジカ・テト、アーノント・ノンヤオ、
ユエン・チーワイ

スペシャルゲスト：オーレン・アンバーチ

ゲスト：湿った犬、高橋 幾郎、テンテンコ

Asian Meeting Festival 2017
Sapporo Special

Venue: Large Practice Room, Sapporo Art Park

Artists: Alice Hui-Sheng Chang, Arnont Nongyao,
C. Spencer Yeh, Caliph8, dj sniff, Musica Htet,
Nguyen Thanh Thuy, Otomo Yoshihide, Yii Kah Hoe,
Yuen Chee Wai

Special Guest: Oren Ambarchi

Guests: shimetta-inu, Takahashi Ikuro, TENTENKO

テラコヤーツセンター「土砂」

テニスコーツ in 地下歩行空間

会場：札幌駅前通地下歩行空間北三条交差点広場(西)

出演：テニスコーツ

スモーフェス in 資料館裏庭

会場：札幌市資料館裏庭

出演：船川 翔司、エントリーされた方々、テニスコーツ、

MC MANGO ほか

9/27

水 | Wed.



札幌国際芸術祭2017 クロージングウィーク
NMA Live—大友良英スペシャル3days DAY2

会場：くう | 出演：クリス・ピッツィオコス、ショロー CLUB(大友 良英、不破
大輔、芳垣 安洋)

札幌の三至宝：アートはこれを超えられるか!

一夜限りの坂 NIGHT
トークとレコードのゆうべ with スナック寿樹

会場：OYOYO まち×アートセンターさっぽろ

出演：坂 一敬、上遠野 敏

狸小路TV

アートマネージメントってなんだ5

出演：成田 真由美(札幌国際芸術祭ボランティアセンター
何かやり隊長)、中島 洋

テラコヤーツセンター「土砂」

DOMMUNE 中継ライブ

会場：札幌市資料館 2階テラコヤーツセンター「土砂」

出演：テニスコーツ | ゲスト：MC MANGO

9/28 木 | Thu.

札幌国際芸術祭2017クロージングウィーク
NMA Live—大友良英スペシャル3days DAY3

会場：ターミナルプラザことにバトス

出演：大友 良英×吉田 野乃子、大友 良英×宝示戸 亮二、

大友 良英 with さっぽろ八月祭スペシャルビッグバンド

堀尾寛太《補間》 会場内ライブ

会場：AGS6・3ビル | 出演：テニスコーツ、高橋 幾郎、堀尾 寛太

狸小路TV 北海道食文化の成り立ち

出演：桐生 宇優(北雄ラッキー株式会社代表取締役社長)、本間 幹英(株式会社ほんま
代表取締役社長)、小林 米三郎(小林酒造株式会社社長)、藤井 幸大(サンマルコ食品
株式会社取締役)、五十嵐 いおり

SIAFラボ 編集局 第4回 編集会議—SIAF2017を編集する—

会場：札幌市資料館サカナ通信編集室

9/29 金 | Fri.

ノイズ電車 SAPPORO 2017

会場：札幌市電 | 出演：大友 良英、湿った犬

Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

富士翔太朗「プラネタリウム点灯式ソロライブ」

会場：Ten to Ten Hokkaido Hostel & Kitchen 中島公園

出演：富士 翔太朗

大友良英+テニスコーツ+
立花泰彦 at OYOYO

会場：OYOYO まち×アートセン
ターさっぽろ

出演：大友 良英、テニスコーツ、
立花 泰彦



9/30
土 | Sat.



クロージングイベント 「モエレ沼公園 音楽&アート解放区」

会場：モエレ沼公園
出演：大友 良英、立花 泰彦、テニスコーツ、のん

東 宏典、長見 順、林 和夫、北原 英司、田中 充[林 和夫以下、池袋盆BAND]、プロジェクトFUKUSHIMA! (山岸 清之進、富山 明子)、富山 理沙子、狩野 健一、外山 章、加藤 健介、中川 真理子、岡部 公美、音遊びの会、ひがし町パーカッションアンサンブル、モバイルアースオープン、青柳 唯、ikura&偶玉ザム仔、カズケル、アレグロデュオ、大内 拓也、藏重 夕佳、水本 理志、水本 紅璃、タップダンサー小杉龍画、ジャグラー・コーヘイ、佐々木 梨乃、縫嶋 ハル、新藤 理、寺崎 好美、土肥 亜美、西村 伸雄、松尾 竜平、村山 慶一郎、森川 昆、山田 一雄、山本 睦子、山本 裕太郎

2015年からスタートした大風呂敷プロジェクトでつくられたすべての大風呂敷がモエレ沼公園に敷き詰められ、その上でゲストディレクター大友良英のほか、プロ・アマチュアを問わずさまざまなアーティスト・パフォーマーによる、多種多様な表現が同時多発的に繰り広げられました。道外の大風呂敷工場から寄せられた風呂敷も含めると、敷かれた風呂敷の総面積は1万m²を超え、モエレ沼公園を鮮やかに彩りました。

Closing event: Music & Art Set Free in Moerenuma Park

Venue: Moerenuma Park
Artists: Otomo Yoshihide, Tachibana Yasuhiko, Tenniscoats, Non, Azuma Hironori, Nagami Jun, and others

All large furoshiki made in the O-furoshiki Project, which started in 2015, were spread in Moerenuma Park, on which Otomo Yoshihide and various professional and amateur artists and performers simultaneously performed to create diverse expressions. Furoshiki covering an area of more than 10,000 m² in total, including those from O-furoshiki factories in another area of Japan, were laid out in the venue, adding color to Moerenuma Park.

9/30
土 | Sat.

梅田哲也オールナイトトーク「生きているのに走馬灯」
会場：「りんご」の隣の建物 | 出演：雨宮 庸介、梅田 哲也

梅田哲也《わからないものたち》

会場内ライブ

会場：金市館ビル | 出演：OTACO

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

裏庭フィナーレ「開拓風呂入浴式・晚餐会」

会場：札幌市資料館裏庭 | 出演：タノタイガ

狸小路TV

狸小路TVメンバーのラスト放談

出演：中島 洋、福津 京子、木原 くみこ

10/1
日 | Sun.



∈Y∋「ドット・リーム | DOT LEEM」

会場：札幌芸術の森 工芸館 | サウンド・インスタレーション：∈Y∋

10/1 日 | Sun.



トーク クワクポリョウタ

会場：札幌市円山動物園 動物園センター
出演：クワクポリョウタ

トーク

札幌国際芸術祭2017 振り返りトーク
in 札幌市資料館

会場：札幌市資料館 2階研修室
出演：羊屋 白玉、柴田尚(北海道教育大学教授/NPO 法人 S-AIR 代表理事)

梅田哲也《わからないものたち》

会場内ライブ

会場：金市館ビル | 出演：湿った犬

テラコヤーツセンター「土砂」

Let it be...

会場：札幌市資料館 2階
テラコヤーツセンター「土砂」
出演：テラコヤーツオールスターズ

市電放送局 JOSIAF

1周目「Time Loop Tram 99」

会場：札幌市電 | 出演：99(ツーナイン)

2周目「Next Loop!」

会場：札幌市電
出演：大友 良英、羊屋 白玉、深澤 雅一(ラジオカロス パーソナリティ)、タノタイガ、札幌 LRT の会

コタンベッププロジェクト

ひろがれコタンワークショップ #03
さいごもめちゃクチャ CLOSING

会場：円山公園

CAMP SITE PROJECT「裏庭」

裏庭フィナーレ「開拓風呂入浴式」

会場：札幌市資料館裏庭 | 出演：タノタイガ

SIAF2017開催へ向けたプレイベント

2016	2/17(水)	SIAF パブリックミーティングーゲストディレクター大友良英を迎えて芸術祭を考える
	4/20(水)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ プレワークショップ
	4/24(日)	第1回デザインミーティング
	5/21(土)	SIAF まち歩きワークショップ
	5/22(日)	第2回デザインミーティング
	6/8(水)	第3回デザインミーティング
	6/11(土)・12(日)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ
	6/17(金)	ラボの日 緊急ミーティング 一緒に考えよう芸術祭プログラム！
	7/26(火)	大風呂敷レクチャー in まこまない大風呂敷工場
	7/31(日)	夏のウポボピクニック
	8/5(金)・6(土)	さっぽろ八月祭2016
	8/7(日)	SIAF パブリックミーティング 開催まであと1年! いろいろ発表します
	8/9(火)ー11(木・祝)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ
	9/2(金)	ARTSAT×SIAF ラボ 作品制作公開実験
	9/25(日)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ
	10/1(土)	SIAF ラボ×札幌国際芸術祭デザインプロジェクト「SIAF ラボ プロジェクトミーティング」
	10/11(火)	ボランティアプロジェクトーキックオフミーティングー
	10/22(土)	Asian Sounds Research Presents 「OPEN GATE 2016 」～動き続ける展覧会～報告会
	10/23(日)	第1回 SIAF2017CM映像制作ワークショップ 大風呂敷ワークショップ 札幌デザインウィーク in チカホ
	11/5(土)	さっぽろアートステージ2016×札幌国際芸術祭2017連携企画 札幌・北海道のイベント仕掛け人によるクロストークーNEVER MIND THE BOOKS×NOMIPON!!×TOBIU CAMP×さっぽろ天神山アートスタジオ×SIAF2017ー
	12/2(金)	第2回 SIAF2017CM映像制作ワークショップ
2017	12/3(土)	オーケストラってなんだ?～さっぽろコレクティブ・オーケストラにむけて～
	12/4(日)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ
	12/14(水)	ボランティアプロジェクトー第2回ボランティアミーティングー
	1/15(日)	しりょうかん大風呂敷しゅっちょう工場 in SIAF ラボ
	1/22(日)	冬のウポボピクニック
	1/26(木)	梅田哲也・さわひらき フィールド・アクション@モエレ沼公園
	2/5(日)	第3回 SIAF2017CM映像制作ワークショップ
	2/6(月)ー12(日)	第68回さっぽろ雪まつり×札幌国際芸術祭2017 トット商店街
	2/11(土・祝)・12(日)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ
	2/16(木)ー19(日)	2017冬季アジア札幌大会連携 創造都市発信事業 札幌国際芸術祭2017アーティスト・プレビュー 平川紀道《datum》

2/19(日)	平川紀道《datum》クロージングトーク「アート&サイエンスとしてのメディアアート」
2/19(日)ー26(日)	地方で、デザイナーが、北海道のクリエイティブの未来について考える エキシビション DESIGN IN REAL WORLD 大阪と札幌、それぞれの場合 トークイベント DESIGNERS IN REAL WORLD それぞれの現実と未来(2/25)
2/26(日)	しりょうかん大風呂敷しゅっちょう工場 in SIAF ラボ
2/28(火)	ボランティアプロジェクトー第3回ボランティアミーティングー
3/8(水)	SIAF2017CM映像制作ワークショップお披露目会
3/16(木)	「THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 #033 篠原有司男」配信
3/19(日)・20(月・祝)	大風呂敷サミット2017「そもそも大風呂敷ってなんだっけ？」
3/24(金)・26(日)・28(火)	指輪ホテルと市電にゆられて演劇をつくろう 参加者募集説明会 OYOYO(3/24)、SIAF ラボ(3/26)、おおどおり大風呂敷工場(3/28)
4/18(火)	いおん大風呂敷しゅっちょう工場 in イオンモール札幌発寒
4/23(日)	中央区×市電×SIAF デザインプロジェクト 共同ワークショップ 「小学生デザイナー求む! 市電SIAF 号の設計図をつくろう!」市電とデザインを知るレクチャー
4/30(日)	松井紫朗レクチャー「穴のふしぎ」
5/13(土)・14(日)	中央区×市電×SIAF デザインプロジェクト 共同ワークショップ 「小学生デザイナー求む!市電SIAF 号の設計図をつくろう!」制作ワークショップ 「モバイルアースオープン」薪窯づくりワークショップ
5/15(月)	「THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 #034 齋藤秀三郎」配信
5/20(土)	SIAF ラボキックオフミーティング
5/24(水)	大風呂敷しゅっちょう工場 in 札幌市立大学
5/27(土)	指輪ホテルと市電にゆられて演劇をつくろう 参加者募集説明会 in SIAF ラボ
6/17(土)	CAMP SITE PROJECT「裏庭」裏庭ミーティング vol.1「パブリックとプライベートの間」
6/18(日)・24(土)・25(日)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ
6/24(土)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ トークセッション「オーケストラってなんだ？」
6/27(火)	大風呂敷しゅっちょう工場 in 北九条小学校 SIAF ラボ編集局 第1回 編集会議ーSIAF2017を編集するー
6/30(金)ー7/2(日)	アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 プレイベント サウンド&ノイズ・ワークショップ第1弾
7/1(土)・2(日)・8(土)・9(日)	アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 プレイベント 音で遊ぼう!親子ワークショップ
7/4(火)	大風呂敷しゅっちょう工場 in 北九条小学校
7/7(金)ー9(日)	アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 プレイベント サウンド&ノイズ・ワークショップ 第2弾
7/15(土)ー17(月・祝)	大友良英＋青山泰知＋伊藤隆之《(with)without records》作品制作ワークショップ
7/15(土)	CAMP SITE PROJECT「裏庭」裏庭ミーティング vol.2 アウトドアグッズの進化と可能性
7/17(月・祝)	市電SIAF 号完成お披露目会、大風呂敷しゅっちょう工場 in 大丸札幌店
7/22(土)	SIAF ラボ編集局 第2回 編集会議ーSIAF2017を編集するー
7/22(土)・23(日)	さっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ
8/1(火)	大風呂敷レクチャー in まこまない大風呂敷工場

2016年度からの継続的なプロジェクト

Projects from 2016

一緒に作ろう芸術祭 公募プロジェクト

Public Offering Project – Let’s Create an Art Festival Together –

北海道内の団体、個人がSIAF2017会期中に札幌市内で実施する事業を募集し、SIAF2017の公式プログラムとして事業費を支援するほか、その実現に至るまでをサポートするプロジェクト。応募総数98件のうち、一次審査を通過した31件のプレゼンテーション資料を公式ウェブサイト、札幌市役所1階ロビー、SIAFラウンジで公表し、集まった市民意見も参考にして右記の5事業を選定しました。

In this project, 98 proposals from organizations and individuals in Hokkaido were submitted following an open call for projects to be held in Sapporo during SIAF2017. Thirty-one proposals passed the initial screening and their presentation materials were made public via the official website, Sapporo City Hall's lobby and SIAF Lounge. The following five projects were selected as SIAF2017 official programs, taking the opinions of local residents into consideration, and financial and other support were provided for their implementation.

募集要件

- ・SIAF2017の公式プログラムにふさわしい事業であること
- ・SIAF2017のテーマや大友ゲストディレクターのメッセージを踏まえていること
- ・北海道内の団体(任意団体も含む)または道内在住の個人が行う事業であること
- ・事業を実施する期間の一部または全部がSIAF2017開催期間に重なっていること
- ・札幌市内で実施する事業であること(会場は事業者自身が確保すること)
- ・事業者自身が、応募した企画の実施および運営を必ず実現できること

●募集期間

2016年5月9日(月)～6月30日(木)

●一次審査通過事業公開・ご意見募集期間

2016年7月19日(火)～25日(月)

●最終発表

2016年8月7日(日)

SIAFパブリックミーティングにて発表

●審査員

大友 良英、磯田 憲一、小崎 哲哉、
沼山 良明、宮井 和美、熊谷 淳



募集チラシ

札幌デザイン開拓使 サッポロ発のグラフィックデザイン ～栗谷川健一から初音ミクまで～

企画: ワビサビ

会場: JRタワー プラニスホール



妖怪フィギュア・アートシアター 中島公園百物語

企画: 公益財団法人北海道演劇財団

8/19(土)・20(日)

本公演会場: 札幌市こども人形劇場こぐま座前の広場(札幌市中央区中島公園)
妖怪パレード会場: 札幌市北3条広場、狸小路商店街、中島公園周辺



I HAVE a DREAM ～ひがし町パーカッションアンサンブル

企画: 医療法人薪水 浦河ひがし町診療所

8/5(土) SIAF2017前夜祭「さっぽろ八月祭2017」
会場: 札幌市北3条広場(アカブラ)

8/19(土) アースオープン×パーカッション
in 北大マルシェ
会場: 北大マルシェ(北海道大学農学部前)

9/2(土) パーカッション市電ライブ
会場: 札幌市電

9/3(日) パーカッション meets テラコヤーツ
会場: 札幌市資料館

9/16(土) パーカッション狸小路ライブ
会場: 狸小路6丁目 南3条グランドビル前

9/30(土) クロージングイベント「モエレ沼公園 音楽&アート解放区」
会場: モエレ沼公園



ゲストハウス×ギャラリープロジェクト Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

企画: 札幌 ギャラリー×ゲストハウス プロジェクト実行委員会



モバイルアースオープン

企画: 安齋 伸也

5/13(土)・14(日) 「モバイルアースオープン」薪窯づくりワークショップ
会場: 旭山記念公園「森の家」

8/15(火) 夏休み緊急企画!! アースオープンで夏祭り in 旭山ベース
会場: 旭山記念公園「森の家」

8/19(土) アースオープン×パーカッション in 北大マルシェ
会場: 北大マルシェ(北海道大学農学部前)

8/20(日) モバイルアースオープン in 北大マルシェ
会場: 北大マルシェ(北海道大学農学部前)

9/2(土) モバイルアースオープン
「新・新に移動式オープンがミニ消防車でやってくる」
会場: 札幌市新琴似・新川地区センター

9/16(土) 札幌オオドリ大学コラボ企画・モバイル避難所体験!
～レンタカー・宿泊とモバイルアースオープンを体験しよう～
会場: 大通西4丁目「だい・どん・でん」会場内

9/17(日)・18(月・祝) Asian Sounds Research Presents
OPEN GATE 2017 動き続ける展覧会
～An ever-changing exhibition
「何もないところから」～ start from here
会場: 石山緑地

9/21(木) モバイルアースオープン「土窯で遊ぼう」
会場: 旭山記念公園「森の家」

9/21(木)・26(火) モバイルアースオープン「体験授業」
会場: 札幌市立盤溪小学校

9/30(土) クロージングイベント「モエレ沼公園 音楽&アート解放区」
会場: モエレ沼公園



SIAF デザインプロジェクト

SIAF Design Project

企画メンバーの佐藤直樹を中心に、デザインの考え方を整理し、SIAF2017のメインビジュアルやシンボルマークなどのデザインを組み立てて行くプロジェクト。ディスカッション、シンポジウムなどを通して、札幌の街全体の風景を視野に入れながら、どのようなデザインがSIAF2017にふさわしいかを考えるワークショップなどを行いました。

A project led by project member Sato Naoki to clarify the idea of design and develop designs for the main visual and symbol mark of SIAF2017. The idea of design was clarified through discussions and symposiums, and workshops were held to consider what kind of design is suitable for SIAF2017 with an eye on the cityscape of Sapporo.

● イベントスケジュール

2016年

4/24(日) **第1回デザインミーティング**
会場: MEET.
ゲスト: 工藤“ワビ”良平(ワビサビ)、上田 亮(COMMUNE)

5/21(土) **SIAF まち歩きワークショップ**

5/22(日) **第2回デザインミーティング**
会場: 札幌市立大学サテライトキャンパス

6/8(水) **第3回デザインミーティング**
会場: SIAF プロジェクトルーム

8/7(日) **SIAF パブリックミーティング**
メインビジュアルとシンボルマーク発表
会場: 札幌プラザ2・5

● 関連プログラム

2017年

2/19(日) **地方で、デザイナーが、北海道のクリエイティブの未来について考える [エキシビション]**
DESIGN IN REAL WORLD 大阪と札幌、それぞれの場合
会場: MEET.、BLAKISTON
出展: UMA/ design farm. COMMUNE

2/25(土) **地方で、デザイナーが、北海道のクリエイティブの未来について考える [トークイベント]**
DESIGNERS IN REAL WORLD それぞれの現実と未来
会場: MEET.
ゲスト: 原田 祐馬(UMA/design farm)、梶原 加奈子(KAJIHARA DESIGN STUDIO)、桑原 崇 / 児玉 結衣子(mangekyo)、青山 剛士 / 青山 吏枝(drop around)、上田 亮(COMMUNE)
ファシリテーター: 山中 緑(HOKKAIDO MIRAI LAB)



大風呂敷プロジェクト

O-Furoshiki-Project

市民から集めた布で、パッチワーク状のカラフルな大風呂敷や旗を制作して、SIAF2017の会期中に市内のさまざまな場所に展開するというプロジェクト。布を提供すること、大風呂敷を縫うことなどを通して市民が芸術祭に参加する「市民と一緒につくる芸術祭」を象徴する事業です。2016年11月23日(水・祝)には市内中心部に「おおどおり大風呂敷工場」がオープン。ここを活動拠点としながら、小学校やショッピングモールで出張ワークショップを行ったほか、自主的に大風呂敷を作成する「きょうりょく工場」も登場しました。最終的にプロジェクトの参加人数は2,000人を超え、1万平米を超える大風呂敷がクロージングイベント会場のモエレ沼公園を彩りました。

・おおどおり大風呂敷工場及び関連イベント参加人数: 2,119人
(その他、布・糸の提供、大風呂敷の設置などに多数の方が参加)
・クロージングイベントで敷かれた風呂敷の総面積: 10068.75㎡

A project in which pieces of cloth collected from local residents were sewn to make large, colorful patchwork furoshiki, which were then spread out in various parts of the city during SIAF2017. This project, in which local residents participated in the art festival by offering cloth and sewing large furoshiki, symbolizes the civic participation of the art festival. The Odori O-furoshiki Factory opened in the city center on November 23, 2016. While large furoshiki were mainly made at this factory, workshops were held in elementary schools and shopping malls. Cooperative factories that voluntarily made large furoshiki also appeared. Eventually, more than 2,000 people participated in the project, and large furoshiki covering an area of more than 10,000 m2 in total added color to Moerenuma Park, the venue of the closing event.

● 大風呂敷が展開された会場・イベント

2017年

JRタワー1階 東・西コンコース [7/21(金)–9/28(木)]
JRタワー地下1階 イースト/ウエストアベニュー [7/25(火)–9/28(木)]
札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ) [7/25(火)–9/27(水)]
大丸札幌店6階 グリーンパティオ [8/2(水)–9/5(火)]
SIAF2017前夜祭(さっぽろ八月祭2017) [8/5(土)]
SIAF2017インフォメーションセンター [8/5(土)–10/1(日)]
コタンベッププロジェクト [8/6(日)–10/1(日)]
マレウレウ祭り in SIAF2017 [9/3(日)]
アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 札幌スペシャル [9/23(土・祝)・24(日)]
クロージングイベント「モエレ沼公園 音楽&アート解放区」 [9/30(土)]



さっぽろコレクティブ・オーケストラ

Sapporo Collective Orchestra

2016年より、ゲストディレクターで音楽家の大友良英、演出家の藤田貴大、そして参加する子どもたちみんなでワークショップを重ねてきました。また、ワークショップの講師にはSIAF2017参加アーティストの石川直樹やマレウレウ、吉増剛造、鈴木昭男などを講師に迎え、さまざまな表現にふれあうと共に、プロジェクトの理解をより深めるためのトークイベントなども実施しました。

A series of workshops for children were held from 2016 with musician/guest director Otomo Yoshihide and stage director Fujita Takahiro. SIAF2017 participating artists, including Ishikawa Naoki, Yoshimasu Gozo and Suzuki Akio, were invited as instructors in workshops to provide a variety of expressions, and talk events were also held to deepen the understanding of the project.



● イベントスケジュール

2016年

4/20(水) **プレワークショップ**
会場: 札幌市立八条中学校(札幌市立八条中学校の吹奏楽部とのワークショップ)

6/11(土)・12(日) **ワークショップ**
会場: 札幌市立資生館小学校
講師: 大友 良英、藤田 貴大

8/9(火)–11(木・祝) **ワークショップ**
会場: 札幌市立資生館小学校
講師: 大友 良英、藤田 貴大、石川 直樹、マレウレウ

9/25(日) **ワークショップ**
会場: 札幌市立資生館小学校
講師: 大友 良英

12/3(土) **オーケストラってなんだ? ~さっぽろコレクティブ・オーケストラにむけて~**
会場: 札幌市資料館 2階プロジェクトルーム
登壇者: 大友 良英、有馬 恵子

12/4(日) **ワークショップ**
会場: 札幌市立資生館小学校
講師: 大友 良英、吉増 剛造

2017年

2/11(土・祝)・12(日) **ワークショップ**
会場: 札幌コンサートホール Kitara 大リハーサル室
講師: 大友 良英、鈴木 昭男

6/18(日) **ワークショップ**
会場: 札幌市役所食堂
講師: 大友 良英

7/22(土)・23(日) **ワークショップ**
会場: 札幌市役所食堂
講師: 大友 良英、藤田 貴大

6/24(土) **トークセッション「オーケストラってなんだ?」**
会場: 札幌市役所食堂
登壇者: 大友 良英、藤田 貴大、有馬 恵子

6/24(土)・25(日) **ワークショップ**
会場: 札幌市役所食堂
講師: 大友 良英

8/9(水)–11(金・祝) **公開ワークショップ**
会場: 札幌市立北九条小学校
講師: 大友 良英、藤田 貴大

8/17(木)–19(土) **ワークショップ**
会場: 札幌コンサートホール Kitara 大リハーサル室
講師: 大友 良英

8/24(木) **トークセッション**
「コレクティブ・オーケストラは芸術祭の縮図である」
会場: 札幌市資料館 2階プロジェクトルーム
登壇者: 大友 良英、藤田 貴大、有馬 恵子

8/26(土) **ワークショップ・リハーサル**
会場: 札幌コンサートホール Kitara 大リハーサル室

8/27(日) **本番公演**
会場: 札幌コンサートホール Kitara 大ホール

10/11(水) **トークセッション**
「さっぽろコレクティブ・オーケストラって何だったんだろう?」
会場: 札幌市役所 1階ロビー
登壇者: 大友 良英、中村 美亜、有馬 恵子

岸野雄一が、さっぽろ雪まつり西5丁目会場の高さ12メートルにもなる大雪像を監修し、この大雪像を使った音楽影絵劇を披露しました。テレビの歴史を体現している女優、黒柳徹子さんの姿をした天女が、巨大な街頭テレビを携え商店街に舞い降りている大雪像を舞台に、岸野が扮する農夫と、ジョン(犬)が扮する狼が日本の四季を表現。黒柳さんのナレーションや四季を軽やかに歌う音楽と共に、アニメーションやライブでつくりだされる影絵が雪像上のテレビに投影され、札幌の夜を彩りました。また、SIAF2017会期中にCAI02会場で展示した「札幌ループライン」が、雪まつり期間、初上映されました。

Kishino Yuichi supervised the creation of a 12-meter-high snow sculpture in the Nishi 5-chome venue of the Sapporo Snow Festival, and used this large sculpture as the screen for a musical shadow play. With Kishino performing the role of a farmer and John the dog performing the role of a wolf, the play showcased the four seasons of Japan, using a large snow sculpture representing a nymph in the shape of Kuroyanagi Tetsuko (an actress embodying the history of TV) who held aloft a sculpted TV screen. With narration by Kuroyanagi and music expressing the four seasons, the shadow play was combined with an animation and a live performance and projected on the sculpture's TV screen, adding color to the night of Sapporo. A shadow landscape of the Sapporo Loop Line, which was exhibited in the CAI02 venue during SIAF2017, was also projected.

●会期

2017年2月6日(月)ー12日(日)

●パフォーマンス

会期中毎日17:00、18:00、19:00、20:00の4回公演(各回約15分)



撮影:アキタヒデキ

SIAF ラボでは年間を通してSIAF の情報発信、ワークショップやレクチャー、展覧会などを行っています。SIAF2017ではARTSATプロジェクトへの参加やCAMP SITE PROJECT「裏庭」のプロデュース、SIAFの情報を不定期に発信する瓦版『サカナ通信』の発行など多岐にわたる活動を展開しました。今後も次回SIAF開催に向けて、さまざまなプログラムを実施していきます。

SIAF Lab provides information on SIAF, and organizes workshops, lectures and exhibitions all year round. In SIAF2017, it was involved in a wide range of activities, including participation in the ARTSAT project, the production of CAMP SITE PROJECT "URANIWA" and the publication of SAKANA PRESS, which provides information on SIAF on an irregular basis. SIAF Lab will carry out various programs toward the next SIAF.

●SIAF ラウンジ

SIAF の記録物や、関連書籍が閲覧できるライブラリーを有し、芸術祭にまつわる情報のほか、芸術文化に関するさまざまな情報を共有、発信するスペースです。カフェも併設され、飲食や休憩スペースとしても利用されています。SIAF2017では休憩スペースとしての利用に加え、インフォメーションセンターとして活用しました。

●ARTSAT × SIAF ラボ

P34

SIAF2017では久保田晃弘をリーダーに迎え、SIAF ラボから小町谷圭、石田勝也、船戸大輔、金井謙一、藍圭介らが参加しプロジェクトチームを結成。「衛星はメディアである」をモットーに、宇宙の文化芸術活用を推進するARTSATプロジェクトとコラボレーションし、モエレ沼公園で《Sculpture to be Seen from Space, Improvisation to be Heard from Space. 宇宙から見える彫刻、宇宙から聞こえる即興演奏》《Sculpture for All of the Intelligence 全知性のための彫刻》を展開。2017年10月には気球を成層圏へ打ち上げてのテレコーディングパフォーマンスに成功しました。

●大黒淳一 × SIAF ラボ

P34

モエレ沼公園の周辺環境を生かした、環境条件によって変化する音響彫刻作品《沼紋》。SIAF ラボから石田勝也、船戸大輔が参加し、環境センサーの開発など作品制作のサポートを行いました。

●CAMP SITE PROJECT「裏庭」

P53

SIAF ラボのメンバーと、タノタイガが企画をプロデュース。SIAF 2017会期前より勉強会やワークショップを重ねてきました。SIAF 2017会期中もさまざまなイベントを行い、活動記録や、活動の中で生み出したツールを写真や動画、解説を交えてSIAFプロジェクトルームに展示しました。

●SIAF ラボ編集局 × サカナ通信

P53

2016年度より継続的に活動している「SIAF ラボ編集局 一札幌・北海道を編集するー」は、暮らしにまつわる「人・もの・こと」を題材として、この土地ならではの情報を集め、編集、発信していくプロジェクトです。SIAF2017会期中はサカナ通信との連携活動としてSIAFのプログラムへの取材、瓦版「サカナ通信」の発行、観覧者へのインタビューなどを行いました。

メインビジュアルとシンボルマーク

変化するデザイン

メインビジュアルやシンボルマークをはじめとしたデザインのすべては開催期間に照準を合わせ変化させていきました。2016年2月16日の開催概要において、「札幌国際芸術祭デザインプロジェクト」を、2016年からスタートする継続プロジェクトの一つとして以下のように説明していました。「SIAF2017を広く発信するデザインは、ワークショップを通じて、芸術祭のテーマにふさわしいデザインの考え方を整理し、まずはシンボルマークに繋げていきます。同時に、サインや看板といった必須のデザイン要素やコミュニケーションのためのデザインを共同作業として組み立てていく予定です。結果だけでなく、その過程を重視することにより、アーカイブについても学習と実践の機会となることを目指します。」ここに書かれている通り、これまで一般参加のミーティングやワークショップを重ね、会場につながる札幌の街全体の風景を視野に入れながら、どのようなデザインがSIAF2017にふさわしいかを判断するための軸を探ってきました。そこから導かれたのが右記の項目です。

●メインビジュアル



2016年8月7日発表



2017年5月11日発表



●シンボルマーク



3

実施状況

Operational Documents

1 運営

会場

- ・常設会場31カ所のうち、有料会場は11カ所。
- ・常設会場のうち9会場で来場者アンケートを実施した。（アンケート結果 P134～137）

常設会場

モエレ沼公園	RE/PLAY/SCAPE	P34～P37
札幌市東区モエレ沼公園1-1	時間：10:00～17:00 ※毎週土曜、8月11日(金・祝)、9月17日(日)は19:00まで 休園：9月9日(土) 料金：SIAFパスポート／個別鑑賞チケット [500円]	
札幌芸術の森	NEW LIFE:リプレイのない展覧会	P38～P41
札幌市南区芸術の森2丁目75	時間：8月6日(日)～31日(木) 9:45～17:30 (最終入場 17:00) 9月1日(金)～10月1日(日) 9:45～17:00 (最終入場 16:30) 料金：SIAFパスポート／個別鑑賞チケット 一般：1,100円 [団体(20人以上) 900円] 高校・大学生：600円 [団体(20人以上) 500円] ※工芸館、有島武郎旧邸は無料 ※工芸館の公開時間：10:00～11:00、12:00～13:00、14:00～15:00、16:00～17:00	
札幌市立大学 芸術の森キャンパス	毛利 悠子《そよぎ またはエコー》	P42
札幌市南区芸術の森1丁目	時間：9:45～17:00 ※9月16日(土)12:00～14:00は開場 休館：8月26日(土)・27日(日)、9月22日(金)・23日(土・祝) 料金：無料	
金市館ビル	梅田 哲也《わからないものたち》	P43
札幌市中央区南2条西2丁目1 7階	時間：13:00～20:00 休館：火曜 料金：SIAFパスポート／まちなか会場共通券 [500円]	
北専プラザ佐野ビル	・ 端 聡《Intention and substance》 ・ 札幌の三至宝：アートはこれを超えられるか！ ・ DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 (略称：DOMMUNE SAPPORO!) 展示：大友 良英、斎藤 秀三郎、篠原 有司男、中ザワヒデキ、山川 冬樹 時間：13:00～20:00 休館：月曜 ※8月7日(月)、9月18日(月・祝)は開館 料金：SIAFパスポート／まちなか会場共通券 [500円]	P45～P49
札幌市中央区南5条西3丁目2 地下1階・5階		

CAI02	DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 (略称:DOMMUNE SAPPORO!) 展示：さわひらき、札幌ループライン 時間：11:00～18:00 休館：月曜 ※8月7日(月)、9月18日(月・祝)は開館 料金：SIAFパスポート／まちなか会場共通券 [500円]	P48～P49
AGS6・3ビル	堀尾 寛太《補間》 時間：13:00～20:00 休館：月曜 ※8月7日(月)、9月18日(月・祝)は開館 料金：SIAFパスポート／まちなか会場共通券 [500円]	P44
狸小路商店街	狸小路TV 時間：展示時間は店舗による 料金：無料	P52
北海道教育大学 アーツ&スポーツ 文化複合施設 HUG	さわひらき《うろ・うろ・うろ》 時間：12:30～19:30 休館：火曜 料金：SIAFパスポート／まちなか会場共通券 [500円]	P50
札幌大通地下ギャラリー 500m美術館	中崎透×札幌×スキー「シュプールを追いかけて」 時間：7:30～22:00 休館：無休 料金：無料	P51
JRタワープラニスホール	札幌デザイン開拓使 サッポロ発のグラフィックデザイン～栗谷川健一から初音ミクまで～ 時間：13:00～19:00／土・日・祝 10:00～19:00 休館：無休 料金：SIAFパスポート／個別鑑賞チケット [500円]	P58
北海道大学総合博物館	火ノ刺繍 －「石狩シーツ」の先へ 時間：10:00～17:00 ※金曜は21:00まで 休館：月曜、9月3日(日)、9月19日(火) ※8月7日(月)、9月18日(月・祝)は開館 料金：無料	P59
札幌市資料館	・ NMAライブ・ビデオアーカイブ ・ 北海道の三至宝：アートはこれを超えられるか！ ・ テラコヤーツセンター「土砂」 ・ 札幌市資料館を拠点としたアートプロジェクト 時間：9:00～19:00 ※展示により異なる 休館：月曜、9月19日(火) 料金：無料	P53～P57
札幌市中央区大通西13丁目		

札幌市円山動物園 西門イベントハウス [旧・魔境の伝説] 札幌市中央区宮ヶ丘3-1	クワクポリョウタ《LOST #16》	P60
	時間：9:30-16:30（最終入場 16:00） 休館：第2・4水曜 料金：SIAFパスポート提示で200円（通常料金：600円） ※1回入場料を支払うと会期中に何度でも入園可	
円山公園 札幌市中央区宮ヶ丘	コタンベッププロジェクト	P61
	時間：テント貸出時間 10:00-16:00（16:30までに返却） 料金：無料	
札幌宮の森美術館 札幌市中央区宮の森2条11丁目2-1	石川直樹展「New Map for North」	P62
	時間：10:30-19:00（最終入場 18:30） 休館：火曜 料金：SIAFパスポート提示で300円 ※割引料金適用は1回のみ （通常料金 一般：800円／シニア（60歳以上）、高校・大学生：600円） 中学生以下無料	
mima 北海道立 三岸好太郎美術館 札幌市中央区北2条西15丁目	北海道立三岸好太郎美術館 開館50周年記念 特別展 大友良英アーカイブ お月さままで飛んでいく音 ＋ 三岸好太郎ワークス 飛び出す事ハ自由ダ	P66
	会期：9月2日（土）-10月1日（日） 時間：9:30-17:00（最終入場 16:30） 休館：月曜、9月19日（火）※9月18日（月・祝）は開館 料金：SIAFパスポート提示で500円／高校・大学生：250円 （通常料金 一般：610円／高校・大学生：360円／小・中学生：250円）	
TOOV cafe/gallery 札幌市中央区南9条西3丁目2-1 マジソンハイツ1階	OPEN GATE 2017 関連企画 「OPEN GATEの部屋」OPEN GATE archive room 動き続けた展覧会、動き続ける記録たち〜 The ever-changing archives of Asian Sounds Research	P65
	会期：9月6日（水）-10月1日（日） カフェスペースでの小さな展示 8月6日（日）-10月1日（日） 時間：10:30-22:00（月-土）、10:30-20:00（日） 休館：8月21日（月）、9月4日（月）、9月5日（火）※9月29日（金）は17:30まで 料金：無料	
りんご 札幌市豊平区中の島1条3丁目8-19	梅田 哲也《りんご》	P43
	時間：18:00-21:00 休館：木曜 料金：無料	
藻岩山 札幌市南区藻岩山	堀尾 寛太《テレグラフ》	P44
	時間：作品点灯時間は日没-21:30、22:30-24:00（藻岩山展望台 10:30-22:00） 休館：無休 料金：無料（展望台に行くロープウェイ、ケーブルカーの乗車料金が必要）	

〈ゲストハウス×ギャラリープロジェクト〉

Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

※いずれも休館日なし、料金無料

UNTAPPED HOSTEL 札幌市北区北18条西4丁目1-8	上ノ 大作「ハタゴ（旅籠）」、ワビサビ「METALOOKS」 相川 みつぐ「UNBEATEN-N18W5」 時間：10:00-20:00（ANNEX 15:00-20:00）
WAYA 札幌市豊平区豊平2条4丁目1-43	鈴木 悠哉「archegraph_study」 時間：19:00-23:30
雪結（yuyu） 札幌市中央区南3条東4丁目3-13	酒井 広司「胆振線 19792017」、南 阿沙美「ハトに餌をやらないでください」 時間：12:00-18:00 ※南 阿沙美 展示期間：8月6日（日）-9月3日（日）
Ten to Ten Hokkaido Hostel & Kitchen 中島公園 札幌市中央区南8条西5丁目288-5	富士 翔太郎「きこえるまち」 時間：11:00-22:00
SappoLodge 札幌市中央区南5条東1丁目1-4	白濱 雅也「熊の神」 時間：18:00-26:00
THE STAY SAPPORO 札幌市中央区南5条西9丁目1008-10	斉藤 幹男「選ばれた魚」 時間：12:00-17:00
めざましサンド店 札幌市中央区南4条東3丁目9-1 ハイツ昭和1階	相川 みつぐ「季節は巡る」 時間：8:00-17:00
札幌ゲストハウスやすべえ／ 河合珈琲 札幌市中央区南10条西7丁目6-6	東方 悠平「野生」 時間：11:00-21:00 ※展示期間：8月6日（日）-17日（木）
〈大風呂敷プロジェクト〉	
JRタワー 東・西コンコース JR 札幌駅直結	時間：1階 5:30-24:00／地下 6:00-23:30 休館：無休 ※9月28日（木）まで 料金：無料
札幌駅前通地下歩行空間 （チ・カ・ホ）	時間：5:45-24:30 休館：無休 ※9月27日（水）まで 料金：無料
大丸札幌店6階 グリーンパティオ 札幌市中央区北5条西4丁目7	時間：10:00-20:00 休館：無休 ※9月12日（火）まで 料金：無料

チケット

会期中、有料会場（一部除く）に何度も入場できるパスポートと、会場ごとの個別鑑賞チケットを販売した。

●SIAFパスポート

会期中、有料会場（一部除く）に何度も入場できるチケット

前売券



一般/市民・道民



高校・大学生

当日券



一般



市民・道民



団体



高校・大学生

	種類	料金	販売場所	販売期間
前 売 券	一般	1,500円	チケットぴあ／ローソンチケット／セブン-イレブン	
	市民・道民	1,300円 (早割1,200円) ※早割は5月31日(水)まで	札幌市内プレイガイド(道新プレイガイド、大丸プレイガイド、チケットポート札幌店)／北海道内のイオン・イオンスーパーセンター各店舗／北海道内のJAF各支部／SIAF ラウンジ	2017年5月17日(水) ～8月5日(土)
	団体(20人以上)	－	－	
	高校・大学生	700円	上記の一般、市民・道民券の販売場所	
当 日 券	一般	2,200円	モエレ沼公園／札幌芸術の森(美術館・野外美術館)／JRタワープラニスホール／金市館ビル／北専プラザ佐野ビル／CAI02／インフォメーション(大通すわろうテラス、OYOYO まち×アートセンターさっぽろ、SIAF カフェ&インフォメーション)／北海道ツーリストインフォメーションセンター札幌狸小路／北海道内のイオン・イオンスーパーセンター各店舗	2017年8月6日(日) ～10月1日(日)
	市民・道民	1,800円		
	団体(20人以上)	1,700円		
	高校・大学生	800円		

無料の方

- ・中学生以下（一部会場を除く）
- ・障がいのある方および介助される方1名（障害者手帳などを提示）
- ・学校の授業の一環として鑑賞する場合の引率教員

団体料金適用

下記、提示により適用

- ・札幌市円山動物園年間パスポート
- ・JAF 会員証

SIAF パスポートで入場できる有料会場

モエレ沼公園／札幌芸術の森／ JRタワープラニスホール／金市館ビル／北専プラザ佐野ビル／CAI02／北海道教育大学アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG／AGS6・3ビル

●個別鑑賞チケット

- ・会場ごとの入場券（入場は1回のみ）
- ・まちなか会場共通券は、5会場（金市館ビル、北専プラザ佐野ビル、CAI02、AGS6・3ビル、北海道教育大学アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG）のうち2会場に入場できるチケット



モエレ沼公園



JRタワー
プラニスホール



札幌芸術の森



まちなか会場
共通券

会場	料金	販売場所
モエレ沼公園	500円	
JRタワープラニスホール	500円	
札幌芸術の森	一般：1,100円（団体20人以上 900円） 高校・大学生：600円（団体20人以上 500円）	
まちなか会場共通券	500円	各会場 ※まちなか会場共通券は金市館ビル、北専プラザ佐野ビル、CAI02、大通すわろうテラス、OYOYO まち×アートセンターさっぽろ、北海道ツーリストインフォメーションセンター札幌狸小路で販売
札幌宮の森美術館	一般：800円（SIAFパスポート提示で300円） 60歳以上、高校・大学生：600円（SIAFパスポート提示で300円） ※割引料金適用は1回のみ	
札幌市円山動物園	高校生以上：600円（SIAFパスポート提示で200円） ※SIAFパスポートを提示して1回入場料を払うと会期中は何度でも入園可	
mima 北海道立三岸好太郎美術館	一般：610円（SIAFパスポート提示で500円） 高校・大学生：360円（SIAFパスポート提示で250円） 小・中学生：250円	

●創造都市さっぽろWAONとのセット券

SIAFパスポート（市民・道民）と創造都市さっぽろWAON（300ポイント付）とのセット。

種類	料金	販売場所
早割セット	1,400円	
前売セット	1,500円	北海道内のイオン・イオンスーパーセンター各店舗
当日セット	2,000円	

●有料イベント

販売場所：チケットぴあ、各イベント会場 ※イベントにより販売場所が異なる

開催日	イベント名	料金	SIAFパスポート 割引料金
8/5(土)・6(日)・18(金)・ 19(土)・9/16(土)	DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5 (略称:DOMMUNE SAPPORO!) 配信・収録	1,500円	1,000円
8/6(日)	クリスチャン・マークレー＋大友良英「Found Objects」	3,000円(要SIAFパスポート)	
8/10(木)・9/2(土)・14(木)	ノイズ電車関連企画 合格点	2,000円	1,000円
8/11(金・祝)・25(金)・ 9/1(金)・15(金)・29(金)	ノイズ電車 SAPPORO2017	1,000円	
8/16(水)・19(土)・20(日)	特別協力プログラム マームとジブシー 10th Anniversary Tour〈札幌公演〉	16日:1,000円(学生500円) 19・20日:各3,000円(学生各2,000円) ※当日券は500円増 ※3作品セット券:7,500円(学生4,500円)	
8/18(金)	梅田哲也ライブパフォーマンス「わからないものたち その2」	1,500円	1,000円
8/18(金)	トーク「石川直樹×アヨロバトリー」	500円	
8/18(金)	サウンド オン サイレント〜テニス Courts、細馬宏通 in シアターキノ	1,500円	
8/23(水)–26(土)	raprap	一般:3,500円 高校生以下:1,500円	
9/1(金)	パフォーマンス 吉増剛造×空間現代	1,500円	1,000円
9/2(土)	刀根康尚「AI Deviation」	1,000円	無料
9/3(日)	パフォーマンス 吉増剛造×鈴木ヒラク	1,500円	1,000円
9/3(日)	マレウレウ祭り in SIAF2017 〜目指せ100万人のウボが大合唱〜	2,500円	
9/3(日)	酒井広司・南阿沙美「夕暮れ彫刻ピクニック」	1,000円	
9/15(金)	端聡×港千尋スペシャルトーク	800円	
9/18(月・祝)	DARK ELECTRONICS WORKSHOP	1,500円 (要SIAFパスポートまたはまちなか会場共通券)	
9/21(木)	大友良英ドキュメンタリー映画『KIKOE』上映会	1,000円	
9/23(土・祝)	梅田哲也ライブパフォーマンス「わかりやすいこと」	2,000円	1,500円
9/23(土・祝)・24(日)	アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 札幌スペシャル	2,000円	無料
9/23(土・祝)・24(日)	SIAF2017市電プロジェクト×指輪ホテル 「Rest In Peace, Sapporo 〜ひかりの街をはしる星屑〜」	2,500円	
9/26(火)–9/28(木)	NMA Live–大友良英スペシャル3days	3,000円	2,000円 ※3日間セット券: 5,000円
9/29(金)	大友良英＋テニス Courts＋立花泰彦 at OYOYO	1,000円	
9/30(土)	梅田哲也オールナイトトーク「生きているのに走馬灯」	1,000円	500円

スタンプラリー

- ・会場巡りを楽しんでもらうために、スタンプラリーを実施。
- ・SIAFパスポートにスタンプラリー台紙を組み込み、12会場を巡るとクリアファイルまたはノート等を進呈した。
- ・子ども用スタンプカードも用意。6会場を巡るとノベルティ(ステッカー)を進呈した。



スタンプラリー台紙
(パスポート)



子ども用スタンプカード(表／裏)



ステッカー



スタンプ絵柄

インフォメーション

- ・会期中、市内中心部4カ所にインフォメーションを設置し、SIAF2017の情報提供やアクセス案内、スタンプラリーのノベルティ等の交換を行った。
- ・SIAFパスポート、グッズ販売を行った。※JRタワーは除く



JRタワー
JRタワー東コンコース
開業時間:10:00–18:00
休業日:無休



大通すわろうテラス
札幌市中央区南2条西4丁目(札幌ナナイロ前)
開業時間:11:00–19:00
休業日:無休



OYOYO まち×アートセンターさっぽろ
札幌市中央区南1条西6丁目8-1 第2三谷ビル6階
開業時間:18:30–22:30
休業日:月曜
※8月7日(月)、9月18日(月・祝)は開業



SIAFカフェ&インフォメーション
札幌市中央区大通西13丁目 札幌市資料館1階
開業時間:9:00–19:00
休業日:月曜、9月19日(火)
※9月18日(月・祝)は開業

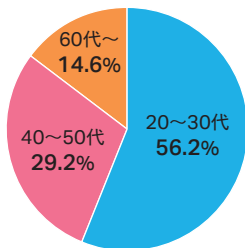
会場連絡バス

- 会期中の土日・祝日に、JR札幌駅北口～モエレ沼公園（モエレ便）、JR札幌駅北口～札幌芸術の森（芸術の森便）の2ルートの連絡バスを運行した。
- 乗車にはSIAFパスポートが必要。乗車料金は無料。
- 発車時刻の15分前から受付し、整理券を配布した。（定員52名）

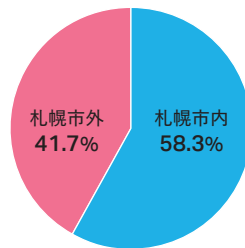
	モエレ便	芸術の森便
運行期間	2017年8月6日(日)～10月1日(日)の土日・祝日(18日間)	
	全便8月27日(日)[北海道マラソン開催のため]	
運休日	・8月11日(金・祝)～13日(日)のJR札幌駅北口発の15:15便[お盆時期による渋滞が予想されたため] ・9月9日(土)[モエレ沼公園休館日のため]	—
運行時間	JR札幌駅北口 ↔ モエレ沼公園 ・JR札幌駅北口発 10:00 11:00 14:00 15:15 ・モエレ沼公園発 12:00 13:00 16:00 17:15 ※最終便は札幌駅経由すすきの(南4西1)着 (所要時間35分)	JR札幌駅北口 → 札幌市立大学芸術の森キャンパス(降車のみ) → 札幌芸術の森入口(降車のみ) → 芸術の森センター(終点) 札幌芸術の森入口 → 石山東3丁目(停車は9月16日(土)～18日(月・祝)の最終便で降車のみ) → JR札幌駅北口(終点) ・JR札幌駅北口発 11:45 13:20 ・札幌芸術の森発 14:15 16:05 (所要時間40分)
乗車人数	2,051人	1,375人
	合計 3,426人	
平均乗車人数	15.9人/便	19.1人/便

●会場連絡バス利用者に対するアンケート結果

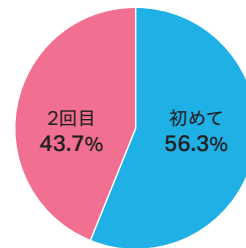
9月17日(日)、JR札幌駅北口(鐘の広場)にて実施。回答数48件



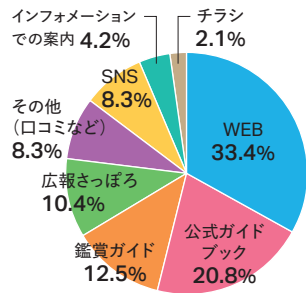
年代



居住地



利用回数



会場連絡バスを知ったきっかけ

サイン

会場案内のサインを会場敷地内や地下鉄駅構内などに設置した。

●案内サイン（地下鉄駅構内）



大通駅



さっぽろ駅



構内地図

●会場サイン



モエレ沼公園



札幌芸術の森



札幌市資料館



500m美術館



AGS6・3ビル



金市館ビル(狸小路2丁目)

2 広報・PR

パブリシティ実績

媒体	件数
新聞	246
テレビ	85
ラジオ	118
雑誌・フリーペーパー	82
ウェブサイト	291
計	822

※2015年10月1日(木)－2017年10月31日(火)
※当実行委員会で、掲載、放送の確認ができたもの

パブリシティ効果

新聞、テレビ、ラジオ、雑誌、ウェブサイトなどに無料で掲載・放送された、SIAF2017関連の記事を広告費換算すると、約3億5千万円の効果があった。

※掲載・放送された分量を広告出稿した場合の料金（株式会社インサイトによる推計）

メディアへの情報提供

●記者発表

開催概要発表に合わせて記者発表会および説明会を開催した。

開催日	会場	内容	メディア参加人数
2016年2月16日(火)	札幌市時計台ホール	テーマ、企画メンバー、会期の発表	38人
2016年8月7日(日)	札幌プラザ2・5	参加アーティスト、プロジェクト、公募企画の発表	25人
2016年12月21日(水)	Red Bull Studios Tokyo Hall (東京)	参加アーティスト、プロジェクトの追加発表	52人
2017年5月11日(木)	さっぽろテレビ塔 2階ホール	会場、プロジェクト、参加アーティストの最終発表	57人

●メールマガジン配信

会期前から適宜、メールマガジンの配信を行った。

●定例市長記者会見

札幌市政記者クラブ主催の定例市長記者会見で、10回の情報提供を行った。[2015年10月～2017年9月]

●札幌市政記者クラブへの情報提供

- ・102回の情報提供を行った。[2015年10月～2017年10月]
- ・会期中は週間イベント情報を提供した。

●プレスツアーの実施

- ・内覧会(2017年8月5日(土))および開幕日(8月6日(日))の2日間にプレスツアーを実施し、計59人が参加。各会場で、アーティストまたは企画者が作品解説を行った。
- ・2017年8月8日(火)～9日(水)に、首都圏のアート関係の記者15人を招聘した。

●海外に向けた情報発信

- ・e-flux[※]を使い、開催概要発表後と開幕後にリリース配信[2016年3月、2017年8月]
※世界中の美術関係者が利用しているメールによる展覧会の情報提供サービス
- ・英国音楽雑誌『THE WIRE』(2017年8月号)への広告掲載
- ・ユネスコ創造都市ネットワークのメディアアーツ都市共同展示会における作品展示を通じたPR(フランス アンギャン＝レ＝バンにて開催)
- ・ユネスコ創造都市ネットワークメンバーに資料配布
- ・東南アジアなどの商談会でチラシなどの配布
- ・札幌市の国際交流員が札幌の魅力を発信するFacebookページ「SapporoToday」でSIAF2017を紹介

PR映像

- ・大友良英ゲストディレクターがSIAF2017開催への思いを語ったPR映像を制作し、街頭ビジョン、AIRDOの機内ビデオ(2017年4月の1カ月間)、Youtubeで放映
- ・CM映像制作ワークショップ(主催:一般財団法人さっぽろ産業振興財団ICC、2016年7月～2017年3月開催)で学生が制作したSIAF2017のCMを街頭ビジョン、新千歳空港、映画館、Youtubeで放映
- ・SIAF2017のメインビジュアルを用いた動画をJRタワー、新千歳空港、札幌市交通局所管のデジタルサイネージで放映

インターネットを用いた広報

●公式ウェブサイト

- ・2016年8月7日(日)公開
- ・アクセス数…365,853件[2016年8月7日(日)～2017年10月2日(月)]
- ・閲覧するたびに、トップページのデザインが変わる仕様とした。
- ・会期中の平均アクセス数…3,262件/日
- ・88の国と地域からのアクセスがあった。
- ・<http://siaf.jp>

●公式フェイスブック

- ・いいね!数…8,131件[2017年10月2日(月)時点]
- ・投稿数…691件[2014年9月29日(月)～2017年10月2日(月)]
- ・<https://www.facebook.com/siaf2014info/>

●公式ツイッター

- ・フォロワー数…5,557人[2017年10月2日(月)時点]
- ・ツイート数…3,966件[2014年10月1日(水)～2017年10月2日(月)]
- ・https://twitter.com/siaf_info



公式ウェブサイト

広報印刷物

種別	発行月	数量	サイズ	種類
開催概要	2016年2月	1,500	A4/16ページ	—
開催概要	2016年8月	4,000	A4/20ページ	—
ポスター	2016年8月	2,000	B2	8種
チラシ	2016年8月	32,000	A4/両面	32種
ポストカード	2016年8月	20,000	—	8種
開催概要	2017年5月	12,000	A4/52ページ	—
ポスター	2017年5月	3,300	B2	3種
チラシ	2017年5月	80,000	A3/両面2つ折	3種
チラシ(英語)	2017年6月	10,000	A3/両面2つ折	—
子ども用チラシ	2017年6月	70,000	A4/両面	—
チラシ	2017年7月	100,000	A2/両面4つ折	3種
ポスター(交通広告用)	2017年7月	1,080	B3	—
鑑賞ガイド	2017年8月	60,000	A5/68ページ	—



ポスター(2016年8月)



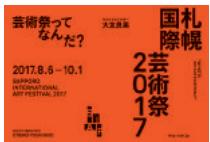
ポスター(2017年5月)



チラシ(2016年8月)



チラシ(2017年5月)



ポストカード

●プロジェクト・イベントのチラシ・ポスター

- ・SIAFパブリックミーティング
- ・さっぽろコレクティブ・オーケストラ
- ・一緒につくろう芸術祭公募プロジェクト
- ・ウポポピクニック
- ・ボランティアプロジェクト
- ・大風呂敷プロジェクト
- ・トット商店街(ポスター、ポストカードあり)
- ・ボランティア募集
- ・さっぽろ八月祭2017
- ・ノイズ電車SAPPORO2017
- ・市電放送局 JOSIAF
- ・SIAF2017市電プロジェクト×指輪ホテル「Rest In Peace, Sapporo～ひかりの街をはしる星屑～」
- ・NMA Live-大友良英スペシャル3days
- ・サカナ通信
- ・狸小路TV
- ・raprap
- ・マレウレウ祭り in SIAF2017
- ・中島公園百物語
- ・アジアン・ミーティング・フェスティバル2017
- ・OPEN GATE 2017
- ・マームとジブシー 10th Anniversary Tour
- ・大友良英アーカイブ お月さままで飛んでいく音＋三岸好太郎ワークス 飛び出す事ハ自由ダ
- ・札幌デザイン開拓使
- ・モエレ沼公園 音楽&アート解放区



一緒につくろう芸術祭
公募プロジェクト



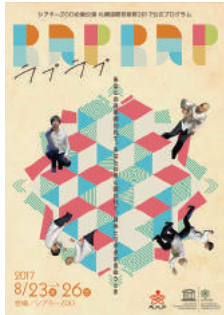
トット商店街(ポスター)



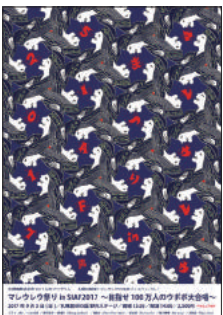
ノイズ電車 SAPPORO
2017



指輪ホテル
「Rest In Peace, Sapporo
～ひかりの街をはしる星屑～」



raprap



マレウレウ祭り in
SIAF2017



中島公園百物語



アジアン・ミーティング・
フェスティバル2017



OPEN GATE 2017



大友良英アーカイブ＋
三岸好太郎ワークス

ノベルティ

うちわ(1万部)、ポケットティッシュ(2万部)を作成し、すすきの祭り、さっぽろ夏まつりのほか、各種イベントで配布した。



札幌市広報媒体の活用

● 広報さっぽろ

- 毎月、市内全世帯に配布する広報誌（発行部数103万部）に情報を掲載し、SIAF2017の認知度向上と集客を図った。
- 2017年5月号から9月号までは毎月、SIAF2017の企画を紹介。芸術祭に興味を持ってもらえるように、企画メンバーのインタビューや作品紹介を掲載した。

月日	掲載ページ	ページ数	内容
2015年11月	今月のニュース	1/3	SIAF2017ゲストディレクターが決定
2016年2月	企画	1/4	パブリックミーティング開催の案内
2016年3月	今月のニュース	2/3	SIAF2017の開催概要が決定
2016年6月	今月の話題	1/3	さっぽろコレクティブ・オーケストラ ワークショップ参加者募集
2016年7月	今月のニュース	2/3	プレイベント（さっぽろ八月祭）、SIAFパブリックミーティング
2016年9月	今月のニュース	2/3	企画発表
2017年1月	今月のニュース	1/2	トット商店街、さっぽろ垂氷まつり
2017年3月	企画	1/4	大風呂敷制作体験会
2017年4月	特集	1/5	平成29年度予算の概要ページでの紹介
2017年5月	企画	1	企画メンバーにインタビュー
2017年5月	今月の話題	1/3	ボランティア募集
2017年6月	今月のニュース	1	SIAF2017の全貌（企画紹介など）
2017年7月	子ども向けのページ	1	中島公園百物語、毛利悠子《そよぎまたはエコー》、さっぽろ八月祭を紹介
2017年7月	中央区版 特集	1/3	CAI02、資料館会場の紹介
2017年7月	南区版 特集	2	札幌芸術の森、札幌市立大学、石山緑地会場の紹介
2017年8月	特集	4	モエレ沼公園、北専プラザ佐野ビルなどの各会場の作品紹介
2017年8月	東区版 特集	2	モエレ沼公園会場の紹介
2017年8月	南区版 特集	1/5	開催案内と芸術の森の紹介
2017年9月	企画	2	広報モニターと行く芸術の森エリア

● 広報番組（テレビ）

月日	時間	番組名	放送局	内容
2016年9月10日（土）	11:54～11:59	札幌ふるさと再発見	STV	公募プロジェクト選定団体のインタビュー
2017年3月14日（火）	22:54～22:59	ウォッチングさっぽろ	TVh	おどおり大風呂敷工場
2017年3月18日（土）	11:54～11:59	札幌ふるさと再発見	STV	CM映像制作ワークショップ
2017年5月20日（土）	11:54～11:59	札幌ふるさと再発見	STV	市電をデザインして芸術祭を盛り上げよう
2017年7月1日（土）	11:54～11:59	札幌ふるさと再発見	STV	さっぽろコレクティブ・オーケストラ
2017年9月14日（木）	22:54～22:59	ウォッチングさっぽろ	TVh	好評開催中！札幌国際芸術祭2017

● 広報番組（ラジオ）

月日	時間	番組名	放送局	内容
2016年5月20日（金）	11:35～11:45	サッポロ・シティ・ナビ	NORTH WAVE	大友ゲストディレクターがテーマ、プロジェクトを語る
2016年8月5日（土）	11:35～11:45	サッポロ・シティ・ナビ	NORTH WAVE	大友ゲストディレクターがプレイベントなどを語る
2017年6月3日（土）	11:30～11:45	さっぽろ散歩	STV	芸術祭の概要
2017年8月8日（火）	9:35～9:45	スマイルさっぽろ	HBC	市長生出演（SIAF2017を紹介）
2017年8月26日（土）	11:30～11:45	さっぽろ散歩	STV	大友ゲストディレクターが語るSIAF2017

その他

- 札幌市公式ホームページのトップページに、SIAF2017のバナーを掲載
- 札幌市内の小学校4～6年生向けに、絵本のキャラクターおぼけのマールがSIAF2017の会場や展示の内容を紹介するチラシを配布
- 旅行ガイドブック『ことりっぶ』（昭文社）とのコラボレーションにより、フリーペーパー『札幌国際芸術祭2017 アートと食を楽しむ札幌さんぽ』を作成し、市内・市外各所に配布



ことりっぶ

交通機関との連携

- 地下鉄車内、バス車内（ジェイ・アール北海道バス、北海道中央バス、じょうてつバス）にポスターを掲示
- 地下鉄さっぽろ駅と大通駅の構内3カ所に大型ポスターを掲示
- ラッピング電車「市電SIAF号」を運行
- 札幌ハイヤー協会加盟のタクシーや地下鉄車内にステッカーを掲出
- 夢大地北海道ガイドタクシーの勉強会でSIAF2017を説明



市電SIAF号

広告掲載

- ・ 各種マスメディア
- ・ 札幌駅前通地下歩行空間〔2017年7月31日(月)–8月13日(日)、2017年8月28日(月)–9月10日(日)〕

●マスメディアへの純広告

媒体	出稿数
新聞	9件
テレビ	0件
ラジオ	40件
雑誌・フリーペーパー	21件
ウェブサイト・SNS	13件
計	83件

※2017年4月1日(土)～2017年10月1日(日)

旅行業界関係者向けPR

- ・ 2016年11月24日(木)、SIAF2017の概要説明会を札幌市役所にて開催(17社28名が参加)
- ・ 2016年11月17日(木)、2017年5月18日(木)、北海道観光振興機構が主催する北海道ブロック記者発表会(開催地 東京)に参加
- ・ 2016年9月15日(木)、2017年9月14日(木)、札幌市国内観光プロモーション実行委員会が主催する「観光説明商談会・視察会」に参加
- ・ 2017年5月24日(水)、25日(木)、6月1日(木)、2日(金)、北海道観光振興機構が主催する北海道観光商談会でPR(名古屋、大阪、東京、仙台で実施)

街頭PR

- ・ 大丸札幌店、丸井今井札幌本店、地下鉄大通駅構内、地下街(オーロラタウン、ポールタウン)などに懸垂幕、横断幕、バナーを設置
- ・ 札幌駅前通地下歩行空間に広告を掲出(再掲)
- ・ 市内10区の区役所にバナースタンドを設置
- ・ すずきのの音声放送でSIAF2017を告知



大丸札幌店



丸井今井札幌本店



地下街

3 ガイドブック

SIAF2017の展示作品やパフォーマンスの紹介、鑑賞コースの提案、参加アーティストによるコラムのほか、芸術祭以外の訪れたい場所やイベント情報、北海道内の美術館情報、バンドメンバー(企画メンバー)や事務局スタッフのおすすめのお店など、芸術祭閉幕後も活用できる内容のガイドブックを発行した。



タイトル 完全コンプリートガイド 札幌へアートの旅 札幌国際芸術祭2017公式ガイドブック

発売日 2017年7月3日(月) ※北海道での販売は7月5日(水)から

判型 A5変形版 / 172ページ

発行部数 1万部

販売価格 1,200円(税込)

販売場所 全国書店、インターネット、SIAFインフォメーション(大通すわろうテラス、札幌市資料館、OYOYOまち×アートセンターさっぽろ)、札幌芸術の森美術館、モエレ沼公園など

内容 Chapter 1 いつものまちが見慣れぬ風景に! SIAF2017という事件
Chapter 2 何を見る? どう巡る? アートを飛び出したアートを体験せよ!
Chapter 3 SIAFへ、そしてその先へ 北海道、アートな旅ガイド
Chapter 4 SIAF2017 旅のアドバイスとインフォメーション

発行 株式会社マガジンハウス

編集 コロカル編集部

4 グッズ

メインビジュアル・シンボルマークのデザインを用いた公式グッズを販売した。



パスケース+ストラップ
各450円
ストラップのカラー：
シアン、マゼンタ、イエロー



クリアファイル
200円
サイズ：A4



ノート
350円
サイズ：A5方眼



缶バッジ
各300円
13種類



鈴木昭男《点 音》刺繍バッジ
各500円
刺繍のカラー：黒、白



「札幌ループライン」マスキングテープ
各500円
カラー：黒、白



Tシャツ
各3,500円
サイズ：XS～L
カラー：白、黒



エコバック
2,000円



タオル
各1,500円
カラー：マゼンタ、イエロー、シアン

5 連携

企画運営や広報において、各種団体と連携、協力を行った。

●企画運営

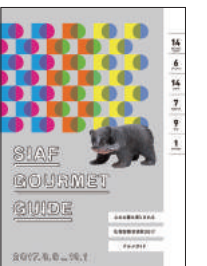
- ・文化施設との共同企画（mima 北海道立三岸好太郎美術館、札幌宮の森美術館）
- ・大学施設を活用した展示（札幌市立大学、北海道大学、北海道教育大学）
- ・大風呂敷プロジェクトとの連携（札幌駅前通まちづくり株式会社／札幌駅総合開発株式会社／株式会社大丸松坂屋百貨店大丸札幌店／イオン北海道株式会社／株式会社北洋銀行）
- ・SIAFパスポート販売（北海道内のイオン・イオンスーパーセンターの各店舗、北海道内のJAF各支部）

●広報協力

- ・大丸札幌店、丸井今井札幌本店の壁面に懸垂幕を掲出（2017年7月～10月）
- ・キャリアバンク、読売新聞北海道支社主催「朝活」で、SIAF2017の説明（2017年5月）
- ・紀伊國屋書店札幌本店で友友良英ゲストディレクターのトークを開催（2017年7月）
- ・雑誌、ラジオのタイアップで、SIAFパスポートプレゼントを実施
- ・すすきの祭り、サッポロ・シティ・ジャズ、PMFでのチラシ等の配布
- ・市内各ホテルでのSIAF2017ポスター掲示、チラシ配布（約100カ所に送付）
- ・ホテル アンワインド札幌とプレス招聘ツアーでの広報協力
- ・大風呂敷プロジェクトで中山ミシン マネキン人形「千鳥ふみ子」さんが応援隊長に就任

●コラボレーションメニューの開発・販売、応援店舗での広報連携

- ・札幌市内の飲食店49店舗とコラボレーションし、期間限定のメニューやSIAFパスポート特典を提供。これらの情報を掲載した「SIAFグルメガイド」を3万部発行
- ・さっぽろオータムフェスト会場の「さっぽろシェフズキッチン」と「さっぽろアフタヌーン Bar & Lounge」で、SIAF2017とコラボレーションしたスペシャルメニューを提供
- ・SIAFのポスター、チラシを店内に設置するSIAF応援店舗を募集し、コラボレーション店舗と合わせて約100カ所にポスター、チラシを設置



SIAFグルメガイド

●「一緒につくろう芸術祭公募プロジェクト」応募事業との広報連携

- ・北海道大学（TERRACE-科学とアートが会える場所-）との企画・広報協力
- ・一般社団法人北海道ダンスプロジェクト（我楽多-1（GARAKUTA-ICHI）にいらっしゃい!!）との広報協力
- ・DCMホームマック株式会社（カミネッコン・アート in チカホ2017）との広報協力

●その他各種団体との広報連携

- ・札幌交響楽団（定期演奏会でのブース設置）
- ・札幌演劇シーズン実行委員会（札幌演劇シーズン2017夏との広報協力）
- ・NPO法人北海道を発信する写真家ネットワーク（北1条さっぽろ歴史写真館展示「さっぽろ時空を越える視点」との広報協力）
- ・さっぽろアートボランティア・ネットワーク（V-net）
- ・シアターキノ
- ・札幌時計台指定管理者 エムエムエスマンションマネジメントサービス株式会社（札幌市時計台舞台「盲目のサロルンカムイ」との広報協力）
- ・一般財団法人公園財団（国営滝野すずらん丘陵公園との広報協力）
- ・札幌広域圏組合（ISHIKARI SAND FESTIVALでのブース設置）
- ・苫小牧市美術博物館（NITTAN ART FILE2、中庭展示での広報協力、トークイベント実施）
- ・飛生芸術祭実行委員会（TOBIU CAMPでのブース設置）
- ・NPO法人 樽前arty+（樽前arty2017との広報協力）

6 ボランティア

- ・ 市民が主体となる活動を模索するため、2016年10月に市民と一緒にボランティア活動の仕組みを考えていく「ボランティアプロジェクト」を立ち上げ、参加者とともに検討を重ねた。その結果、展示(札幌大通地下ギャラリー500 m美術館、モエレ沼公園など)やプロジェクト(大風呂敷プロジェクト、市電プロジェクトなど)のサポート活動とボランティアによる自発的な活動「SIAFたんけん隊(何かやり隊)」の2種類を実施することとなった。なお、前回(2014)は、ボランティア中心で行った展覧会会場における作品監視や会場案内を見直し、今回は業者委託により行った。
- ・ 「SIAFたんけん隊(何かやり隊)」では、北専プラザ佐野ビル会場でのコンシェルジュ活動(会場案内、作品解説、近隣会場への誘導など)、バリア情報発信、学生向けボランティア案内、ボランティアによるボランティアのための情報発信の4つの活動を行った。
- ・ 活動に参加するには、事前登録が必要で、2017年5月11日(木)より登録を開始した。
(登録条件は、原則15歳以上(中学生は除く)で活動マニュアル等を遵守できる方)
- ・ ボランティア参加者への待遇は、ボランティア保険加入(参加者負担なし)、SIAFパスポート、パスケースを進呈した。
- ・ 会期中は、札幌市資料館会場内にボランティアセンターを設置し、情報発信や問い合わせ対応を行った。

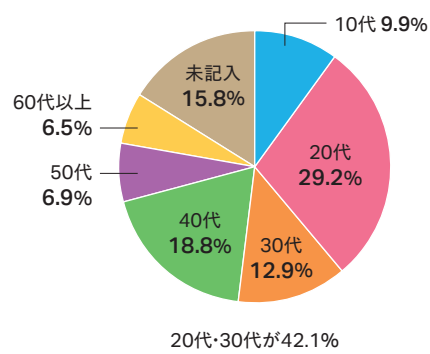
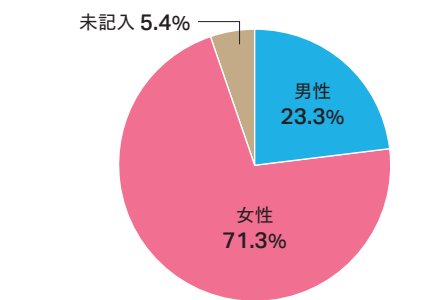
構成

- ・ 登録者数 356 人
- ・ 会期中活動人数 202 人
- ・ 活動参加のべ人数 852 人

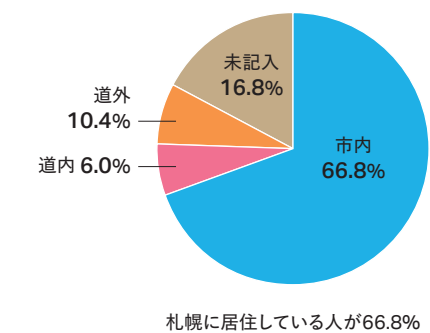
活動者の属性

●性別		
	人数	割合
男性	47 人	23.3 %
女性	144 人	71.3 %
未記入	11 人	5.4 %
合計	202 人	100 %

●年齢		
	人数	割合
10代	20 人	9.9 %
20代	59 人	29.2 %
30代	26 人	12.9 %
40代	38 人	18.8 %
50代	14 人	6.9 %
60代以上	13 人	6.5 %
未記入	32 人	15.8 %
合計	202 人	100 %



●居住地		
	人数	割合
市内	135 人	66.8 %
道内	12 人	6.0 %
道外	21 人	10.4 %
未記入	34 人	16.8 %
合計	202 人	100 %



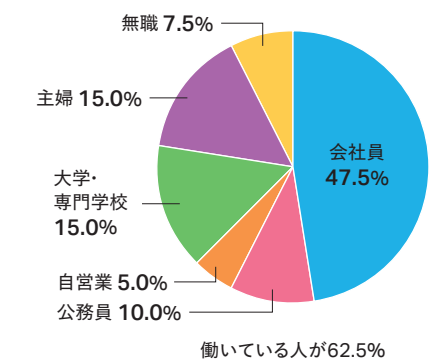
ミーティング・説明会

- ・ ボランティアプロジェクト 2016年10月～2017年2月(3回) [参加人数:計95人]
- ・ ボランティア説明会 2017年5月20日(土) 10:00～11:30 [参加人数:52人]
2017年5月24日(水) 18:30～20:00 [参加人数:60人]

アンケート結果

活動参加者にアンケート調査を行った。(回答数 40件)

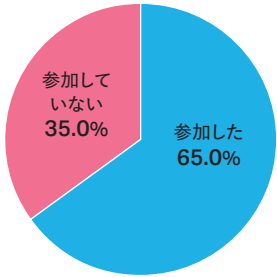
●職業		
	人数	割合
会社員	19 人	47.5 %
公務員	4 人	10.0 %
自営業	2 人	5.0 %
大学・専門学校	6 人	15.0 %
主婦	6 人	15.0 %
無職	3 人	7.5 %
合計	40 人	100 %



●ボランティア参加の理由 (複数回答可)	
SIAFに関心がある	87.5%
現代アートに関心がある	50.0%
ボランティア活動に興味がある	40.0%
アートイベントに興味がある	32.5%
前回のボランティアに参加して楽しかった	27.5%
アート関係の仕事をしている	7.5%
知人・友人に誘われた	7.5%
その他	5%

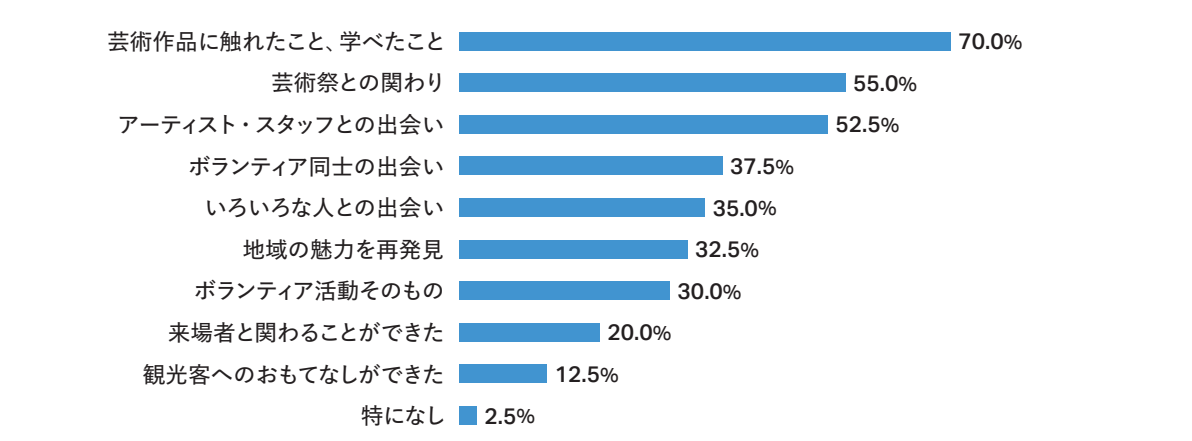
● 前回 SIAF2014のボランティア経験

	人数	割合
参加した	26 人	65.0 %
参加していない	14 人	35.0 %
合計	40 人	100 %



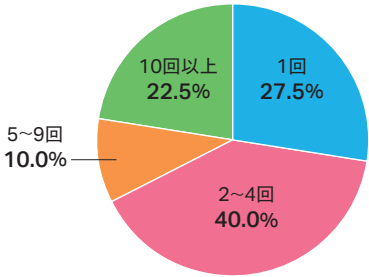
前回のボランティア参加者が65%

● 参加して良かったこと（複数回答可）



● 活動回数について

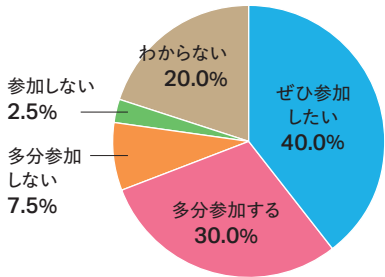
	人数	割合
1回	11 人	27.5 %
2～4回	16 人	40.0 %
5～9回	4 人	10.0 %
10回以上	9 人	22.5 %
合計	40 人	100 %



複数回参加した人が72.5%

● 次回 SIAF のボランティアに参加したいか

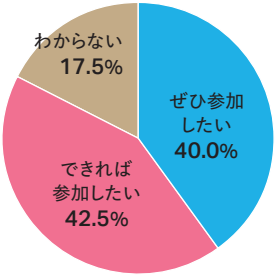
	人数	割合
ぜひ参加したい	16 人	40.0 %
多分参加する	12 人	30.0 %
多分参加しない	3 人	7.5 %
参加しない	1 人	2.5 %
わからない	8 人	20.0 %
合計	40 人	100 %



次回も参加したい、多分参加する人が70%

● 今後、SIAF のボランティアに関するワークショップなどに参加したいか

	人数	割合
ぜひ参加したい	16 人	40.0 %
できれば参加したい	17 人	42.5 %
わからない	7 人	17.5 %
合計	40 人	100 %



今後も参加したい人が82.5%

● 自由意見

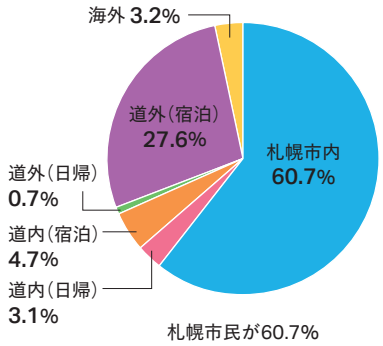
- ・ ボランティア初心者には単純な仕事、作業の方が関わりやすい。
- ・ 前は作品監視で長時間参加したこともあり大変だったが、来場者とのふれあいやボランティア同士の交流などもあり、とても有意義だった。今回はとても楽しかったが、ほとんど交流などがなく残念。
- ・ ボランティア同士の交流の場をもっと用意してほしい。
- ・ ボランティア同士の交流や作品を見たり、作家から解説を受けたりして楽しめた。
- ・ 楽しかった反面、戸惑う場面も多かった。
- ・ 今回はボランティアが活動できる場所が少なかった。もっといろいろな所のボランティアができれば、もう少し楽しめたかもしれない。
- ・ ボランティアの参加可能な日程を、活動ごとに一覧できれば、予定が立てやすかった。
- ・ この芸術祭だけに留まらない事後的な活動も活発であるとよいと思う。
- ・ 作家や大友ゲストディレクターと関わってよかった。

7 来場者数

- ・ 目標35万人に対し、38万1,697人であった。（109%）
- ・ 来場者構成は、展示会場で実施したアンケート結果などから、札幌市民60.7%、北海道外は28.3%、海外からは3.2%と推計した。

● 来場者構成

	割合
札幌市内	60.7 %
道内(日帰)	3.1 %
道内(宿泊)	4.7 %
道外(日帰)	0.7 %
道外(宿泊)	27.6 %
海外	3.2 %
合計	100 %



札幌市民が60.7%

会場別来場者数

モエレ沼公園への来場者が13万7,182人(35.9%)と多く、次いで札幌大通地下ギャラリー 500m美術館が5万8,368人(15.3%)、札幌市資料館が4万4,594人(11.7%)であった。

●SIAF2017 会場別来場者数

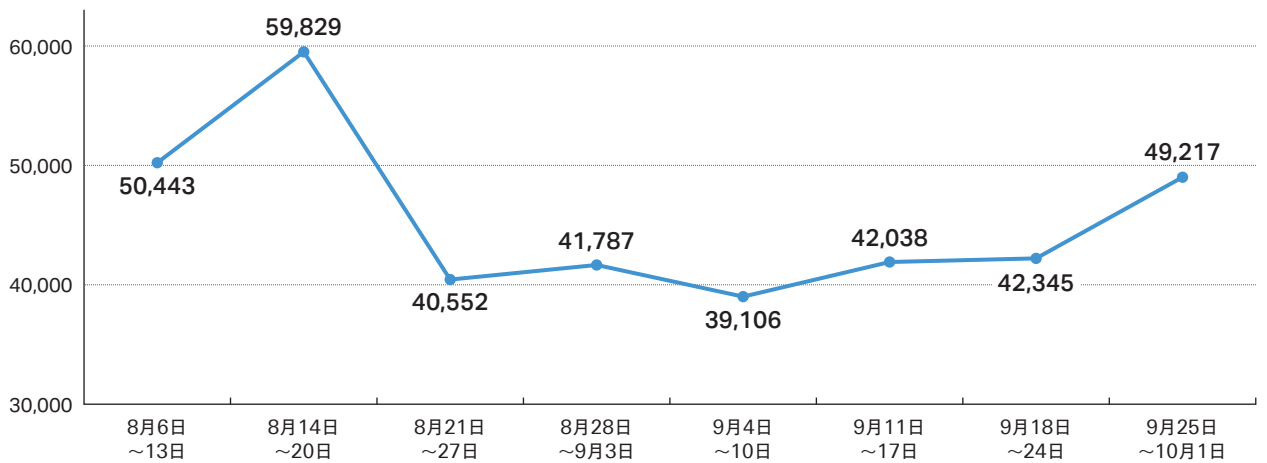
会場	プログラム	来場者数	割合
モエレ沼公園	RE/PLAY/SCAPE	137,182 人	35.9 %
札幌芸術の森	NEW LIFE:リブレイのない展覧会	44,077 人	11.6 %
札幌市立大学 芸術の森キャンパス	毛利 悠子《そよぎ またはエコー》	5,272 人	1.4 %
金市館ビル	梅田 哲也《わからないものたち》	5,070 人	1.3 %
北専プラザ佐野ビル	端 聡《Intention and substance》、札幌の三至宝、DOMMUNE SAPPORO!	6,067 人	1.6 %
AGS6・3ビル	堀尾 寛太《補間》	3,874 人	1.0 %
北海道教育大学アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG	さわひらき《うろ・うろ・うろ》	2,793 人	0.7 %
札幌大通地下ギャラリー 500m美術館	中崎 透×札幌×スキー「シュプールを追いかけて」	58,368 人	15.3 %
札幌市資料館	NMAライブ・ビデオアーカイブ、テラコヤーツセンター「土砂」、北海道の三至宝、資料館を拠点としたアートプロジェクト	44,594 人	11.7 %
CAI02	DOMMUNE SAPPORO!	2,751 人	0.7 %
JRタワープラニスホール	札幌デザイン開拓使	6,125 人	1.6 %
北海道大学総合博物館	吉増剛造 火ノ刺繍―「石狩シーツ」の先へ	10,234 人	2.7 %
mima 北海道立三岸好太郎美術館	大友良英アーカイブ＋三岸好太郎ワークス	2,995 人	0.8 %
札幌市円山動物園	クワクボリョウタ《LOST #16》	11,360 人	3.0 %
札幌宮の森美術館	石川直樹展「New Map for North」	3,510 人	0.9 %
りんご	梅田 哲也《りんご》	1,086 人	0.3 %
藻岩山	堀尾 寛太《テレグラフ》	2,036 人	0.5 %
その他展示会場	ゲストハウスなど	17,923 人	4.7 %
イベント		16,380 人	4.3 %
合計		381,697 人	100 %

開催日別来場者数

- ・開催日別におけるイベントを除く来場者数は、会期57日間で36万5,317人で、1日あたりの平均は6,409人となった。
- ・最多来場日は、9月24日(日)の1万1,335人となった。

8月				9月				10月			
曜日	天候	来場者数		曜日	天候	来場者数		曜日	天候	来場者数	
8月6日	日	晴	6,970人	—				—			
8月7日	月	晴	4,347人	8月28日	月	曇	3,567人	9月18日	月・祝	大雨	3,371人
8月8日	火	晴	5,810人	8月29日	火	曇	3,967人	9月19日	火	雨	4,312人
8月9日	水	雨	6,308人	8月30日	水	晴	6,351人	9月20日	水	晴	4,479人
8月10日	木	曇	5,918人	8月31日	木	晴	5,330人	9月21日	木	晴	5,465人
8月11日	金・祝	曇	7,956人	9月1日	金	晴	5,579人	9月22日	金	晴	5,671人
8月12日	土	雨	5,242人	9月2日	土	曇	8,003人	9月23日	土・祝	曇	7,712人
8月13日	日	曇	7,892人	9月3日	日	晴	8,990人	9月24日	日	晴	11,335人
小計			50,443人	小計			41,787人	小計			42,345人
8月14日	月	晴	7,444人	9月4日	月	晴	3,085人	9月25日	月	晴	3,557人
8月15日	火	晴	9,595人	9月5日	火	晴	5,261人	9月26日	火	晴	5,829人
8月16日	水	晴	7,724人	9月6日	水	晴	4,981人	9月27日	水	曇	4,575人
8月17日	木	曇	7,539人	9月7日	木	晴	4,537人	9月28日	木	曇	5,042人
8月18日	金	晴	7,179人	9月8日	金	晴	6,151人	9月29日	金	曇	8,227人
8月19日	土	晴	10,821人	9月9日	土	晴	5,576人	9月30日	土	晴	10,902人
8月20日	日	晴	9,527人	9月10日	日	晴	9,515人	10月1日	日	晴	11,085人
小計			59,829人	小計			39,106人	小計			49,217人
8月21日	月	晴	6,298人	9月11日	月	曇	3,665人				
8月22日	火	雨	3,385人	9月12日	火	雨	3,936人				
8月23日	水	晴	4,909人	9月13日	水	雨	4,527人				
8月24日	木	雨	4,760人	9月14日	木	晴	4,701人				
8月25日	金	晴	5,731人	9月15日	金	晴	6,033人				
8月26日	土	曇	6,893人	9月16日	土	晴	9,466人				
8月27日	日	晴	8,576人	9月17日	日	曇	9,710人				
小計			40,552人	小計			42,038人				

● 週別の来場者数動向



※第1週は8月6日(日)～8月13日(日)の8日間の合計

8 アンケート

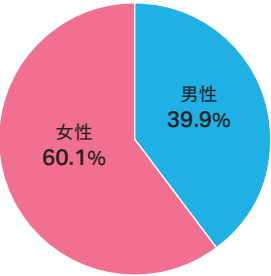
来場者の属性や満足度、意見などを把握するため、9会場（モエレ沼公園、札幌芸術の森、札幌市立大学、北専プラザ佐野ビル、北海道教育大学アーツ&スポーツ文化複合施設 HUG、札幌市資料館、JRタワープラニスホール、北海道大学総合博物館、札幌宮の森美術館）で来場者アンケート調査を実施した。（回答者数3,253人）

※表記の割合（％）は、選択肢ごとに小数点第二位を四捨五入しているため、単一回答の設問であっても合計が100％にならない場合がある。
※各設問で、未記入などで回答内容が不明な場合は人数から除いている。

属性

●性別

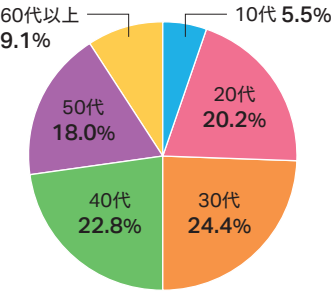
	人数	割合
男性	1,267 人	39.9 %
女性	1,908 人	60.1 %
合計	3,175 人	100 %



男女比は前回（2014）とほぼ同じ

●年齢

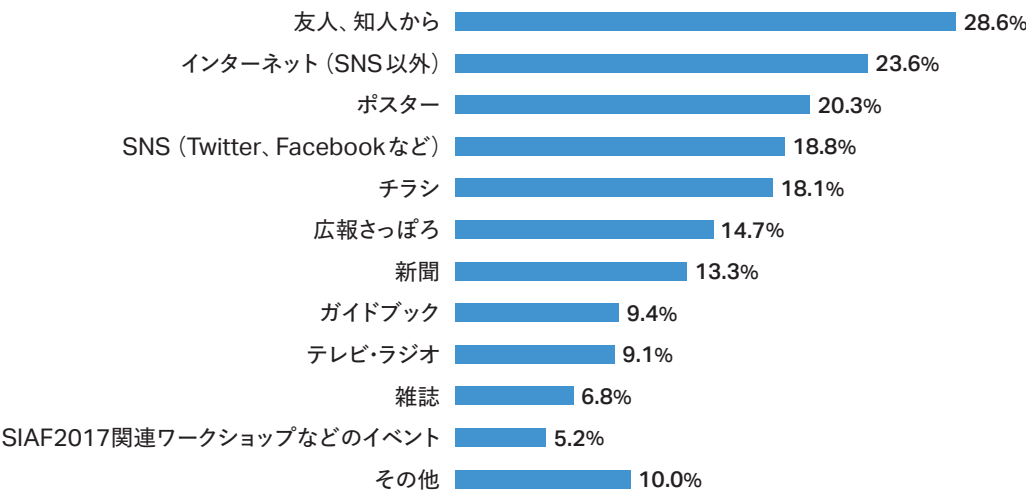
	人数	割合
10代	179 人	5.5 %
20代	652 人	20.2 %
30代	788 人	24.4 %
40代	739 人	22.8 %
50代	583 人	18.0 %
60代以上	293 人	9.1 %
合計	3,234 人	100 %



20代～40代がほぼ同じ割合

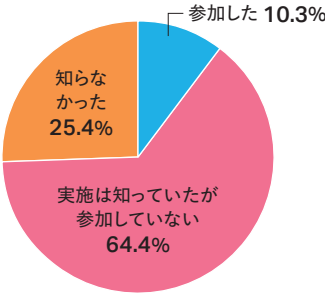
来場のきっかけ、理由、交通手段について

●どのようにしてSIAF2017が開催されることを知りましたか。（複数回答可）



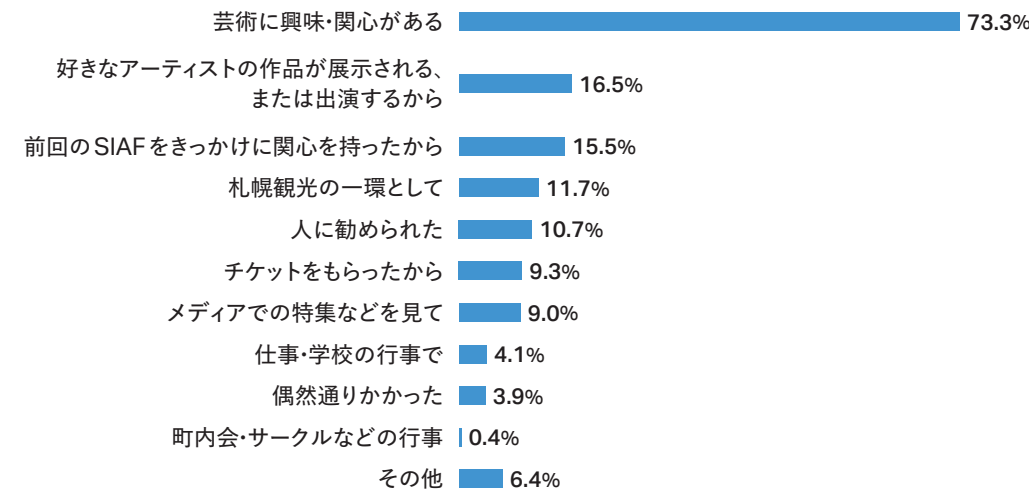
●SIAF2017では、会期前から公式プログラムの関連ワークショップなど、さまざまな市民参加型イベントを実施していたことをご存知でしたか。

	人数	割合
参加した	308 人	10.3 %
実施は知っていたが参加していない	1,934 人	64.4 %
実施していることを知らなかった	762 人	25.4 %
合計	3,004 人	100 %

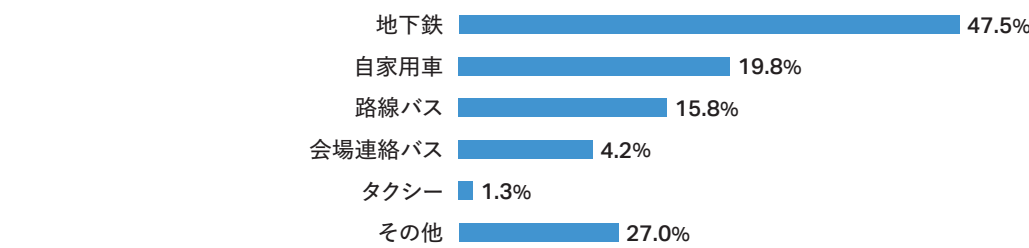


7割以上が会期前イベントを知っていた

●SIAF2017をご覧になった理由を教えてください。（複数回答可）



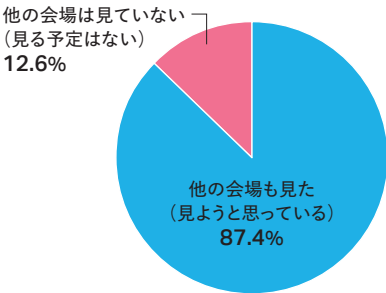
●本日は、どのような交通手段を使ってお越しになりましたか。札幌市内の移動に伴う交通手段をお答えください。（複数回答可）



観覧について

●ご覧の会場以外にも、市内のさまざまな場所で展示やイベントが行われています。あなたは、他の会場もご覧になりましたか。または、ご覧になる予定ですか。

	人数	割合
他の会場も見た（見ようと思っている）	2,631 人	87.4 %
他の会場は見えていない（見る予定はない）	380 人	12.6 %
合計	3,011 人	100 %



複数の会場を観覧する（予定を含む）人が87.4%

●SIAF パスポートを使って、同じ会場を複数回ご覧になりましたか。

		人数	割合
見た(見ようと思っている)	全体	1,324人	45.8%
	(札幌市民)	(963人)	(53.6%)
見ていない(見る予定はない)	全体	1,567人	54.2%
	(札幌市民)	(834人)	(46.4%)
合計	全体	2,891人	100%
	(札幌市民)	(1,797人)	

全般について

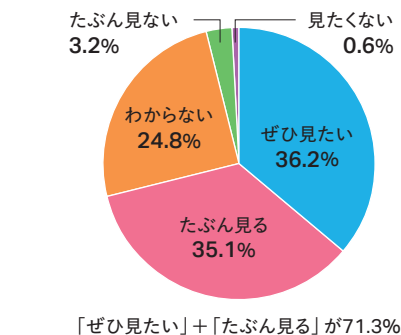
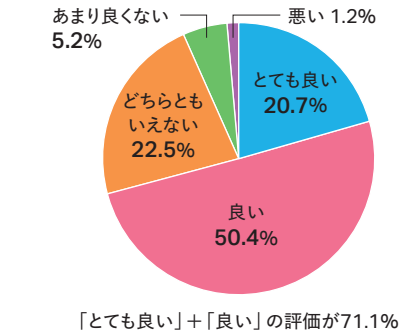
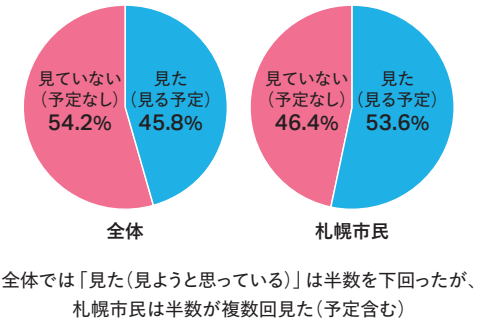
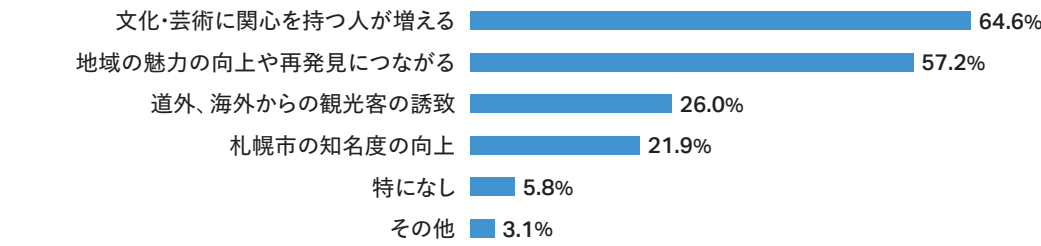
●SIAF2017の全体的な感想をお聞かせください。

	人数	割合
とても良い	615人	20.7%
良い	1,500人	50.4%
どちらともいえない	671人	22.5%
あまり良くない	154人	5.2%
悪い	37人	1.2%
合計	2,977人	100%

●SIAFは3年に1度の開催予定です。次回もご覧になりたいと思いますか。

	人数	割合
ぜひ見たい	1,093人	36.2%
たぶん見る	1,060人	35.1%
わからない	747人	24.8%
たぶん見ない	98人	3.2%
見たくない	18人	0.6%
合計	3,016人	100%

●SIAFには、どのような効果があると思いますか。(複数回答可)



自由意見(抜粋)

●展示内容等について

- ・普通の美術館や展覧会にはないような作品ばかりで、とても新鮮だった。
- ・これほどアーティストと接する機会がある芸術祭は今までになく、よかった。
- ・参加してみると楽しめる芸術祭であったが、内容に偏りがあった。
- ・芸術の裾野を広げるためには、もっと分かりやすい作品がよい。
- ・会場間の移動に時間がかかるわりには、1会場の展示が物足りなかった。
- ・メインとなる作品、見どころが分かりにくい。
- ・もっと海外のアーティストを呼んでほしい。
- ・子どもと一緒に楽しめるものを増やしてほしい。

●作品解説について

- ・スタッフの説明で、作品が物だけでなく、空間・光・音の全てだと理解した時に感動した。
- ・作品解説、地域との関わり、鑑賞のポイントなどを分かりやすい言葉で解説してほしい。

●広報、PRについて

- ・ウェブサイトやパンフレットの情報が集約されておらず、知りたい情報を探しにくかった。
- ・市民の認知度がまだまだ足りない。興味・関心がある人だけの内輪受けになってはいけない。
- ・告知や申込方法がウェブサイトのものが多く、関心があっても知る機会がなかった。

●会場、アクセスなどについて

- ・観光目的では訪れないような場所に行くことができてよかった。
- ・SIAF パスポートの特典の会場連絡バスが便利だった。
- ・会場が分散しすぎて、各会場に行きにくかった。
- ・会場の案内、地図が分かりにくい。
- ・階段だけの会場もあり不便だった。障がいのある方や高齢の方にも配慮した会場にしてほしい。
- ・複数の会場を巡る無料(格安)のバスがあると会場を回しやすい。

●会場連絡バスについて

- ・会場連絡バスの情報が分かりづらい。ウェブサイトの情報も見づらかった。
- ・SIAF パスポート特典であれば、パスポート購入時に会場連絡バスの情報がほしかった。
- ・バス受付時の整理券番号と乗車順は連動させた方がよい。不公平感が残った。
- ・平日も運行してほしい。

●SIAF パスポート、チケットについて

- ・パスポートをきっかけに、札幌市内のさまざまな場所を巡ることができて楽しかった。
- ・パスポートやチケットは、どの会場でも購入できるようにしてほしい。
- ・市外の方は、各会場が離れているため見る会場を最低限に絞らざるを得ず、パスポートは割高感があった。

●その他

- ・ほかの芸術祭や市内のイベントなどと連携できるとおもしろいと思う。
- ・もっと学生に参加してもらい、市民参加の流れをつくってほしい。

9 経済波及効果

SIAF2017開催により、約49億円の経済波及効果があったと推計した。

市内支出額 ①	1次波及効果 ②	2次波及効果 ③	波及効果合計 ①+②+③
34億2,700万円	7億9,700万円	6億6,700万円	48億9,100万円

- ・ 市内支出額：来場者が札幌市内で飲食、買い物、移動、宿泊をした際に支出した額
- ・ 1次波及効果：市内支出額による需要発生が、その他の産業にもたらす生産誘発額
- ・ 2次波及効果：需要の発生により雇用者の所得が生まれるが、その雇用者が消費したことによる生産誘発額

※「平成23年 札幌市産業関連表」を用いて算出

10 収支状況

2015年度事業費内訳（決算）

●収入の部（単位:千円）		
区分		金額
公的負担金収入	札幌市負担金	39,500
	国等助成金	16,000
繰越金及びその他収入		9,879
計		65,379

●支出の部（単位:千円）	
区分	金額
SIAF 普及事業費	23,501
スタッフ人件費	15,392
広報プロモーション費	7,222
事務局諸経費	6,637
繰越金	12,627
計	65,379

2016年度事業費内訳（決算）

●収入の部（単位:千円）		
区分		金額
公的負担金収入	札幌市負担金	74,000
	国等助成金	28,000
繰越金及びその他収入		31,452
計		133,452

●支出の部（単位:千円）	
区分	金額
作品制作費	38,469
SIAF 普及事業費	21,360
スタッフ人件費	21,770
広報プロモーション費	15,609
事務局諸経費	11,916
繰越金	24,328
計	133,452

2017年度事業費内訳（決算見込）※2017年12月末現在

●収入の部（単位:千円）		
区分		金額
公的負担金収入	札幌市負担金	239,820
	国等助成金	112,503
協賛金等収入		12,474
チケット・グッズ等収入		31,166
繰越金及びその他収入		24,528
計		420,491

●支出の部（単位:千円）		
区分		金額
開催事業費	作品制作費	173,454
	会場費	100,703
SIAF普及事業費		13,450
スタッフ人件費		42,702
広報プロモーション費		58,819
事務局諸経費		17,363
繰越金		14,000
計		420,491

有識者の評

Professional Assessment

札幌国際芸術祭2017の評価

芸術・観光・運営のバランスをどう取るか？

天野 太郎

横浜市民ギャラリーあざみ野 主席学芸員／札幌国際芸術祭コミッティー

総評

今回のSIAF2017は、大友良英ゲストディレクターのもと開催された。ジャンル(アートや音楽など)にとらわれなかった点、ディレクター自らもアーティストとして参画した点、それから札幌市内とはいえ、広域に会場を点在させたことも特徴的だった。何よりもディレクターの存在が全面に押し出された芸術祭は他に類を見ないだろう。大友自身のパフォーマンスをはじめ、mima北海道立三岸好太郎美術館での大友クロニクルの展示も好評だった。そもそも大友氏自身が札幌との縁があったことも幸いした。

また、単に会場が点在していたことだけではなく、何らかの形で展示場所、つまり札幌、あるいは北海道という土地性を意識した作品が多く、鑑賞者が街巡りをすると同時に、そうした作品の背景を知ることで場を意識することができた点は特筆されて良いだろう。ことさら世界的な視野に立つのではなく、表現者と場とのリアリティが鑑賞者と共有できた点も評価されるべきだろう。数年前であればこうした傾向は、ローカル性として決して肯定的には評価されなかったが、世界の枠組みが破綻して以降、民族やその住まう地の単位がかろうじて価値を共有できる最小単位になった現在、意義ある構成だったと思われる。

改めてSIAFの特徴でもあり、同時に欠点でもある主会場を持てないことについて指摘しておきたい。これは、同芸術祭開催前から筆者より指摘してきた課題で、収入面(愛知や横浜のように主会場をまず見るために入場券を買わざるを得ない)に深刻な問題を抱えること、会場の分散化が鑑賞者の移動に負担をかけることなどが挙げられる。一方で、こうしたネガティブな点を除けば、否応なく市内を移動せざるを得ないことからとりわけ道外の鑑賞者にとってはこれまで知ることができなかった札幌や北海道についての発見を得る機会が増える点は評価すべきだろう。実際に、主会場を抱える国際展は、主会場の入場者の60～70%が他会場へ移動していることが判明していることから、良くも悪くも主会場で満足してしまう傾向がある。また自治体にとってこういった国際展の役割の一つに観光資源になり得るかどうかが、あるいは機能しているかどうかが大きな関心となっている。こうした点に立てば、さまざまな会場を周遊せざるを得ない状況は逆手に取れば周遊観光へとつながる利点でもある。

会場構成、作品など

屋外作品(前回の札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)や島袋道浩氏の石、札幌市資料館裏のコロガル公園など)が少なかった代わりに屋内、それも日頃足を踏み込むことのない場が選ばれたのは、スペクタル感に乏しかったとはいえ、場と作品を合わせた新たな発見ができた。札幌市立大学は、清家清建築が堪能でき、かつ場を巧みに活用した毛利悠子作品、さわひらきのHUG、クワクボリョウタのCAI02、円山動物園の展示も広い意味でサイト・スペシフィックな作品として好評だった。HUGとサップロファクトリー、OYOYOとスープカレー店、すすきの展示など、とりわけ道外からの参加者にとって美術と食の接近は良かった、という意見多し。

広報面

ガイドブックに各会場の住所がなかった(地図のみ)。地図も読みづらい。地上でビルを探すのが分かりにくい。一方で、地下鉄改札を出たあとの地上地図には、乗降口番号もあり分かりやすく、市営地下鉄の協力が大きい。駅での露出度やデジタルサイネージ、チ・カ・ホなどで目立っていた。これは、市電のラッピングなどに芸術祭カラーを効果的に示した。

会場時間

時間帯が複数あることをどう伝えるか。時間差で時間を無駄にせず作品を見て回ることができるという点、会社帰りに見られるなど、の利点を生かすべき。

スタンプラリー

全部見てみようという気になり、札幌市内を回遊するのは、スタンプラリー好きには好評だった。会期中に発生した台風18号の影響で、公共施設(大学含む)や屋外が展示中止になったが、その案内を札幌駅にあるインフォやホームページ、SNSを通じて告知した対応は良かった。

受付、監視

有償アルバイトが受付などをしていたということで対応はとても丁寧であったという感想が多く聞けた。事例として、チケットを落として次の展示へ行ったとき一つ前の展示の場所に連絡して確認してくれるなどテキパキとした対応で非常に好感を持ちました、という声あり。

パンフレット

構成が見にくかった、という指摘が多かった。後改訂されたものの、当初、場所の住所が入っていなかったのは地元住民ですら不便を感じたという意見が多かった。紙媒体では止むを得ないが、期間限定展示やイベントが終わっているのが一緒になっていることで、情報の混線があったようだ。少なくともホームページなどで情報のアップデートを見やすい形で紹介する必要があると感じた。

移動手段

モエレ沼公園と札幌芸術の森以外は、えきチャリさっぽろは有効な手段であったようだ。朝6時から24時まで借りて500円というのも良かった。借りている外国の方が多く、受付の対応は好評であったと聞くことが多かった。

次回開催に向けてのアドバイス

今後の開催時期について、8月スタートは夏休み時期と重なり、宿も高い。一方で、シェアハウス、Airbnbなど使った旅にできれば家族でゆっくり来たいという意見が多く聞かれた。宿泊施設のインフラづくりが急がれる。また、開催時期の冬の可能性についてであるが、広域の展示が見込まれる中、雪に不慣れな道外の観客にとっては負担が大きいと思われる。長期の夏休み中の、これからますます増加するインバウンドの観光客も含めた取り込みは当分継続すべきと考える。

また、既述したが、主会場のないことを利点として大いに生かすことが次回展への大きな枠組みと考える。これは一方で、運営に大きな負担をかけること、また作家の選定、展示といったキュレトリアルな側面をより強化する必要を迫られる。これもすでに何度も事務局に提案してきた点であるが、事務局を札幌市芸術文化財団に移管し、継続的な組織づくりに着手すべきである。事務局長など市とのパイプ役には市役所からの人材が必要であるが、上記のような人的な育成を行うにはこの手段しか見当たらない。早期の着手が望まれる。

典型化された美術の規範の狭小さを打ち破る芸術祭

飯田 志保子

インディペンデント・キュレーター／東京藝術大学 准教授／SIAF2014アソシエイト・キュレーター／札幌国際芸術祭コミッティー

評価できる点

音楽と美術の領域を融合した実践を行うアーティストの参加と、さまざまな市民参加事業によって、大友ゲストディレクターのSIAF2017に対するヴィジョンと指針が明確に表現されたこと。芸術監督制を敷く上で最も肝心なのは、監督の声が市民、来場者、ステークホルダーに対して明確に伝わることである。徹頭徹尾「市民のための芸術祭」にしようとした姿勢と、良い意味でアーティスト選定に偏りがあったことが、SIAF2017の特性を強調した。視覚芸術よりも、視聴覚ならびに身体表現を伴った全身で体感する作品、ワークショップ形式で一過性ではない深い参加経験を得られるプロジェクトが多くを占め、典型化された美術の規範の狭小さを打ち破る芸術祭となった。また、鑑賞/体感/参加する作品のみならず、札幌の文化史を個人の視点で語り直す主観的なアーカイヴ展示もいくつかバランスよく組み込まれ、芸術祭という大きな枠組みを借りながら、そのアジェンダに対するアンチテーゼやオルタナティブであろうとするゲストディレクターの一貫した姿勢が強く前景化された。こうした挑戦的な試みを可能にしたのは、ひとえに各作品のクオリティの高さと、それを実現したスタッフの尽力である。さらに、街中の雑居ビルや市内の建物におけるサイト・スペシフィックな展示が増えたことで、美術館や資料館といった文化施設内の展示との対比が際立ち、芸術祭としての奥行きが増したことも評価される。SIAF2014でも会場の一つであったモエレ沼公園をコンセプトの中核に据えたことで、札幌市内広域の魅力のアピールや観光資源紹介に貢献した。SIAF2014での経験と反省点が生かされ、十分に達成できなかった市民参加を飛躍させられたのは今回最も重要な評価点である。デザインも機能性・可読性ともに高く、効果的であった。

改善すべき点

上記の評価点を逆の視点から見たものが改善点となるだろう。コンセプトの「ガラクタの星座たち」に対し、星を表象する各作品の質は高かったものの、芸術祭全体として星座を体現しきれていなかった点。芸術祭としては総合的に評価できるが、今後SIAFが国際展を目指すのであれば、美術展としての見応えもさらに求めたい。会場数とイベント数の多さは評価点・改善点のどちらにもなるが、それらがキュレーションされた展覧会なしに市内に多数点在することは散逸感を招く。会期中を通して動きや変化が起こり続けることは望ましい一方、多数の小さなイベントは、固定ファン以外はフォローしきれないため、映画祭のように短期集中型で大小の事業を集約させるか、あるいは中核をなす固定の主催場の展覧会のボリュームを増すなど、今後の検討課題の一つである。また運営面においても、事務局の規模と人材に見合った事業数と組織体制への改善が求められる。国際性については、今回札幌市民のSIAFの認知と参加意識は向上したと思われるが、少なくとも現代美術領域における国際的な認知度は向上していないため、今後SIAFが国際性をどのくらい重要視するかに応じて検討が要される。場合によっては市の基本構想にメスを入れ、「札幌芸術祭」に舵を切る大転換を図ることも検討する意義があるかもしれない。

次回開催に向けての

アドバイス

～「独自性」と「継続性」の観点から

SIAF2017で達成されたのは独自性である。芸術祭が乱立するなかで独自性を打ち出すのは極めて難しいことであるから、今回を一つの成功モデルとし、次回以降も美術専門家ではないゲストディレクターを選定していくことを試みても良いかもしれない。ただし、美術専門家以外のゲストディレクターの起用については美術関係者から批判の声も少なくないため、美術専門家とそれ以外の共同ディレクター制も一考の余地がある。運営に関しては、事業数と会場数を減らし、SIAFの持続可能性を担保するべきである。ゲストディレクターの熱意とコミットメントは何より重要だが、主催者の規模を鑑み、事業の枠組みは事務局でしっかり手綱を握るべきではないだろうか。

自由意見

SIAFは国内では数少ないボトムアップで創始された芸術祭であることに立ち返ると、改めて「市民」と「同時代の美術」の要素が重要であると思う。この二大要素は、事業主体や予算規模に抛らず、芸術祭を行う意思と展望があるところではどこでも実現されることが、世界の多様なビエンナーレにおいても確認できる。札幌の場合、1970年代から地元の現代美術家が手弁当で国際交流を含む先行事業を行ってきた実績もあるため、行政としてサポートすべきは「市民」と「同時代の美術」を持続可能にする枠組み(＝芸術祭)を作ること、そして特に個人では継続が難しい「国際」の部分に注力すべきではないかと思う。上記の「改善点」では「札幌芸術祭」への大転換も一案として提案したが、「今後SIAFが国際性をどのくらい重要視するか」という点で、原点に立ち返り、「国際芸術祭」としての発展を探索してもらいたいと私は考える。それが札幌で芸術祭を創始した理由の一つではなかっただろうか。

芸術祭を育てる、ということーさらなる広がりに向けて

熊倉 純子

東京藝術大学教授(音楽環境創造科・大学院国際芸術創造研究科)

展示はおおむね見る事ができたように思いますが、その中で特に見応えがあったのが、毛利悠子・堀尾寛太・梅田哲也の3人の作品です。レジデンスの成果が功を奏し、時間をかけて構想し作り込まれたインスタレーションは、遠方からの来場者をも「旅のかいがあった」と満足させてくれる充実したものでした。モエレ沼公園の展示も、招待作家たちの作品の中に大友作品が散りばめられ、招待作家たちの作品群をつなげるアクセントとして機能しているようでもあり、はたまた大友さんが招待作家たちを包み込んで迎えているようもあり、展示室から展示室へとわくわくする回遊体験を提供していたと思います。札幌芸術の森美術館の展覧会はシンプルなコンセプトですが、音楽と現代美術の接点を示した点で、札幌の音楽好きの若者たちに大きな示唆を与えてくれたのではないのでしょうか?前回の北海道立近代美術館や札幌芸術の森、北海道庁赤れんが庁舎などのずっしりと重く深い展示とは趣を異にして、軽やかでシンプルな構成が今年の特徴なのかなと感じました。

しかし、展示もさることながら、ミュージシャンである大友さんの真骨頂は、数々のライブ・パフォーマンス企画に表れていた可能性もあります。特に、街中に解き放たれた若手ミュージシャンたちと遭遇できたら、きっと忘れえぬ体験となったと思います。また、大友さんの人脈で、札幌に長く脈々と受け継がれていたマイナーな音楽系の活動に光が当てられたことも、歴史的に大きな意味があったはずです。残念ながら、私自身は短い滞在の中、効率よく(日本文化政策学会の)バスツアーで展示を回った反面、公演系のプログラムはまったく見る事が叶わず、札幌在住の方々がうらやましく感じました。遠方から訪れる、いわゆる芸術祭とは展示がメインと思い込んでいる観客には、今回の芸術祭の貴重な妙を味わうことは難しかったのかもしれない。

転じて、運営系はどうだったのでしょうか?前回同様、SIAF運営チームの密なチームワークが随所に感じられました。ディレクターである大友さんの哲学と「ビッグバンドのような運営チーム」というフラットな運営方針は、今後の日本の芸術祭にとって重要な示唆に富むものです。ぜひとも今後も札幌にその哲学が根付いていくことを望みます。札幌市役所の事務局もー大友さんには、きっと何度も叱られたと思いますがー前回同様、全国有数の熱意と柔軟性で取り組まれているように拝察いたしました。

ただ、一点懸念を抱いたのは、準備期間を含めて札幌市内の芸術関係者の反応が薄かったことです。「いま、なにがどうなっているのか、まったく見えない」という声をよく耳にしました。「市役所による、市役所の芸術祭」などというふうに、思われてはいないでしょうか?財団、大学、NPOやアーティストたちなど、皆さんがもっと芸術祭に参画をして、オール札幌で汗をかいて楽しみ、皆が成長する機会になると、より素晴らしいと思います。毎回、ディレクターも事務局担当者たちも変わるシステムで、芸術祭をどう成長させていくのか?前回の評価報告書にも書かせていただきましたが、鍵となるのは地元の芸術関係者が受け皿としての能力を高め、毎回の経験を継続・発展させることに尽きると思います。次回の運営面での盛り上がりにはさらなる期待をしております。

資源の選択と集中でよりいっそう賑わいの創出を

樽見 弘紀

北海学園大学法学部教授(非営利組織論・芸術文化政策論)／
安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄理事(兼 運営委員)

評価できる点

- ・実行委員会と市役所の担当部局連携による周到な準備と実施体制は、トリエンナーレ形式開催であることの利点をいかんなく発揮している。
- ・名声・実績・能力、いずれにも優れた総合ディレクター(前回の坂本龍一氏、今回の大友良英氏)をつかまえ得ている。
- ・芸術祭の一連のフェーズ(起案、計画、実行、評価等々)において、歴代の首長(上田前市長、秋元現市長)が十全にリーダーシップを発揮している。
- ・都市インフラを活用した、意欲的かつ実験的な企画展示も少なくない。
※SIAF2017における路面電車利用のパフォーマンスなどはとても興味深かった。
- ・とまれ、トリエンナーレの「2回目」を見事、やり遂げたその事実!

改善すべき点

現在の拡散型 / 分散型開催方式から圧縮型 / 稠密型開催方式への転換(提案1)

南区の札幌芸術の森と東区のモエレ沼公園とではいかにも遠隔に過ぎる。札幌駅前通 / 札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)をウェルカムゲートと規定することには大いに賛同するが、残念ながら、期間中、その基幹たる「ゲート」からして賑わいが感じられなかった。自治体施設としての札幌芸術の森エリア(札幌市立大学を含む)やモエレ沼公園エリアなどを大事にしたい市役所の気持ちはある程度理解するが、ここは「資源(ヒト・カネ・モノ・情報など)の選択と集中」および「芸術祭の賑わい創出」にもっと大胆に舵を切るべきである。いっそ「芸術祭は都心」のみを言い、「周縁は関連イベント」とする、と割り切ってみてはどうか。

芸術祭開催期間中の路面電車・ベロタクシー・シェアサイクルなど、重層的な地上移動手段の十全な活用(提案2)

前述の「都心の芸術祭」の「賑わい」をより効果的に演出するためには、参加者が効率的かつダイナミックに地上を平行移動する(できる)必要がある。地下鉄やバスもちろん一定の役割を担うが、ループ化なった路面電車や、ドイツ起源のベロタクシー(人力タクシー)、中国からの進出を果たしたモバイク(シェアサイクル)など、ここへ来て面白い展開・充実をみせている札幌の多様な地上移動手段網を重層的に活用しない手はない。人々の「呼吸するように街をめぐる」の実現に注力すべき。期間中、物理的にも、金銭的にも、また、心理的にも地上移動手段の選択肢を増やすこと、また異なる交通手段相互の連関を図ることが、そのまま芸術祭の魅力を増し、また、魅力に満ちた札幌の都市景観を世界に発信することにもつながるものと思う。

次回開催に向けての アドバイス (「自由意見」を含む)

ハコは街にある

(前回、今回の2回の芸術祭ですでにその端緒は開かれているが)既存の美術館や公共施設といった、いわゆるハコモノに固執しない芸術祭の「新しいハコ」の在り方の発見に向けた、発想の転換とアイデア出しをさらに加速すべき。とりわけ、商業ビル、ホテル、学校、カフェ、商店、商店街、民家、民家の蔵などの活用方法をもっと発見・発掘したい。
※規模ははるかに小さいが、例えば、神奈川県の葉山芸術祭などはアイデアの宝庫としてとても参考になると思われる。

肝はカネになる

芸術祭隆盛のカギは、その実、作品取引のショーケース機能にある(と僕は信じて疑わない)。税金由来の自治体予算(＝他人のカネ)で、企画(＝魅力)を広告代理店や総合ディレクター(＝他人のちから)に丸投げするのではなく、早く市民ベースのみならず経済ベースでも「自発する芸術祭」

たり得るフェーズに上がるべき。世界の名だたる芸術祭では、実は、裏で、あるいは周縁で暗躍する(?)キュレーターや画廊や画商の情報交換活動や、場合によってはリアルな商取引が重要であることは一定程度常識であると思う。同時に、芸術祭開催期間中、ホテルや商業施設などが経済的に潤った、という成功体験もあなどれない。短期的に、あるいは中長期的に「SIAFはカネが動く」も、実は大切な到達目標ではないだろうか。

とはいえヒトが真ん中

さはさりながら、前提条件としてベネッセも安藤忠雄も持たないSIAFにとって、やはりボトムアップの市民力に勝る原動力はない。とはいえ、「市民」はともすると「烏合の衆」の別称でもある。どのような市民、市民力を必要としているか、を精査することが肝要かと思う。以下、瀬戸内国際芸術祭との対比で、求められる市民像を列記してみたいと思う。

前提条件(まちそのものの魅力)

瀬戸内:何もないところに芸術祭のアイデアが降臨→自発する「こえび隊」などの市民力(当然と言えば当然)
 札幌:一通り何でもあるまちに降って湧いた芸術祭＝さまざまな都市の魅力のone of them →市民は忙しいので市役所任せ(当然と言えば当然)

旅の起点としての芸術祭 vs. 旅の終点としての芸術祭

瀬戸内:狭い、何もない島々に芸術祭を「目的(終点)」とする人々が集中する→外形的には成功。その実、不平不満は潜在的にある→芸術祭訪問のフェス的成功
 札幌:広い、都市機能も整った街の芸術祭を「理由の一つ(起点)」に人々がまちに散在する→外形的には失敗。その実、旅の満足度はある程度確保される→芸術祭訪問の総花的成功
 【芸術祭単体としての評価は、フェス的成功>総花的成功、となりがち?】

SIAFの真ん中たる市民/市民力像

- 市民の代表たる「市長」のもっと顔の見える芸術祭:例えば、海外の芸術祭(パリなど)では、市長招聘作家として世界各地から、未だあまり光の当たっていない作家の「個展」などが開催される。「市長招聘」をSIAFの一つの目玉企画に仕立てられないか。
- 「心の札幌市民」も参加できる芸術祭:札幌は冬季オリンピック(1972年)やビール、ラーメンなどを通して日本有数の国際ブランド力を持つ都市である。札幌に住まわずとも、札幌を愛し、いつか札幌への旅行/移住などを祈念する人々を「心の札幌市民」として遇するSIAFへの特別参加のかたちを工夫したい。
- 世界中の作家や作品が活発に売り買いされる芸術祭:アート作品は室内装飾の身近なアイテムとして、あるいは割のいい(?)投資/投機の対象としてかつてない裾野の広がりを見せる。SIAF開催期間中に全国/全世界のアートの売り手と買い手がプロ・アマを問わず札幌に集結する、というシーン、すなわちショーケースの賑わいを創出したい。
- マイノリティーのための芸術祭:アールブリュットや先住民アートなど、既成概念に捉われない新しいアートの発信地機能を強化できないか。
- 多言語・マルチメディアで同時発信される芸術祭:海外の芸術祭に比して、とかく多言語性や同時性の面で遅れの目立つ日本の芸術祭の常を超克するなんらかの方法論を手にすることで、国内でも突出した国際性をもつ芸術祭となりたい。

まずは芸術祭の面白さを市民に体感させて

藤田 直哉

文芸批評家

評価できる点

他の芸術祭と比較し、音楽やノイズなど、異なったテーマを持ってきたところは評価に値する。木彫りの熊などの民芸品に着目した展示も良かった。「ゴミ」など、一見したところネガティブに捉えられかねないテーマを持ってきたところも良い。メディアアートを全面に出す創造都市であり、同時に自然で知られる北海道であるので、そこを推し出す点も悪くはないと思う。作品で良かったのは、中心市街の作品群。なかなか普段見れないような建物を大胆に使い、現代美術が一気に見られる構成になっていたのは良かった。

改善すべき点

全体的に、盛り上がっていない。集客に問題がある。地元の人々の当事者意識も低い。それは、札幌の文化的な土壌の問題もあるのかもしれないが、越後妻有や瀬戸内のような、地域を巻き込んだ芸術祭の作り方に比べると寂しい(旅行者は、住人との触れ合いも楽しむものである)。地域への影響や効果も薄いのではないか。これも北海道特有の問題だと思われるが、あらゆるものが遠くて交通の便が悪い。札幌芸術の森とモエレ沼公園は、それぞれに素晴らしい場所なんだけれど、中心部からのアクセスが悪い。観光する人は、普段と違う景色に触れる楽しみも期待するのだけれど、途中の風景も特異なものではないのが、退屈さを生んでいる。市電を作品にしたように、移動のバスも作品化したり、映像を見せたりで楽しませることもできるのではないか。さらに、展示のボリュームがそれぞれに少ないので、不満足感がある。例えば、モエレ沼公園をもっと全体的に使って、今の20倍ぐらいの作品があっても良かったのではないか(若い地元のアーティストや学生らに参加してもらって)。残念ながら観光としてのデザインが悪いとしか言えない。

次回開催に向けてのアドバイス

SIAF2017のテーマや内容自体は意欲的だったが、しかし、ノイズや星座のような主題は、少し高度ではないか。実はそこにないうでいて耳を澄ませばある、という「ノイズ」の鑑賞方法は、むしろ通常のスペクタクルな芸術に対する反省や批評として存在するのであって、そもそもスペクタクル的な「現代美術」それ自体の経験があまり豊かではない札幌は、それが機能する手前にあるのではないだろうか。まずは派手で直観的な現代美術で圧倒して市民を芸術に巻き込む方が先では。歴史や伝統がある地域と比べて、北海道は不利な点もあるし、有利な点もある。やはり、伝統的な地域では地域資源が多いし、住民の積極的な意識なり社会関係資本なりがある。その点では明らかに不利なのだけれど、新しい設計都市であることを生かしたり、近代(開拓)に固有の問題系が集約されているという点では、面白い場所でもある。炭鉱(エネルギー開発)やアイヌの虐殺など、一見負に見えるテーマであっても、世界的な潮流としては、むしろ取り上げるべき題材とされていることが多い。それらの「近代」の問題系を問うことで、北海道・札幌という特異な地域固有の歴史を提示し、そのことによって全世界のさまざまな「近代」の問題を抱えている地域と連帯し、連携できるのではないか。むしろそれこそが、日本の芸術祭や地域アートのブームによって食傷気味の観客に対し、アピールする新機軸になるのではないか(他がやらないテーマに意欲的に取り組み、なおかつ、そこでしかできないことをやっているものは、わざわざ観に行く価値があるものと観客は感じるはずだ)。

自由意見

「札幌」という枠組みを超えてもいいのではないか。例えば、新千歳空港ではいろいろな展示ができそうである。初音ミクのシアターなども使える。「自然」をテーマにするのなら、残念ながら札幌の市街地はあまり向いていない。もっとむき出しで雄大な自然が、例えば「青の洞窟」などで見れる。北海道に来る観光客が見たいのは、普段見られない「自然」ではないのか。崇高な自然美に触れたいのではないか。富良野の花畑や、洞爺湖の地形などが見たいのではないのか。そ

れを支援するような芸術のあり方―人工と自然を対立させるのではない、芸術のあり方―も可能ではないのだろうか。国東半島芸術祭は、そのようにむしろ自然を推していた。

初音ミクなどや、コンピューター産業のような民間企業がもっと積極的に参加しても良いのではないか。特に、メディアアートを推すのなら、民間の企業の力が必要である。例えば、ハドソンやデービーソフトなど、歴史的なファミコンの会社も存在していたわけであるから、その辺りを再評価したり、むしろ積極的に提示することで、全国各地のゲームファン達にアピールできるのでは(『美術手帖』2017年12月号で、現代の美術のキーワードに「ゲーム」が入っていた)。芸術ファンだけを当て込むのでは、芸術ファンすら見向きもしない。むしろ、芸術の輪郭を改変し、拡張していく創造性こそ、目の肥えた美術ファンを振り向かせるし、芸術に興味のなかった多くの人々を巻き込んでいくことになるはずである。

従来の美術の文脈から離れ、SIAFの独自性を深化させた画期的芸術祭

細田 成嗣

ライター

評価できる点

何よりもまず、普段あまり大々的に取り上げられることの少ない、先端的な表現活動を行っているアーティストたちに、スポットライトを当てる場が提供されていたことが多いに評価できる(例:堀尾寛太、梅田哲也、また「ノイズ電車」に参加した面々など。一部では評価されているものの、未だ世間的には正当な扱いを受けていないアーティストたち)。同時に、それが「芸術のための芸術」へと自閉することなく、美術の文脈を専門的に学んだわけではない人たち、とりわけ家族連れや子供たちにとっても端的に楽しめるイベントになっていたことも評価できる(例:子供たちも自由に出入りできる《(with)without records》、探検心をくすぐる《点音》のマップ、スペクタクル的な要素もある《ドッカイドー／・海・》など)。これらの展示作品を手がけたりパフォーマンスを行ったりしたアーティストたちには、普段美術家ではなく音楽家として活動している者も多く、芸術祭全体が従来の美術の文脈には収まりきることのないものとなっていた。そこに本芸術祭ならではの独自性が打ち出されていたように思う。また、本芸術祭ではインターネット上のSNSなどを情報発信の場に活用していた。ほとんどの展示作品は写真撮影可能であり、そしてその展示作品もいわゆる「インスタ映え」する要素があったことなどから、来場者同士によるSNS上での口コミ的な情報の広がりが見られた。こうした側面も時代の情報環境に即した広報戦略として評価できる。

改善すべき点

複数の展示会場が広範囲に点在しているため、短期間しか滞在しない観光客は全てを見ることができず、そのうちのいくつかを選ばなければならなかった。この「捉えきれなさ」自体は良い(「SIAF2017バンドメンバー」の一人である藪前知子が『webちくま』での連載記事「ひとつの芸術祭の終わりに」の中で述べていたように、公的助成金を使用する「まちおこし」の一環として行われる国際芸術祭において、リスク回避と綿密な計画性ばかりが重視されることによって、アーティスト自身が初めに抱いていたはずの動機が薄れゆく傾向が強い他の芸術祭に比して、むしろこの「動機」を前面に出した本芸術祭の功績は非常に大きいと言える)ものの、それによって、こうした観光客にとっては、それぞれまったく異なる会場巡りを行うというよりも、むしろ主要スポット(モエレ沼公園、札幌芸術の森など)にばかり行き先が集中してしまい、体験のバリエーションが狭まってしまっていたように見受けられた。また、本芸術祭の基本構想には「札幌らしいアート・シーンの活性化を図る」という目的があるものの、今回の芸術祭に限って言えば、ゲストディレクターである大友良英の周辺のアーティストの作品の印象が強く、少なくとも筆者は札幌市から独自のアート・シーンを感じ取ることができなかった。確かに札幌という地政学的条件や都市の景観を活かした作品、札幌の歴史を掘り起こした展示物、その場所できかなし得ない展示作品やライブ・パフォーマンスなどはあった。すなわち都市全体としての札幌の魅力を感じることはできたものの、そこに息づくアーティストの魅力があまり前面に出てくることがないように思えたのである。これはおそらく、先に述べた「体験の逆説的な画一化」によって見えなくなってしまうところもあるように思われる。

次回開催に向けてのアドバイス

音楽家が芸術祭のゲストディレクターを務めるということ、「サウンド・アート」という美術の文脈とも異なる「音楽と美術のあいだ」ともいうべきユニークな芸術祭であることが、SIAF2017の特徴的な側面だと言える。そのためこうした特徴が継続していくことが望まれる。また、それによってどのような「新しさ」を獲得しているのかということも、より多角的な視点から検討されるべきである。例えば今回であれば、アート系の雑誌だけでなく、より多くの音楽雑誌に「音楽フェスティバル」として取り上げられても良かったように思う。次回ではこうしたさまざまなメディアとの連携が望まれる。また、今回は東京オリンピックと同時期に開催される予定のため、「創造都市さっぽろ」の魅力

を今回以上に打ち出していくが必要になると思われる。例えば、今回の芸術祭では展示やパフォーマンスだけでなく、長い時間をかけなければその成果が出てこないようなワークショップ・イベントも複数開催されていた。そうしたイベント参加者たちが3年後にどのような成果を見せるのか、こうした側面を次回の芸術祭と連関させていくことが期待される。それにより、札幌に息づく現在のアート・シーンの独自性が、よりクリアな形で来場者に伝わるような芸術祭となることだろう。

自由意見

筆者はあくまでも芸術祭を目的に、さらに人生で初めて訪札した観光客でもあったため、展示作品やライブ・パフォーマンスを堪能するとともに、札幌という都市の魅力も知ることができた。しかしながらSIAF2017では、その「捉えきれなさ」も手伝って、札幌市民と短期間しか滞在しない観光客との間で、その体験が大きく異なるものになっていたように思う。より具体的に腑分けすると、気軽に足を運べる札幌市在住者、少し時間をかければ訪札できる札幌市近郊の住民、会期中ほぼ一度しか訪れることのない観光客という分けができる。加えてここには、芸術祭を目的に訪札する人たちと、別の目的で訪札したところ偶然にも芸術祭に出会うことになった人たちがいる(下図参照)。

これらそれぞれのブロックで芸術祭の体験の異なりが見られるように思われる。今回の芸術祭では、「捉えきれなさ」によってそれぞれの異なる体験が、必ずしも序列化されることのない等価なものとしてもたらされていた。ただしSNS上での情報戦略は、芸術祭を鑑賞することを目的に訪問した来場者には有用だが、たまたま訪れた近郊住民および観光客や、イベントをフォローしているわけではない札幌市民に対しては、やや効果に疑問の残るところがある。おそらく来場者の大半を占めるのは札幌市民および都市近郊の住民であるため、ここに向けた情報戦略により注力することが必要になるだろう。こうしたブロックそれぞれに適した情報戦略が望まれるとともに、同ブロック内部での体験の多様性を確保していくことによって、「体験の逆説的な画一化」を回避していくことも必要になるように思われる。

	札幌市民	札幌市近郊住民	観光客
芸術祭が目的	日常生活と密接に関わる中で芸術祭と接する。毎日接する機会がある。	日常生活の範囲内で芸術祭を鑑賞しに出かける。複数回接する機会がある。	芸術祭を鑑賞するために非日常的な時間を費やす。接する機会はほぼ一度きりしかない。
別の目的	芸術祭を知らない／興味がない札幌市民。時間をかけることで認知させる／興味を抱かせることが可能。	何らかの目的で札幌市を訪れた近郊住民。初めの印象によっては、複数回足を運んでもらえる可能性もある。	何らかの目的で札幌市を訪れた観光客。印象が良からうが悪からうが、繰り返し足を運ぶ可能性は非常に少ない。

他の機会では得難い思い切った方針と、作品を楽しむことを助ける工夫の必要性

吉崎 元章

札幌市芸術文化財団総務課課長職／一般財団法人地域創造派遣／札幌国際芸術祭コミッティー

評価できる点

音楽家であるゲストディレクターの個性が色濃く表れ、テーマへの一貫性が全体を通してみられたことが、他の芸術祭とは異なる特徴を生んでいた。札幌市民にとっても、これまで紹介されることが少なかった表現や、北海道にありながらもほとんど顧みられなかった事物に芸術的視点からスポットが当てられたことで、新たな刺激を得る機会になったと思われる。また、企画チームに地元からも多く加えたことや、広くプロジェクトを募り正式プログラムにしたこと、コンサートや演劇などへの市民参加の機会や大風呂敷プロジェクトでボランティアの活動の場をつくったことなど、前回とは異なり、強く地元を意識し、市民を巻き込もうとする意図が感じられた。この地で長く活動してきた中から発案された企画の数々には、ローカルな話題にとどまらない確かな強度があった。さらに、ゲストディレクターが会期中のほとんどを札幌に滞在し、さまざまなイベントに登場したことが芸術祭全体のまとまり感と市民への親近感を生み、突発的なものを含め、各所でイベントを多発させることで祝祭的な盛り上がりがある程度演出できていたと思う。

改善すべき点

多くの人にとって美しさや心地よさに直結しづらいノイズや「ガラクタ」をもとにした作品群は、視覚体験を重視しがちな美術愛好家や実験的な表現に馴染みの薄い人には戸惑いもみられたようだ。挑戦的な試みは評価するが、作品を楽しむことを助ける何らかの工夫がもう少しあっても良かったのではないか。札幌において最も入場者が見込める時期でありながら、各有料会場の入場者数があまり伸びなかったことは残念である。入場者の広がりを感じられなかったことは、各イベントでも同様である。オーケストラや演劇、大風呂敷プロジェクトなどに積極的に参加した人達は充実した時間を過ごしたようだが、その気持ちが熱いほど、それ以外の人との乖離が生まれているように感じた。コンサートや各種イベントに出向いても、そうしたコアな参加者や関係者が大半を占め、互いに親しげに挨拶し合う光景などは、興味を抱いて訪れた他の人に疎外感を味わわせる排他的な雰囲気も少なからず醸していた。それが、ネット上で散見された「内輪だけでの盛り上がり」という印象につながる一要因にもなっていたのだろう。

次回開催に向けてのアドバイス

SIAF単独の成果だけではなく、芸術関係の各種事業や既存の組織、機関が他にも多くある札幌においての芸術祭の役割をしっかりと見据えるべきだろう。3年に一度、大きな予算と規模で行うことができる芸術祭が、札幌の文化に何をプラスしていけるかを考えると、他の機会では得難い先進的で刺激的な思い切った方針で行う重要性を感じる。独自性による北海道外からの注目度も然ることながら、札幌にいかに根付かせていけるかも大切にしてほしい。一度に多くの市民を引き込むことは困難であり、少しずつ広げていくしかないが、少しでも多くの人に興味や関心をもってもらう工夫とともに、それらの人が来やすい、入りやすい環境や雰囲気づくりを心掛ける必要があろう。一方、他の芸術祭に行った時に重宝するのは、作品ガイド付きで各会場を巡るバスツアーである。札幌の場合も会場が分散しているため、有料でも構わないので効率的に巡るための数コースを用意してはどうだろうか。また、子どもだけではなく、高齢者や障がい者が積極的に参加できるプログラムも今後検討してほしい。さらに、札幌ならではの独自性を出すためには、雪が積もった冬期間の開催が、冬季オリンピック・パラリンピック招致を見据える上からも含めて効果的だと思う。

全国各地で行われている芸術祭の魅力のひとつは、普通に観光として訪れただけではなかなか接することができない、その地固有の記憶や文化、庶民の日常に深く触れられることだろう。それは、美術館やギャラリー、整備された観光名所だけではなく、歴史が刻まれた民家や廃校、空き店舗なども会場となっていることにも関係していよう。札幌の芸術祭でも同様の効果が期待できるが、それは観光客に限ったことではなく、住民にとっても自らが住む場所の価値や魅力を改めて見いだすことにつながるものである。また、芸術祭が長く継続されていくことで少しずつ札幌の文化や社会に影響を与えていくはずである。芸術祭ごとに目に見えて残っていくものがあると、徐々に浸透してきていることが実感しやすいのではないだろうか。初回の島袋道浩の作品のように展示作品を残すことは今回難しいだろうが、SIAFで行ったイベントのうちのいくつかを今後も継続的に行っていくなど、モノではなくコトを残していくことも考えられよう。SIAF2017で行ったさまざまな事項のアーカイブ化をさらに深めていくこともその一つである。

「芸術祭ってなんだ？」を問い続けること ー札幌国際芸術祭2017を巡って

吉本 光宏

ニッセイ基礎研究所 研究理事

明確なディレクターシップ

ディレクターシップが遺憾なく発揮された芸術祭。それがSIAF2017の全体的な印象である。ディレクター自身の作品やライブはもちろんのこと、コンセプトや作家・作品のラインナップ、市電プロジェクトなどのイベント等々、街全体がノイズミュージックを奏でるような芸術祭だった。前回のSIAF2014は見そびれたため、資料で把握できる範囲内でのことだが、ディレクター色は今回の方が明確に現れていたのではないか。国内の他の芸術祭と比較しても、その点はSIAF2017が際立っていたように思う。キュレーターや美術家ではなく、音楽家をゲストディレクターに迎えたこともその一因だろう。ディレクターの選定は、芸術祭の成否を左右する最も大きな要因のひとつである。裏を返せば、大きなリスクを孕んでいるが、SIAF2017はその点で評価できる成果を残したと言える。しかも2回連続で音楽家を起用したことで、SIAFの特徴としてひとつのベクトルを示すこととなった。ゲストディレクター制度は、開催回ごとに独自のコンセプトやメッセージを発することが可能だが、芸術祭として統一的なイメージを形成しにくい側面も併せ持っている。SIAFが芸術祭として何を社会に訴えていくのか、市民や地域にとってどんな価値をもたらすのか。3回目には、そうした点について中長期的な視点からの検討が欠かせないだろう。それだけに次のディレクターの選定に注目したい。

都市空間と芸術祭

市街地を使った作品設置は前回よりさらに強化された。全ての会場を回ったわけではないが、個人的には北専プラザ佐野ビル、金市館ビル、りんご、札幌市資料館裏庭などが印象に残った。ロケーションと設置空間、作品内容にある種のゲリラ性を感じ取られ、「ガラクタの星座たち」というサブテーマとも合致していた。ガイドブックを頼りに、街中に展開される作品を探索するのは、芸術祭の楽しみの一つである。しかし、一カ所で集中的に開催される場合と比べて、賑わいや祝祭性という点では、不利な点も否めない。モエレ沼公園、札幌芸術の森、札幌市資料館の3会場を回れば主要な作品を鑑賞できるようになっていたが、短期間で市街地の会場も含めて回るのは楽ではない。それを不利な条件とするのではなく、プラスのものとするためには、作品の魅力だけではなく、芸術祭としての仕掛けや舞台づくりも重要な要素である。その点に関して、市電プロジェクトや狸小路TV、テニスコーツライブ、札幌駅や地下街に設置された大風呂敷プロジェクトなどは一定の役割を果たしていた。ただし、街中のサインやマップには改善の余地があるように思う。確かに目的の建物にたどり着いているのだが、入口や作品までのルートが分かりにくかった。特にりんごは閉館ギリギリで辺りがすっかり暗かったせいもあるが、最後の曲がり角が分からず数メートルのところで危うくたどり着けないところだった。マップには入口を矢印で示すとか、街中でのサインをより工夫するとか、ナビゲーション用のアプリを用意するとか、次回に向けて改善の余地があると思われる。さらに、街中全体を使って芸術祭を展開しようという主催者の意図に対して、観客は実際に芸術祭のどこをどのようなルートで訪れ、何を鑑賞したのか。会場ごとの入場者数の集計結果だけでは限界があるだろうが、その点も次回に向けて検証が必要なポイントの一つだろう。

芸術祭ってなんだ？

日本は国際芸術祭のブームである。昨年(2016年)はさいたま、KENPOKU(茨城県)、今年(2017年)は、岐阜、北アルプス、Reborn-Art(石巻)、種子島、奥能登といった具合に、毎年各地で新たな芸術祭が創設されている。芸術祭のディレクターでなくとも「芸術祭ってなんだ？」と問いかけたくなる状況だ。しかも現在継続中の芸術祭のほとんどは2000年以降に始まったもので、これほど短期間にこれだけ数多くのトリエンナーレ、ビエンナーレが始まった国は日本において他にはないだろう。乱立に対する批判、あるいはどこも似たり寄ったりの内容になりがちなことへの懸念はもっともなことである。しかしそれは俯瞰的な見方であって、どの芸術祭もその地域に

とっては唯一無二のものであるという点を忘れてはならない。つまり、芸術祭ってなんだ?という問いかけは、普遍的なものであると同時に、開催地域ごとに個別の問いとして考える必要がある。仮に芸術祭を自然環境豊かな町村で開催される「里山型」と、札幌のような都市部で開催される「都市型」に分けた場合、この問いに答えを見いだすのは後者の方がハードルが高いはずだ。里山型の場合、作品を求めてその場所を訪問すること自体に意味を見いだすことができるからである。都会から訪れる人々は、経済性や効率性を優先する中で見失ってしまった地域の歴史や文化の価値を再発見するばかりか、深刻な人口減少と高齢化に直面する日本の現実が突きつけられる。地元の人々は、長い歴史の中で培われてきた文化的な営みや地域資源の価値を見直すきっかけになる。経済的な恵みや地域の活性化に対して芸術祭が果たす役割も小さくない。それ自体が芸術祭本来の目的でなかったとしても、あるいはたとえ一時的なものだったとしても、である。しかし都市型の場合、さまざまな文化施設が整備され、日常的に数多くの文化事業が行われている中で、芸術祭は市民に何を提供し、地域にとってどのような役割を担うのか。そのことを里山型以上に明確にする必要があるだろう。市が主導する文化イベントが他都市と比較しても充実している札幌の場合はなおさらだ。

札幌市の文化事業と芸術祭

例えば、1990年に故レナード・バーンスタインの提唱で始まった「パシフィック・ミュージック・フェスティバル」、2007年スタートの「サッポロ・シティ・ジャズ」、26回を数える「YOSAKOIソーラン祭り」、2000本のショートフィルムが集まる「札幌国際短編映画祭」、劇場文化を札幌に根付かせようという「札幌演劇シーズン」等々である。これらの文化事業と比較した場合、芸術祭にはより強い社会的なメッセージや問題提起を期待したい、と思う。ジャズやYOSAKOIのように誰にでも分かりやすい、参加して楽しいというものではない。もちろんそれが悪いというわけではないが、見る人に新たな気づきや思索を促し、現代社会に対する新たな見方、時には批評的な思考を提供することに、芸術祭の少なからぬ意義がある、と思うからである。SIAF2017でもテーマやサブテーマから、ディレクターのそうした狙いを読み取ることができる。テーマには「参加する前と後で世界の見え方が一変するくらいの、そんな強烈な場を自分たちの手で作り出すことが、わたしの考える『祭り』です」とあり、サブテーマとして「ガラクタの星座たち」が掲げられ、「自分たちが捨ててきたものに向き合いつつ未来を発見する」とある。つまり「世界の見え方が一変するようなガラクタ」から芸術祭を組み立てることによって、私たちにメッセージを感じ取ってほしいというのが、今回の芸術祭の意図だったとすると、芸術祭全体からそれを感じ取ることができたのではないか。そういう意味でも、冒頭に述べたとおり、SIAF2017はディレクターシップが十二分に発揮された芸術祭だったと言える。

創造都市における芸術祭

とは言え、芸術祭ってなんだ?という問いには永遠に答えがないだろう。ある種の解が示されたとしても、それを乗り越えるための問いかけを発することでしか、芸術祭としての存在意義が見いだせなくなってしまうと思うからだ。万人に受け入れられるような芸術祭になった途端に、芸術祭ではなくなってしまう。つまり芸術祭には、ある種の分わかりにくさ、難解さがつきまとう。そうでなければ芸術祭の意味がない、とまでは言わないが、現代の芸術を扱う以上、そこから逃れることはできないだろう。創造都市にも同様の側面を指摘できる。創造とは今までに見たこともないようなものを生み出すことである。だとすると、市民に分かりやすいものだけを行っていたのでは、創造とは無縁になってしまう。たとえ、一般の市民には受け入れられそうにないものであったとしても、芸術ならではのアプローチで都市に未知の価値を与え、社会的な課題に新鮮な切り口を突きつけるような芸術祭こそ、創造都市には求められている。創造都市には寛容性が必要だ、とも言われる。言い換えれば、未知のものに対する好奇心が創造都市としての懐の深さや力量につながる。創造都市における芸術祭はその中心的な存在であってほしい。そうしたアプローチは、行政組織には決して容易なことではないはずだ。しかし、それが創造都市の宿命であり、芸術祭に期待されることではないか。「芸術祭ってなんだ?」。札幌市にはそれを問い続ける芸術祭を次回以降も期待したい。

インクルーシブでコミュニティー中心の芸術祭

Agnieszka Gratza　アグネシュカ・グラツァ

アートライター

———

評価できる点

これまで2回の開催でSIAFは知名度の高い音楽家をディレクターに迎え、彼らの作品は本芸術祭のメイン展示になっていた。そのため、サウンドアートやライブコンサートの他、幅広い音楽関連イベントに重点を置き、広く多くの観衆を引き付けるようデザインされていた。これがSIAFの強みの一つであるとともに、この地域密着の芸術祭に強い個性を与えている。SIAF2017は、テーマに対して最新の芸術論や注目を集める芸術家によって主導されるキュレーションによるアプローチを目指しているのではなく、大友良英の大風呂敷プロジェクトに見られるような、あらゆる人を巻き込むインクルーシブでコミュニティー中心の芸術祭になることを目指しているように思われる。多数の面白みがあり、アイコニックな会場で作品を展示することにより、札幌の都市としての魅力を紹介している。

———

改善すべき点

- ・実務的問題点として、SIAFパスポートの入手が簡単ではなかった。パスポートを購入できる場所は少なかったため、パスポート販売のない会場に来場者が来た場合、遠くからはるばるイベントを見に来たにもかかわらず門前払いされてしまうことになる。
- ・JR札幌駅のSIAFインフォメーションセンターは役立ち、スタッフはフレンドリーで英語が話せたが、案内表示を使うことにより、駅建物中でのインフォメーションデスクの場所を目立つように改善することが可能であろう。
- ・中心部から離れた会場への連絡バスの本数が増えればよかった。
- ・全体テーマはあまり興味を引き付けるものではなく、サブテーマ「ガラクタの星座たち」も面白みがないとは言わないが、一般的な来場者にとってはおそらくぼんやりしすぎていたのではないかと思われる。

———

次回開催に向けてのアドバイス

SIAF2017に参加したアーティストの大多数は日本人であった。結果として、「札幌国際芸術祭」はびったりした名称ではないように思われる。SIAFを名称だけでなく真の国際フェスティバルにするためには、海外からさらに多くのアーティストを迎えるべきである。また、クリスチャン・マークレーなどの著名人だけでなく、新進アーティストも含めることにより、SIAF会期中及び準備段階における彼らの札幌滞在が、日本人アーティストとの芸術交流のさまざまな機会を創出するであろう。SIAFは“アート”フェスティバルとして、さらに洗練されたキュレーションによるアプローチや、今日的意味があり、かつ、タイムリーであるテーマの選択により、メリットが得られるのではないだろうか。

———

自由意見

数多くのフェスティバルやビエンナーレを観てきた者として、SIAF2017においてゲストディレクターの作品が目立って取り上げられていたことに驚いた。大友氏は、彼が参加したライブイベントに加えて、mima北海道立三岸好太郎美術館での自身の展示の他に、複数会場で作品を展示していた。これは悪いことではないし、大友氏は人気があり広く愛されている人物であるようだが、私は個人的に、今回の芸術祭がこのカリスマ的ディレクターに少しばかり偏りすぎていたように感じた。今後は芸術監督に加えて、キュレーターを選任してもよいかもしれない。

札幌ポリフォニー

Clélia Zernik クレリア・ゼルニク

パリ国立高等美術学校 芸術哲学教授／美術評論家

総評

SIAF2017の特色は、アーティストと市民だけでなく、アーティスト同士、人間と人間以外のものとの間に架け橋をつくり、つながりを構築することへの強い思いにあるのではないだろうか。ゲストディレクターである大友良英もまた、アートによって独立したものの間に調和関係を生じさせていた。各アーティストによる独立した作品をもう少し注意深く見てみると、作品は相互に呼応しているように見える。インスタレーションの多くは、出発点としてガラクタが使用されているが、それらはいまなお音を出し、動き続けていた。例えば、モエレ沼公園でみられた大友のインスタレーションでは、古い機器を接続しあい、星座が形成されており、それは人間ではないものの存在に語りかけているように思われる。毛利悠子のインスタレーションでは、複数の古いピアノが自ら演奏を始める。毛利は大学の長い廊下を風が吹き抜けるサウンドスケープに変え、過去のエコーを表層に呼び戻す。梅田哲也はデパートの忘れ去られた屋根裏で見つけたものを集め、それらを建物の振動に合わせるように作動させる。堀尾寛太は空きビルを使い、自動的にシャッターが開閉したり、照明がついたりするインスタレーションを展開した。この芸術祭を最後に取り壊される建物が、長い眠りから目覚め、あくびをし、叫び声をあげていたかのようだ。生命、記憶、物体の動きは人間の動きよりもはるかに大きい。私たち全てを一つにつなげる、この共通する生命の原理に注意を向けるべきではないか。端聡による美しいインスタレーション《Intention and substance》もまた、生命の循環に目を向けさせる。端聡は非常に短い循環回路で液体と気体の出会いをつくり出し、私たちの概念的カテゴリーを越え、無数の光が放たれる。これらの作品は全てに共通して、人間を除外した自動的な機能を使っている。本芸術祭は、もののつながりや関係性を称え、人々にこの例に従おうと誘っている。これが私なりのサブテーマ「ガラクタの星座たち」の解釈である。このようにして本芸術祭それ自体がポリフォニーとなり、一つのアート作品となる。大友にはフェスティバルを盛大な祝祭へと変化させる並外れた魅力がある。

評価できる点

ライブやパフォーマンス、DJ盆踊りなど、芸術祭に華を添えたイベントが多数あった。また、本芸術祭は、市民や観光客、子どもや高齢者など、あらゆる人を一つにすることを目指しているように思われる。このインクルーシブなコンセプトは非常に重要なものであり、アート界のみを対象とした欧米のビエンナーレ/トリエンナーレのエリート主義的コンセプトとはまったく異なっているように感じた。アート界の周りの全ての人を取り込むことは、社会的つながりを再構築する。できるだけ多くの人々を取り込むことが本芸術祭の目標であるならば、①開幕時における札幌以外での情報発信(推測するに、例えば東京の美術館やアンスティチュ・フランセのような機関などでの十分なPRができていなかったように思われる)、②会期中の会場のサイン(設置箇所や効果)、③終了時における国内及び海外プレスによる報道、来場者数、という3つのデータを評価、数値化することができると良いのではないだろうか。

改善すべき点

本芸術祭が全ての人を取り込もうとするならば、外国人への対応があまり行われなかったことを指摘する。ガイドブックや資料などで英語に翻訳されているのは一部のみであり、サインは読みにくく分かりづらい。各作品の作品解説はよく作られており、うまく英語翻訳されていたが(例えば、端聡の作品解説は極めて分かりやすかった)、全般的・実用的な情報の英語翻訳が非常に少なかった。夏の北海道には大勢の外国人観光客が来るのに、SIAF2017への外国人来場者は少なく、また、本芸術祭に関する英語情報は十分ではなかった。さらに、非常にローカルな地方イベントに参加しているという気分になるのは、おそらく国際的に知名度のある作品やアーティストが不在だからであろう。また、本芸術祭の独自性のあるビジュアルを効果的かつ明確にすべきであった。

日本の多くの芸術祭に共通していることだが、各展示会場が非常に離れていることも多少は来場者の意欲をそぐ要素になりうる。遠く不便な場所にあるように見えた会場に、足を運ぶことを諦めた友人もあり、結果として、本芸術祭の一部しか見ることができず、明確な理解が得られなかったようだ。

次回開催に向けてのアドバイス

大勢の来場者と外国人を引き付けるため、今回は国際的知名度の高いアート作品を1、2点展示することを推奨する。クリスチャン・マークレーや大友良英は非常に有名な国際的アーティストであるが、専門家ではない一般的な来場者にとってはやや特殊に感じたかもしれない。一方で、家族的なあたたかな雰囲気や、この芸術祭にエネルギーを与えている社会的・協働的な側面は残す必要がある。作品の気品、地域の歴史、そして芸術祭そのものが持つコミュニケーションを生み出す力を保ちつつ、さらに目を引くようなメジャーなイメージを加えていくことも必要であろう。例えば、全ての資料に本芸術祭のアイデンティティーとなるような画像を入れると良かっただろう。今回のガイドブックやウェブサイトにあるような抽象的な色使いよりも、簡単に認識できる画像の方がベターであったと考える。その方が独自性をより強くビジュアルで訴えることができ、あまり情報を得ていない来場者や外国人にも本芸術祭の特徴を瞬時に理解させることができたであろう。情報のコミュニケーションに関する取り組みは、どちらかという一般的なガイドラインに即して行われるべきであり、また、北海道に観光で来る人の流れを本芸術祭に引き付けるための取り組みを行うべきである。なお、学術的な解説や内容は極めて正確であり、うまく行われていた。

自由意見

個人的には、いくつかの要素が一つのインスタレーションから次のインスタレーションへと循環し、大友良英の意図する目的が明らかにされていたと感じた。大友のようなミュージシャンを除いて、一般的には、アーティストが協働することはまれである。大友はアーティストにその認識を持たせることなくコラボレーションさせ、芸術祭の参加アーティストからジャズバンドのミュージシャンへと変化させた。これが、SIAF2017のテーマである「芸術祭ってなんだ?」の一つの解釈である。この疑問符は、密かに解釈の創出を待ち望んでいることを意味している。つまり、この芸術祭自体が、全ての作品がつながって生まれたマスターピースであるのだ。大友は芸術祭というコンサートの指揮者のように、異なる芸術表現の間でハーモニーを生み、人々をつないでいる。キュレーション自体が芸術表現の一つであるとも言えるだろう。参加アーティストが一つになり、家族や地域に親しみのあるものがあったことは高く評価するが、外部には十分に開かれていなかったように思われる。SIAF には、再構築に向けた力や情熱は十分にあるように思われる。私は、英語を話す友人が会場を案内してくれたことから、本芸術祭の高いクオリティと一貫性を大いに評価している。しかし、そのような手助けのなかった人たちは、この芸術祭の唯一性や知性を理解できなかったのではないかという懸念が残る。

市民と直接つながり、コミュニケートする芸術祭

David Novak デヴィッド・ノヴァク

カリフォルニア大学サンタバーバラ校音楽科准教授

総評

2017年9月20日から25日までSIAF2017に参加した。この期間中、ほぼ全ての展示を見て回り、パフォーマンスやイベントにも参加することができた。私は総合的に、SIAF2017に対して極めて好ましい印象を持った。展示の質は非常に高く、会場自体にとっても独自性があり、また芸術祭の一部として多くのワークショップやパフォーマンスイベントが企画されており、活気に満ち充実したスケジュールを構成していた。一連の展示物は先進的であり、既存の組織や施設、コミュニティスペースの活用や市民参加の促進という観点の両方において、札幌の資源を存分に活用していると感じた。大友氏は素晴らしいキュレーターであり、本芸術祭開催における大友氏の役割は、コンセプト的にもイベントの段取りに関しても顕著であり、芸術祭全体に同氏の影響が深く表れていた。

評価できる点

大友氏は地域社会を巻き込み、展示とイベント/パフォーマンス/ワークショップを織り交ぜてSIAF2017を企画した。このアプローチは、社会プロジェクトに携わったキュレーターであり、ミュージシャンでもある同氏個人の経歴を反映しており、今世紀に入って以降の社会志向アートへの大きな「社会の転換」ともぴったりと合致している。ノイズ電車や市電放送局JOSIAF、DOMMUNE SAPPORO!、OYOYO まち×アートセンターさっぽろなどのプロジェクトが一般参加型であったことで、札幌市民と直接つながり、コミュニケートする芸術祭が実現された。札幌は、国際フェスティバルの会場として、モエレ沼公園や札幌芸術の森、札幌市立大学、mima 北海道立三岸好太郎美術館やさまざまな商業施設に恵まれており、芸術祭を巡ることが札幌の建築様式やライフスタイルを楽しむスペシャルツアーになっていた。さらに、おそらく札幌ならではと思うことは、ゲストハウス、駅の通路、商店街、ビルなどのローカルな場所が展示会場として使用され、街全体が芸術祭に織り込まれていた手法も面白く味わった。これにより札幌の街を探索し、日常生活に溶け込む感覚がもたらされていた。「大漁居酒屋てっちゃん」が特に記憶に残った。

また、札幌のアートと音楽の長い歴史を垣間見ることもできた。NMAライブ・ビデオアーカイブ、mima 北海道立三岸好太郎美術館、そして札幌市資料館での展示は、市内の美術組織やアーティストに新しい作品をもたらした。私の限られた視点からではあるが、大友氏が地元のアートコミュニティを本芸術祭に巻き込み、札幌市民が最新のサウンドアートやパフォーマンスに触れ、クリエイティブな生活へのインスピレーションを得たことは素晴らしいかった。SIAF2017は、地元から国際的なコネクションに至るまで、利用できる資源の全てをうまく活用していた。「アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 札幌スペシャル」は新進即興演奏者の国境を越えたネットワークとつながる絶好の機会であったし、札幌芸術の森会場のクリスチャン・マークレーの作品は重要な新しい取り組みであった。

改善すべき点

SIAF2017の最大の難点は、会場が市内全域に遠距離で散らばっているという根本的な問題であった。この問題は札幌の都市構造に伴うものであろうし、簡単に解決されるものではない。特色ある場所を利用しながらも、この問題をいかにスムーズに変えていくことができるか、私には分からない。私が経験したところでは、会場連絡バスはモエレ沼公園や札幌芸術の森へ行く際には便利であったが、バスをつかまえるのは不便な場合もあり、また満員だったこともあった。地下鉄やバスを使ってモエレ沼公園に自力で行くこともできたが、日本語を話せない人にとっては難しいのではないと思う。札幌駅は、混雑しすぎていて作品を簡単に設置できる場所ではない。通りすがりの人が思いがけずアート作品に目を留めるには良い場所であるが、プログラムからその場所を見つけ出すのが難しいことから、私なら札幌駅に重要な意義を持つ作品を設置することはしない。また、この点に関連して、英語版の作品解説が主な印刷物に掲載されていれば、日本語を話せない来場者に役立つのではないだろうか。展示会場を訪れることは時間を大いに費やすため、

何が見られるのかという意義がさらに分かるものや、本芸術祭のコンセプトや目的に関するPR資料という観点から、もう少し内容のあるものが求められるのではないかと思う。

最後の指摘としては、本芸術祭のキュレーションへの大友氏の有益かつ影響力の大きな関与が、別の観点からはセルフプロモーションであるとの間違った解釈をされてしまう可能性がわずかにあるということである。大友氏は、キュレーターとして独自性のある素晴らしい人物であり、SIAFの選考は称賛に値する。総合的に、これは大成功であった。しかし、このキュレーターの影響力が独自のネットワークや人脈に強く反映するのは避けがたく、また同氏の経歴が押し出されすぎていると見られる可能性はあった。例えば、キュレーターが自分自身の芸術活動に焦点を当てた展覧会(例:大友良英アーカイブ)を開催することは、あまり一般的ではないだろう。私の個人的見解としては非常に興味深かったが、この展示は参加アーティストの中でも作品紹介を行う最も大きな展示であっただろうし、本芸術祭で注目を浴びた大友氏の他のインスタレーションやパフォーマンスと相まって、参加アーティストの中でアンバランスな展示ではないか、という懸念を引き起こしたかもしれない。一方で、キュレーターが開催地に6カ月間移り住んで地域社会に溶け込むというのも一般的ではない。よって、彼の大きな関与によるメリットは数々あった。大友氏の類まれな人物像や献身によって、たくさんのエネルギーや参加者を生み出し、また、本芸術祭を唯一無二のものにしたのは明らかであることを改めて述べておきたい。

次回開催に向けてのアドバイス

SIAFの現行モデルには多くの長所がある。札幌はアートフェスティバルにはぴったりの美しい場所である。今回のパフォーマンスイベントやワークショップは社会的資源を耕し、札幌におけるクリエイティビティーを培うための素晴らしいモデルであったと感じた。市民がSIAFに寄与するプロジェクトに参加できることを知っていれば、芸術祭や地元アート界にさらに積極的に関与するようになる。大友氏のモデルはこの点において成功を収めた。結局のところ、芸術祭が長続きする長期的価値を生み出すのは、このような市民による継続したクリエイティブ活動のネットワークであり、それによって市民と外からの来場者の両方が、札幌は開かれたアートと文化の街であるとの認識を持つのである。従って、札幌市は力強いアートコミュニティの育成のため、SIAF開催年以外においてもアートプロジェクトを継続支援していくべきである。これは、一人一人のアーティストやアートグループの活動や、アートグループとコミュニティとの間で行うプロジェクトを促進する観点から、日常生活にアートを持ち込むべく、学校やアウトリーチの場などで実施していくべきである。創造的な機会が生み出される都市を札幌市民が志向しているとすれば、札幌市は芸術文化にすでに深い関わりのある都市であり、それを背景にSIAFは自然と生じてくるといえる。さらに地域に根ざした社会的創造性の価値が生まれれば、SIAFはより一層独自性の高いイベントになるだろう。あらためて、素晴らしいイベントを開催した主催者とキュレーターに拍手を送りたい。SIAF2017は将来に向けた大きな一歩であった。

魅力的で時に札幌の景観の探求をすることになった芸術祭

Reuben Keehan ルーベン・キーハン

クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館 (QAGOMA) アジア現代美術キュレーター

総評

1980年代から90年代にかけた地方美術館ブームの再来のごとく、日本は今、新たなビエンナーレや芸術祭の乱立を経験している。これは、資金や動員の取り合いという大きな課題を各事業にもたらす一方で、重要な問いも提起している。それは、大規模芸術祭に特徴を与えるものは何か、またそれは現状の文脈にどのように作用するのか、という問いである。

SIAFは、この土地の持つ地理的独自性や、初回から2回続けて、アーティストをディレクターに起用した点が特色となっている。興味深いことに、坂本龍一と大友良英はビジュアルアートではなく、ミュージシャンとして前衛音楽とポピュラー音楽にまたがる活動をしている。実際にSIAF2017開幕のプレスイベントにおいて、大友は「現代美術」という制度に対する反感を率直に公言し、多様なインスタレーションやパフォーマンスを通して主として音(=sound)に焦点を置いた展示をつくり上げていた。会場は、市内中心部から郊外にある主要会場まで40カ所以上にわたって広がり、札幌の景観を巡るという点においても本芸術祭は魅力的かつチャレンジングなものであった。

最も心ひかれた2つの会場は、市内中心部から離れた場所にあった。イサム・ノグチによる明確なビジョンが貫かれたデザインによるモエレ沼公園と南部に位置する札幌芸術の森である。両施設ともに、広大な野外環境と、アートに適した既存スペースであるという特徴を有している。芸術の森に隣接する札幌市立大学では、本芸術祭の見所の一つである毛利悠子の素晴らしいサウンドインスタレーション《そよぎ またはエコー》が展示され、札幌芸術の森美術館では、クリスチャン・マークレーの作品を概説するような優れた展示が行われていた。その他の見所としては、開幕週に行われたマークレーと大友によるアコースティックな実験的サウンドパフォーマンスと、正規の芸術表現から外れ、まるでそれに対抗するような北海道独自のクリエイティビティーに敬意を表した「札幌と北海道の三至宝 アートはこれを超えられるか!」が挙げられる。

評価できる点

明らかに実験的な要素の強い芸術祭において、大友は「盆踊り」の開催によって非常にアクセスしやすい入口をつくった。また、多数の会場にわたる展開により、来場者は各会場を移動しながら札幌のさまざまな側面を体感することができた。展覧会という観点から見ると、具体的なテーマを持たせるのではなく、はっきりとした手法と、音というメディアに焦点を置くという明確なアプローチがあったと言えるかもしれない。作品は概ねクオリティが高く、札幌の歴史や背景との関連性が感じられるものであり、また、会場の選択もうまく行われていた。

改善すべき点

来場者からは共通して、ガイドブックに掲載されていた地図のクオリティに対しての不満を聞いた。曖昧で不正確な部分が多い傾向にあった。概して、SIAF2017のような複数の会場で構成する大型芸術祭の場合、特に札幌以外からの来場者にとっては、地図は可能な限り明確かつ正確であることが重要である。市内にある各会場間を移動することは思わぬ場所の発見に恵まれる一方で、一般の来場者にとっては厄介なことになることもあり、優れた展示作品との出会いの機会を減らしてしまうことになるだろう。

次回開催に向けてのアドバイス

芸術祭に特徴を与えるものは何か、またそれは現在の芸術祭の文脈にどのように作用するのかという問いに立ち返ると、重要なのは札幌と北海道の背景に焦点を置くことであると言える。この点から、日本の他の芸術祭やビエンナーレにはできない方法で、どのようにしたらこの芸術祭を「国際的」にすることができるだろうか。ボーカルグループ・マレウレウの参加や、毛利悠子の砂澤ビッキ作品への関心は、現代のアイヌの表現と、沖縄や台湾、フィリピン、ボルネオ、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋及び北米を含む各地の先住民アーティストとの対話のプラットフォームをSIAF

が創出し得ることを示唆している。SIAFには、ダイナミックで学際的なイベントであることを越え、北海道におけるアート制作の将来的な発展に直接インパクトを与えられる豊かな可能性がある。

自由意見

私は現代美術を専門とするプロのキュレーターであるが、制度としての「現代美術」に対して大友が示した反感に共感を覚えることがあるのを認めなくてはならない。一方で、現代美術をより広い文化領域に開こうとして、美術館や芸術祭が大手映画会社やファッションレーベル、世界的なブランドなどの商業文化を頻繁に活用し、それによって実験音楽、文学、演劇、ダンス、映画などに見られる真の実験やイノベーションが犠牲となっていることも、私は知っている。SIAF2017は、ストリートフェスティバルや地域の祭りといった異種文化の要素を取り入れることで、大衆を引きつける力を得た。今後の芸術監督の人選については、坂本や大友の後継者にふさわしい人物を見つけることが重要だと私は考えている。後継者は、商業主義を必要とせずに大衆受けするものとアバンギャルドとのバランスを取ることができ、ショッピングモールで見られるようなもののレプリカではなく、現代美術を他の実験的分野(音楽、文学、演劇、映画又はそれ以外のものであるかもしれないが)に広げていくことのできる人物であるべきだ。また、個人的な見解として、SIAFの課題は、本芸術祭の文脈において最も意味のある国際性の担保を模索しながら、刷新と継続のバランスをうまくとっていくことであると考えている。このことは、飽和状態となってきた芸術祭市場において、差別化を図ることにもつながるだろう。

Evaluation of the Sapporo International Art Festival 2017–

How art, sightseeing and festival management be balanced?

Amano Taro

Curator in Chief, Yokohama Civic Art Gallery Azumino / Sapporo International Art Festival Committee

General comment

This art festival was held under guest director Otomo Yoshihide. It was a genre-strad-
dling festival (fine art, music, etc.), and the director also participated as an artist. It
was also characterized by various venues that were scattered throughout Sapporo. In
addition, it was one of a kind in that the director was unusually spotlighted. Otomo's per-
formances and his chronicle at the Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido were also
popular. It was also lucky that Otomo was originally associated with Sapporo.

Venues were scattered throughout the city, and works somehow represented the
nature of the venue, that is, the nature of the locality of Sapporo or Hokkaido. As a
result, viewers were able to be aware of the place by knowing the background of the
works while travelling around the venues. Viewers could also appreciate the reality
captured between the artist and the place rather than a global vision. This should also be
recognized. These trends would not have been won several years ago. Since the global
framework collapsed, however, it seems that the unit of an ethnic group or its living place
has become the smallest unit where values can be barely shared. Accordingly, it was a
meaningful structure.

I would like to mention the fact that there exists no main venue, which is a charac-
teristic and also a weakness of the Sapporo International Art Festival. That is an issue
I pointed out before the festival. It could cause serious problems with income (people
have to buy admission tickets to see the main venue in Aichi and Yokohama), and the
dispersed venues could put an extra burden on viewers. Meanwhile, except these nega-
tive points, travelling around the city provides increasing opportunities for viewers from
outside Hokkaido to discover something they didn't know about Sapporo and Hokkaido.
That said, in international festivals with a main venue, 60 to 70% of visitors to the main
venue moved to other venues. There is a tendency that people are satisfied with the main
venue only. Local governments are very much interested in the role or function of an
international exhibition as a tourist resource. In this regard, this situation in which visitors
have to travel around various venues can be utilized to promote tourism.

Outdoor exhibits were fewer than in the previous edition (Sapporo Ekimae-dori
Underground Walkway, Shimabuku's stone, Korogaru Park in Nature in the backyard of
Shiryokan), and more indoor places, especially rarely visited places, were selected as
venues. The places may not have been spectacular but the combination of the places
and works led to new discoveries. At Sapporo City University, visitors could enjoy archi-
tecture by Seike Kiyoshi and a site-specific work by Mohri Yuko. Exhibits by Sawa Hiraki
and Kuwakubo Ryota at HUG, CAI02 and Maruyama Zoo were also popular as site-spe-
cific works. Many people, especially visitors from outside Hokkaido, favorably viewed
the venues that were close to good eating places, including HUG (near Sapporo Factory),
OYOYO (near a soup curry restaurant) and Susukino.

The addresses of venues were not listed in the guidebook. Maps were included but
they were difficult to read. It was difficult to find buildings on the ground. The street maps
after going through ticket gates in the subway included platform numbers and were easy
to understand thanks to the cooperation of the Municipal Subway. Advertising such as
digital signage was effective at subway stations and in the Underground Walkway. The
SIAF colors were effectively used for ad-covered streetcars.

Venue structure and works

Public relations

Opening hours of venues

Stamp rally

Reception and supervision

Pamphlet

Means of transportation

Advice for the next art festival

Information on several time slots should have been provided more effectively. Some
visitors could have used pockets of free time to take in works and stopped by on their
way home from work.

It encouraged visitors to see all the venues, and the route avoiding the city center was
popular for stamp rally lovers. When exhibitions at public facilities (including universities)
and outdoors were cancelled due to Typhoon No. 18, it was great that the information
was provided through the Information Center at Sapporo Station, the official website and
social media sites.

Many people made favorable comments about the courtesy of staffs at each venue's
reception. For example, a visitor who lost his ticket at a venue said that he had a good
feeling toward a receptionist at the next venue who acted quickly and contacted the
previous venue to see if someone had left a ticket there.

Many people pointed out that the structure of the pamphlet was difficult to see.
Although it was revised, the first edition did not include the addresses of venues. Even
locals said it was hard to use. It couldn't be helped in print media, but limited-time exhibi-
tions and events were still listed in the pamphlet, which confused some people. Updated
information should have been provided at least on the event's website.

The 500-yen rental bicycle service in Sapporo was effective except in Moerenuma
and the Art Park. The price (500 yen) for rental from 6 a.m. to 12 midnight was reasonable.
Many overseas visitors used the service, and the receptionists were also praised for
their courtesy.

August is the summer holiday season, so accommodation fees are high. Many people
said that if shared houses and Airbnb could be used, they would spend more time in
Sapporo with their families. It is urgent to develop the accommodation infrastruc-
ture. Regarding the possibility of holding the event in winter, for visitors from outside
Hokkaido who are not familiar with snow, it will be challenging to look around exhibitions
over a wide area. The event should be held during the long summer holiday season to
attract more people, including the increasing number of inbound tourists.

As I mentioned earlier, the fact that there is no main venue should be used as an advan-
tage in the next art festival. However, it puts a heavy burden on the operation of the event
and requires a strengthening of curatorial activities such as the selection of artists and
how to exhibit works. As I have often proposed to the secretariat, it should be transferred
to the Sapporo Cultural Art Foundation to create a continuous organization. This seems
to be the only way for the above-mentioned human resource development, although
persons from the government are needed to serve as the director of the secretariat and
take other posts to liaise with City of Sapporo. It is an urgent task.

An art festival that breaks down fine art norms

Iida Shihoko

Independent Curator / Associate Professor, Tokyo University of the Arts / Associate Curator, SIAF2014 / Sapporo International Art Festival Committee

Points to be praised

Guest director Otomo's vision and policy for SIAF2017 were clearly expressed through the participation of artists who integrate music with fine art, and various civic participatory projects. The most important thing in the art director system is that the voice of the director reaches local residents, visitors and stakeholders. His thorough stance to make it an art festival for local residents with a selection of artists based on his own artistic tastes was positive characteristics of SIAF2017. Most works were pieces that can be felt throughout the body as audiovisual arts rather than visual arts, and many projects were conducted in a workshop style that provides a greater depth of experience. This art festival broke down the typical fine art norm. In addition to works for appreciation, experience and participation, subjective archives of Sapporo's cultural history were exhibited from an individual perspective. In the large context of an art festival, the consistent stance of the guest director, who tried to be an antithesis and alternative to the agenda of a usual festival, was highlighted. This defiant attempt became possible thanks to the high-quality works and the efforts of staff. A larger number of site-specific exhibits in multi-tenant buildings in the downtown area and buildings in the city were contrasted with exhibits in museums and other cultural facilities, adding depth to the art festival. Moerenuma Park, which was also one of the venues in SIAF2014, was set as the core of the concept, promoting the appeal of Sapporo and introducing tourism resources. Building on the experiences and failures of SIAF2014, civic participation made dramatic progress. This was the most important success. The graphic design was functional, readable and effective.

Points to be improved

The above points to be praised become points to be improved when they are looked at the other way around. Regarding the concept of "When Bits and Pieces Become Asterisms," the quality of works representing stars was high, but the entire art festival did not embody the asterisms. This edition could generally be regarded as a success, but if SIAF aims to be internationalized, it should also be an art exhibition worth seeing. The numbers of venues and events can be points to be praised and improved. Without curated exhibitions, numerous venues and events that are scattered throughout the city provide a feeling of dissipation. Continuous movements and changes during the event are desirable, but numerous small events can be followed by only the most dedicated festival lovers. One of methodologies that could be considered for future editions would be to make it a short-term event with intense large and small projects such as a film festival; or, the volume of exhibitions could be increased in the main venues. With regard to operation, it is required to improve the number of projects and organizational structure in line with the capacity and human resources of the secretariat. It seems that Sapporo residents' awareness of SIAF and participation were raised, but international visibility was not increased in the contemporary art domain. Consideration will be necessary on how important internationality is for SIAF. In some cases, it might be necessary to review and reconstruct the city's basic concept and shift the event to the Sapporo Art Festival.

Advice for the next art festival:

from the perspectives of uniqueness and continuity

SIAF2017 achieved uniqueness. Since it is extremely difficult to develop uniqueness in a sea of art festivals, it may be a good idea to set this event as a success model and select a non-fine art expert as a guest director for subsequent editions. However, appointing a non-fine art expert as a guest director often draws criticism from those involved in fine art. It may be worth thinking about a co-director system that employs a fine art expert and a non-fine art expert. With regard to operation, the numbers of projects and venues should be decreased to ensure the sustainability of SIAF. Although the guest director's passion and commitment are respected, the secretariat should take the initiative when planning the event in consideration of the capacity of the organization.

Free opinion

Given that SIAF is one of a few art festivals created from the bottom up in Japan, the elements that the event is held primarily for local residents and focuses are placed on contemporary art, are important. A variety of biennales in the world have proved that these two elements can be realized anywhere where there is the clear aim and vision for an art festival, regardless of the type of organization and scale of the budget. In Sapporo, local contemporary artists have organized contemporary art projects that also include international exchanges since the 1970s. The local government should support the creation of a framework (realized as SIAF today) that allows the sustainability of such events, particularly focusing on internationality, which is difficult for individuals to maintain. In the above points to be improved, I even suggested a shift to the Sapporo Art Festival as an idea, but SIAF should be reminded of its starting point in regard to "how important internationality is for SIAF (for local residents and contemporary artists)" and seek development as an "international" art festival. It was supposed to be one of the reasons for beginning the art festival in Sapporo.

Developing an art festival – for further expansion

Kumakura Sumiko

Professor of Tokyo University of the Arts (Department of Musical Creativity and the Environment / Department of Arts Studies and Curatorial Practices, Graduate School of Global Arts)

I saw almost all exhibits at SIAF2017, and was especially impressed by the work of Mohri Yuko, Horio Kanta and Umeda Tetsuya. Thanks to the successful artist-in-residence program, excellent installations were designed and created over time, satisfying visitors from far away at the event and making them say that it was worth travelling all the way to Sapporo to see them. At Moerenuma Park, the works of Otomo were exhibited among the works of invited artists, serving as an accent to and connecting the works of the invited artists and providing an exciting tour experience from an exhibition room to another. The concept for the exhibition at the Sapporo Art Museum was simple, but inspired young music lovers in Sapporo by highlighting a contact point between music and modern fine art. Unlike the deep exhibits at the Hokkaido Museum of Modern Art, Sapporo Art Park and the Red Brick (the Former Hokkaido Government Office) in the previous festival, this time the exhibits were characterized by a light and simple structure.

However, the true value of Mr. Otomo as a musician might have been expressed in live performances more than in exhibits. Particularly, people who met young musicians unleashed in the downtown area must have had an unforgettable experience. Mr. Otomo's human network turned the spotlight on minor music activities that have been passed down in Sapporo. This was historically significant. Unfortunately, I was not able to see any performances because I had such a short stay, although I efficiently took a bus tour that the Japan Association for Cultural Policy Research provided to see exhibits. I envied Sapporo residents. For visitors from far away who think that exhibits are the main attractions in art festivals, it might have been difficult to savor the sights and sounds of this art festival.

How was the event managed? As with the previous edition, I could feel the good teamwork in the operation team here and there in the art festival. Mr. Otomo's philosophy and inclusive operation policy –"an operation team like a big band" in his words– were highly suggestive for future art festivals in Japan. I hope the philosophy will root in Sapporo. The City of Sapporo's Secretariat was passionate and flexible about operating the festival in the same way as before although they may often have been challenged.

I just wondered why art-related people in Sapporo rarely responded to the festival from the preparation period. I often heard them say that they don't know what is going on. Do people think SIAF is an art festival by the city hall, for the city hall? If more foundations, universities, NPOs and artists participate in the art festival, and if all people in Sapporo work hard for and enjoy the art festival to develop themselves, it will be better. How should we develop the art festival when the director and secretariat staff members change every time? As I wrote in the previous evaluation report, the key is for local art-related people to increase their capacity to help support the festival and to continue/develop the festival based on their experiences. I hope for better management next time.

More vibrancy to be created through the selection and concentration of resources

Tarumi Hironori

Professor, Faculty of Law, Hokkai-Gakuen University (lectures on nonprofit organizations; arts and cultural policies) / Director, Kan Yasuda Sculpture Museum Arte Piazza Bibai (as well as Steering Committee member)

Points to be praised

- The thorough preparations and implementation system made possible by the cooperation between the Executive Committee and responsible department in the City Hall clearly demonstrates the advantages of the triennial format of the event.
- The fact that it attracts famous, accomplished and skilled general directors (Sakamoto Ryuichi last time and Otomo Yoshihide this time).
- Successive mayors (previously Mayor Ueda, currently Mayor Akimoto) have displayed ideal leadership during the series of phases (drafting, planning, implementation, appraisal, etc.) of the art festival.
- There were many ambitious and experimental exhibitions that utilized the infrastructure.
 - * Performances that utilized the streetcar during the Sapporo International Art Festival 2017 were of particular interest.
- The fact that the 2nd triennial event was executed admirably.

Points to be improved

Conversion from the current diffusion / distribution-style event to a more compact / densely concentrated event (Proposal 1)

The Sapporo Art Park in Minami Ward, and Moerenuma Park in Higashi Ward are far too remote. I very much agree with prescribing Sapporo Ekimae Street and the Sapporo Ekimae-dori Underground Walkway as the Welcome Gate but, unfortunately, there didn't seem to be a good turnout at that key "gate" during the period of the festival. I understand, to a certain extent, the City's wish to place importance on municipal facilities such as the Sapporo Art Park area (including the Sapporo City University) and Moerenuma Park area, but I believe more emphasis should have been placed on "the selection and concentration of resources (people, money, items, information, etc.)" and "the art festival's creation of a lively atmosphere". Or better yet, how about adopting a policy in which "the art festival is central" and "the fringe is for related events"?

Complete utilization of multilayered above-ground transportation, such as streetcars, velotaxis, shared cycles and the like, during the festival period. (Proposal 2)

In order to effectively stage a "lively" "city center art festival", as previously mentioned, the (ability to provide) efficient and dynamic above-ground movement of participants is necessary. The subways and buses also have a certain role to play, but there's no reason why we shouldn't utilize the loop-route streetcar, the velotaxis (human-powered taxis) that originated in Germany, and the Mobikes (shared bicycles) that arrived from China, which display the interesting development of Sapporo's multilayered network of diverse above-ground transportation. Attention should be focused on the realization of people's "movement around town as if breathing life into it." During the period of the festival, physically, financially and mentally, too, increasing the choice of above-ground transportation and the mutual connection of different means of transportation will help increase the appeal of the art festival itself, and also help convey the appeal of Sapporo's urban landscape to the world.

Advice

(including "free opinion")
with regard to the
staging of the next
edition

The "arenas" are in the town

(It seems that the clues have been found through the previous and this editions, but) changes in conception and new ideas should be accelerated with regard to the discovery of ways of utilizing "artistic arenas" for an art festival that is not tied to existing buildings such as art museums and public facilities. In particular, it is necessary to discover and unearth methods of utilizing commercial buildings, hotels, schools, cafes, shops, shopping streets, private houses, private warehouses and the like.
*The scale may be much smaller but, for example, the Hayama Art & Music Festival in Kanagawa Prefecture is a treasure-trove of ideas and I believe it could be used as a reference.

An important factor is money

I believe the key to the prosperity of an art festival is its function as a showcase for the trading of the work created there. A plan (= appeal) created on a municipal budget that originates from tax (= other people's money) should not just be left to an advertising agency or general director (= another person's power), but should be raised to a phase of a "spontaneous art festival", not only from a citizen base but also from an economic base. At world-renowned art festivals, I believe the importance of activities and exchanges of information with secret curators, galleries and art dealers in the fringe or behind the scenes and, in some cases, real commercial trading is, to a certain degree, common sense. At the same time, the successful experience in terms of financial profits of hotels and commercial facilities during the period are not to be taken lightly. In the short- and mid-term, an important attainment target will surely be that "SIAF is responsible for money being spent."

Nevertheless, people are the heart of the festival

However, as a precondition, as far as SIAF – which doesn't have Benesse or Tadao Ando – is concerned, there is no driving force to surpass the bottom-up power of the people. Having said that, "citizens" are prone to be known also as "an undisciplined crowd". I think it is essential to carefully examine what kind of citizens and citizens' power is necessary. Below is a list of sought-after civic models compared with those of the Setouchi Triennale (Art Setouchi).

Preconditions (the appeal of the town itself)

Setouchi: The idea of an art festival in such a remote, uneventful place is a god send → spontaneous power of the people such as the "Koebi-tai" support team and the like (hardly surprising)
Sapporo: An art festival that springs up in a place that has pretty much everything = just one of the appeals of the city → citizens are busy and leave everything up to the City (hardly surprising)

An art festival as a starting point of a journey vs. the finishing point of a journey

Setouchi: People gather with the "aim (finishing point)" of an art festival on small, uneventful islands → external success. As a result, discontent is latent → festival-style success in terms of visiting the art festival
Sapporo: "One of the reasons (starting point)" people are scattered around town is an art festival in a large city with urban functions → external failure. However, a certain level of travel satisfaction is ensured → all-round success in terms of visiting the art festival
(Does the appraisal of the art festival tend to be made considering that festival-style success is greater than all-round success?)

The model of citizens/civic power central to SIAF

- An art festival in which more of the face of the local people's representative –the mayor– can be seen: For example, at overseas art festivals (Paris and the like), "solo exhibitions" are held by artists –invited by the mayors– from regions around the world, who are not yet in the spotlight. Maybe "mayoral invitations" could become one of the highlights of SIAF.
- An art festival in which "Sapporo citizens at heart" can participate: Sapporo is a city with one of Japan's most prominent international brand strengths, with its Winter Olympics (1972), beer, ramen and the like. It would be good to devise a way in which those who love Sapporo without living here, and those who wish to travel or live here – in other words, "Sapporo citizens at heart" could participate in a special way at the SIAF.
- An art festival in which artists and artwork from around the world are the focus of lively buying and selling activities: Works of art spreading unprecedentedly as both interior decoration and as items that are the subject of somehow lucrative investment/speculation. During the SIAF period, I would like to see a scene in which pro and amateur buyers and sellers gather in Sapporo from around Japan and the rest of the world; in other words, the creation of an active showcase.
- An art festival for minorities: Maybe it is possible to strengthen the function of being the base for new art not bound to preconceived ideas, such as art brut (outsider art), indigenous peoples' art and the like.
- An art festival conveyed simultaneously via multiple languages and multimedia: By finding a method of overcoming the fact that art festivals in Japan lag conspicuously behind overseas art festivals regarding multilingual and simultaneous aspects, it would become one of Japan's most prominent art festivals in terms of international outlook.

Providing opportunity for local residents to experience the pleasure of an art festival is the priority

Fujita Naoya

Literary critic

Points to be praised

Compared with other art festivals, unique themes, such as music and noise, were involved. That deserves a nod of approval. The exhibitions that focused on carved wooden bears and other folkcraft articles were very nice. It was also interesting to bring "junk" as theme, which could be taken as negative stereotyping. Sapporo is a creative city in terms of media arts, and Hokkaido is known for its nature. These aspects can be highlighted. The works in the downtown area were great. Unique buildings such were boldly used as venues, allowing multiple contemporary art pieces to be seen.

Points to be improved

The festival was low-key as a whole. There was no power to attract people. Local people's sense of ownership was also low. It may be the cultural climate of Sapporo, but SIAF was cheerless compared with the art festivals of Echigotsumari and Setouchi, where local communities are involved (travelers enjoy having contact with locals). It seemed to have little effect on the local community. This also seems to be a problem unique to Hokkaido; everything was far away and it was inconvenient in terms of transportation. Both Sapporo Art Park and Moerenuma Park are beautiful, but access from the city center is bad. Tourists expect to see unfamiliar scenery, but the landscapes on the way to these venues were not unique, so the journey was boring. It may be a good idea to create artworks that incorporate transportation like the streetcar or to show videos for fun on the buses. The volume of exhibits at both venues was small, which caused a feeling of dissatisfaction. In Moerenuma Park, the whole area could have been used to exhibit 20 times as many works as in this edition (young local artists and students could have participated). Unfortunately, I must say that design was bad in terms of sightseeing.

Advice for the next art festival

The themes and contents of SIAF2017 were ambitious, but "noise" and "asterisms" may have been too advanced for themes. Appreciating noise, which seems only to exist when listening hard, is positioned as a reflection and criticism of spectacular art pieces. In Sapporo, which has little experience of spectacular contemporary art pieces, it was too early to appreciate noise, wasn't it? Priority should be given to involving local people in art by overwhelming them with flamboyant and intuitive contemporary art pieces. Compared with regions with a long history and tradition, Hokkaido has advantages and disadvantages. Traditional regions have abundant resources, people with a positive consciousness and social capital. In this regard, Hokkaido is at a disadvantage. However, it is an interesting place in that Sapporo is a newly designed city and has issues peculiar to modern times (pioneer days). Themes that appear to be negative, such as coal mines (energy development) and the massacre of Ainu people, are globally considered to be subjects that should be involved. By dealing with these modern-day issues, it may be possible to present a history unique to Sapporo/Hokkaido, but connecting it to regions around the world that face modern-day issues. That may develop ideas to attract visitors who are fed up with art festivals and the local art boom in Japan (visitors surely feel that ambitious activities that can be done only in a certain location and under unique themes are worth seeing).

Free opinion

The art festival could go beyond the framework of Sapporo. For example, various exhibitions can be held at New Chitose Airport. Hatsune Miku's theater can also be used. If the theme is "nature," the downtown area of Sapporo will not be suitable. Unspoiled, grand nature can be seen at, say, the Blue Cave. I guess that tourists who visit Hokkaido would like to see "nature" that cannot be seen in their daily lives. They would like to experience grand natural beauty. They would like to see flower gardens in Furano and the terrain of Lake Toya. Art can support nature rather than standing against nature. At the Kunisaki Art Festival, nature was promoted that way.

It may be good for private companies, such as companies related to Hatsune Miku and the computer industry to take a more active part. If Sapporo wants to promote media art, the power of private companies is necessary. Video game companies, such as Hudson and dB-SOFT, used to exist in Sapporo. This can be reevaluated and aggressively presented to appeal to gamers all over Japan ("game" is listed as a keyword for contemporary art in the *Bijutsu Techo* magazine, December 2017). Art festivals intended for only art fans cannot attract even art fans. Rather, creativity that alters and expands the outline of art will surely attract discerning fine art fans and involve many people previously disinterested in art.

An epoch-making art festival that enhanced its originality beyond the context of fine art

Hosoda Narushi

Writer

Points to be praised

It was great that underrepresented artists who are engaged in advanced expressive activities were spotlighted (e.g., Horio Kanta, Umeda Tetsuya, and those involved in NOISE TRAM; they are highly rated by some people, but are underappreciated by the general public). It was also great that the event was open to the general public without becoming "art for art's sake" and enjoyed by non-fine art experts, especially families and children (e.g., *(with) without records*: viewers including children were free to walk around; map of *Otodate*: stimulated an exploration spirit; *dot kai dot / DKD*: had a spectacular element). Many of the artists who produced these exhibits or performed usually act as musicians rather than fine artists, so the entire art festival was beyond the context of fine art, and the festival's uniqueness was strengthened as a result. Social media sites were also used for offering information. Visitors were allowed to photograph most exhibits, and they looked good on Instagram, so visitors spread information on social media like word-of-mouth communication. This is also highly evaluated as public relations strategy tailored to today's information environment.

Points to be improved

Since multiple venues were scattered over a wide area, tourists who stayed for a short period were not able to see all of them. This "elusiveness" itself was good*. However, many tourists only visited major spots (e.g., Moerenuma Park, Sapporo Art Park) without getting around various venues, resulting in less exposure to other events and art works. One of the purposes in the festival's basic concept is to "revitalize the art scene unique to Sapporo." As far as this year's edition is concerned, I had a strong impression of works by artists who are close to guest director Otomo Yoshihide, and did not feel the local art scene. There were works using Sapporo's geopolitical situation and cityscape, exhibits about the history of the city, and site-specific exhibits and live performances. I felt the attraction of Sapporo but not of artists living there. Due to the paradoxical standardization of experience, as mentioned above, the local art scene may have been invisible.

*As Yabumae Tomoko, one of the SIAF band members, said in "At the End of an Art Festival," a running story on the website "web Chikuma," SIAF made a remarkable contribution in highlighting the motives of artists while most other publicly funded art festivals, held as local revitalization, focus so much on risk aversion and meticulous planning that the artists' motives tend to get weakened.

Advice for the next art festival

This art festival is characterized by the fact that a musician served as a guest director and the unique aspect "between music and fine art," which is different from sound art in the context of fine art. I hope that these characteristics will continue. It is also necessary to consider from diversified perspectives what novelties can be gained from its uniqueness. For example, this year's festival was featured in art magazines, but it could have been picked up as a music festival in music magazines. I hope for such collaboration with various media for the next edition. Since the next festival is scheduled to coincide with the Tokyo Olympics, it will be necessary to further highlight the attraction of Sapporo as a creative city. For example, not only exhibitions and performances but also workshops, with which it takes time to bear fruit, were held in the festival. What kinds of achievements will the participants make three years later? I expect this aspect to be shown in the next edition. This will make an art festival that clearly shows visitors the unique art scene of Sapporo.

Free opinion

Since I was a tourist who visited Sapporo for the first time to see the art festival, I enjoyed the exhibits and live performances and felt the attraction of the city. However, partly due to its "elusiveness," experiences seem to be quite different for local residents and tourists who stay for a short period. More specifically, visitors can be classified into Sapporo residents who can easily visit the venues, suburban residents who need some time to visit the city, and tourists who can visit Sapporo only once during the festival period. These visitors are also classified into those who visit the city to see the art festival and those for other purposes but find the art festival accidentally (see the below figure).

People in these categories seem to have had different experiences in the art festival. In this year's edition, their different experiences were not necessarily ranked but considered equal to each other due to the "elusiveness." The information provision strategy on social media sites was effective for those who visited the city to see SIAF, but I doubt if it was effective for suburban residents who happened to visit and Sapporo residents who did not follow the event. Since most of the visitors are from Sapporo or the suburbs, an information strategy suitable for those categories will be necessary. It will be desirable to develop fitting strategy for each category, and it will be also necessary to avoid the paradoxical standardization of experience by securing diverse experiences in the same category.

	Sapporo residents	Residents in the suburbs of Sapporo	Tourists
For the art festival	Have contact with the art festival in their day-to-day lives. They have opportunities to visit every day.	Visit the art festival in their day-to-day lives. They have opportunities to visit a few times.	Come for the art festival. They have only one opportunity to visit.
For other purposes	Sapporo residents who don't know or who are not interested in the art festival. It is possible to get them know or make them interested in the festival over time.	Residents in the suburbs who visit Sapporo for other purposes. A good first impression may make them visit a few times.	Tourists who visit Sapporo for other purposes. They are unlikely to visit again regardless of their first impressions.

Need for a bold policy that would be impossible in other events and efforts to help people enjoy art

Yoshizaki Motoaki

Manager, General Affairs Section, Sapporo Cultural Arts Foundation / Japan Foundation for Regional Art-Activities / Sapporo International Art Festival Committee

Points to be praised

The distinct personality of the guest director, who is a musician, was reflected on the festival and the theme was consistent throughout the event. These points made the festival unique and different from other art festivals. It artistically spotlighted expressions that had rarely been highlighted and things that had long been in Hokkaido but neglected, providing a new stimulus to Sapporo residents. Many local people participated in the project team, and ideas were publicly sought to develop official projects. Opportunities were also provided for locals to participate in concerts and theatrical plays, and as volunteers for the O-furoshiki Project. These represented the organizer's awareness of local power and an intention to get locals involved in the event, making it different from the previous event. A number of projects that were developed through activities in this area were powerful enough to spread beyond the boundaries of the local area. The guest director stayed in Sapporo almost all through the festival and appeared in various events, creating a cohesive impression on the festival and developing an affinity with local residents. Many events, including pop-up events, were held in different places, successfully creating a festive mood.

Points to be improved

Both art lovers and people unfamiliar with experimental expressions seemed to feel confused by works created from noises and "bits and pieces" (junk) as they are not beautiful or pleasant for many people. I praise the effort but a little more work to help viewers to enjoy works was needed. It is a shame that the attendance in fee-charging venues did not increase as expected, even though the event was in a high season that attracts many people to Sapporo. It is also a shame that not all the events attracted a range of people. Some people who actively participated in the orchestra, theatrical plays and the O-furoshiki Project seemed to have a rewarding time, but I felt that their enthusiasm created a feeling of distance for other people. The majority of people in concerts and various other events were very enthusiastic participants, and the sight of people greeting each other in a friendly way created a clubby atmosphere that brought a feeling alienation to other people. This may have led to the impression of a "private festivity," an expression that was often seen on the Internet.

Advice for the next art festival

Serious consideration should be given not only to the results of the art festival but also the role of an art festival in Sapporo, which is home to various other art projects, organizations and institutions. The triennial art festival is a large-scale event with a large budget, which could add something to the culture of Sapporo. Such an event could employ an advanced, stimulating and bold policy that would be impossible in other events. In addition to the uniqueness of the festival to attract attention from outside Hokkaido, it is also important to consider how to have the event take root in Sapporo. Attracting many local residents at once is difficult, so there is no choice but to increase visitor numbers little by little. It is necessary to make efforts to get as many people as possible interested in the event and create an accessible environment and a welcoming atmosphere. When I visited another art festival, I found that a guided bus tour to travel around venues was convenient. In Sapporo, venues were scattered over a wide area. It may be a good idea to prepare a few courses for bus tours to efficiently travel around the venues, even if it is subject to fees. I hope that programs not only for children but also elderly people and those with disabilities will be planned. I think that an art festival in winter with snow is effective for highlighting the uniqueness of Sapporo and for hosting the Olympics as well.

Free opinion

One of the appeals of art festivals all over Japan is that visitors can experience the memories and culture of the area and the daily lives of local residents in the area, which are rarely experienced in sightseeing tours. It is related to the fact that not only art museums, galleries and tourist spots but also private houses, abandoned schools and vacant stores are used as venues. The art festival in Sapporo is also expected to have a similar effect, and provides opportunities for tourists and local residents alike to discover the value and appeals of the area. As the art festival continues over time, it will gradually affect the culture and society of Sapporo. If there are legacies of each festival, they will help people realize that the festival has gradually gained popularity. Unlike the piece created by Shimabuku at the first event, it may be difficult to preserve exhibits in this festival, but it may be possible to continue some events of this festival in the future; that is, to leave behind events rather than things. Promoting the archiving of various things that were done in this festival is one such effort.

Keep asking the question, "How do we define 'Art Festival'?"

– Beyond Sapporo International Art Festival 2017

Yoshimoto Mitsuhiro

Director of the Center for Arts and Culture , NLI Research Institute

Clear directorship

An art festival, in which directorship was exercised to the fullest. This is my overall impression of the Sapporo International Art Festival 2017. Not only the director's works and live performances, but also the concept, the lineup of artists and works, the Streetcar Projects and other events – it was an art festival where it felt like noise music was played in the whole city. I missed SIAF2014, so I just understand it with only materials, but the director's color seems to have been more apparent in SIAF2017 than before. In this regard, SIAF2017 was more outstanding than other art festivals in Japan. One contributing factor was that the guest director was a musician rather than a curator or a fine artist. The selection of the director is a key element in the success of an art festival. It also involves a great risk, but SIAF2017 was a commendable success in that regard. Musicians have been picked for the post twice in a row. This showed the direction of the Sapporo International Art Festival. The guest director system makes it possible to deliver a concept and a key message that are unique to the year's event, but it makes it difficult to form a uniform image of the art festival. How does SIAF appeal to society as an art festival? What value does it bring to local people and the community? These points should be considered from a medium- to long-term perspective for the third edition. The selection of the next director will deserve special attention.

Urban space and the art festival

More works were installed in the downtown area than before. I did not visit all the venues, but I was impressed by Hokusen Plaza Sano Bldg., Kinichikan Bldg., Ringo, and the backyard of the Shiryokan. I felt a certain type of guerilla characteristic in the locations, spaces and works, and it matched the sub-theme, "When Bits and Pieces Become Asterisms." Exploring works exhibited throughout the city with a guidebook in hand was part of the fun of the art festival. Compared with events that are intensively held in one place, however, I have to admit that it was disadvantageous in terms of festivity. Major works could be appreciated in Moerenuma Park, Sapporo Art Park and the Shiryokan, but it was not easy to visit all the venues in a short period of time. To turn the disadvantage to an advantage, it is important to highlight not only the appeal of works but also attempts and venues unique to the art festival. In this regard, the Streetcar Projects, Tanukikoji TV, the Tenniscoats live performances, and the O-furoshiki Project at Sapporo Station and the underground shopping arcade worked quite well. However, there is room for improvement in the signs and maps in the downtown area. I was able to reach the destinations, but it was difficult to understand the routes to the entrance or works. Particularly, I almost lost my way to Ringo at the last corner about a few meters from the venue because it was near closing time and dark. This needs some improvement, such as showing the entrance with an arrow on maps, using more easy-to-follow signs in the downtown area and preparing a navigation app. The organizer intended to use the whole city for the art festival. Which venues did they visit? Which route did visitors actually use? What did they appreciate? It is necessary to examine these points for the next event although there is a limit to how well they can be evaluated just from the attendances at individual venues.

How do we define 'Art Festival' ?

In Japan, international art festivals are booming. New art festivals started in Saitama and Ibaraki (KENPOKU) in 2016 and in Gifu, the Northern Alps, Ishinomaki (Reborn-Art), Tanegashima and Okunoto in 2017. Against this backdrop, even people other than the director of an art festival may want to ask, "How do we define 'Art Festival'?" Most of the existing art festivals began in and after 2000. There is no other place than Japan where

so many triennale and biennale have been launched in such a short period time. It's only natural that people criticize the flood of art festivals and are concerned that they are all alike. This is taking a broad view, but what should not be forgotten is that each art festival is special to its region. In other words, the question of "How do we define 'Art Festival'?" is universal, and at the same time, it should be considered as an individual question for the region. If we divide art festivals into the village type that is held in natural surroundings and the urban type that is held in an urban area like Sapporo, it is harder to find a clear answer for the latter type than for the former type. This is because in the village type, people can find meaning in visiting there to see works. Visitors to village-type events from urban areas can rediscover the value of local history and culture, something they may have forgotten while focusing on economy and efficiency, and they also experience the reality of Japan's falling population and aging society. Local people have an opportunity to review the value of cultural activities and local resources that have been handed down over generations. Village-type art festivals play a significant role in bringing about economic benefit and local revitalization. It is great even if it was not the original goal of an art festival or even if it is temporary. In the urban type, where there are various cultural institutions and many cultural projects are conducted on a daily basis, what does it provide for local residents? What kind of role does it play for the local community? It is necessary to more clearly answer these questions in the urban type than in the village type. It is all the more so with Sapporo, where there are more cultural events initiated by the city than in other cities.

The City of Sapporo's cultural projects and art festival

The city's cultural projects include the Pacific Music Festival, which began in 1990 following a proposal by the late Leonard Bernstein, the Sapporo City Jazz, which began in 2007, the YOSAKOI Soran Festival, which marked its 26th anniversary in 2017, the Sapporo International Short Film Festival and Market, in which 2,000 short films are shown, and the Sapporo Engeki Season, an event to root theater culture in Sapporo. Compared with these cultural projects, I hope that the art festival will present social messages or questions rather than just providing an opportunity for everyone to easily participate and enjoy, like jazz and YOSAKOI. Of course, an easy-to-understand and enjoyable event is not bad, but I think that the art festival has profound significance in helping viewers to discover new visions and thoughts, get new perspectives of contemporary society and give critical interpretations. I understood this to be the intention of the director from the theme and the sub-theme of SIAF2017. The director said about the theme, "The festival I am imagining is creating, with our own hands, an intense place where our view of the world will be drastically changed after being there." The sub-theme, "When Bits and Pieces Become Asterisms," was explained by saying, "these pieces of work will help us to face the things we have dumped and to find the future." If the intention of this art festival was for us to understand his message from the art festival created by "bits and pieces that can drastically change our view of the world," I must say I felt it from the art festival as a whole. In that sense, as mentioned at the beginning, SIAF2017 was an art festival in which the directorship was exercised to the fullest.

Art festival in a creative city

Even so, there can be no answer to the question, "How do we define 'Art Festival'?" If an answer was indicated, an art festival must keep posing new questions to retain its significance. If an art festival becomes universally accepted, it will no longer be an art festival. In other words, there is always some sort of unintelligibility or difficulty in art festivals. I'm not going to say, otherwise, art festivals mean nothing, but there is no escape from it as long as contemporary art is featured. There is a similar aspect in creative cities. Creativity means to create new things that have never been seen. If so, creating only things that are easy to understand for local people is completely unrelated to creativity. Even if not accepted by the public, an art festival that provides unknown value to the city with an artistic approach and adds a fresh dimension to social issues is required for creative cities. It is said that tolerance is necessary for creative cities. In other words, curiosity about the unknown leads to the generosity and competence of creative cities. I hope an art festival will be at the center of a creative city. Such an approach is not easy for administrative organizations. However, that is the fate of creative cities and what is expected for art festivals. How do we define 'Art Festival'? I hope that the City of Sapporo will organize an art festival that keeps asking that question.

Inclusive and Community-centered Art Festival

Agnieszka Gratza

Freelance Art Writer

Points to be praised

For its first two editions SIAF chose to appoint as directors high-profile musicians whose work has also been featured in the festival. Hence the emphasis on sound art, live concerts and the wide-ranging musical offerings designed to appeal to a broad audience. This is one of SIAF's strengths and it gives this particular regional art festival a strong identity. SIAF does not seem to aspire to a curated approach with themes driven by art discourse and artists of the moment, but rather to be all inclusive and community-centred as Otomo Yoshihide's O-furoshiki project attests. By staging works in a host of interesting and iconic venues, it showcases Sapporo as a city.

Points to be improved

- On a practical level, getting hold of the festival pass was not altogether straightforward; there were not many places where they could be purchased, so if a visitor turned up at a venue that did not sell the pass they would be turned away, even if they had come a long way to see a show.
- Although the staff at the SIAF Information Center of the Sapporo JR station was helpful, friendly and spoke English, the visibility of the stand inside the station could be improved through signposting.
- More frequent shuttle bus services to outlying venues would have been welcome.
- I did not find the overall theme very engaging and the sub-theme ("When bits and pieces become asterisms"), though not uninteresting, was perhaps too obscure for your average visitor.

Advice for the next art festival

The vast majority of artists in this year's SIAF were Japanese. As a result, the festival's name ("Sapporo International Art Festival") seemed something of a misnomer. In order for SIAF to become a truly international festival, in more than name alone, more artists from abroad should be included. And not just the big names, such as Christian Marclay, but also emerging artists, whose presence in Sapporo during and in the run up to the festival would create opportunities for artistic exchange with their Japanese counterparts. As an art festival, SIAF could benefit from a more sophisticated curatorial approach and the choice of a theme that feels both relevant and timely.

Free opinion

As someone who attends a lot of festivals and biennials, I was surprised to see how prominently the Director's own work featured in SIAF. Aside from live events in which he took part, Otomo Yoshihide had works in a few of the venues as well as his own exhibition at Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido. While this is certainly not a bad thing, and Otomo seems to be a popular and well-loved figure, to me this festival felt a little too dominated by its charismatic director. A case may be made for appointing a curator in addition to an artistic director for future editions of SIAF.

Sapporo Polyphony

Clélia Zernik

Professor of Art Philosophy, Beaux-arts de Paris / Art Critic

General Comment

The specificity of this festival seems to be in the desire to build bridges, to create connections, not only between the artists and the public, but also between the artists themselves, and between the human and the non-human. Otomo Yoshihide, the artistic director of the Sapporo festival, also uses a pre-established harmony system made possible by art. Each work is autonomous and was conceived by one artist alone. However, if we examine them a little more closely, the installations seem to answer each other. All of them use as their starting point the debris of a world that has come to an end, yet which continue to emit sound or movement. For example, in the Otomo installation the old devices are connected to each other and form a constellation that seems to address to a non-human presence, as in the Isamu Noguchi Moerenuma Park project; in the installation by Yuko Mohri, old pianos start playing on their own: she transforms a long university corridor into a soundscape where the wind can blow, bringing echoes from the past back to the surface. Testuya Umeda gathers objects he discovered in the forgotten attic of a department store, and sets them in motion in relation to the building's vibrations. Kanta Horio occupies an abandoned house and installs it with a device that allows it to open its doors and turn the lights on its own. It almost seems as though this haunted house has awakened after a long sleep, yawned and let out a shout, before being destroyed once and for all at the end of the Triennial. The movements of life, memory and objects are greater than those of humankind. Should we not stay attentive to this common basis of life that connects us all together? *Intention and Substance*, a beautiful installation by Satoshi Hata also encourages us to pay attention to the cycle of life. Satoshi Hata creates an encounter between liquid water and gaseous water in a very short circuit, defying our conceptual categories and exploding in myriad backlit sparks. All these works share an automatic quality from which humans are excluded. This festival celebrates the networking of things, the relationships between pieces and invites people to follow this example: that's how I interpreted the subtitle of the festival – "When bits and pieces become asterisms". Festival thus becomes polyphonic, a total artwork. There is quite an enchanting side to Otomo that turns festivals into full-blown festivity.

Points to be praised

There are a lot of events, turning around this festival, for example lives, performances, Bon Odori DJ set. Also the festival seems to want to integrate everyone, visitors and locals, children and seniors alike. This very inclusive conception of the festival seems to me very important and very different from the elitist conception of western biennials / triennials which are exclusively addressed to the world of art. To include everyone around an artistic party rebuild the social link. In this way, festivals become new models of society, responses to disasters. If the goal is to include as many people as possible, it seems interesting to be able to evaluate and quantify three data: upstream, information about the festival outside Sapporo (a priori, it seemed to me that there was for example not enough advertising in Tokyo in places such as museums or institutions, such as the French Institute, etc.); on site, signage (density and efficiency); downstream, fallout in the national and international press, numbers of visitors.

Points to be improved

If the festival seems to include everyone, it should be noted however that few things are addressed to a foreign public. The guidebook and all the documentation and information in situ are only partially translated into English, the signage is not very readable and understandable. In general, the cartels for each piece in particular are very well made and translated into English (for example the cartel for Satoshi Hata is extremely relevant), it is rather the elements of general understanding and practical information that are too

few. In attendance at the festival, a small number of foreign visitors is to be observed, even though many foreign tourists visit Hokkaido in summer but stay insufficiently long in Sapporo to inquire about the festival. It sometimes feels to attend a very local and provincial event, perhaps because some pieces or artists already well known by the international public are missing. The visual identity of the festival must be more effective and concrete. The fact that the exhibition venues are very distant (as in many other Japanese art festivals) can be a little discouraging, - some friends have given up going to certain places because it seemed too far away and inaccessible, and consequently had a truncated and partial vision of the event, which seemed unclear to them.

Advice for the next art festival

I would recommend for the next festival to include one or two international high-profile artworks to attract a large audience and foreigner visitors. Christian Marclay and Otomo Yoshihide are very famous international artists but may have seemed a bit specialized for a non-connoisseur audience. On the other hand, it is absolutely necessary to preserve this atmosphere of family festival very warm, this social and collaborative dimension which gives all the energy to this festival. It is necessary to preserve the elegance of the chosen works, the local inscription and the communicative energy, but perhaps to add a more striking, more mainstream image. For example on all communication documents, it would have been good to have a picture that gives a visual identity to the festival. Rather than abstract colors, as on the guidebook or website, an easily recognizable and less abstract picture would have been better. It seems to me that it would have given a stronger visual identity that allows both less informed visitors and the foreign public to understand more immediately the specificity of the festival. Communication efforts should rather be made on the general guideline and should primarily address the flow of tourists who come to Hokkaido to attract them to the festival. The scientific explanations and details are extremely precise and well done.

Free opinion

In my opinion, some elements recur from one installation to the next, making Otomo Yoshihide's deliberate aim obvious. In general, artists (except perhaps musicians, like him) rarely work together. He decided to make them collaborate without their knowledge, transfiguring them from artists in a festival into musicians in a jazz band. This is one way of understanding the title of the Triennial: How do we define "Art Festival"? The interrogative form means the festival is hidden and awaits construction: the festival itself is the masterpiece, born of the connection between all the other works. Otomo Yoshihide is like a great conductor, and the festival is a concert, creating harmony between the different artistic proposals and connecting individuals. In one way, with Otomo Yoshihide, curating becomes an actual art form. I really appreciated the pleasure that the artists had in being together, there was something family and local very friendly - but perhaps insufficiently open to the outside. There is a lot of youth, passion and desire, and a desire to build and rebuild. For my part, as I was guided on all sites of the event and helped by English-speaking friends, I greatly appreciated this festival of a very high quality and very consistent. But I fear that those who were not accompanied like me could not understand the festival in its singularity and intelligence.

An Art Festival to Connect and Communicate Directly With the Public of Sapporo

David Novak

Associate Professor of Music, University of California, Santa Barbara

General Comment

I attended the Sapporo International Art Festival from September 20-25, 2017. In this time period, I was able to visit almost all of the exhibits, as well as attending several performances and other singular events that took place during the time of my stay. My overall impression of the Festival is very favorable. The quality of the exhibits was very high, the sites were in themselves very unique, and there were also a number of exciting workshops and performance events programmed as part of the festival, which made for a dynamic and rich schedule. I thought the range of exhibitions was forward-thinking and made excellent use of existing resources in Sapporo, both institutionally and in terms of cultivating community spaces and local participation. Mr. Otomo was a terrific curator, whose role in organizing was significant both conceptually and on-the-ground in arranging events, and his influence showed deeply throughout the festival.

Points to be praised

Mr. Otomo organized the festival as a mix of exhibits and events / performances / workshops that involved the community. This approach reflects both his personal history as a curator and musician involved with social projects, and aligns well with the larger "social turn" to socially oriented art since the turn of the millennium. The participatory nature of projects such as the Noise Tram and Streetcar Radio Station, Dommune and OYOYO Machi x Art Center realized the potential of an art festival to connect and communicate directly with the public of Sapporo. As a site for an international festival, Sapporo is blessed with unique local sites such as the stunning Moerenuma Park and Sapporo Art Park, as well as the Sapporo University, Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido and various businesses, which made exploring the festival into a special tour of Sapporo architecture and city lifestyle. Perhaps even more uniquely, I also appreciated the way in which local sites - such as hostels, train station passageways, shotengai and ordinary buildings -- were used to house exhibits, and how the city was woven into the fabric of the festival. This gave the festival a sense of exploration and integration into everyday life in the city (Tairyo Izakaya Tecchan was especially unforgettable...).

I also enjoyed the glimpses into long-term art and music histories in the city. The NMA Live Video Archive, Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido, and the exhibits in Shiryokan gave a sense of place to the festival, and helped to place newer works in the long-term logic of arts organization and the life of artists in the city. From my limited perspective, Mr. Otomo did an excellent job of bringing out the local arts community and involving them in the festival, as well as exposing Sapporo citizens to a current wave of sound-oriented arts and performance that will inspire new engagements with creative life. SIAF2017 really took advantage of all of the resources available, from local to international connections. The Asian Meeting Festival 2017 was a wonderful opportunity to connect with an emerging transnational network of improvisers, and the Christian Mar-clay pieces were quite important new works.

Points to be improved

The biggest drawback to the organization of the festival was the inherent problem of the locations being spread out very far across the city. Frankly, this problem might be inherent to the city structure, and is not easily solved. I'm not sure how you could easily change this without losing access to these unique sites. In my own experience, the shuttle buses made it easier to go to Moerenuma Park and Sapporo Art Park, but sometimes it was not convenient to catch them, or they were full. For example, I could navigate my own way to Moerenuma Park via subway and bus, but I imagine that a non-Japanese

speaker would find it challenging. Sapporo Station, frankly, is too busy of a place to easily locate the pieces. It is a good location for passerby to stumble upon artworks, but I would not install items of significance there, since it is difficult to locate them from the program. Following this point, I think non-Japanese visitors would probably benefit from an English language program that translated the descriptions of the artworks more consistently and in a central document. Because it is a significant investment of time to visit some of the sites, they would probably require more of a sense of what they would see, and perhaps a little more context in terms of PR materials regarding the conceptualization and goals of the festival.

A final point is the minor potential for Otomo's otherwise very positive and strong involvement in the festival curation to be misinterpreted as self-promotion. Mr. Otomo is a unique and exciting choice for a curator, and I applaud SIAF for taking this opportunity. Overall it was highly successful. But it is perhaps unavoidable that the curator's influence strongly reflects their own networks and personal connections, and there were a couple of points at which Mr. Otomo's personal history could be viewed as overrepresented. For example, it may not be too common for a curator to have an exhibit (e.g. Otomo Yoshihide: *Sound that Flies to the Moon*) dedicated to their own artistic history. Though fascinating from my perspective, this was perhaps the most extensive profile of any artist in the festival, which, coupled with Mr. Otomo's other high-profile installations and performances in the festival, could lead to concerns about an imbalanced representation among the participating artists. On the other hand, it may not be common for a curator to move for 6 months to a festival site and immerse themselves in the local community! So these are the positive benefits represented by his strong involvement. I again state that Mr. Otomo's unique profile and personal dedication clearly generated lots of energy, participation, and also the special characteristics that made the festival so enjoyable and unique.

Advice for the next art festival

There are many strengths to the current model for SIAF. The city is an excellent and beautiful location for an arts festival. I thought that the performance events and workshops were great models for cultivating social resources and fostering creativity in the city. If local residents know that they can be involved in projects that contribute to SIAF, they will become more invested in the festival and in creating a local arts world. I think Mr. Otomo's model was successful in this capacity. Ultimately it is this local network of ongoing creative work among residents that generates the long-term value of a perennial arts festival, so that both locals and outsiders know Sapporo as a place of open arts and culture. Therefore the city should continue to support arts projects in the years between festivals to cultivate a strong arts community. This should take place in terms of fostering the work of individual artists and collective arts groups, projects between arts groups and everyday communities, in schools and other sites of education and outreach, and maker-spaces and clubs to bring arts into everyday life. If the public is already oriented towards the city as a place that cultivates local opportunities for creativity, then SIAF springs naturally from a city that is already deeply invested in arts and culture, and the city can generate locally rooted values of social creativity that will make SIAF an even more original event. Again, I applaud the organizers and curators for a very special and successful event. SIAF2017 was a great step toward the future.

Festival was an engaging and sometimes challenging way to explore Sapporo's landscape.

Reuben Keehan

Curator, Contemporary Asian Art, Queensland Art Gallery | Gallery of Modern Art (QAGOMA)

General Comment

In an apparent replay of the prefectural museum boom of the 1980s and 90s, Japan is suddenly experiencing a glut of new biennials and art festivals. While this presents significant challenges for individual events in terms of resourcing and audience share, it also raises an important question. What makes a large-scale exhibition special, and what can it do for its context on an ongoing basis?

Sapporo International Art Festival is distinguished by the unique geography of its location, and by the appointment of artists as directors of its first two editions. Intriguingly, Sakamoto Ryuichi and Otomo Yoshihide largely operate outside the visual arts, as musicians whose work straddles the avant-garde and the popular. Indeed, at a press event in the opening days of SIAF2017, Otomo openly professed an antagonism toward the institution of 'contemporary art', creating an exhibition that was largely focused on sound through a range of installations and performances. Sprawling across no less than 26 venues from the downtown core to significant locations at the city limits, the project was an engaging and sometimes challenging way to explore Sapporo's landscape.

The two most captivating venues were the furthest from the city centre: Moerenuma Park, built from a visionary design by Isamu Noguchi; and Sapporo Art Park in the city's south. Both have the benefit of expansive, open-air settings and existing art-friendly spaces. Adjacent to the Art Park, Sapporo City Univeristy hosted one of the highlights of the exhibition, Mohri Yuko's extraordinary sound installation 'Breath or Echo', while an excellent, focused survey of the work of Christian Marclay was held nearby at the Sapporo Art Museum. Other highlights included a fully acoustic experimental sound performance by Marclay and Otomo during the opening week, and 'Three Great Treasures of Sapporo and Hokkaido', which paid tribute to the island's renegade creativity from outside the formal artistic sphere.

For an exhibition with such a high proportion of content with a decidedly avant-garde character, Otomo provided a remarkably accessible entry-point, staging a 'bon-odori' dance for Sapporo's end of summer festival. As a multi-venue event, it also provided the opportunity for visitors to experience different aspects of the city as they moved through venues. In exhibition terms, it might be said that there was no particular theme, but there was a clear methodology, and a clear approach to media, focusing on sound. Works were generally of a high quality and felt relevant to the history and context of Sapporo, and venues were well chosen.

A common source of complaint from visitors was the quality of the maps included in the exhibition guide, which tended to be vague and inaccurate. In a large, multi-venue exhibition like SIAF, it is important that maps are as clear and accurate as possible, especially for visitors from outside Sapporo. The sheer number of venues in downtown Sapporo may also have been challenging for casual, non-specialist visitors. While moving between venues is a wonderful way to discover unlikely sites within a city, it does tend to discourage the general public, meaning that fewer people would be able to experience the wonderful work that was on display.

Points to be improved

Advice for the next art festival

To return to the question of what makes an exhibition special, and what it can do for its context on an ongoing basis, it is important to focus on the context of Sapporo and Hokkaido. In this sense, how can this art festival be 'international' in a way that other Japanese art festivals and biennales cannot? The inclusion of the vocal group Marewrew and Mohri Yuko's interest in the work of Sunazawa Bikky suggest that SIAF could provide a platform to bring contemporary Ainu expressions into dialogue with First Nations artists from elsewhere, including Okinawa, Taiwan, the Philippines, Borneo, Australia, New Zealand, the Pacific and North America. There is a rich possibility here that beyond being a dynamic, multi-disciplinary event, could directly impact on the development of art making in Hokkaido into the future.

I must admit that though I am a professional curator of contemporary art, I sometimes share the antagonism that Otomo expressed towards "contemporary art" as an institution. I do find, however, that in attempting to open contemporary art up to broader cultural fields, museums and art festivals too often embrace commercial culture, such as big movie studios, major fashion labels, globally renown brands, to the detriment of genuine experiment and innovation that can be found in experimental music, literature, theatre, dance, cinema and so on. SIAF2017 was successful in drawing its popular appeal from a different kind of culture: of street festivals and community celebrations. In selecting future artistic directors, I think that it will be important for SIAF to find a fitting successor to Sakamoto and Otomo, someone who can balance the popular and the avant-garde without the need for commercialism, who can open contemporary art up to other experimental disciplines, be they musical, literary, theatrical, cinematic or otherwise, without replicating what can already be found in a shopping mall. The challenge for SIAF, as I see it, is to balance innovation and engagement while seeking ways of being international that have the most meaning to its context, in order to distinguish itself in what is becoming a crowded marketplace for this sort of event.

Free opinion

札幌国際芸術祭実行委員会

〈2018年3月1日現在〉

実行委員会

顧問

高橋 はるみ（北海道知事）

顧問

岩田 圭剛（札幌商工会議所 会頭）

会長

秋元 克広（札幌市 市長）

副会長

岸 光右（札幌市 副市長）

副会長

蓮見 孝（札幌市立大学 学長）

委員（監事）

酒井 裕司（一般財団法人さっぽろ産業振興財団 専務理事）

委員

菊嶋 明廣（札幌商工会議所 専務理事）

広瀬 兼三（株式会社北海道新聞社 代表取締役社長）

若泉 久朗（日本放送協会札幌放送局（NHK）局長）

星野 尚夫（一般社団法人札幌観光協会 会長）

長澤 徹明（公益財団法人札幌市公園緑化協会 理事長）

白鳥 健志（札幌駅前通まちづくり株式会社 代表取締役社長）

廣川 雄一（札幌大通まちづくり株式会社 代表取締役社長）

橋本 道政（公益財団法人札幌市芸術文化財団 副理事長）

甲谷 恵（北海道環境生活部 文化・スポーツ局 局長）

大川 祐規夫（北海道教育庁生涯学習推進局 局長）

小西 正雄（札幌市経済観光局 局長）

高野 馨（札幌市市民文化局 局長）

事務局（札幌市市民文化局 国際芸術祭担当部）

事務局長 熊谷 淳

事務局次長 松浦 剛

●実行委員会開催

2015年度 第1回 2015年6月16日（火） / 第2回 2015年10月1日（木） / 第3回 2016年2月12日（金）

2016年度 第1回 2016年6月2日（木） / 第2回 2017年3月28日（火）

2017年度 第1回 2017年5月10日（水） / 第2回 2017年7月6日（木） / 第3回 2017年11月27日（月）

札幌国際芸術祭
コミッティー

天野 太郎（横浜市民ギャラリーあざみ野主席学芸員）

飯田 志保子（インディペンデント・キュレーター / 東京藝術大学准教授 / SIAF2014アソシエイト・キュレーター）

久保田 晃弘（多摩美術大学教授 / アーティスト）

吉崎 元章（札幌市芸術文化財団総務課課長職 / 一般財団法人地域創造派遣）

助成・協賛・協力

●助成



平成29年度 文化庁文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業

一般財団法人地域創造 ニトリ北海道応援基金 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)

Office for Contemporary Art Norway **OCA**

●協賛



●特別協力



●協力



一般社団法人 札幌ハイヤー協会 さっぽろ天神山アートスタジオ ノルウェー王国大使館

関係者クレジット

RE/PLAY/SCAPE

企画:宮井 和美
共催:公益財団法人 札幌市公園緑化協会
協力:公益財団法人イサム・ノグチ日本財団、山口情報芸術センター[YCAM]、ワタリウム美術館 ほか

●ARTSAT×SIAFラボ《Sculpture to be Seen from Space, Improvisation to be Heard from Space. 宇宙から見える彫刻、宇宙から聞こえる即興演奏》／《Sculpture for All of the Intelligence 全知性のための彫刻》
○プロジェクトリーダー:久保田 晃弘(ARTSAT／SIAFラボ)
○開発
プロジェクトマネージャー:小町谷 圭(SIAFラボ)
堀口 淳史・中澤 賢人・宇佐美 尚人・橋本 論(ARTSAT)、石田 勝也・船戸 大輔・金井 謙一・藍 圭介(SIAFラボ)
開発アドバイザー:岩谷 圭介
協力:気象庁札幌管区気象台、札幌大谷大学、札幌市立大学、多摩美術大学、北海道大学創成研究機構
○展示
アーティスティックディレクター:平川 紀道(ARTSAT)
サウンド:矢坂 健司
無線:堀口 淳史
照明:時里 充、大庭 圭二(Ryu)
映像:田所 淳
デザイン:小酒井 祥悟(Siun)
機材協力:株式会社シンタックスジャパン、東芝ライテック株式会社、東リ株式会社、フォスター電機株式会社 フォステクスカンパニー
制作協力:株式会社クワザワ工業、野方電機工業株式会社、株式会社佐々木製作所
○広報・記録
映像・アーカイブ:石田 勝也(SIAFラボ)、門間 友佑
ウェブサイトイラストレーション:川成 由(SIAFラボ)
ロゴデザイン:白井 宏昭

●大友 良英+青山 泰知+伊藤 隆之《(with)without records》
テクニカルスタッフ:山元 史朗、平林 慎、樋口 勇輝
テクニカルサポートスタッフ:高井 奈々、山田 知之
ワークショップ参加者・設営ボランティア:阿部 哲平、石川 勇人、上杉 孝行、大藤 健、川村 恵、木浪 さくら、木村 学、後藤 美弥子、志村 美紀、進藤 理、鈴木 由信、塚原 義弘、間可 裕樹、中村 啓一、中屋 一史、中山 さおり、干場 良光、蒔田 浩平、松田 英一郎、眞鍋 昌揮、三上 京子、三上 千年、安田 せひろ、柳本 理恵、山本 晃平
プロダクションマネジメント:福田 幹(MDR)、坂口 千秋
共同開発:YCAM InterLab.
協力:山口情報芸術センター[YCAM]

●大友 良英《サウンド・オブ・ミュージック》
システム設計:伊藤 隆之

●ナムジュン・バイク《K-567》
協力:ワタリウム美術館

●松井 紫朗《climbing time / falling time》
協賛:帝人フロンティア株式会社

●伊藤 隆介《長征―すべての山に登れ》
協力:佐々木 けいし

●大黒 淳一×SIAFラボ《沼紋》
環境センサー開発:石田 勝也・船戸 大輔(SIAFラボ)

NEW LIFE:リブレイのない展覧会

企画:藪前 知子
共催:札幌芸術の森(公益財団法人札幌市芸術文化財団)
展示・運営協力:梅村 尚幸、坂本 真惟(札幌芸術の森美術館)

●クリスチャン・マークレー《Record Without a Cover》
《Recycling Circles》《Lids and Straws (One Minute)》ほか
協力:ギャラリー小柳、SETENV

●刀根 康尚《Il Pleut(雨が降る)》
プログラミング:伊藤 隆之
音響装置設計・制作:牟田口 景(WHITELIGHT)
○関連イベント「AI Deviation」
プログラミング:トニー・マイヤット(サリー大)
システムオペレーション:伊藤 隆之(YCAM)
音響設計:牟田口 景(WHITELIGHT)
共同開催:北翔大学

●€Yヨ《ドッカイドー／・海・》
○関連イベント「ドット・リーム | DOT LEEM」
サウンド・オペレーション:増子 真二
センサー・オペレーション:堀尾 寛太

●鈴木 昭男《点 音》
展示補助:眞木 裕太

●藤田 陽介《CELL》
展示補助:眞木 裕太
協力:大原 昌宏(北海道大学)、川本 思心

毛利 悠子《そよぎ またはエコー》

作曲:坂本 龍一
詩:砂澤 ビッキ(英訳:管 啓次郎)
声:カミュー・ノーマント
制作:伊藤 里織、田中 信司
プログラミング:イトウユウヤ
照明エンジニア:大庭 圭二(Ryu)
施工:HIGURE 17-15cas
制作マネジメント:坂口 千秋
制作協力:砂澤 凉子、高嶋 雄一郎、高橋 洋一、山口 創司、上遠野 敏、石田 勝也、沼山 良明、丸田 知明、佐藤 真奈美、小田井 真美、佐々木 雅子、鈴木 萌、佐々木 暁、松岡 貴志、フェリペ・ロドリゲス・マルチネス、川上 大雅、佐野 誠、空 里香、川上 佳津仁、上田 理子、山下 誠、渡辺 直樹、山内 博、渡来 拓郎、長谷川 朋美、高井 奈々、楠崎 真央、小林 大賀、蝦谷 凜之介、園山 茉生、原 雅司、布施 晴香、南 怜花、村川 龍司、樋口 勇輝、吉住 唯
協力:札幌市立大学、一般社団法人清水沢プロジェクト、ノルウェー王国大使館
機材協力:フォスター電機株式会社 フォステクス カンパニー、ヤマハミュージックリテイリング札幌店
助成:Office for Contemporary Art Norway **OCA**

梅田 哲也《わからないものたち》／《りんご》

協力:辻石材株式会社、有限会社エイトワン
特別協力:株式会社 POS 建築観察設計研究所、永田 壘
設営協力:平林 慎
ボランティアスタッフ:西村 康子、沖田 ななえ、小谷 有加、高田 秀美、和田 めぐみ、松吉 菜々子、石山 ひなの、平尾 拓也、山田 大揮、町田 かすみ、太田 茅乃、桑田 真帆、小倉 幸恵
キュレーション&コーディネート:雨森 信

端 聡《Intention and substance》

テクニカルスタッフ:東辻 聖、福津 圭佑
協力:小西工業、今村技研、三穂電機(株)、Y・S・コーポレーション、TRUNC、イトウ設備、寺田 英司、高橋 喜代史、今村 育子、川上 大雅、福井 淳、安田 せひろ、西村 遥奈、小澤 千穂、トラスト・C・ハワード、Shoko Honke、佐藤 史恵、藤原 裕倫
トークゲストスピーカー:港 千尋

札幌・北海道の三至宝 アートはこれを超えられるか!

企画:上遠野 敏
協力:札幌市立大学学生ボランティア

●レトロスペース坂会館別館
館長:坂 一敬、副館長:中本 尚子

●大漁居酒屋てっちゃんサテライト
協力:UR都市機構、小熊商店

●北海道の木彫り熊〜山里稔コレクションを中心に
協力:山里 稔、清水 敏、瀬野 一郎、渡辺 拓治、上田 悟、曾山 輝義、立体の熊公募入選の皆様

●地球の声を聞いた男・三松正夫の昭和火山火山画
協力:三松 三朗(三松正夫記念館館長)

●赤平住友の炭鉱遺産:坑内模式図
協力:赤平市、赤平市教育委員会、吉田 勲、三上 秀雄、赤平コミュニティガイドクラブ“TANtan”

DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5

協力:レッドブル・ジャパン株式会社、フォスター電機株式会社 フォステクスカンパニー、山本現代
配信:宇川 直宏、渡邊 元、埼玉 匠海、徳地 恭太、大塚 黒
音響:百瀬 俊介、荻野 良平

クワクポリョウタ《LOST#16》

リサーチ協力:南陽堂書店、札幌市公文書館
協力:札幌市円山動物園

堀尾寛太《補間》／《テレグラフ》

●《補間》
制作アシスタント:新美 太志、眞木 裕太
制作ボランティア:水石 公基、和根崎 海、高橋 せいか
協力:TASKO inc.

●《テレグラフ》
制作アシスタント:眞木 裕太
制作ボランティア:松吉 菜々子
設営協力:堀川林業株式会社
協力:株式会社札幌振興公社、浄土宗藻緑山観音寺

狸小路TV

番組ディレクター:五十嵐 いおり、加賀城 匡貴、木原 くみこ、中島 洋、中田 美知子、西野 功泰、早川 涉、福津 京子
プログラミング:大塚 黒
企画協力:今野 勉、長沼 修、是枝 裕和、松井 茂、後藤 一也
冊子編集:佐藤 優子
文:今野 勉、長沼 修、上杉 一紀、是枝 裕和、松井 茂
印刷物デザイン:モンマユウスケ
什器制作:こんの工作所
協力:札幌狸小路商店街振興組合、HBC、HTB、UHB、STV、富士フイルム株式会社
運営協力:シアターキノ

さわ ひらき《うろ・うろ・うろ》

音楽:ASUNA
キャスト:MC MANGO、阿児 つばさ、梅田 哲也
撮影協力:アキタヒデキ、宮出 実希
設営協力:ヒロセガイ
ファブリケーター:林 一平、MU.industries
協力:北海道教育大学、キャンノン株式会社、株式会社丸昭佐藤組
キュレーション&コーディネート:雨森 信

中崎透×札幌×スキー「シュプールを追いかけて」

アシスタントコーディネーター:赤坂 文音、黒岩 絵里子
アドバイザー:安斎 伸也、川上 大雅
協力:青森公立大学国際芸術センター青森、ウバシプロダクション、札幌オリンピックミュージアム、真駒内セキスイハイムアイシアリーナ、株式会社秀岳荘、北大山岳館、SNOW Freaks、鈴木 馨二、我満 嘉明、我満 嘉治、佐々木 大輔、山口 正廣、金井 哲夫、小野 浩二、児玉 毅、在田 一則、原田 廣記、高澤 光雄、芳賀 孝郎、芳賀 淳子、上野 英孝、伊藤 大悟/DAIGO、井山 敬介、金子 由紀子、白取 史之、住吉 智恵、四方 幸子、小牧 寿里、斎藤 誠子、クリストファー・オアー、坂口 千秋

SIAF500メーターズ:わたなべひろみ、原口 淑子、長谷川 宏美、細川 瑛代、関田 勝己、佐々木 蓉子、南 沙樹、小坂 祐美子、三宅 美緒、石山 ひなの、松本 みどり、吉田 慎司
デザイン:乗田 菜々美
設営:小野田 藍、風間 天心、菊地 風起人、吉川 貫一、小嶋 亮平、黒島 正範、今 瑞希、河野 紫、瀬戸 一成、高畠 路子、寺島 奈歩、東辻 聖、福井 さら、福津 圭祐、眞木 裕太、安田 せひろ、安田 千皓、山崎 愛彦

SIAF2017 オフィシャルバー「出会い」at OYOYO

協力:OYOYO(株式会社グローブマン 黒田 仁智)
バー運営:今村 育子、川上 大雅、佐野 由美子、高橋 喜代史、端 聡
空間デザイン:五十嵐 淳

札幌デザイン開拓使 サッポロ発のグラフィックデザイン〜栗谷川健一から初音ミクまで〜

企画:ワビサビ
資料協力:北海道デザイン協議会 ほか

火ノ刺繍－「石狩シーツ」の先へ

企画:藪前 知子
撮影・編集:鈴木 余位
録音・音響設計:牟田口 景(WHITELIGHT)
協力:中森 敏夫(テンボラリースペース)
後援:北海道大学総合博物館
○関連イベント「吉増 剛造×空間現代」「吉増 剛造×鈴木ヒラク」
映像:鈴木 余位／映像補佐:竹本 英樹、川添 彩、広田 智大
映像演出:山本 圭太
音響設計:牟田口 景(WHITELIGHT)

NMAライブ・ビデオアーカイブ

企画:沼山 良明
制作:須之内 元洋、川上 大雅
撮影:門間 友佑
編集:須川 善行
機材協力:フォスター電機株式会社 フォステクスカンパニー

テラコヤーツセンター「土砂」

企画:テニスコーツ(さや、植野隆司)
特別協力:MC MANGO
協力:アプト、新しい人、ほか
制作協力:アートセンター土砂
○テニスコーツ@市立大学
企画:毛利 悠子

札幌市資料館を拠点としたアートプロジェクト

●アートとリサーチセンター
企画・運営・館長:小田井 真美(さっぽろ天神山アートスタジオ / AIRディレクター)
デザイン・運営アシスタント:寺岡 桃
データベース・公開メディア構築:須之内 元洋
調査記録作業アシスタント:足立 岬、澤口 優七、塚崎唯、平中 麻美子
コーディネート:SIAF ラボ
協力:岡部 昌生(美術家)、小牧 寿里(写真家)、梁井 朗(北海道美術ネット)、北海道マガジン「カイ」編集部(株式会社ノーザンクロス)、NPO S-AIR、小室 治夫(杉山留美子基金 代表、JRタワー ARTBOX ディレクター)、佐藤 友哉、吉崎 元章、磯崎 道佳(美術家)、柴田 尚(北海道教育大学 教授 / NPO S-AIR 代表)、穂積 利明(北海道立近代美術館 主任学芸員)、北海道新聞文化部、阿児 つばさ、深澤 孝史(アーティスト)、小樽市立小樽美術館、菊池 史子、清水沢プロジェクト(代表:佐藤 真奈美)、公益財団法人札幌市芸術文化財団

●サカナ通信
編集長:猪熊 梨恵(NPO 法人札幌オオドリ大学)
副編集長:松崎 修(菓子行商gaburi)
運営・コーディネート:杉本 直貴(一般社団法人 AIS プランニング)
協力:SIAF ラボ編集局

●CAMP SITE PROJECT「裏庭」
企画・運営:SIAF ラボ

石川直樹展「New Map for North」

企画協力:アヨロラボラトリー

協力:札幌宮の森美術館＋NPO法人CAPSS、北海道博物館、キヤノン株式会社

コーディネート:岡澤 弦

コタンベッププロジェクト

企画・コーディネート:富田 哲司

空間デザイン:五十嵐 淳

アイヌ文化アドバイザー:マユンキキ(八谷 麻衣)

協力:建築学生同盟北海道組、一般財団法人アイヌ民族博物館、

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(アイヌ文化財団)、

さっぽろ冒険遊びの会、地方独立行政法人北海道立総合研究機構、

NPO法人札幌オオドオリ大学

ゲストハウス×ギャラリープロジェクト Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

コーディネート:大井 恵子(Gallery 門馬&ANNEX)、川上 大雅(salon cojica)、中村 一典(TOOV cafe/gallery)、平塚 智恵美(Kita:Kara Gallery)

市電プロジェクト～都市と市電

協力:札幌市交通局

●ラッピング電車 SIAF 号

企画・コーディネート:漆 崇博、細川 麻沙美

ワークショップ講師:佐藤 直樹

ワークショップ参加者:和田 琉太、南部 隼、伊藤 侑希、石坂 亘、古山 聖悦、関戸 快晴、

高橋 久遠、高橋 祇遠、佐藤 彩理、池田 葉月

共催:札幌市中央区、札幌市交通局

●市電放送局 JOSIAF

プロジェクトメンバー:ウリュウ ユウキ、坂田 太郎、高橋 弥子、成瀬 絢子、三上 拓馬、堀内 まゆみ、朴炫貞、松林 英太
運営・コーディネート:漆 崇博・詫間の り子(一般社団法人 AIS プランニング)

●ノイズ電車 SAPPORO 2017

企画・制作・運営チーム:木野 哲也、永田 壘、古立 太一、山影 敏枝

●SIAF2017 市電プロジェクト×指輪ホテル

「Rest In Peace, Sapporo ～ひかりの街をはしる星屑～」

作・演出:羊屋 白玉

美術:サカタアキコ

衣裳:佐々木 青

衣裳・美術制作:岩本 直美、内倉 麻実、川村 つむぎ、KYOKO FUNAKI、小柴 裕美子、清水 小葉、Chiharu、ナガオサヤカ(プロレスリングサッガロ)、成田 真由美、Hatch、原田 ひより、yoshinao

音楽:今井 大蛇丸、鳥一匹(ムシニカマル)、鼓代 弥生、新藤 理(フリースクール札幌自由が丘学園)、スズエダフサコ(chobico)、ヨコイマウ

照明:高橋 正和

舞台監督:下澤 要

ドラマトゥルク:渡辺 たけし(蘭越演劇実験室)

出演:東谷 春奈、ANJU FUNAKI、泉、大森 佐知子、小野 弥月、亀井 健(劇団コヨーテ)、川島 靖史、川村 りこ、後藤 美紀(ピエロ大集合)、澁彦、じゃがりこ、白鷺 桜優(アート・ル・シティ)高野 吟子(劇団新劇場)、蒿保 亜佑、なかつかゆり(劇団清水企画)、ナガムツ(劇団コヨーテ)、堀内 まゆみ(さっぽろ演劇研究室)、マリオネット人形師ロッカ、南沙樹、むらかみなお(デンコラ)、山田 あさこ、鹿俣 晃、NPO法人 オーク会

記録:酒井 奈菜

動画撮影:小山 赤理、箱崎 慈華

制作:糸山 裕子(アートマネージメントセンター福岡)

運営・コーディネート:漆 崇博・詫間の り子(一般社団法人 AIS プランニング)

DJ盆踊り in さっぽろ夏まつり

共催:さっぽろ夏まつり実行委員会

プロデューサー:岸野 雄一

DJ:珍盤亭娛樂師匠

珍盤亭娛樂師匠門下:是澤凜、小柴 利男

振付師、踊り:吉田 一樹

Asian Sounds Research Presents

OPEN GATE 2017

動き続ける展覧会～An ever-changing exhibition

「何もないところから」～start from here

制作:西谷 充史、黒岩 可奈、船川 翔司、厨子 翔平、野地 真隆、横山 さおり
主催:札幌国際芸術祭実行委員会 / 札幌市、国際交流基金アジアセンター
共催:P3 art and environment
協力:北海道青少年会館 Compass、藻南公園管理事務所(藻南・石山・常盤・さくらの森グループ)、札幌市南老人福祉センター
企画:Asian Sounds Research

●「OPEN GATE の部屋」OPEN GATE archive room

動き続けた展覧会、動き続ける記録たち～The ever-changing archives of Asian

Sounds Research

協力:TOOV cafe / gallery

北海道立三岸好太郎美術館 開館50周年記念 特別展

大友良英アーカイブ お月さままで飛んでいく音＋

三岸好太郎ワークス 飛び出ス事ハ自由ダ

企画:藤原 乃里子
企画助手:小山 冴子
制作助手:安田 せひろ
主催:mima 北海道立三岸好太郎美術館
協力:山口情報芸術センター〔YCAM〕
機材協力:フォスター電機株式会社 フォステクス カンパニー

●大友良英ドキュメンタリー映画『KIKOE』上映会

監督:岩井 主税

配給:World Public

協力:シアターキノ

大風呂敷プロジェクト

札幌大風呂敷チーム:安斎 伸也、伊藤 美香、伊藤 諒哉、稲垣 恵、井下 順子、岩橋 そのみ、川尻 莉子、岸上 瑠美子、木野 哲也、工藤 賀代子、栗岡 恵子、栗岡 町子、小西 耕平、坂田 いさ子、佐藤 志保美、清水 恵子、白鳥 健志、杉本 典子、須佐 加代子、外山 あさき、高橋 恵子、高橋 房代、武田 久美子、千鳥 ふみ子、寺田 まみ、ナガオサヤカ、中嶋 愛、西村 康子、沼山 寿美枝、沼山 良明、野口 良子、野谷 節子、長谷 奈緒美、長谷川 朋美、藤本 恭子、ポール山田、まこまない大風呂敷工場、松本 みどり、村上 由貴枝、文字 英子、矢島 薫、やない 晶子、柳本 理恵、山口 理恵、ヨシナオユカリ、わたなべ ひろみ
[プロジェクトFUKUSHIMA! と各地の大風呂敷チーム]:山岸 清之進、アサノコウタ、中崎 透、小池 晶子、坂口 千秋、富山 明子、小野 慎太郎、高野 久美子、小関 英子、岸波 礼子、沼田 夕妃、渡辺 麻菜美、菅野 環、仁田 広子、穴田 百子、宮下 学、岩田 舞海、新見 永治、武藤 隆、脇田 妙子、寺島 奈歩、野手 佑子、伊藤 達信、宮崎 千明、はじまりの美術館
協力:札幌駅総合開発株式会社、株式会社北洋銀行、イオン北海道株式会社、札幌駅前通まちづくり株式会社、大丸松坂屋百貨店大丸札幌店

●中山ミシン「千鳥ふみ子」さん応援隊長就任

協力:中山ミシン商事株式会社

中島公園百物語

企画:公益財団法人北海道演劇財団、札幌市こども人形劇場こぐま座
構成・演出・音楽:斎藤 歩
人形デザイン:沢則行
人形立案・製作・出演:こぐま座こども人形劇団、やまびこ座、こぐま座パベットユーススクール
文芸・演出部:磯貝 圭子、清水 友陽、西田 薫、熊木 志保、高橋 萌永、岡部 莉奈
美術製作:中川 有子、細川 絵里子(切り絵作家)、新井 伸二(エスエスプランニング)
衣装:安尻 美代子(人形劇団ぼっけ)、アキヨ(Jellyfish)
人形操作指導:さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座
照明:熊倉 英記((株)ステージアンサンプル)
宣伝美術:若林 瑞沙(studio COPAIN)
企画制作:木村 典子(北海道演劇財団)、矢吹 英孝(こぐま座・やまびこ座)
協力:公益財団法人札幌市公園緑化協会、中島公園コンソーシアム(中島公園指定管理者)
助成:文化庁(平成29年度劇場・音楽堂等活性化事業)

さっぽろコレクティブ・オーケストラ

コンダクター:大友 良英

演出協力:藤田 貴大

演奏:さっぽろコレクティブ

プログラム・ディレクター:有馬 恵子

運営チーフ:カジタシノブ

撮影:早川 涉

演出助手:工藤 綾乃、齋藤 彦太、清水 美帆

制作助手:加納 遥香

モバイルアースオープン

企画・制作・運営:安斎 伸也

共催:公益財団法人札幌市公園緑化協会

協力:北大マルシェ2017実行委員会

I HAVE a DREAM～ひがし町パーカッションアンサンブル

企画:医療法人薪水 浦河ひがし町診療所
協力:医療法人社団楽優会札幌なかまの杜クリニック、公益財団法人北海道精神保健推進協会ここりカ・プロダクション、社会福祉法人当麻かたるべの森、社会福祉法人ゆうゆう、札幌狸小路商店街振興組合、北大マルシェ2017 実行委員会

raprap

ドラマトゥルク:斎藤 歩

照明:熊倉 英記((株)ステージアンサンプル)

音響:景井 雅之

衣裳:岡本 囁子(アトリエ・スピカ)

舞台監督:横山 勝俊

宣伝美術:若林 瑞沙(studio COPAIN)

プロデューサー:木村 典子

制作協力:ダブルス

主催:公益財団法人北海道演劇財団

共催:NPO法人札幌座くらぶ

協力:さっぽろ天神山アートスタジオ

助成:文化庁(平成29年度劇場・音楽堂等活性化事業)

マレウレウ祭り in SIAF2017～目指せ100万人のウボボ大合唱～

撮影:STUDIO ROCCA

フライヤーデザイン:相川 みつぐ

助成:台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 札幌スペシャル

プロジェクト・ディレクター:dj sniff、ユエン・チーワイ

舞台監督:馬淵 仁彦

音響:Gok Sound(近藤 祥昭、松原 加奈)

照明:株式会社サンスタッフ

記録撮影・編集:藤井 光、青山 真也

ライター・インタビューア:細田 成嗣

インタビュー:須川 善行

制作:田村 武

主催:札幌国際芸術祭実行委員会 / 札幌市、国際交流基金アジアセンター

共催:P3 art and environment

出店:台湾料理ごとう

札幌国際芸術祭2017クロージングウィーク NMA Liveー大友良英スペシャル3days

企画:NMA

SIAF2017前夜祭 さっぽろ八月祭2017

主催:札幌駅前通地区活性化委員会(事務局:札幌駅前通まちづくり株式会社)
共催:札幌国際芸術祭実行委員会
協力:プロジェクトFUKUSHIMA!、NMA(Now Music Arts)、くう

特別協力プログラム マームとジブシー 10th Anniversary Tour〈札幌公演〉

主催:公益財団法人北海道文化財団

共催:公益財団法人札幌市芸術文化財団

特別協力:札幌国際芸術祭実行委員会

第68回さっぽろ雪まつり×札幌国際芸術祭2017 トット商店街

芸術監督:岸野 雄一

語り手:黒柳 徹子

出演:岸野 雄一、ジョン(犬)

音楽:海藻姉妹

影絵:戸井 安代

雪像・キャラクターデザイン:梅村 昇史

振付:東野 祥子

衣裳:桐山 阿弓

音楽協力:岡村 みどり

アニメーション協力:中村 由尚、薩摩 浩子、円香、田端 志津子

ソプラノ:安川みく

影絵人形製作:北澤 岳雄(TASKO inc.)

小道具製作:加藤 小雪(TASKO inc.)

舞台監督:寅川 英司

舞台監督助手:田中 千鶴

照明:高田 政義(RYU)

音響:小内 弘行((株)ジョイサウンドプロモーション)

映像:竹内 康晃(Take One)、杉山 慎一郎(SphinkS)

ミックス:葛西 敏彦

録音:馬場 友美

効果音:佐藤 咲月

制作:小森あや(TASKO inc.)

撮影:アキタヒデキ(写真)、STUDIO ROCCA(動画)

協力:株式会社ブリズム、RYU、TASKO inc.

雪像制作:さっぽろ雪まつり大雪像制作委員会 第1雪像制作部会

主催:さっぽろ雪まつり実行委員会

●札幌ルーブライン

監修:岸野 雄一

技術協力:クワクボリョウタ

音楽:海藻姉妹

製作協力:木村 匡孝、北澤 岳雄、工藤 幸平、小森 あや(TASKO inc.)

アシスタント:浅野 陽子、櫻田 純菜、渡辺 葉

撮影:アキタヒデキ(写真)、STUDIO ROCCA(動画)

SIAF グルメガイド

コラボ参加店舗:

【美食レストラン】オーベルジュ・ド・リル サッポロ、フレンチレストラン カザマ、グラン、サヴァール、創作フランス料理レストラン ヌーベル プース、ラ・サンテ、リストランテ・アリ、オステリア イルソルト、リストランテ イル・チェントロ ひらまつ、カブリ カブリ、日本料理 とらや、海鮮中華 宮の森れんげ堂、バルコ札幌
【スイーツ】きのとや(大丸店、丸井今井店)、もりもと ミュンヘン大橋店、ケーキハウス ステラ・マリス、パティスリーアンシャルロット、ベルバルク、テイクアウトショップ バニエ
【カフェ・喫茶店】宮越屋珈琲 南2条店、板東珈琲、寿珈琲、カフェ・ド・ノール、ワールドブックカフェ、元気カフェ宮田屋、宮田屋(清田本店、東苗穂店、大麻店、白石店、サッポロファクトリー店、豊平店、美しが丘店、清田ダイイチ店)
【シメパフェ】ミライストカフェ & キッチン、パフェテリア バル、ムジカホールカフェ、ノイモンド オーガニック カフェ、夜パフェ専門店 ななかも堂、パフェ、珈琲、酒 佐藤、ダイニング&スイーツ シナー
【BAR】BAR紺野、バー スターズ2003、糸すぶり BAR ESPRIT、バー トラディション、ショットバー ヴェッキオ、BAR一慶、サントリーバー アヴァンティ、サントリーバー アヴァンティファイブ、ショットバー ビーアール
【その他】居酒屋 てれ屋

第68回さっぽろ雪まつり×札幌国際芸術祭2017 トット商店街

芸術監督:岸野 雄一
語り手:黒柳 徹子
出演:岸野 雄一、ジョン(犬)
音楽:海藻姉妹
影絵:戸井 安代
雪像・キャラクターデザイン:梅村 昇史
振付:東野 祥子
衣裳:桐山 阿弓
音楽協力:岡村 みどり
アニメーション協力:中村 由尚、薩摩 浩子、円香、田端 志津子
ソプラノ:安川みく
影絵人形製作:北澤 岳雄(TASKO inc.)
小道具製作:加藤 小雪(TASKO inc.)
舞台監督:寅川 英司
舞台監督助手:田中 千鶴
照明:高田 政義(RYU)
音響:小内 弘行((株)ジョイサウンドプロモーション)
映像:竹内 康晃(Take One)、杉山 慎一郎(SphinkS)
ミックス:葛西 敏彦
録音:馬場 友美
効果音:佐藤 咲月
制作:小森あや(TASKO inc.)
撮影:アキタヒデキ(写真)、STUDIO ROCCA(動画)
協力:株式会社ブリズム、RYU、TASKO inc.
雪像制作:さっぽろ雪まつり大雪像制作委員会 第1雪像制作部会
主催:さっぽろ雪まつり実行委員会

SIAF2017にご参加・ご協力くださった全ての皆さまへ、深く感謝申し上げます。

SIAF2017企画体制

●ゲストディレクター

大友 良英

●エグゼクティブアドバイザー

沼山 良明

●企画メンバー

漆 崇博、上遠野 敏、木野 哲也、坂口 千秋、佐藤 直樹、中島 洋、端 聡、
細川 麻沙美、マユンキキ〈マレウレウ〉、宮井 和美、藪前 知子

スタッフ

●コーディネーション

雨森 信、岡田 理絵、小野 朋子、小山 冴子、カジタシノブ、斎藤 ふみ、佐賀井 真哉、
佐野 由美子、柴田 直美、高橋 喜代史、富田 哲司、永田 壘、西 翼、松本 知佳

●アーキテクト

丸田 知明

●テクニカルエンジニア

石田 勝也、金築 浩史、小柴 一浩、小町谷 圭、船戸 大輔

●デザイン

白井 宏昭、巢内 直美

●広報PR

山岸 奈津子 (Climate PR)

メインビジュアル・シンボルマーク

佐藤 直樹、Asyl (中澤 耕平、菊地 昌隆、遠藤 幸)

ウェブサイト作成

Asyl (竹田 大純)、黒川 崇史

首都圏PR

TAIRA MASAKO PRESS OFFICE

広報協力

hello! HOKKS (株式会社エフエム北海道 (AIR-G'))
(2016年5月～2017年10月まで、番組内でSIAFのPRコーナーを放送)

記録撮影

スチール：小牧 寿里、クスメエリカ、藤倉 翼
(本誌掲載写真を含む)

ムービー：藤倉 翼、早川 渉、株式会社 seven Swell

イベント運営

プラスポイント株式会社

編集

PILOT PUBLISHING (岩村 良介)